昭和63年度団体営圃場整備事業新町地区に伴う発掘調査報告書

新町大原遺跡

縄文時代中期中葉の集落址

1988

長野県辰野町教育委員会

辰野町
諏訪湖
天竜川

序

長野県は縄文銀座と呼ばれ、尖石遺跡や御殿場遺跡といった国の史跡が数多く存在します。

辰野町では、史跡に指定されている遺跡こそありませんが、およそ250もの周知の遺跡が存在する地域です。この遺跡のなかでも飛び抜けて縄文時代中期の遺跡の数が多くなっています。辰野町内ではこれまでに樋口内城遺跡や新町原田南遺跡といった縄文時代中期の遺跡の調査が実施されてきました。しかし、今回の新町大原遺跡のように縄文時代中期中葉の遺構と、遺物が集中して出土したのは樋口内城遺跡の調査以来となります。今回の調査では、単独に埋められていた有孔鍔付土器をはじめ、祭壇状の遺構を伴う住居址等といった縄文人の精神生活を窺い知ることのできる遺構が出土し、大変興味深い発見となっています。

また、近隣市町村にあまり出土していない時期の土器もあり、この地域の土器の変遷を研究していく上にも欠かすことのできない資料であると考えられます。

この様な貴重な成果を残しながら姿を消していった遺跡のためにも本書を十分に活用していただき、今後の研究の資料としていただきますようお願いいたします。

最後に、発掘調査及び遺物整理作業中に大変お世話になった関係者の皆様にお礼を申し上げ、ごあいさつといたします。

辰野町教育委員会
教育長　一ノ瀬　健二

例　　言

1．本書は、団体営圃場整備事業新町地区に伴う長野県上伊那郡辰野町大字伊那富4447番地外に所在する新町大原遺跡（しんまちおおつばらいせき）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、昭和63年９月28日から11月19日まで現場作業を実施し、出土遺物の整理ならびに報告書の作成は、昭和63年11月20日から平成10年３月31日まで辰野町教育委員会において断続的に行った。

3．発掘調査現場における記録は主として赤羽義洋と、福島永が担当し、遺構等の実測図作成は赤羽やよい・宮脇陽子・村上茂子・福島が主として行った。また、本書の編集・作成は福島があたった。遺物等の整理は赤羽やよい・宇治ひろゑ・工藤信子・田畑三千代・村上茂子が行い実測図の作成は赤羽弘江・大森淑子・大槻直子・佐藤直子・白鳥栄子・竹内みどり・福島が行った。なお、土器復元は福沢幸一氏にお願いした。

　また、現場調査時に、小池幸夫氏および箕輪町教育委員会には多大なるご協力を頂いた、ここに記して感謝にかえたい。

4．調査および整理にあたって作成された実測図・写真等は出土遺物とともに辰野町教育委員会が保管している。

発掘調査関係者名簿

1．新町大原遺跡発掘調査団

調査団長　友野　良一（考古学研究者・宮田村）発掘担当者

調査員　赤羽　義洋（辰野町郷土美術館学芸員・当時）

　　小木曽　清（宮田村）

　　福島　永　（辰野町教育委員会社会教育課文化係）

調査補助員　田畑　幸雄（辰野町教育委員会社会教育課文化係・当時）

　　宮脇　陽子（箕輪町教育委員会・当時）

発掘調査協力者　赤羽信雄・赤羽やよい・板倉たせ子・植村翠・垣内諭・倉田まき子・倉田守
小松祐二・城倉けさみ・茅野安男・中谷あき子・野沢徳章・村上茂子
百瀬茂久・山崎馨・山崎長雄・山崎良之助・山崎君男・埋橋程三・上島正延
伊藤正之進・上島元彦・横川常一・松田信太・伊藤亀一郎・松田良重
松田幸俊・松田宗昭・松田静男・上島茂・松田長男・上島康夫・池上大二
酒井とし子・下平保治・松田展守

整理作業協力者　赤羽弘江・赤羽やよい・宇治ひろゑ・大槻直子・大森淑子・工藤信子
佐藤直子・白鳥栄子・竹内みどり・田畑三千代・平沢正子・村上茂子

目　　次

序
例　　言
第Ⅰ章　発掘調査の経緯……1
　1　保護協議の経過……1
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境……3
　1　位置と付近の地形・地質……3
　2　歴史的環境……5
第Ⅲ章　発 掘 調 査……11
　1　調査の方法と調査結果の概要……11
第Ⅳ章　遺構と遺物……12
　1　住 居 址……12
　　第１号住居址　第２号住居址　第３号住居址　第４号住居址　第５号住居址
　　第６号住居址　第７号住居址　第８号住居址　第９号住居址　第10号住居址
　　第11号住居址　第12号住居址　第13号住居址　第14号住居址
　2　単独埋設土器……101
　3　縄文時代早期の遺構と遺物……102
　4　集石と遺物……107
　　第１号集石　第２号集石
　5　集石炉と遺物……109
　　第１号集石炉　第２号集石炉　第３号集石炉　第４号集石炉　第５号集石炉
　　第６号集石炉　第７号集石炉　第８号集石炉　第９号集石炉　第10号集石炉
　　第11号集石炉　第12号集石炉　第13号集石炉　第14号集石炉　第15号集石炉
　　第16号集石炉　第17号集石炉　第18号集石炉　第19号集石炉　第20号集石炉
　6　土坑と遺物……122
　　第１号土坑　第３号土坑　第４号土坑　第５号土坑　第６・７号土坑
　　第９号土坑　第10号土坑　第14号土坑　第20号土坑　第21号土坑　第25号土坑
　　第29号土坑　第31号土坑　第41号土坑　第35号土坑　第36号土坑　第37号土坑
　　第38号土坑　第39号土坑　第40号土坑
　7　遺構外出土の遺物……130
　8　掘立柱建物址……133
第Ⅴ章　ま　と　め……134
写真図版

挿図目次

第１図　新町大原遺跡位置図
第２図　周辺遺跡分布図　Ｓ＝1/10,000
第３図　新町大原遺跡全体測量図　Ｓ＝1/400
第４図　新町大原遺跡中世建物址実測図　Ｓ＝1/200
第５図　第１号住居址出土遺物実測図(1)
第６図　第１号住居址実測図　Ｓ＝1/60(炉：Ｓ＝1/30)および出土遺物実測図(2)
第７図　第２号住居址実測図　Ｓ＝1/60
第８図　第２号住居址遺物実測図(1)
第９図　第２号住居址出土遺物実測図(2)
第10図　第２号住居址出土遺物実測図(3)
第11図　第２号住居址出土遺物実測図(4)
第12図　第３号住居址実測図　Ｓ＝1/60(炉：Ｓ＝1/30)
第13図　第３号住居址出土遺物(1)
第14図　第３号住居址出土遺物(2)
第15図　第３号住居址出土遺物(3)
第16図　第３号住居址出土遺物(4)
第17図　第３号住居址出土遺物(5)
第18図　第３号住居址出土遺物(6)
第19図　第４号住居址実測図　Ｓ＝1/60(炉：Ｓ＝1/30)
第20図　第４号住居址出土遺物(1)
第21図　第４号住居址出土遺物(2)(４・５は1/2)
第22図　第４号住居址出土遺物(3)
第23図　第４号住居址出土遺物(4)
第24図　第４号住居址出土遺物(5)
第25図　第４号住居址出土遺物(6)
第26図　第４号住居址出土遺物(7)
第27図　第４号住居址出土遺物(8)
第28図　第４号住居址出土遺物(9)
第29図　第４号住居址出土遺物(10)
第30図　第４号住居址出土遺物(11)
第31図　第５号住居址実測図　Ｓ＝1/60
第32図　第５号住居址出土遺物(１・２・４は1/4、３は1/2)
第33図　第６号住居址実測図　Ｓ＝1/60(炉：Ｓ＝1/30)
第34図　第６号住居址出土遺物(1)
第35図　第６号住居址出土遺物(2)
第36図　第６号住居址出土遺物(3)
第37図　第５号・第６号住居址出土遺物(4)(１・２：第５号住居址)
第38図　第６号住居址出土遺物(5)
第39図　第６号住居址出土遺物(6)
第40図　第６号住居址出土遺物(7)
第41図　第７号住居址実測図　Ｓ＝1/60(炉：Ｓ＝1/30)
第42図　第７号住居址遺物出土状況図
第43図　第７号住居址出土遺物(1)
第44図　第７号住居址出土遺物(2)(４は1/6)
第45図　第７号住居址出土遺物(3)
第46図　第７号住居址出土遺物(4)
第47図　第７号住居址出土遺物(5)
第48図　第７号住居址出土遺物(6)
第49図　第７号住居址出土遺物(7)
第50図　第７号住居址出土遺物(8)
第51図　第８号住居址実測図　Ｓ＝1/60
第52図　第８号住居址出土遺物(1)(２は1/4)
第53図　第８号住居址出土遺物(2)
第54図　第８号住居址出土遺物(3)
第55図　第９号住居址実測図　Ｓ＝1/60(炉：Ｓ＝1/30)
第56図　第９号住居址出土遺物(1)(４～７は1/2)
第57図　第９号・第11号住居址出土遺物(2)
第58図　第９号住居址出土遺物(3)
第59図　第９号住居址出土遺物(4)
第60図　第９号住居址出土遺物(5)
第61図　第９号住居址出土遺物(6)
第62図　第９号住居址出土遺物(7)
第63図　第10号住居址実測図　Ｓ＝1/60(炉：Ｓ＝1/30)
第64図　第10号住居址出土遺物
第65図　第11号住居址炉実測図　Ｓ＝1/30
第66図　第11号住居址実測図　Ｓ＝1/60
第67図　第11号住居址出土遺物(1)
第68図　第11号住居址出土遺物(2)
第69図　第11号住居址出土遺物(3)
第70図　第11号住居址出土遺物(4)
第71図　第11号住居址出土遺物(5)
第72図　第12号住居址実測図　Ｓ＝1/60(炉：Ｓ＝1/30)
第73図　第10号～第12号住居址出土遺物(1)(6･7は1/2)
第74図　第12号住居址出土遺物(2)
第75図　第12号住居址出土遺物(3)
第76図　第12号住居址出土遺物(4)
第77図　第12号住居址出土遺物(5)
第78図　第13号住居址実測図　Ｓ＝1/60(炉：Ｓ＝1/30)
第79図　第13号住居址出土遺物(1)(３は1/6)
第80図　第13号住居址出土遺物(2)
第81図　第13号住居址出土遺物(3)
第82図　第13号住居址出土遺物(4)
第83図　第13号住居址出土遺物(5)
第84図　第13号住居址出土遺物(6)
第85図　第14号住居址実測図　Ｓ＝1/60(炉：Ｓ＝1/30)
第86図　第14号住居址出土遺物(1)
第87図　第14号住居址出土遺物(2)

第 88 図　第14号住居址出土遺物(3)
第 89 図　第14号住居址出土遺物(4)
第 90 図　単独埋設土器実測図　S＝1/20
第 91 図　有孔鍔付土器実測図
第 92 図　第１・２号竪穴実測図　S＝1/60
第 93 図　第２号竪穴遺物出土位置図
第 94 図　第１・２号竪穴出土遺物　S＝1/60
第 95 図　第２号竪穴・集石出土遺物（１～16：２号竪穴・17～34：集石）
第 96 図　第１号集石実測図　S＝1/30
第 97 図　第２号集石実測図　S＝1/30
第 98 図　第１号集石炉実測図　S＝1/20
第 99 図　第２号集石炉実測図　S＝1/20
第100図　第４号集石炉実測図　S＝1/20
第101図　第３号集石炉実測図　S＝1/20
第102図　第５号集石炉実測図　S＝1/20
第103図　第６号集石炉実測図　S＝1/20
第104図　第７号集石炉実測図　S＝1/20
第105図　第８号集石炉実測図　S＝1/20
第106図　第11・12号集石炉実測図　S＝1/20
第107図　第９号集石炉実測図　S＝1/20
第108図　第10号集石炉実測図　S＝1/20
第109図　第13・14号集石炉実測図　S＝1/20
第110図　第15号集石炉実測図　S＝1/20
第111図　第18号集石炉実測図　S＝1/20
第112図　第16号集石炉実測図　S＝1/20
第113図　第17号集石炉実測図　S＝1/20
第114図　第19号集石炉実測図　S＝1/20
第115図　第20号集石炉実測図　S＝1/20
第116図　集石炉出土遺物
第117図　第１号・第３～７号土坑実測図　S＝1/60
第118図　土坑出土遺物(1)（第１号～第21号土坑）
第119図　第９・10・14・20・21・25・29号土坑実測図　S＝1/60
第120図　土坑出土遺物(2)（第25号～第32号）
第121図　第31・35～38号土坑実測図
第122図　土坑出土遺物(3)（第６・29・42号）
第123図　土坑出土遺物(4)（第31・35・39・40・42・43号）
第124図　第40号土坑実測図
第125図　遺構外出土遺物(1)
第126図　遺構外出土遺物(2)
第127図　遺構外出土遺物(3)

写真図版目次

図版１　第１号住居址
図版２　第２号住居址
図版３　第３号住居址
図版４　第４号住居址(1)
図版５　第４号住居址(2)
図版６　第５号住居址
図版７　第６号住居址(1)
図版８　第６号住居址(2)
図版９　第７号住居址(1)
図版10　第７号住居址(2)
図版11　第７号住居址(3)
図版12　第８号住居址
図版13　第９号住居址
図版14　第10号住居址
図版15　第11号住居址
図版16　第12号住居址
図版17　第13号住居址(1)
図版18　第13号住居址(2)
図版19　第14号住居址
図版20　単独埋設土器
図版21　第１・２号竪穴　調査参加者
図版22　第１・２号竪穴出土遺物
図版23　第１・２号集石（上：１号，下：２号）
図版24　第３・４号集石（上：３号，下：４号）
図版25　第１～４号集石炉（１：１号，２・３：２号，４・５：３号，６：４号）
図版26　第５～９号集石炉（１・２：５号，３：６号，４：７号，５：８号，６：９号）
図版27　第10～15号集石炉（１：10号，２：11号，３：12号，４：13号，５：14号，６：15号）
図版28　第16・17・19・20号集石炉（１：16号，２：17号，３・４：19号，５：20号）
図版29　第６・29・31号土坑
図版30　遺構外出土遺物(1)
図版31　遺構外出土遺物(2)
図版32　遺構外出土遺物(3)
図版33　遺構外出土遺物(4)
図版34　遺構外出土遺物(5)
図版35　遺構外出土遺物(6)
図版36　遺構外出土遺物(7)
図版37　掘立柱建物址(1)
図版38　掘立柱建物址(2)

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

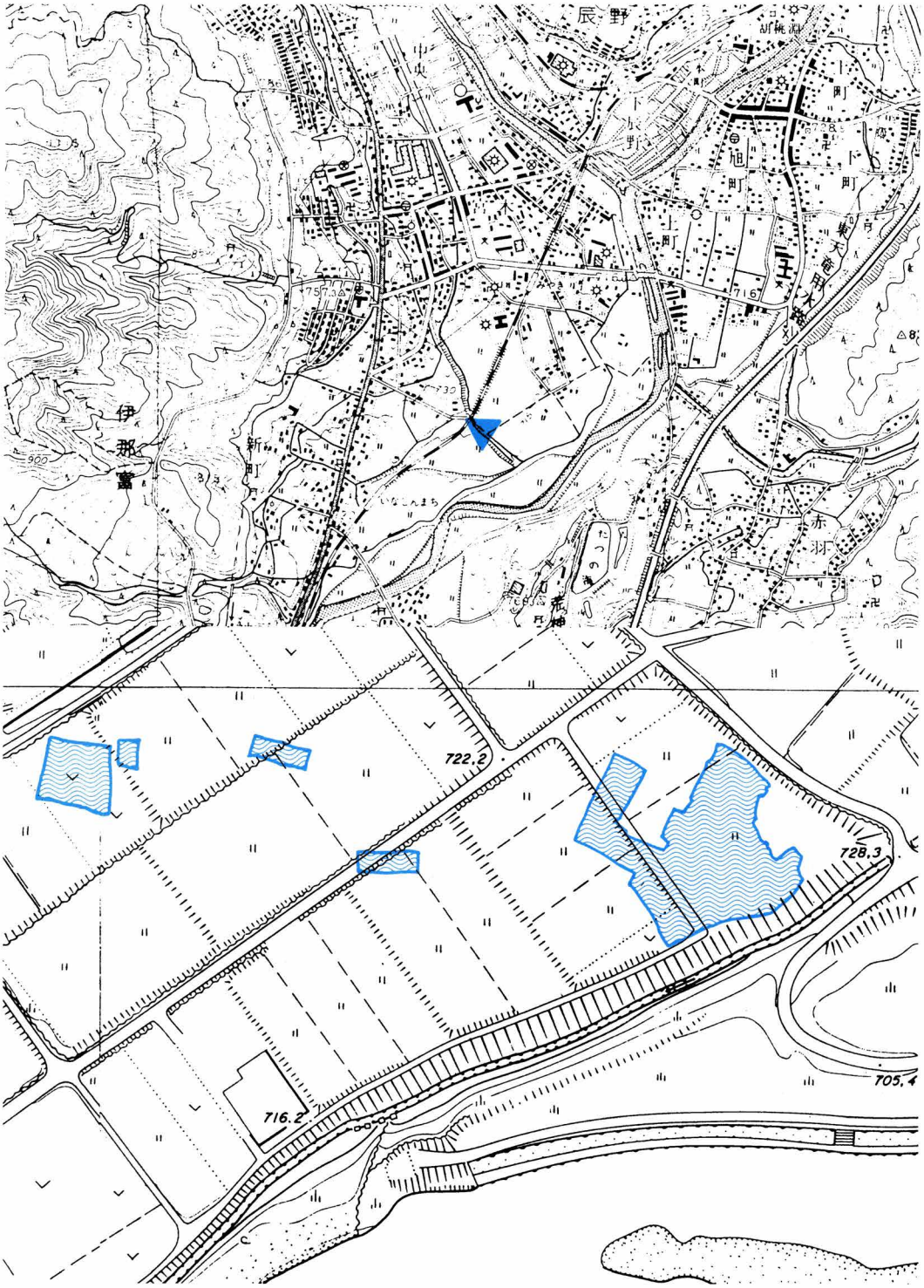
1　保護協議の経過

昭和62年４月20日に町農政課より「昭和62年度新期採択土地改良総合整備事業に伴う埋蔵文化財の調査について」の協議書が提出された。この協議書によると、圃場整備事業の開始予定は昭和63年度で、開発規模はおよそ11haにおよんでいた。この圃場整備事業の範囲内には、新町大原遺跡・新町原田南遺跡・新町原田北遺跡の３遺跡が存在しており、この３遺跡が消滅するおそれが生じた。これに対して町教育委員会では、遺跡の現状を把握するため、昭和62年度事業として試掘調査を行い、遺跡の範囲、規模等について確定していくこととした。同年５月20日付けで町農政課より３遺跡の発掘についての通知が提出されたのをうけて３遺跡の試掘調査を５月25日より実施した。

試掘調査の結果、新町原田南遺跡からは、中世初期の陶磁器をはじめ、堀等が発見され居館址の存在をうかがわせた。また新町原田北遺跡においては、平安時代前半期の住居址をはじめとして縄文時代の遺物なども出土した。さらに、新町大原遺跡からは、縄文時代の炉址をはじめとした縄文時代の遺構が発見され、圃場整備事業の計画されている一帯すべてにわたって遺構・遺物が確認できた。

一方圃場整備事業の実施設計図によると、新町原田北遺跡については、盛土という状況であったため、調査対象から除外し、農道部分についても遺跡の破壊のおそれがないと判断し、調査対象外とした。

切土の箇所のうち、新町原田南遺跡については試掘が十分でなかったため、昭和64年度にもう一度試掘調査を実施し、つづいて本調査へと移行した。また、新町大原遺跡については新町原田南遺跡の調査が終了し次第本調査に入ることとし、原田南遺跡より調査を開始したが、調査に手間取り、調査終了時期が大幅にずれ込んでしまった。そのため開発側と再度保護協議を実施し、調査員と作業員の増員をはかり、作業期間を短縮することを前提にして新町大原遺跡の調査期間の延長を依頼した。当初、開発側も工期の関係上期間の延長は認められないとしていた。しかし試掘調査の時点で、縄文時代中期の集落址が出土することが判明していたため、遺跡の重要性を説明したところ、工期の遅延を懸念しつつも、１カ月の延長で合意にいたり、９月28日より本調査を開始した。



第１図　新町大原遺跡位置図

第II章　遺跡の位置と環境

1　位置と付近の地形・地質

辰野町は、西を木曽山脈の最北部にあたる経ヶ岳（標高2,296.3m）より連なる標高1,100m以上の6つの山塊が占め、東には伊那山脈の北端部が延びている。伊那山脈は天竜川の支流の一つである沢底川を境として南部は標高700m～1,200mの小式部城山塊、北部は標高800m～1,000mの東山丘陵に二分されており、東山丘陵は辰野町でも最もなだらかな丘陵状の山地となっている。

辰野町は伊那谷の最北部ということもあり、山地が町の7割を占め、平地部は3割程度しかない。したがって東山の麓から西山の麓までの幅が狭く、また多くの段丘によって地形的な制約をうけている。しかし、町南部の羽北地区は平地部が大きく開け、箕輪町へと続いていく。

さらに天竜川西部には、その支流である経ヶ岳に源を発する横川川によって形成された横川渓谷に代表されるようなV字谷が深く入り込んでいる。

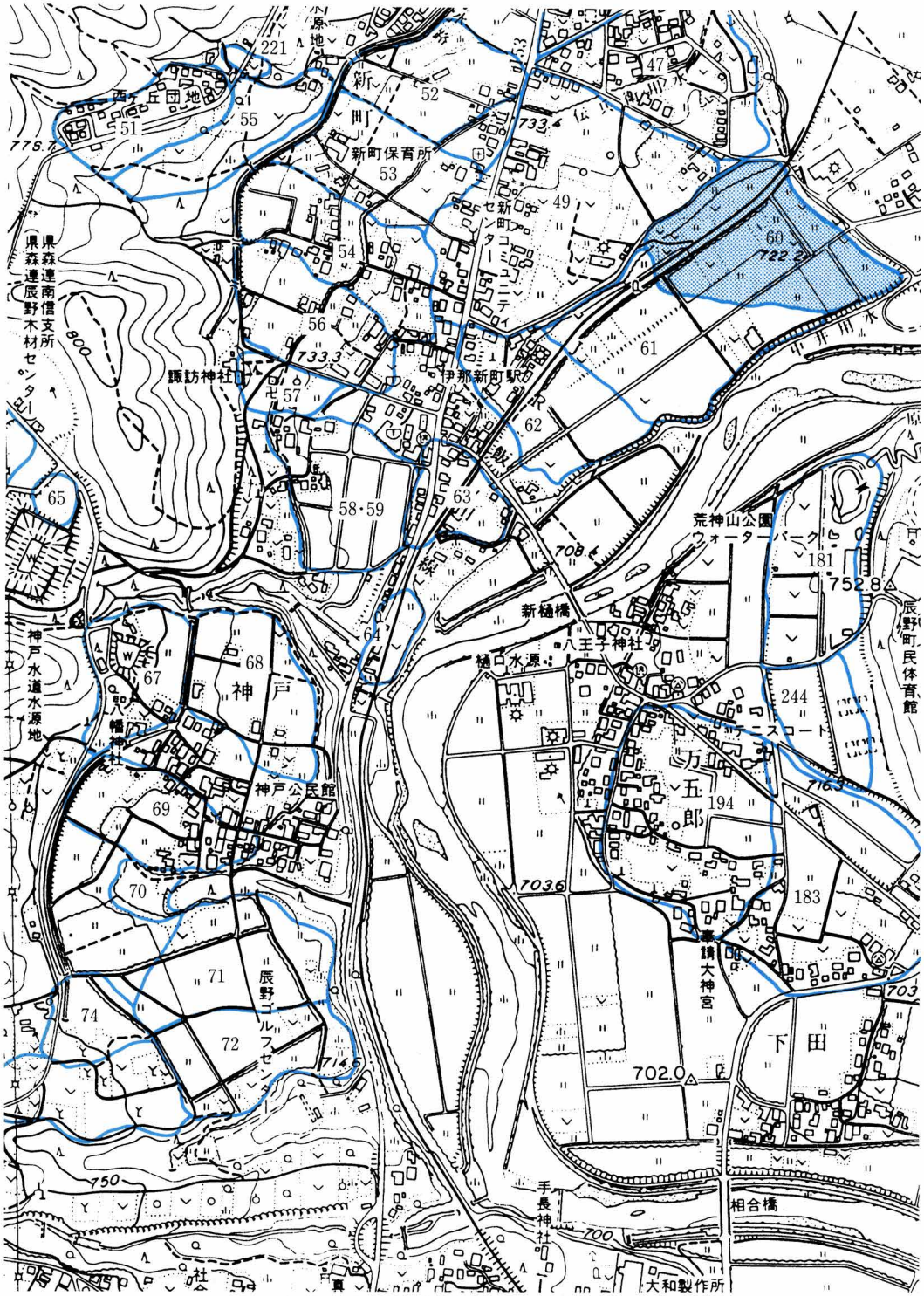
また、辰野町北部の境界付近を含めた権兵衛峠－経ヶ岳－牛首峠－霧訪山－善知鳥峠の連なりは南北分水界となっており、これより北部は千曲川水系として日本海へと流れ込み、南部は天竜川水系として太平洋へ注ぎ込んでいる。

一方、諏訪湖に源を発する天竜川は、町を南北に縦断するように南流し、その両岸には数段の河岸段丘を形成しており、特に荒神山の南側でその発達は顕著である。また、天竜川西岸、特に楡沢山～桑沢山山麓では扇状地が重なりあった複合扇状地が形成されている。

また、伊那盆地の西部や東部の山麓には大きな断層が走っており、特に西部山麓の断層は「伊那谷断層」と呼ばれ、後山地籍においては断層によって尾根が孤立し、稗塚と呼ばれる丸山が形成されているほか、西方の明神山は古い扇状地が活断層によって持ち上がったものである。

さらに、新町の上水道水源地の掘割では昭和4年に春日琢美によってテフラを切る断層が観察され、スケッチに残されているが、このスケッチをみるとテフラの降灰が停止してから15,000年の間に西方の山地が約2.3m上昇したことがわかる。また、新町の天竜川河畔の赤渋より、天狗坂を通って宮所、上島を結ぶ線は赤渋断層と呼ばれ、宮木の大新田より新町の原田地籍へ上がる坂で、断層によって原田の地盤がはね上がった様子が観察されている。

新町大原遺跡は前述のはね上がったまさにその段丘上に位置しており、これより北は段丘崖を形成しており宮木地籍からは一段高くなっている。この段丘は、新町原田南遺跡の存在する段丘上より見ても地盤のはね上がっている様子を確認することができる。



第２図　周辺遺跡分布図　S＝1/10,000

2　歴史的環境

新町区は、県宝指定されている縄文時代後期の仮面付土偶を出土している泉水遺跡（52）が所在する地区である。新町区は経ヶ岳山塊の楡沢山と天竜川に挟まれた地域で、遺跡の立地も、扇状地上に位置する泉水遺跡、神谷所遺跡（66）等と段丘に位置する新町大原遺跡（60）、新町原田南遺跡（62）、新町原田北遺跡（61）、新町北原遺跡（49）等に大きく2分される。前述の泉水遺跡は扇状地上に位置しており、土偶のほかは遺物も採集されていないために遺跡の状況は不明である。神谷所遺跡は平成3年度から平成6年度にかけてほぼ全面を調査した結果、縄文時代早期の押型文土器や小竪穴をはじめ、十三菩提式土器を出土した縄文時代前期末葉の住居址や土坑、弥生時代後期の集落址、火災住居をはじめ、土錘や、試掘調査時に鉄鍋の破片が出土している平安時代末期の集落址、舟釘状の細長い鉄製品が集中して出土している中世の建物址等が出土している。なお、この遺跡の試掘時には本調査の対象外の地区ではあったが堀と思われる遺構も検出され、中世の建物址と考え合わせると山小屋的な施設があった可能性がある。また、弥生時代の住居址は長辺約3ｍ、短辺約2ｍといったような小規模な住居址が主で、埋甕炉の周囲3方向に石囲が設置されているものがほとんどであった。遺跡周辺には大きな湿地帯もなく、遺物をみると後期でもやや古い時期と考えられることから、辰野町における弥生時代黎明期の遺跡として注目される。

また、昭和32年にこの遺跡に隣接する新町丸山遺跡（65）の西麓の畑から、平安時代後期の鉄製羽釜が耕作中に出土している。新町丸山遺跡は通称稗塚と呼ばれており、当初古墳ではないかとの疑いが持たれたが、この小山は活断層によって断ち切られたいわゆるケルン・バットであることが確認されている。神谷所遺跡では平安時代末期の集落のほかにも鉄製の鍋の破片と思われる遺物も試掘調査によって出土しており、鉄製羽釜とこの集落址との関係については今後更に検討していかなければならない課題であろう。

一方、段丘上に立地する新町原田南遺跡は、新町原田北遺跡、新町大原遺跡と共に圃場整備事業に先立って昭和63年度に調査が実施された遺跡で、縄文時代中期末葉の住居址をはじめ、中世の居館址等が出土している。中世の居館址は、堀によって区画された地点には掘立柱の建物址が出土し、その区画外の曲輪かと思われる部分には多数の方形竪穴建物址が検出され、館の空間的な使い分けについての良好な資料を提供することができた。また、玉縁状口縁をもった白磁碗や白磁製の四耳壷破片、東海系の鉢、鎬連弁をもつ青磁碗、口禿げの皿など鎌倉期を中心とした陶磁器が出土しており、辰野町で調査された中でも古い時期に位置付けられる居館址となった。

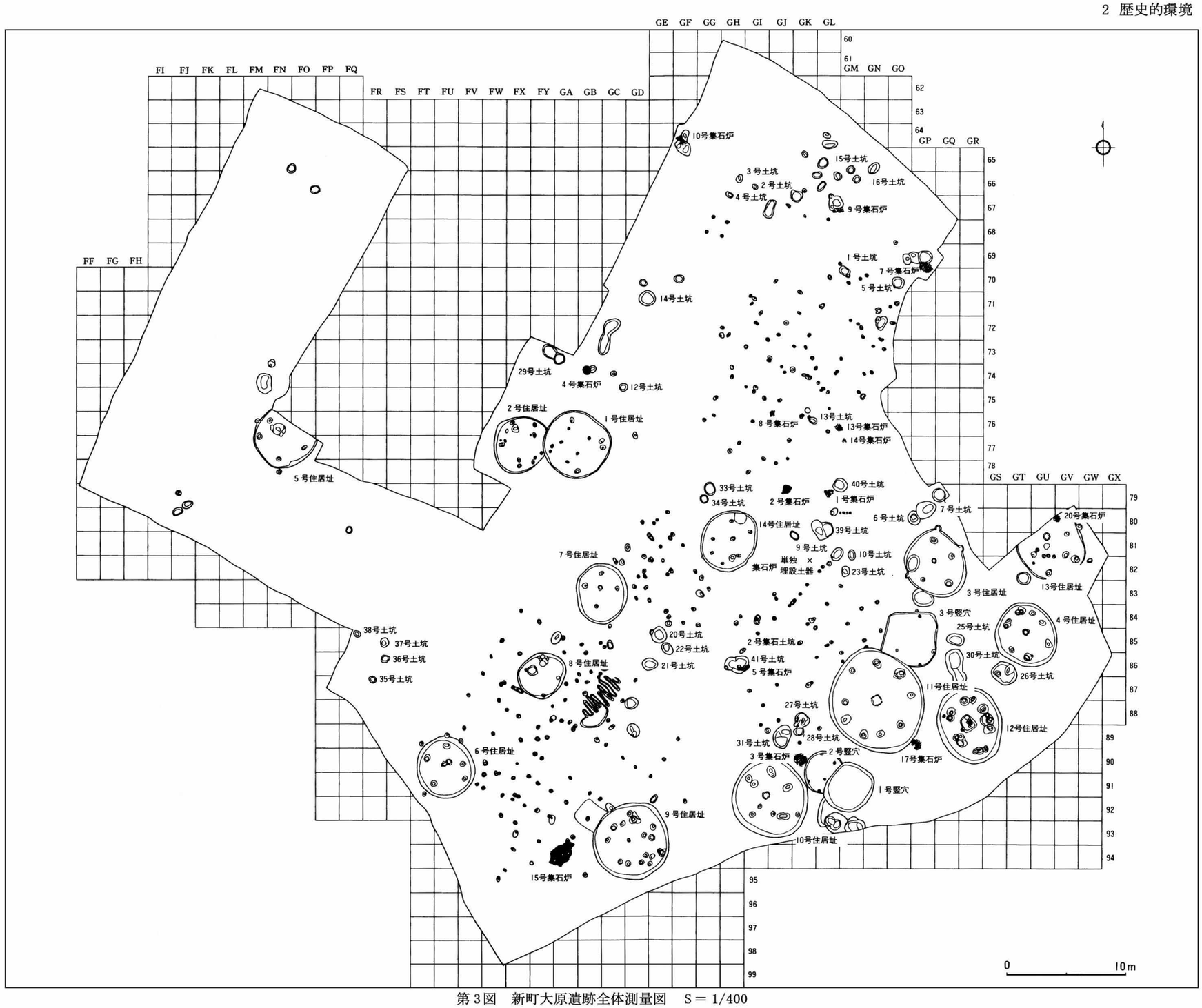
新町原田北遺跡は、試掘のみではあったが、平安時代前半期の集落が確認されている。

うずらい北・うずらい南遺跡（58・59）は、平成5年度に区画整理事業に先立って調査が実施され、縄文時代前期の焼土を伴う土坑が1基出土している。この遺跡を試掘した結果では、南に西流している鳥居沢の氾濫の痕跡が認められ、地形的には不安定な地域といった様相を示している。

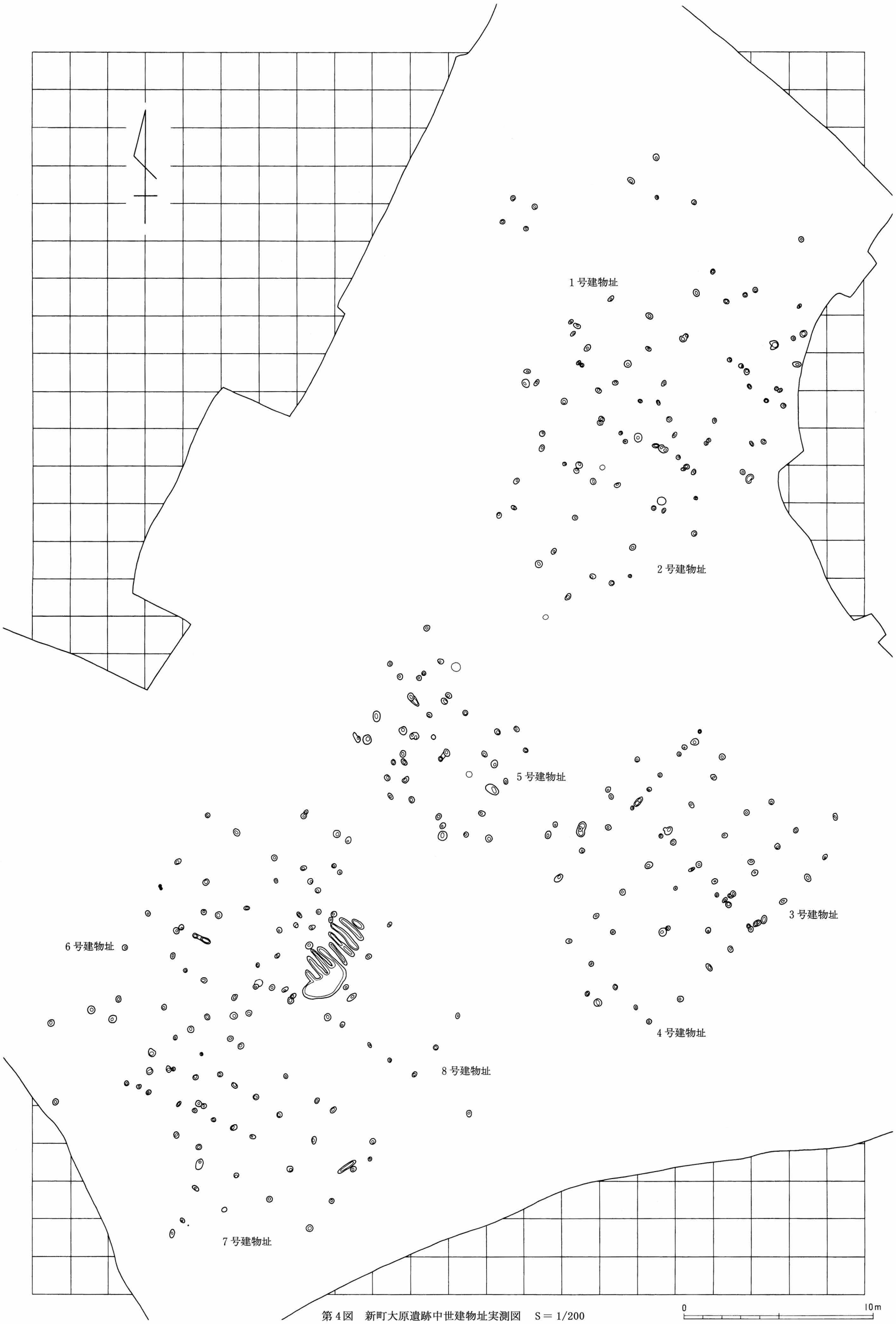
その他山麓に立地している遺跡としては櫟林遺跡（51）があげられる。この遺跡は楡沢山麓のわずかな平坦部に位置し、昭和61年度と平成元年に調査が行われ、縄文時代早期から後期にわたる遺構が出土している。なかでも押型文土器を出土した住居址１基や深さ２ｍに近い円形の大型竪穴や、集石炉10基の出土は、この地区が押型文の時代にベースキャンプ地として利用されていたことを伺わせる。また、縄文時代前期から中期初頭の小竪穴群と、後期の土坑が発見されているのをはじめ、縄文時代中期中葉と思われる壷形土器が出土し、この中から黒曜石の大型のかたまりが発見されるなど、比較的小規模な遺跡にもかかわらず縄文時代の遺跡として非常に貴重な成果をあげている。

No.	遺跡名	縄文時代					弥生時代	古墳時代	奈良平安	中世以降	備考
		早期	前期	中期	後期	晩期					
47	上原			○					○	○	
49	新町北原			○					○	○	
51	櫟林	◎		◎							昭61年発掘調査
52	泉水				○						仮面付土偶出土
53	沢田								○		
54	青木原			○							
55	曽利畑			○							
56	宮垣外								○	○	
57	諏訪神社前									○	
58	うずらい北		○						○	○	平５年発掘調査
59	うずらい南		○						○	○	平５年発掘調査
60	新町大原	◎	◎	◎	○	○				◎	
61	新町原田北			○					○		昭62年試掘調査
62	新町原田南	○	◎	◎	○					◎	昭63年発掘調査
63	道下								○		
64	神沢口			○							
65	新町丸山								○		鉄製羽釜出土遺跡
67	神戸			○							
68	神戸北原			○						○	
69	羽場上			○						○	
70	どん沢								○	○	
71	神戸南原第一								○	○	
74	向袋			○							
221	櫟林第二			○							

周辺遺跡一覧表（○は遺物出土、◎は遺構出土を示す）



第3図　新町大原遺跡全体測量図　S＝1/400



第4図　新町大原遺跡中世建物址実測図　S＝1/200

第Ⅲ章　発掘調査

1　調査の方法と調査結果の概要

遺跡の立地している地点は、断層によって地盤がはねあがって周辺より一段高くなっており、その段丘上を水田として利用している。圃場整備事業ではこの段丘を削り取って南の一段低い地点に埋める計画であったため、新町原田北遺跡は破壊の恐れはないと判断し、試掘調査のみ実施した。新町大原遺跡も昭和62年度に試掘調査が実施されており、遺跡の状況を把握していたことと、工事を実施する期日がせまっていたため試掘調査は実施していない。

本調査については削平される地点の中で、遺構の出土が予想される３地点を設定し、重機により遺構検出面まで土を除去した。遺構検出面まで掘り下げた後は遺構を確認するためにジョレン等を使用して精査し、確認後は移植ゴテなどを使用して掘り下げた。遺構内の覆土は、中世と思われる柱穴については黒色系の土であったが、縄文時代の遺構については多くが遺構確認面の土と同色の褐色系の土で覆われていた。そのため、あらかじめサブトレンチをいれて遺構の有無を確認した地点もある。サブトレンチは任意に設定している。

遺構を確認した後は、住居址は土層あぜを設定し、土坑については半割して土層を確認しながら掘り進め、掘り上がった遺構から実測図を作成し、記録につとめた。

出土遺物等の取り上げ、遺構平面図の作成に際しては２ｍ×２ｍのグリッドを基準として行い必要に応じて図化および写真撮影等を行った。遺構測量は、遺物の出土状態を遣り方測量を基本として1/10の縮尺で測量し、掘り上がった遺構については平板によって1/20の縮尺で平面図を作成した。なお、グリッドは南北方向は数字を、東西方向はアルファベットを用いて表記した。現場でのレベルについては工事用のベンチマーク（721.072ｍ）を使用した。

遺物を整理する段階で遺物台帳を作成し、各遺物には遺跡の略称（ＳＯＨ）および遺物番号を注記した。現場での写真撮影には35㎜一眼レフカメラを使用してモノクロームネガフィルムとカラーポジフィルムを用いた。遺物写真は中判カメラを使用して、６×７モノクロームネガフィルムで撮影した。

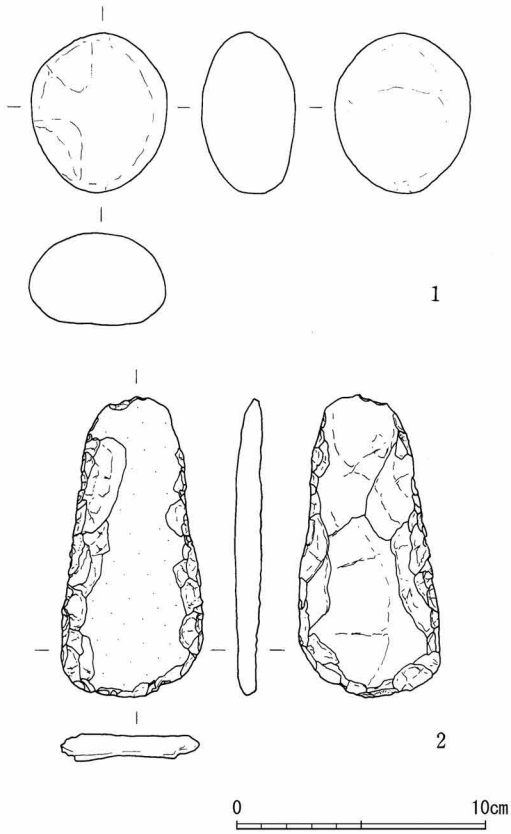
今回の発掘調査によって出土した遺構・遺物の概要は巻末の報告書抄録に記載している。

第Ⅳ章　遺構と遺物

1　縄文時代の住居と遺物

第１号住居址

ＧＡ－77より第２号住居址と一部重複して検出された。水田の造成時に斜面を削平しているため、残存している壁高はおよそ20cmと浅い。覆土は全体的に小石が混じり、一部は木炭を含んでいた。また土層によって第２号住居址を切って掘り込んでいる様子が観察された。この住居址のプランは、5.6ｍ×5.4ｍのほぼ円形で、床面は地山が石を含んでいるために、石が露出していた。また、硬化面も確認されなかった。主柱穴はP_1～P_4と考えられる。P_2の南には主柱穴とほぼ同じ深さの柱穴が出土しており、何らかの理由によって柱を設置しなおしている可能性がある。また、主柱穴の内側にはやや小型の柱穴が４箇所検出されている。



第５図　第１号住居址出土遺物実測図（1）

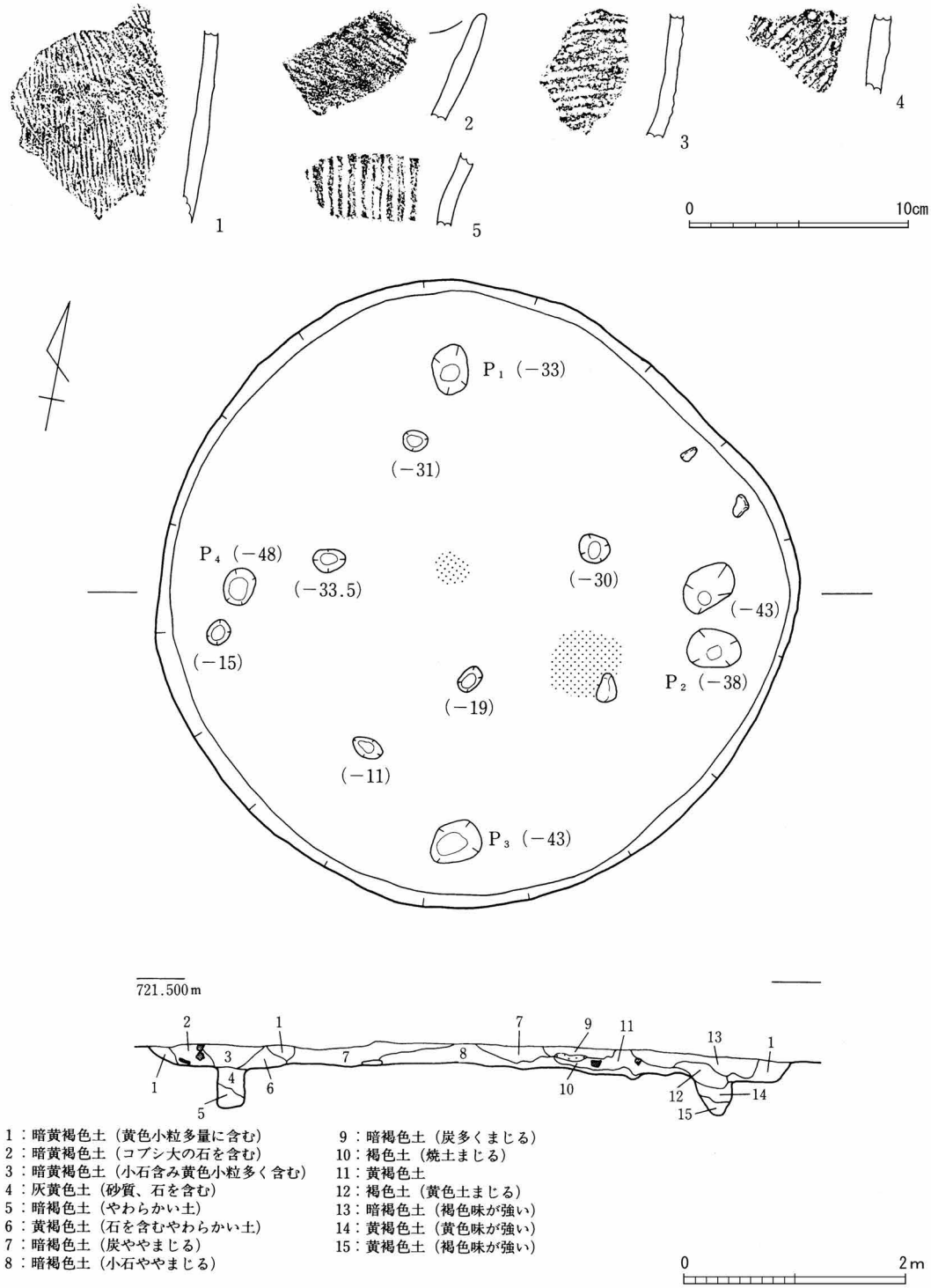
南東壁寄りと中央部には焼土があり、ほかに炉と考えられる施設がないことから、これらが地床炉であったと推定される。

覆土中および床付近から出土している遺物は19点のみであった。

遺　　物

第５図１は磨石である。全面よく磨かれており、底部は平坦になっている。２は撥型の打製石斧である。上に自然面を多く残しながら側面を加工することによって撥型に成形している。背面は大きく４回打撃を加えて粗加工し、側面を調整している。

第６図１～４は器面に縄文を施文している土器である。１はやや白色味を帯びており、砂粒を多く胎土中に含んでいる。表面は煤が付着していた。２は口縁部の破片で４単位の波状口縁と思われる。胎土中にやや繊維を含んでおり、不明瞭な縄文を施文している。５は縦位の沈線を施文しており、焼成も良好であった。しかし他の土器とは異質な感じを受けるので混入品の可能性もある。



第6図　第1号住居址実測図　S＝1/60（炉：S＝1/30）および出土遺物実測図 (2)

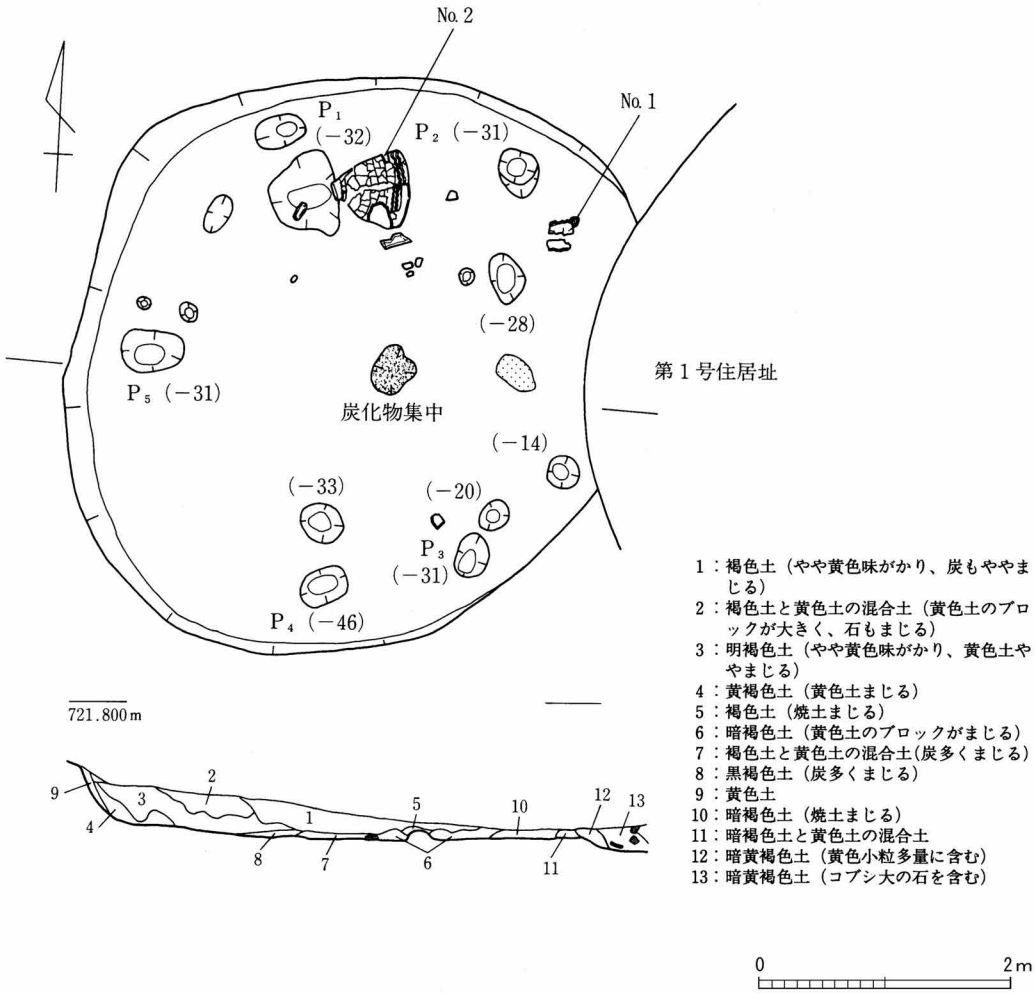
第２号住居址

第１号住居址の西部で出土した５ｍ×4.5ｍのほぼ円形の住居址である。

覆土は西側の台地の高い方向から流入しており、全体的に炭化物を含んでいた。しかし第１号住居址と同様に削平の結果、壁高がおよそ30cmから10cm程度であった。主柱穴はP_1～P_5が考えられるが、第１号住居址との切り合いによって確認できなかったものの、住居址の東部にもう１箇所柱穴があった可能性もある。

床中央部にはやや掘り込まれた窪みがあり、ここからは炭化物が出土していることからこの浅い落ち込みが地床炉と考えられる。そのほかにも東部の床面にも焼土が検出されている。

床からはほぼ完形の深鉢型土器が横倒しとなって潰れた状態で１点出土しているほか、深鉢の体部上半部が破片となって出土している。

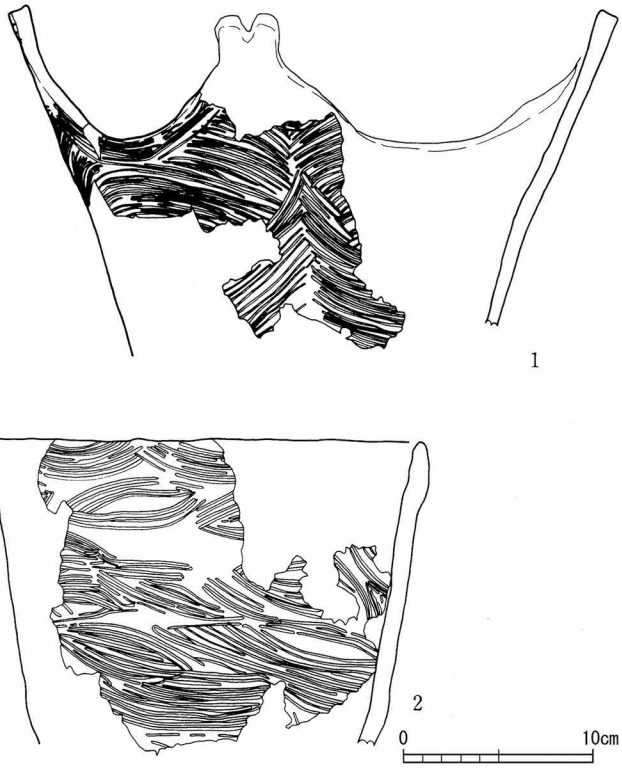


第７図　第２号住居址実測図　S＝1/60

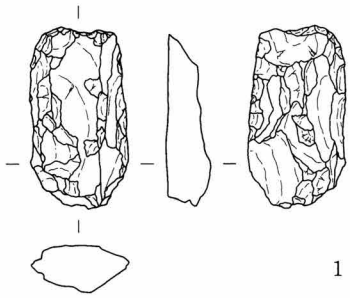
遺　　物

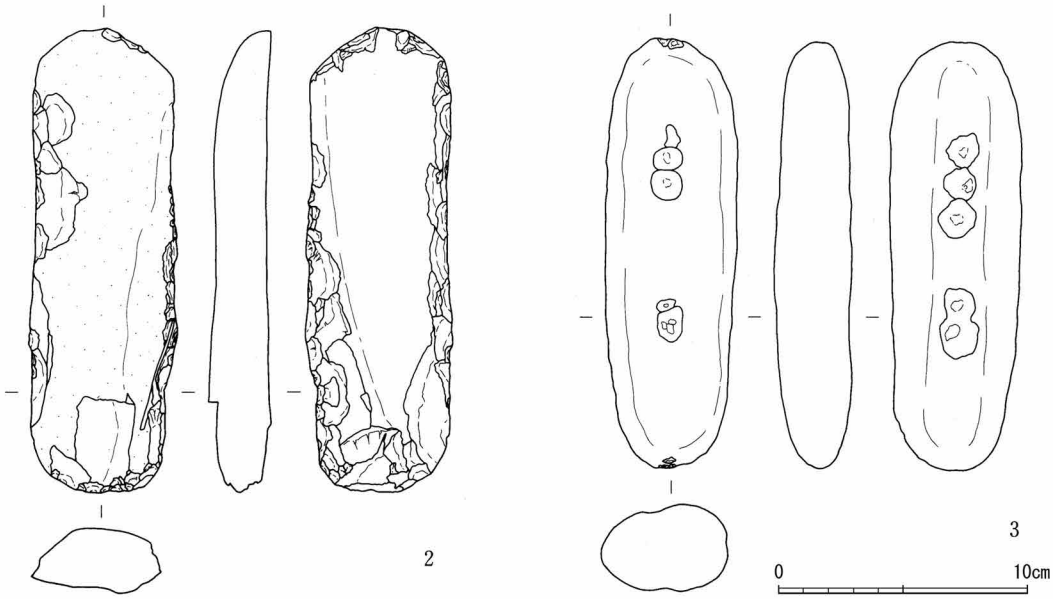
第８図・第10図は床付近より出土した土器である。

第８図１（No.１）は住居址北東部の床面より出土しており、土器の外面を床につけた状態で出土している。器形は、底部から外反しながら開いて口縁部にいたると考えられ、口縁部には４箇所の突起を持つものである。体部上半部の1/4程度残存している。口唇部付近は口縁部の波状に沿って半截竹管文



第８図　第２号住居址遺物実測図（1）





第９図　第２号住居址出土遺物実測図（2）

第10図　第2号住居址出土遺物実測図 (3)

を施し、その下部からは、突起下部をレンズ状文の縦位の分割基準として4単位の文様を施文している。土器は全体的に明るい褐色で、内面は丁寧にミガキが行われていた。

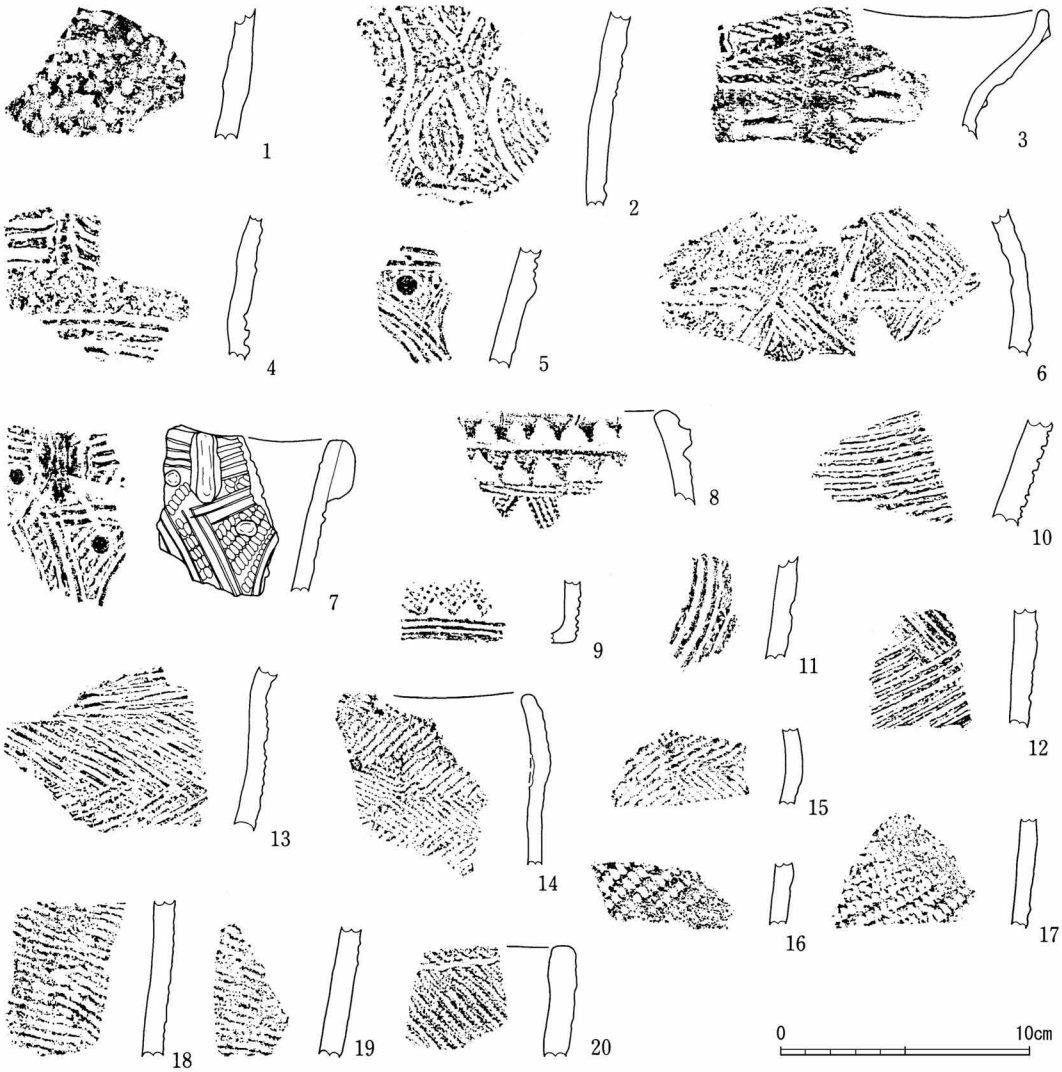
2はやはり体部上半部で1/4程度しか残存していない。口縁部は平口縁で、口唇部から半截竹管状工具による平行沈線文でレンズ状文を施文している。口縁部はやや開き気味の体部からやや屈曲して更に開いている。この土器は1よりもやや胎土が粗くミガキも粗雑な印象を受ける。

第10図の土器は床より出土しており、ほぼ完全な形に復元することができた。底部からやや内湾気味に開く体部は、上半部で一度内側に屈曲し、再び直線的に開いていく器形である。口縁部上部には粘土紐を三本平行に貼りつけた後、その隆帯の上下を指で交互に押圧することによって波状にしている。体部は単節縄文による羽状縄文で埋められている。

第11図は破片である。1は外面に刺突文を施文している。2は縄文を地文として沈線により縦位の楕円や曲線を施文している。3は縄文を地文としてその上に細い隆帯を貼り、その上にも縄文を施文している口縁部の破片である。4はやはり縄文を地文として竹管状工具をもちいて沈線文を引いている。破片の上部には縦位の並行する沈線を引いて一種の区画文としている。5～7は縄文を地文とした上に、並行沈線とボタン状貼付文を伴う破片である。7は口縁部上部に縦位の短い突起を作りだしている。8・9は印刻文を伴う破片である。8は口縁部で、上部の抉られ

ていない部分については無文とし、体部につながる箇所から半截竹管状工具による押引文が施されている。また9は底部の破片で、最下部には横位の沈線が引かれている。10～13は並行沈線を施文している土器である。10・11はレンズ状文を作りだしており、12・13は横位の綾杉状の文様を施文している。14～20は縄文を伴う土器で、14・15は羽状縄文である。

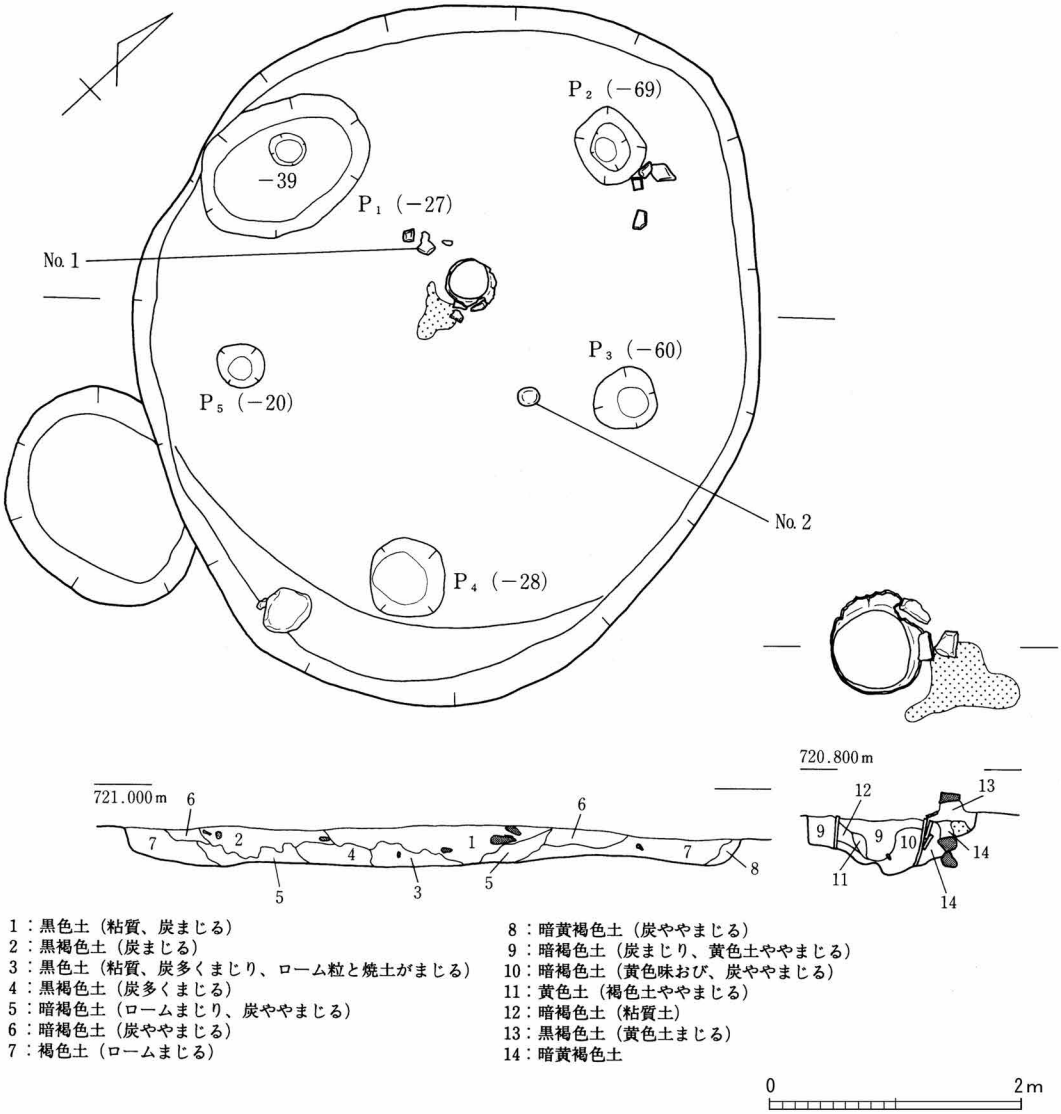
第9図1・2は打製石斧である。1は刃部が欠損しているが、短冊形をした石斧と思われる。表裏共によく調整されている。2は表面に自然面を多く残しており刃部を中心にして加工が行われている。刃部は欠けているのか先端部は丸くなっている。3は凹石である。上部・下部の先端部には使用痕が確認される。



第11図　第2号住居址出土遺物実測図 (4)

第３号住居址

この住居址はＧＰ－82より出土している。段丘の東側に位置しており、サブトレンチをいれてプランを確認して調査を開始した。しかし、調査時に覆土中より出土した遺物は少量であり、床直上からの土器の出土もなかった。遺構図に記録している遺物についても床より10cm～20cm上部で出土している。遺構の規模は、５ｍ×５ｍの不整円形で調査時に南東壁を掘り込みすぎている。柱穴はP_1～P_5の５箇所と考えられる。P_1は集石炉の土坑と重複して出土しておりこの遺構とは時期差がある。住居址の中央部には埋甕炉があるが、焼土は炉体の南床に出土している。炉に使用された深鉢は直径45cmの比較的大型のものである。

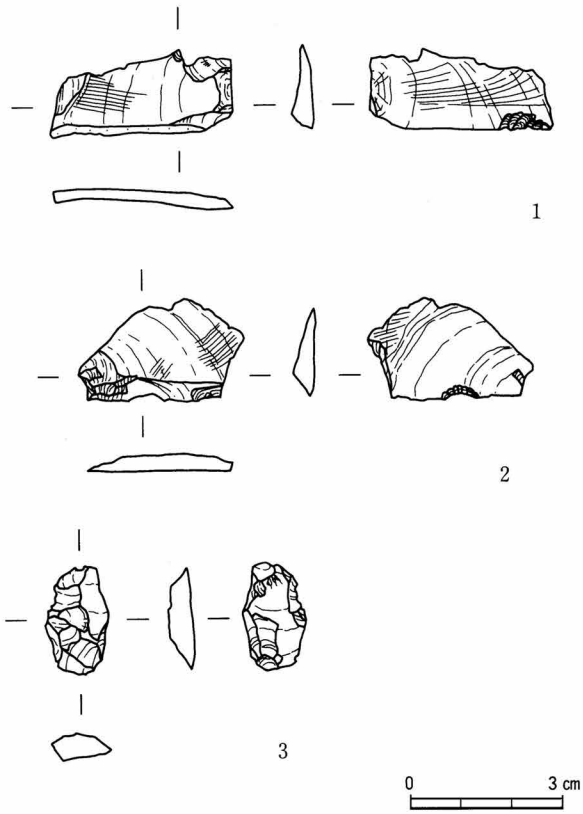


第12図　第３号住居址実測図　Ｓ＝1/60（炉：Ｓ＝1/30）

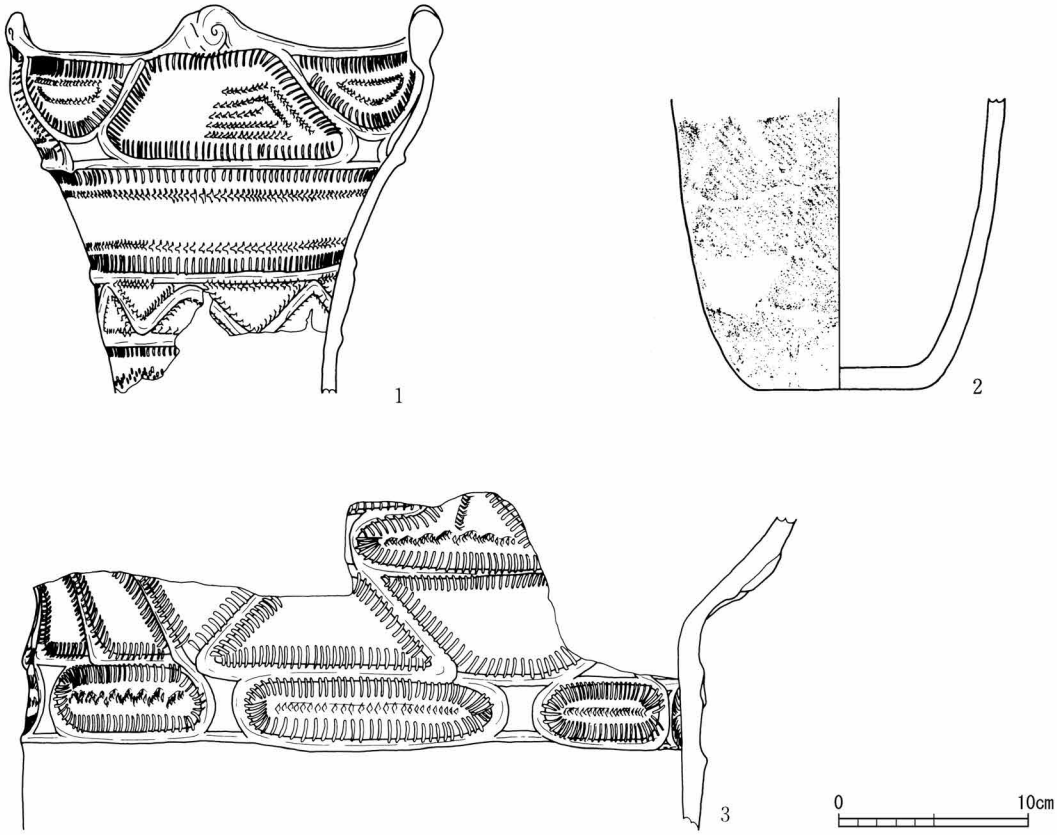
遺　　物

第14図は床付近より出土した土器である。1は炉址付近より出土しており(No.1)、体部下半部を失っているものの上半部についてはほぼ残存していた。口縁部には4箇所の突起がつく波状口縁で、口縁部は隆帯による区画を爪形文で縁取り、区画内はペン先状工具による楔文で充填している。3は埋甕炉である。体部上半部で楕円文が横位に一段配された上部に不整形な三角形の区画文を施文している。体部と口縁部の境界部の文様は隆帯の脇に爪形文を施しているのみで区画内には施文はみられない。その他の文様帯の区画内は爪形文を隆帯に沿って施文し更にその内部を三角押文を直線状または波状に刺突している。体部下半部は現存している部分を見る限りでは無文である可能性が高い。口縁部は直線的に立ち上がる体部とは対照的に大きく外側に開いている。

第15図～第17図は住居址の覆土より出土した破片である。第15図1～8は沈線文を施文している土器である。1～6は半截竹管状工具による並行沈線文を多用しており、縄文時代中期初頭の文様要素がみられる。また、7は胎土が緻密で、焼成が良好な土器片である。曲線を描いて施文されている沈線の脇には半截竹管状工具を縦にして突いた爪形文がみられる。8の沈線で縁取られた区画帯はやや盛り上がっている。9は横位の沈線の下部に、半截竹管状工具を使用して抉るようにキザミを施文しており、工具内側の繊維状の痕跡を、器壁に残している。10～15は角押文を多用している。10と11は同一個体で、白色の粒が混じっているが緻密な胎土である。12・13も同一個体で、白味の強い褐色を呈しており、緻密な胎土であった。14は内面にミガキの痕跡をよく残し、胎土も緻密で焼成も良好であった。16～18は爪形文を施文している土器で、隆帯上にキザミを施している土器もある。19は斜行沈線文系の土器である。赤味のある胎土に雲母が混入している。焼成も良好である。20は隆帯の脇に角押文を施文している土器で、色調は白味がかり、良好な焼き上がりである。21～23・26・28・29は抽象文を施文している土器片である。21・22には爪形文の脇に三角押文が施文されており、特に22はやや黒みを帯びた胎土で器壁は薄



第13図　第3号住居址出土遺物(1)



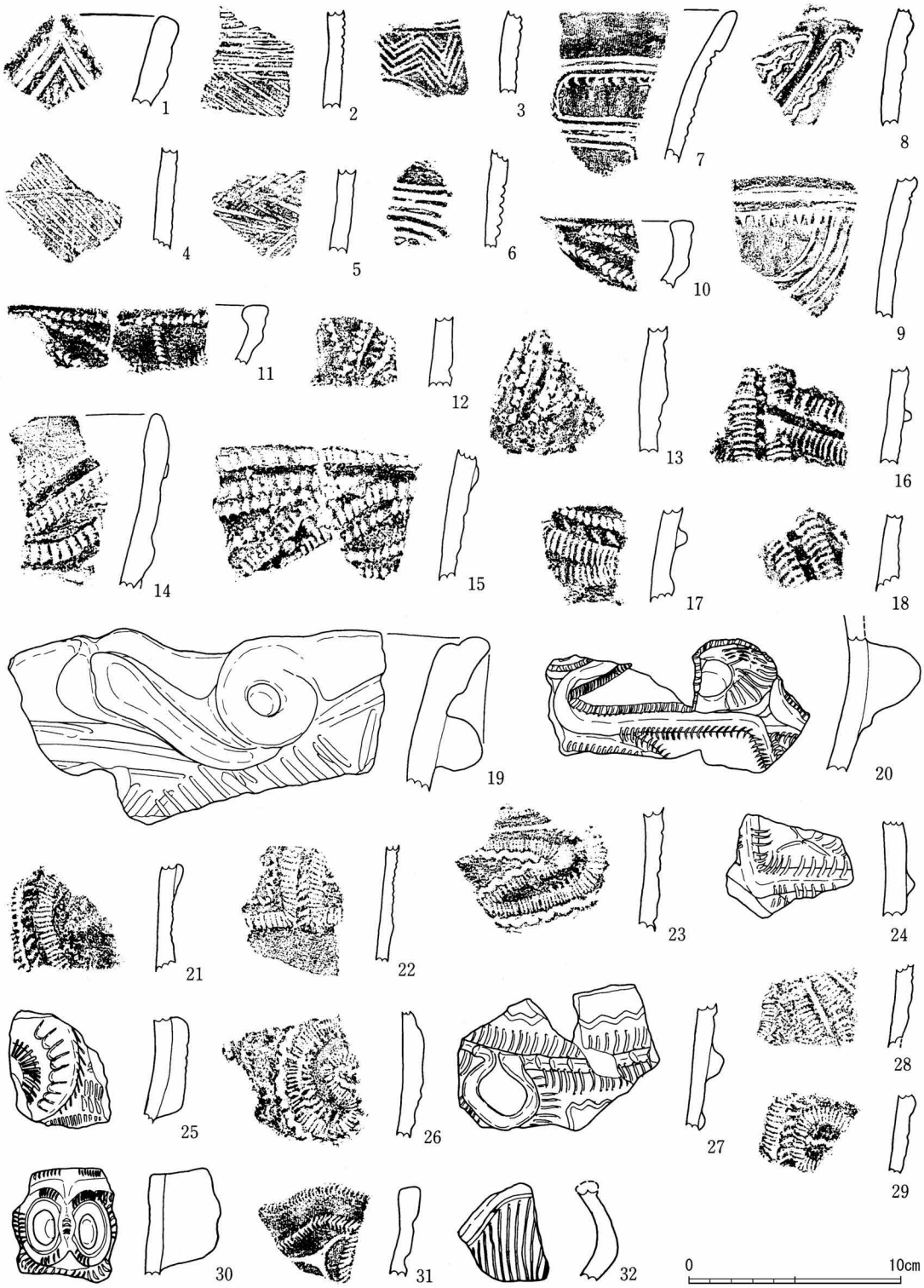
第14図　第3号住居址出土遺物（2）

い。胎土内には砂粒が混じっているものの焼成は良好であった。23は緻密な胎土で焼成も良好であり、内面には煤が付着していた。26は内面にミガキ調製痕をよく残し、爪形文の両脇には三角押文を施している。24は白っぽい胎土で焼成は良好であった。25は内面に煤が付着していた。30は白っぽい緻密な胎土であった。32は口縁部で、砂粒の混じる粗い胎土であった。

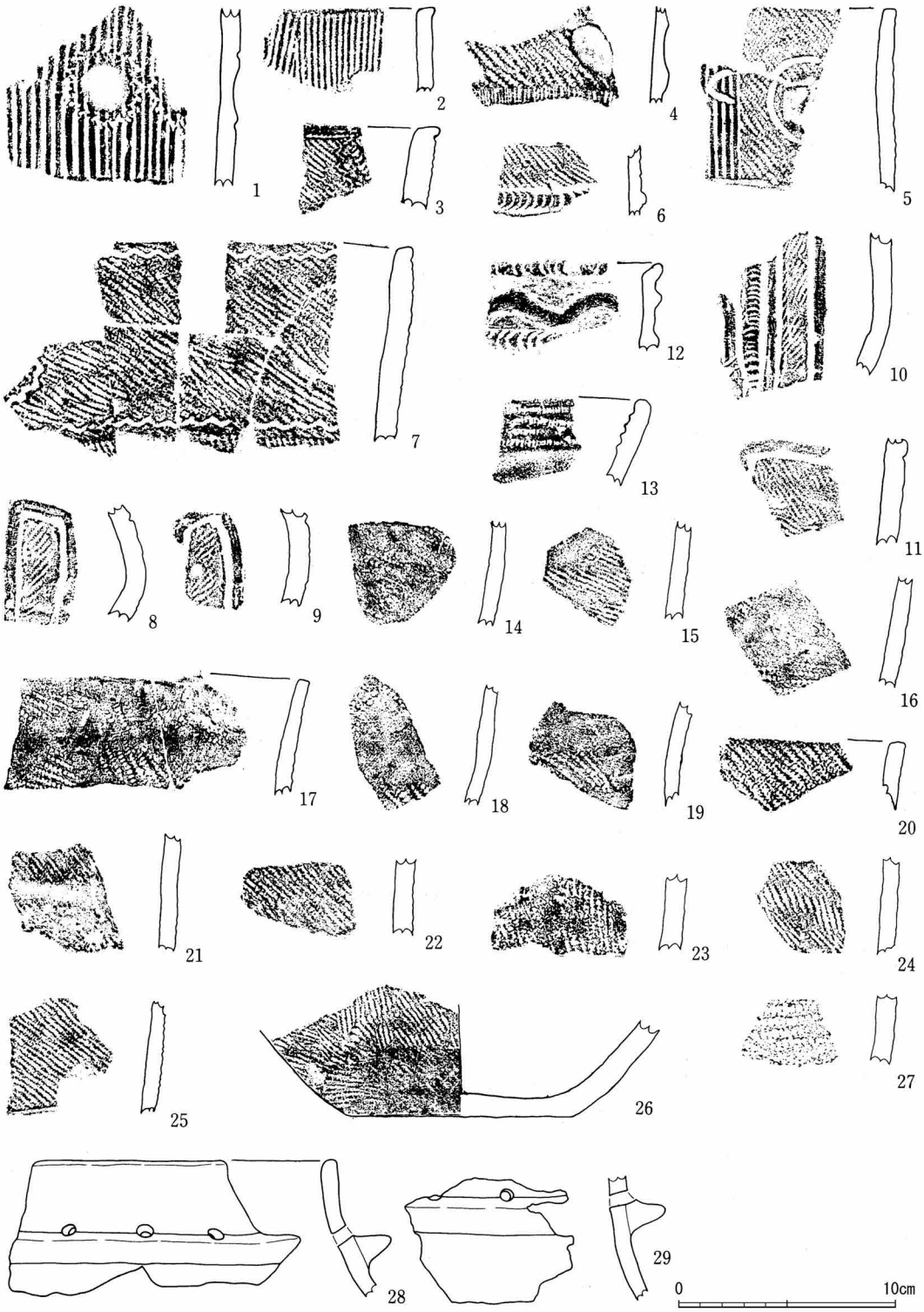
第16図1・2は縦位に沈線文を持つもので、1の円形の無文部の脇には三角押文が施文されている。また2は内面にミガキが密に施されている。3～7は口縁部に縄文を施文している土器で4は内面と断面に煤が付着していた。7は口縁端部にヘラ描きの波状文を施文しており、白色小粒の混じった白っぽい胎土である。13は浅鉢の破片で、白色小粒と雲母が混入している。14～27は縄文を施文している土器である。17は口縁部の破片であるが、突起状の起伏が口縁部上端に確認できる。20には煤が付着しており、26は白っぽい胎土でしっかりした焼成であった。

なお26は炉址東部（No.2）、28・29は床よりやや浮いて出土（No.1）している。

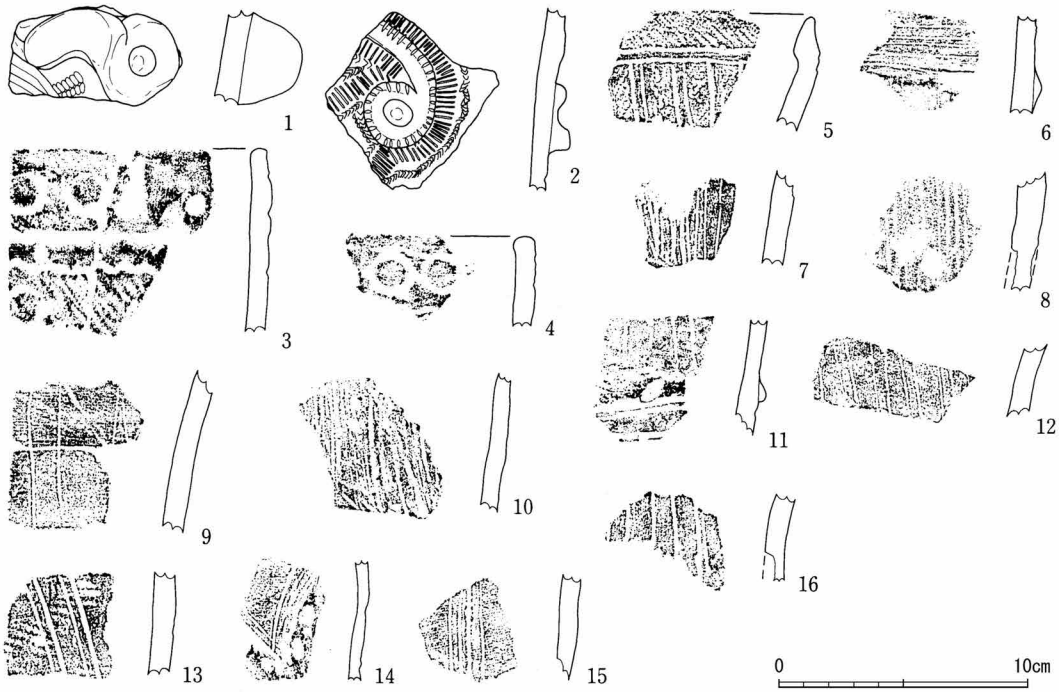
第17図3・4は緻密な胎土で焼成も良好である。色調は白っぽく、竹管によって円文を刺突している。なお、3には補修孔が穿たれている。



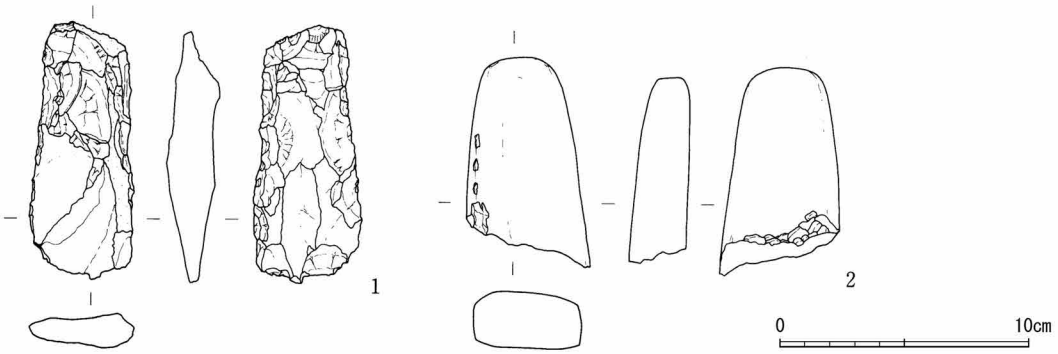
第15図　第3号住居址出土遺物 (3)



第16図　第3号住居址出土遺物 (4)



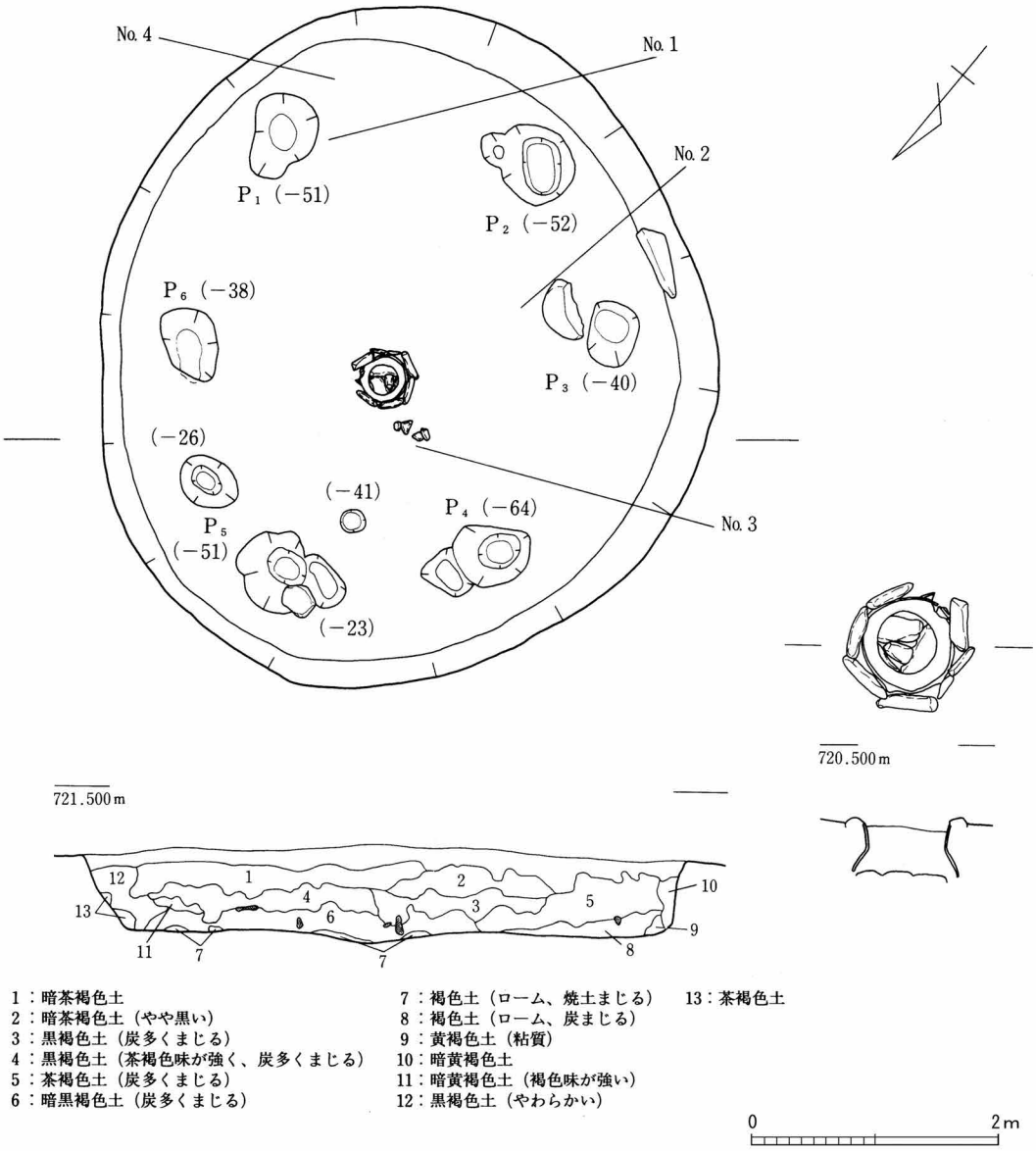
第17図　第3号住居址出土遺物 (5)



第18図　第3号住居址出土遺物 (6)

第4号住居址

ＧＴ－85より出土している。直径5.5×5ｍの楕円形を呈しており、中央部に埋甕炉を設けている。主柱穴はP_1～P_6の6箇所と推定される。覆土中からは土器片のほか、自然石を円柱状に加工している石棒と思われる石器も出土している。また、床直上より出土している土器出土地点(No.1)からは器形の判明する土器のほかに破片も集中して出土している。埋甕炉（第23図1）の周囲は長さ20cm程度の石によって囲まれており、炉の底部にも石が敷きつめられていた。



第19図　第4号住居址実測図　S＝1/60（炉：S＝1/30）

遺　　物

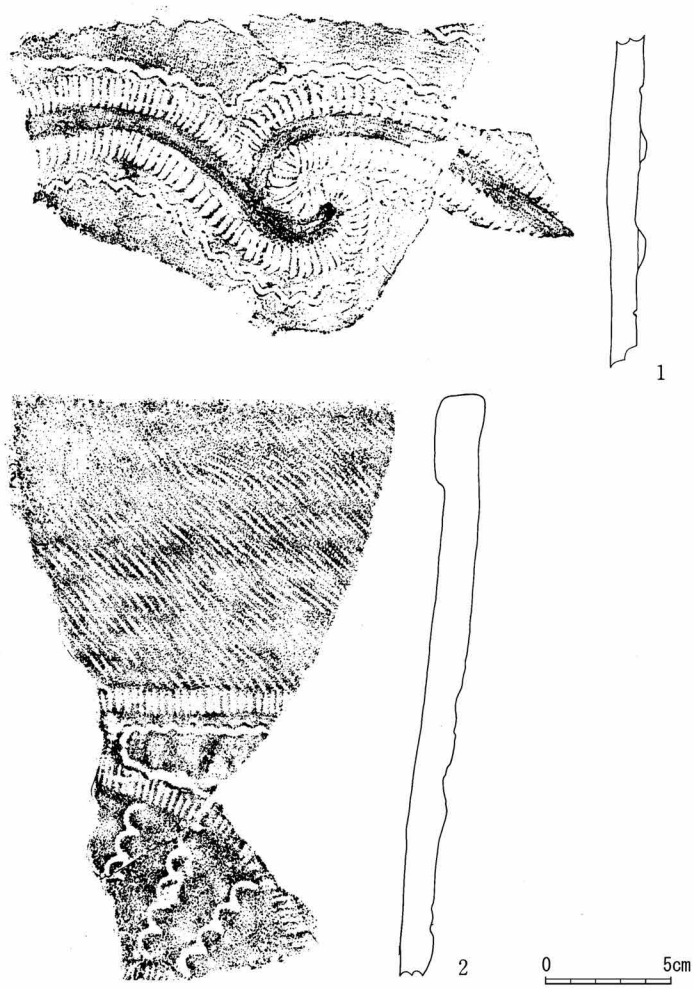
第20図～第28図が第4号住居址より出土した土器である。なかでも土器集中地点（No.1）より出土した土器は第20図1・第21図3・第23図3・第25図14・30・33・第26図23・第27図1・第28図27である。第20図は抽象文を体部に施文している土器である。1は隆帯の両脇に爪形文を施文し、更にその外に波状沈線を施文している。緻密な胎土で焼成も良好である。破片上部には煤が一部付着している。2はやや粗い胎土である。抽象文内は半截竹管状工具で刺突を加えている。

第21図は床付近より出土している土器である。1は焼成があまりよくないため、磨滅している

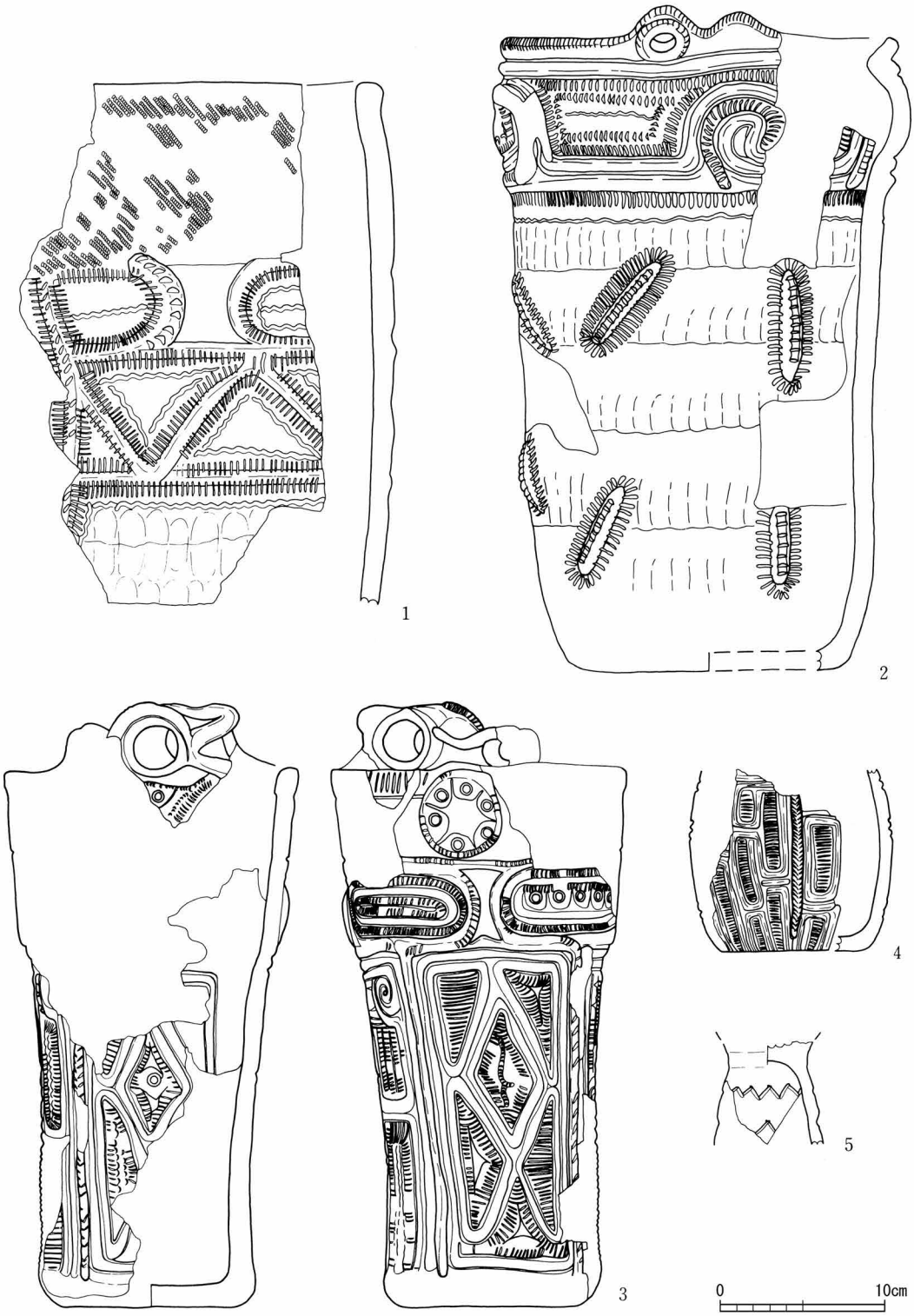
箇所がある。なおこの土器は住居址南部の石の下から出土している(No.2)。2は南東壁寄りのP_1付近より出土している(No.1)。口縁部に円環文を持つ突起を1箇所に配した。赤褐色を呈した焼成の良好な土器である。3も2と同じ地点より出土しており、口縁部にみみずく状の把手を配したパネル文の系統の土器である。色調はやや白身を帯びるが内面は煤が付着しているのか黒色を呈していた。焼成は良好である。4は小型の土器で、パネル文の系統の土器である。やや赤みのある色調で緻密な胎土であった。焼成も良好である。5は台付鉢の底部である。淡い褐色を呈し、焼成はややあまい。

第22図は櫛形文を施文している土器である。器壁は薄く、焼成は良好であった。色調は淡褐色を呈しており、胎土中に白色の砂粒が多く混入されていて、平出III類Aの胎土とよく似ており、この系統の土器の可能性も考えられる。

第23図1は埋甕炉として使用されていた深鉢である。口縁部と、体部下半部を切り取って炉体としている。全体に赤褐色を呈しており、体部上部には縄文が地文として施文されており、その上に隆帯による渦巻き文と半截竹管状工具による平行沈線文が引かれている。隆帯上には一部にキザミが入れられている。胎土は緻密で、焼成も良好である。なお、内面の屈曲部付近には、煤が若干付着している。2はやや開き気味の円筒形の土器で、全体のおよそ1/4程度しか残存していない。口縁部には1箇所に突起が付けられていたと考えられるが接合関係はない。内面はミガキが密に施され、緻密な胎土と相まってやや光沢がある。色調は明褐色を呈しており、全体的に白っぽい感じである。3は土器集中地点より出土している(No.1)。円筒形の土器で体部下部は失われている。口縁部を除いて全体に縄文が施文されている。内面にミガキの痕跡が



第20図　第4号住居址出土遺物(1)

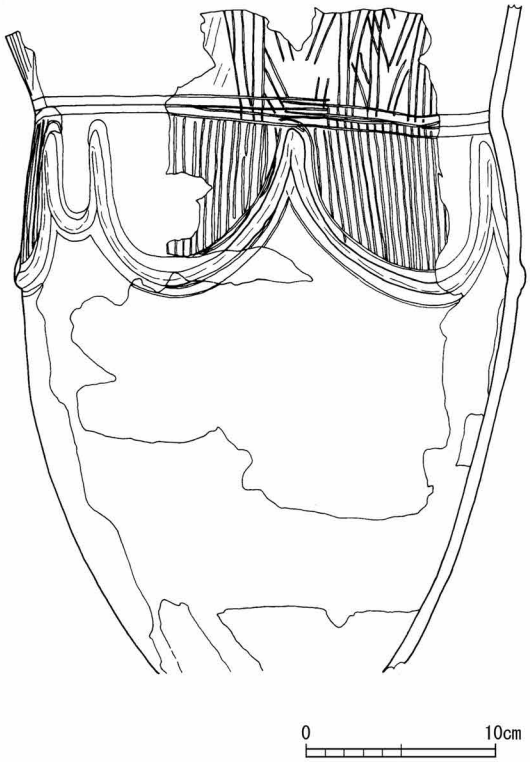


第21図　第4号住居址出土遺物(2)（4・5は1/2）

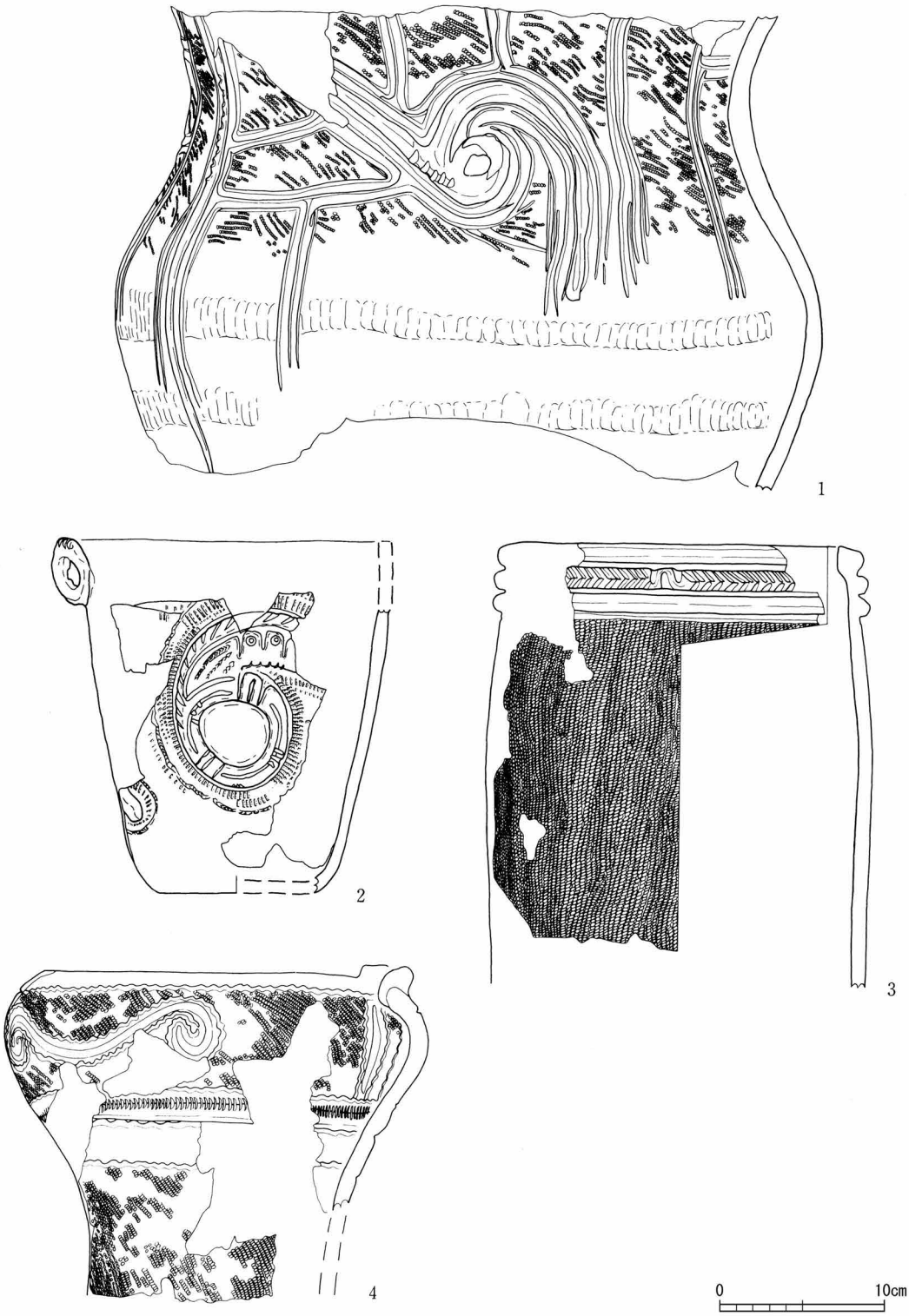
残り、特に口縁部上端部に顕著である。外面の一部には煤が若干付着している部分もみられた。４は縄文を地文として沈線を主体に文様を描いている土器である。口縁部に小さな突起を作り出している。細かい砂粒が混入した胎土であるが、焼成は良好であった。やや赤味をおびた褐色を呈しており、内面には煤が一部付着しており、口縁部付近は磨滅痕が確認された。

第24図～第28図は住居址より出土した破片である。第24図１・３～12は角押文を多用している土器である。１・10は三角押文を施文している。１は内面にミガキが密に施されている。また、10は明褐色の色調を呈している。４は土器集中地点（№１）より出土している。５は楕円の区画文下部にヘラ描きによる沈線を施文しているもので、全体的に磨耗がすすんでいる。13は隆帯脇をヘラ状工具をやや斜めに押すことによって、縄を押しつけたかのような文様を表現している。胎土中には白色砂粒が混入しており、色調は褐色を呈している。この遺跡より出土している土器のなかでは異質の土器である。

第24図14～31・第26図１～３・５・６・14～18は抽象文を体部に持つ土器である。隆帯上にキザミを持ち、両脇を爪形文で施文するもの（第24図15・17・22・23・30・第26図18）や爪形文の脇に波状沈線を引くもの（第24図15・17・18・27～29・31・第26図６）がある。また、第24図14のように爪形文で抽象文のモチーフを描きだしたものもみられる。第24図15は色調は淡褐色を呈し、焼成は良好であった。16は爪形文の下部に半截竹管状工具の小口面を利用して刺突を加え、波状に文様を表現している。19は隆帯脇に爪形文を施文しているが、その隆帯上部の爪形文との間にヘラ状工具によってキザミを施文している。25は土器片の色調が淡褐色を呈している。隆帯と爪形文で区画された内部にはペン先状工具を使用して斜位に交互刺突することによって波状文としている。第26図１・２・５は同一個体である。全体に淡褐色を呈しており、やや白っぽい印象の土器である。内面は光沢があるほどよくミガキがかけられている。文様はヘラによってすべて施文されている。３は磨耗の著しい土器で爪形文の下部には波状沈線文が施文されている。内面はミガキの行われた痕跡が確認されている。14は爪形文を伴う隆帯の上部に三角押文を施文している。15は緻密な胎土で焼



第22図　第４号住居址出土遺物（3）



第23図　第4号住居址出土遺物 (4)

成も良好であった。16も緻密な胎土であり、爪形文の脇には波状沈線文が引かれている。

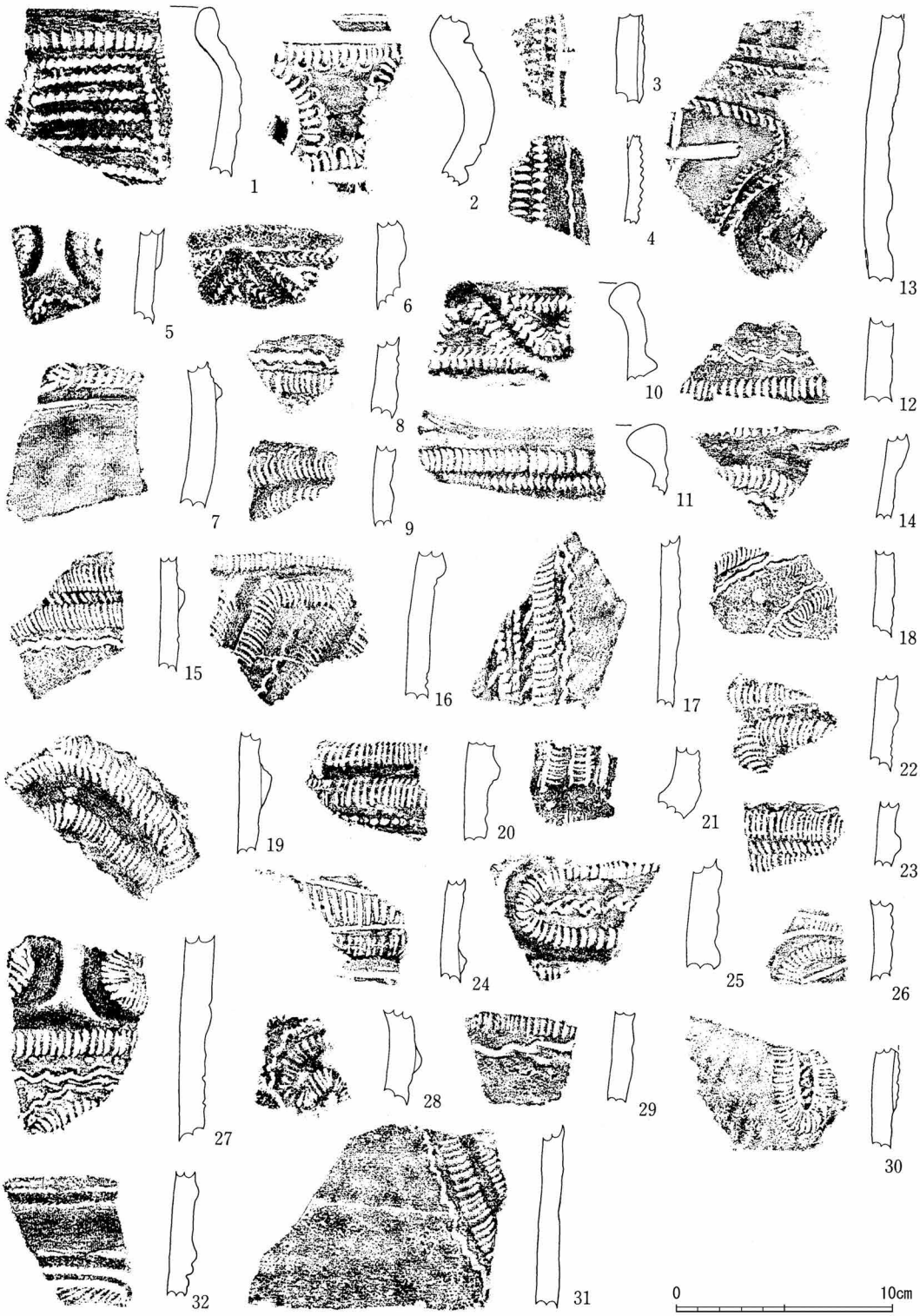
第25図15～35・第26図20～22はパネル文を体部に施文している土器である。縄文を地文としている土器（第25図15・16・18・19・22）は半截竹管状工具で区画し、内面に炭化物がおこげ状に付着しているもの（15）や内面によくミガキが施され、やや白っぽい色調をしており、外面には半肉隆線で区画された中に押引文（19）や波状沈線を施文しているもの（22）がある。また、区画内を横位や斜位の沈線で充塡しているもの（第25図29・第26図20～22）があり、第25図29は緻密な胎土で焼成も良好である。色調も明褐色を呈している。第24図20と22は同一個体である。21は淡褐色を呈しておりやや白っぽい。内面にはミガキが施されている。また、区画内に温泉マーク文を配している土器（第25図24・28）もみられる。

第25図１は第27図１と同一個体で、口縁部を無文帯とし、口縁上部にはキザミと竹管の刺突による円文で装飾している。無文帯の下部には半截竹管状工具を使用しての平行沈線を施文し、その沈線間には一部にキザミが確認できる。焼成はやや甘く、全体的に白っぽい土器であるが、内面は黒色であった。第25図４は外反気味に立ち上がる体部から頸部が断面「く」字状に屈曲して内湾気味になりながら立ち上がっていく器形の深鉢である。肥厚気味の口縁部上部は縦位の集合沈線を施文し、その下部には弧状の並行沈線文を引いている。６・７は口縁部が無文となり、口縁部上端部にキザミがある深鉢である。いずれも内面にミガキが緻密に施されている。

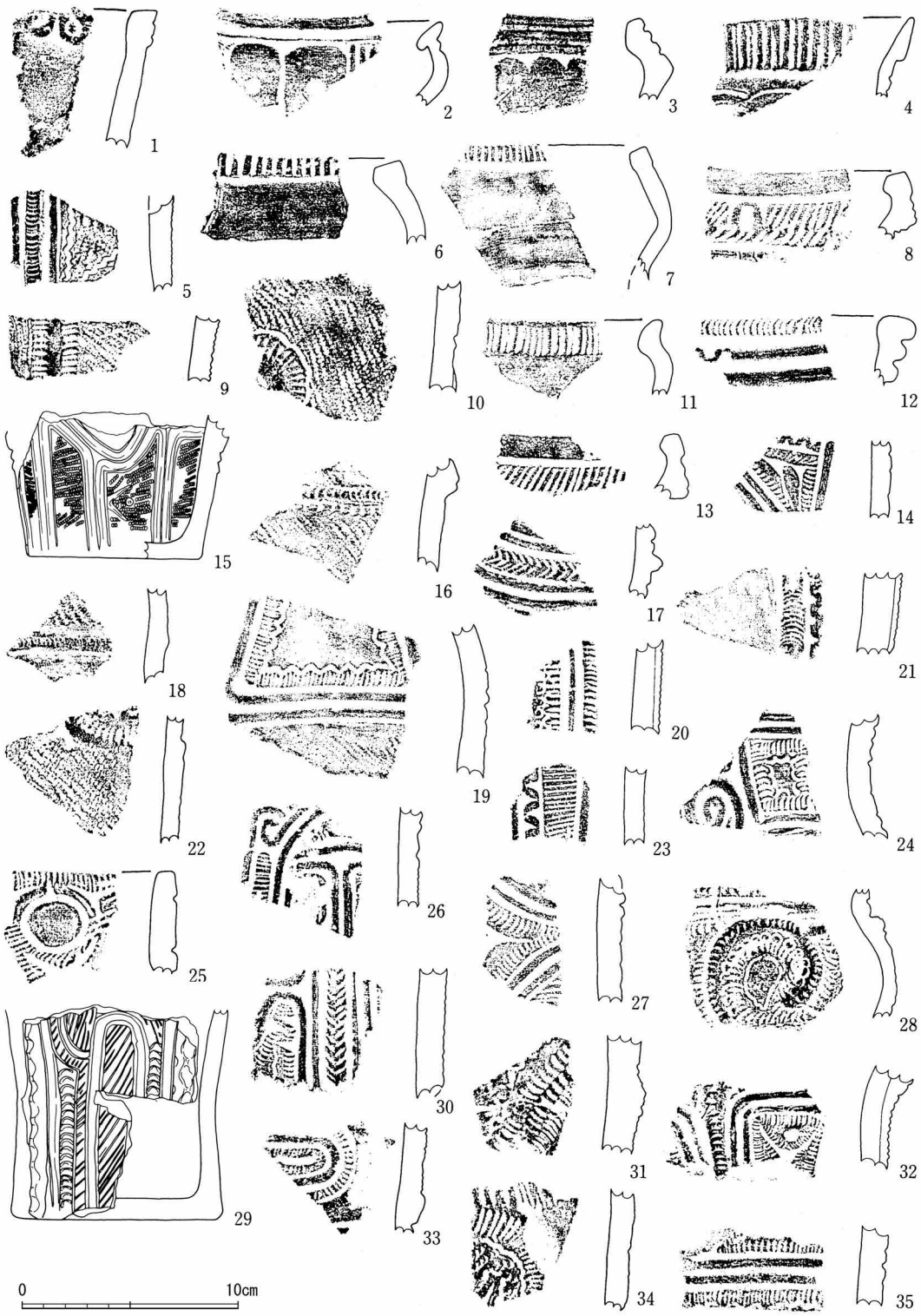
第26図７～13は楕円文が重畳する系統の土器である。隆帯によって楕円文を形成し、その内部に爪形文を施文している。この楕円文の施された文様帯の上部や下部に、爪形文と波状沈線文を横位隆帯に沿って施文しているもの（８・13）もみられる。13は緻密な胎土であり焼成も良好であった。９は口縁部で、２条の爪形文を口縁に沿って施文している。19・25・26は浅鉢の破片である。19・25は口縁上端部に温泉マーク文を施文している。

第27図２は地文に縄文を施文し、隆帯や沈線を引いている。胎土は粗く、白色の砂粒が多く混入している。３・５は薄い粘土紐を貼り付けているもので、３は薄い隆帯上に縄文を施文し、その他の部分は縄文を磨り消している。５は白っぽい色調で、胎土は粗い。４は隆帯によって楕円を作り、その内部を沈線で装飾している。胎土は緻密であるが焼成はあまい。23～31・第28図１～26は縄文を主文としている土器である。縄文装飾の中に沈線を引いているものもみられる（第28図７・16・24）。第28図14は内面にミガキがかけられ、黒色の雲母が多く混入している。

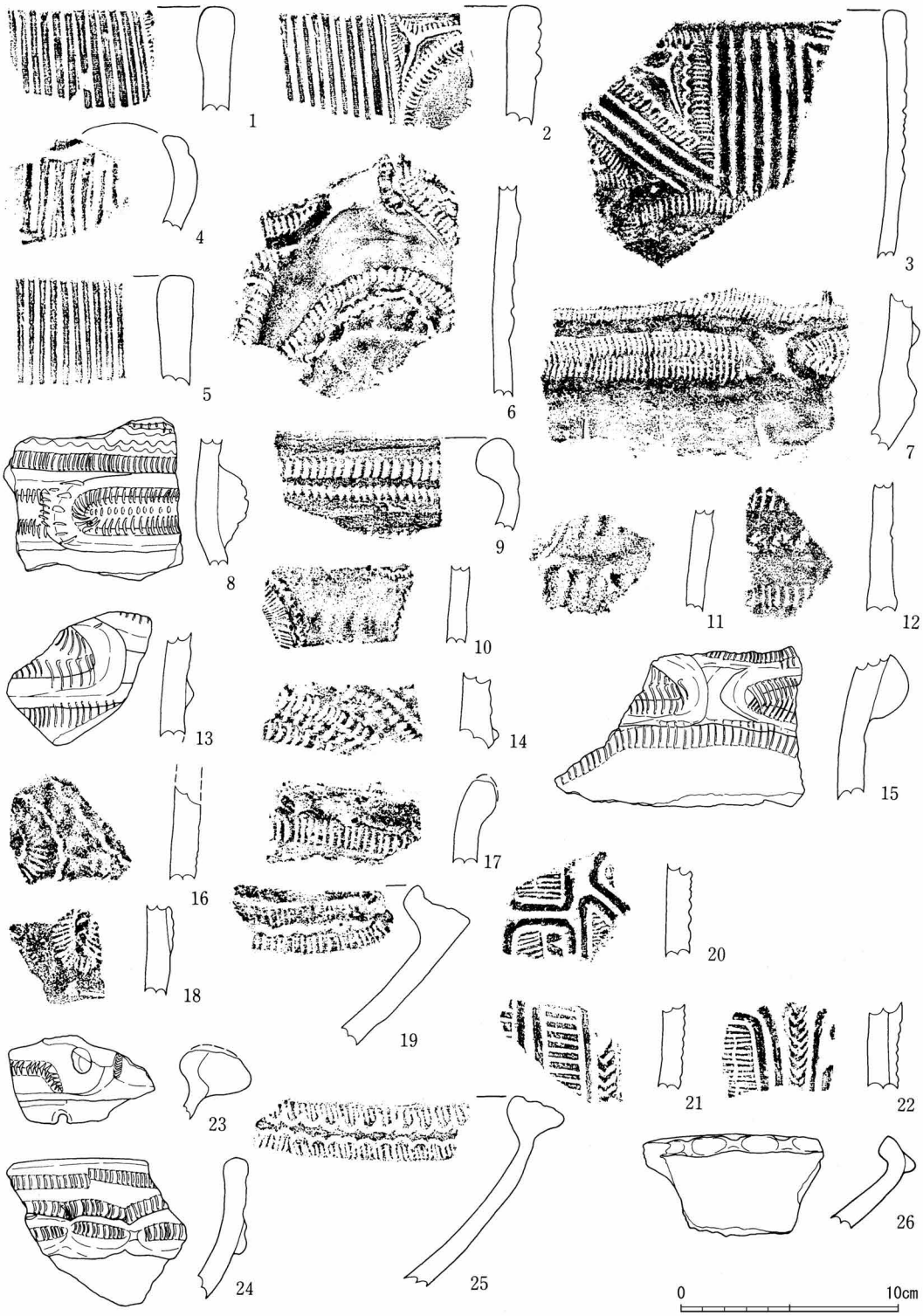
第29図１～４は打製石器である。１は撥状の石斧で、一部に自然面を残している。基部は欠損していた。２～４は短冊型である。２は刃部を欠損している。表面に一部自然面を残している。表面よりみて右側に調整加工が集中しており、横刃型石斧の可能性もある。３はほぼ完全に残っている。刃部に調整加工がされている。４はやや刃部が幅広くなっており、撥型の形態に属するのかもしれない。ほぼ完全に残っており、刃部より基部に細かい調整加工が加えられている。５は覆土を掘り下げる作業中に出土している。全面にミガキを加え、断面円形に仕上げ、先端部も丸く加工している。下半部と、上端部が欠損しているが、石棒であろう。



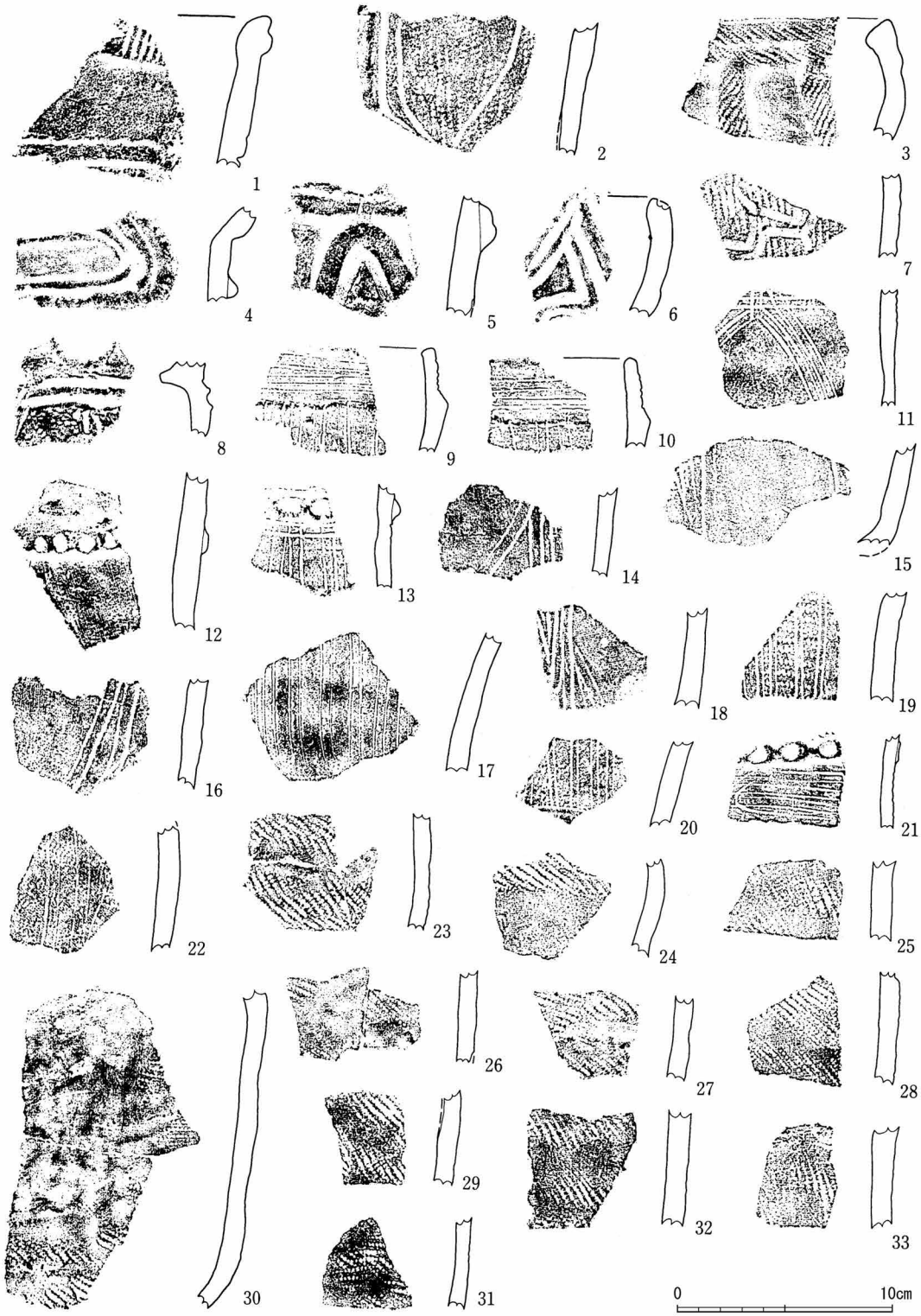
第24図　第4号住居址出土遺物 (5)



第25図　第4号住居址出土遺物 (6)

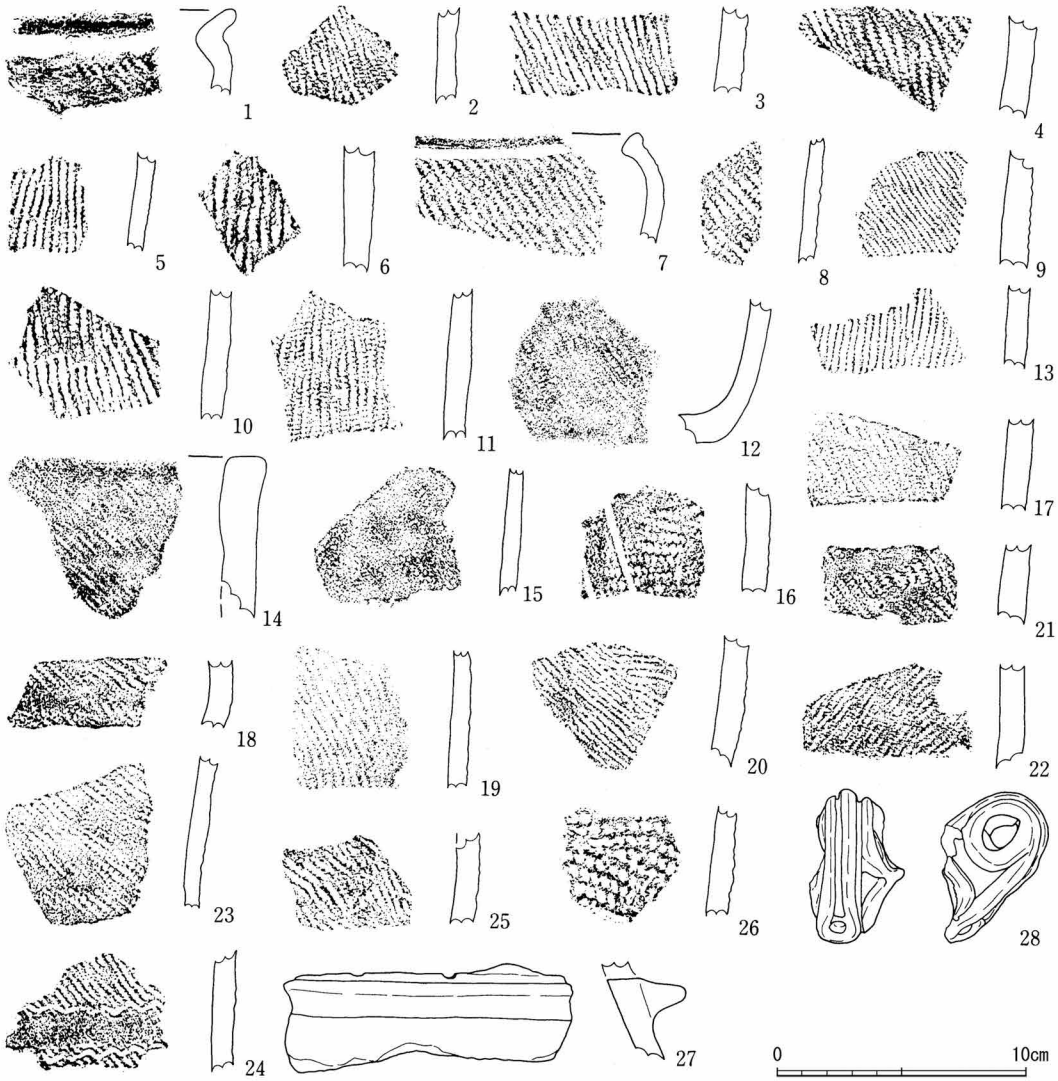


第26図　第4号住居址出土遺物（7）

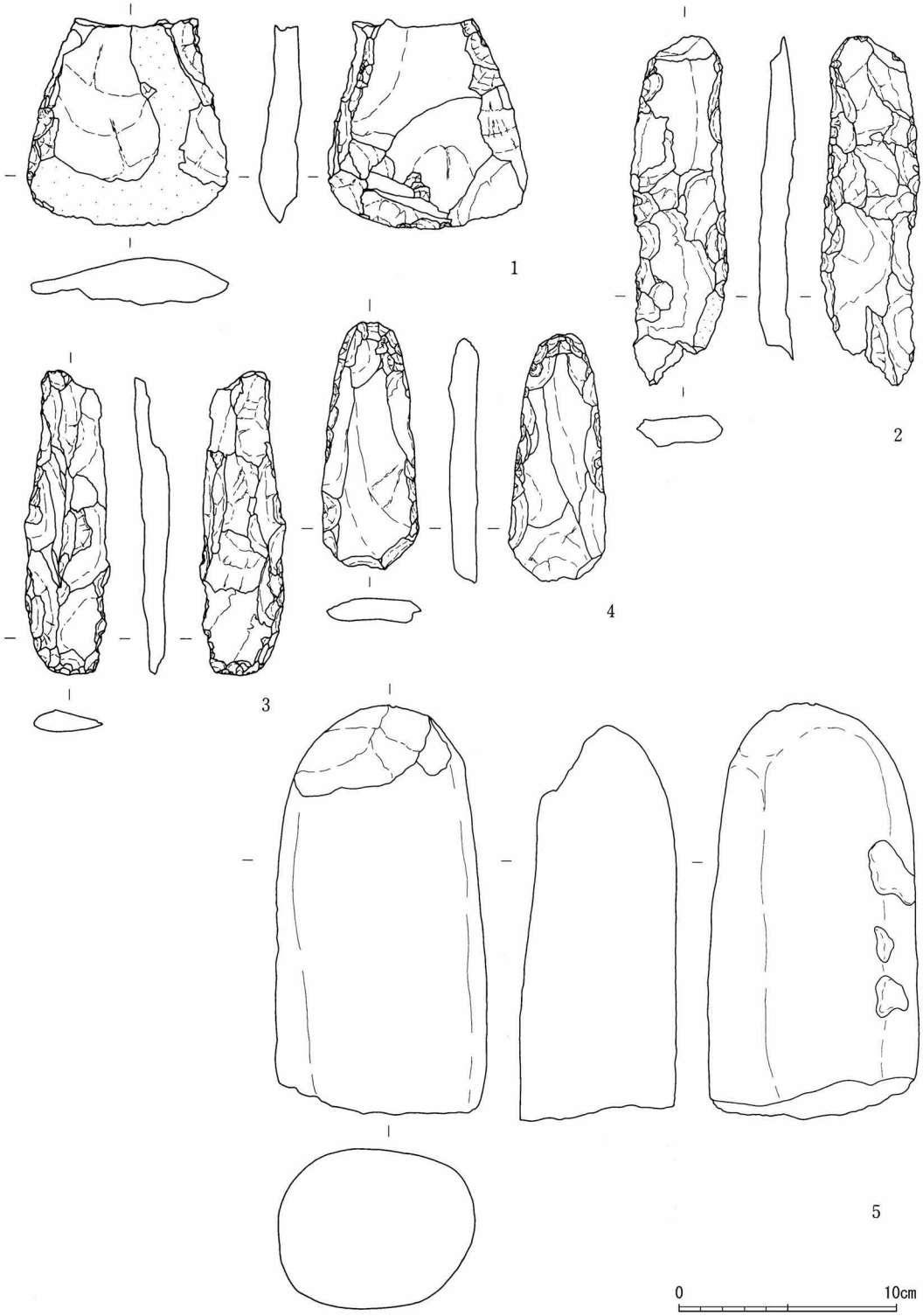


第27図　第4号住居址出土遺物 (8)

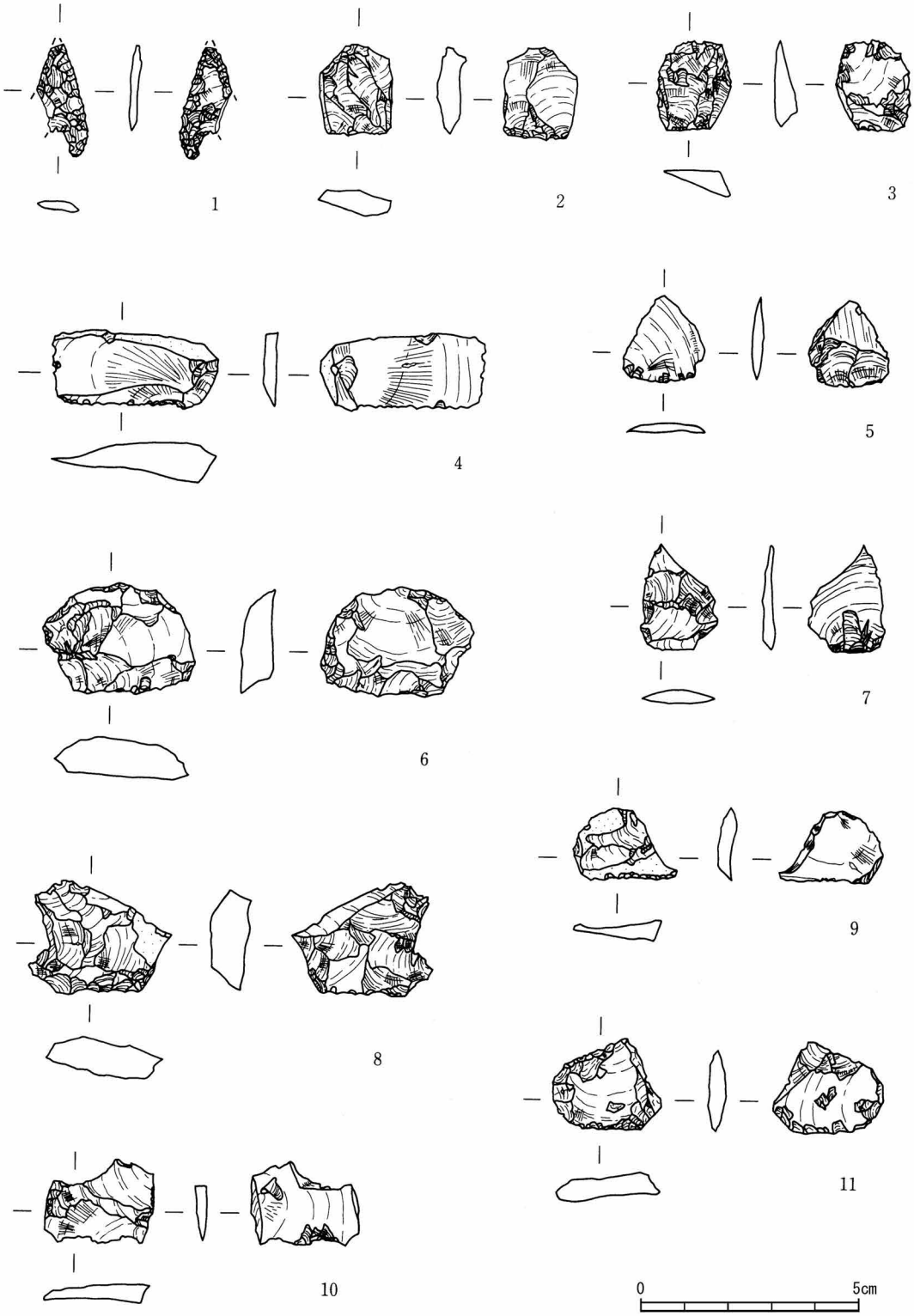
第30図は黒曜石製の石器である。１は無茎の石鏃で一方の基部が欠損している。２・３は楔型石器である。全体に方形で断面は台形（２）または三角形（３）を呈しており、上部と下部に複数回の打撃痕がある。また表面に縦長の剥離痕も確認することができる。４～11は剥片を利用した石器である。刃部として利用したと考えられる箇所には小剥離痕がある。７は下部に数回の打撃によると思われる剥離痕が存在し、楔型石器的な使用法をしていたのかもしれない。また、６についても小剥離が側面にみられることから、ここに刃部のあった可能性も考えられる。11は下部に小剥離痕をもつ石器であるが、全体的に整形のための加工が行われたような痕跡があり、石器の未製品の可能性も考えられる。



第28図　第４号住居址出土遺物（9）



第29図　第4号住居址出土遺物（10）



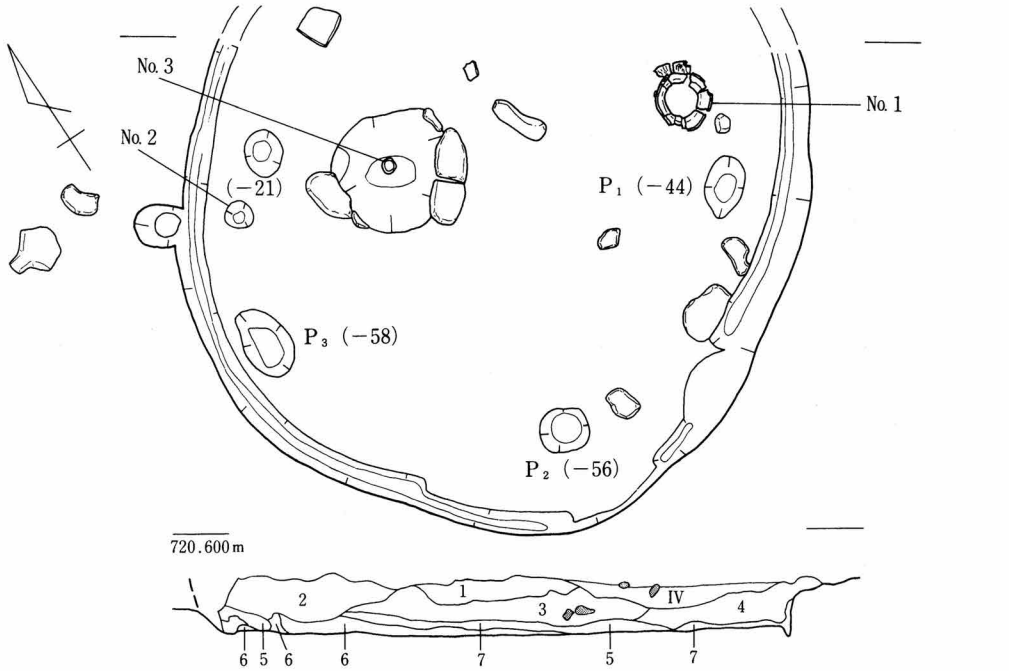
第30図　第4号住居址出土遺物（11）

第５号住居址

この住居址はＦＮ－77より出土している。北東部が調査区外となってしまったために完掘することはできなかったが、直径約５ｍの円形に近い隅丸方形のプランである。P_1～P_3が主柱穴と考えられる。現存する壁高はおよそ30cmで、壁の直下には周溝がほぼ全周している。周溝は幅約20cmで深さは10cm～５cmである。炉は住居の北西寄りに直径１ｍ程の規模で造られていたが、炉石は抜かれていた。炉の中心部には小型の深鉢の底部（第32図３）が出土している。床には大形の深鉢の口縁部が南西部から正位に出土し(No.１)、北東壁寄りからは小型の深鉢の口縁部が伏せた状態で据え付けられていた(No.２)。いずれの土器も唐草文系の土器であった。なお、埋甕は検出することができなかった。覆土には、炭化物や小礫が全体的に混入していた。

遺　　物

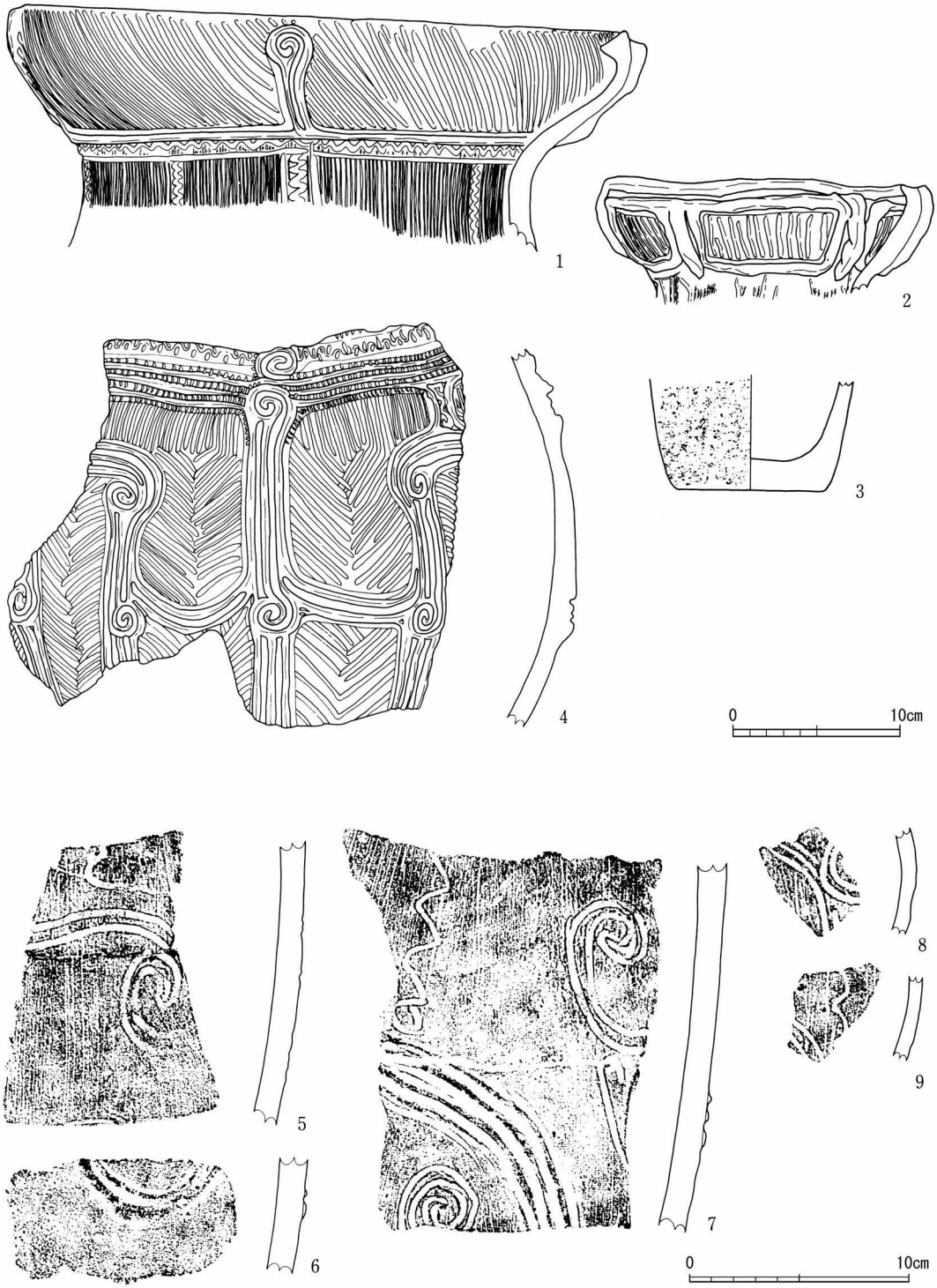
第32図１～４は住居址の床および床付近より出土している土器である。１は住居址の南西部に口縁部を上にして出土していた土器（No.１）である。底部から開き気味に立ち上がり、体部上半部に最大径をもって内傾し、頸部から口縁部にいたっては内湾しながらひらく、いわゆるキャリパー形の器形で、口径約40cm、残存高約15cmを測る。口縁部と体部の境界部には粘土紐を貼り付



1：黒褐色土（小礫まじる炭ややまじる）
2：褐色土（小礫まじり、炭ややまじる）
3：暗褐色土（小礫まじり、炭ややまじる）
4：黒褐色土（小礫まじり、炭ややまじる）
5：黒褐色土（焼土・ローム粒まじり、炭ややまじる）
6：黄褐色土（ロームに褐色土まじり、炭ややまじる）
7：褐色土（ローム多くまじり、炭まじる）

0　2m

第31図　第５号住居址実測図　Ｓ＝1/60



第32図　第5号住居址出土遺物（1・2・4は1/4、3は1/2）

け、その下部に波状沈線文を引くことによって体部と区画している。口縁部は頸部の横位隆帯より立ち上がった唐草文が4箇所に配され、その後に斜位のヘラ描沈線を引いている。体部は縦位の細い条線文で装飾し、その後に横位の波状沈線文や、沈線を引き、口縁部に配されている唐草文の下には両側に縦位の沈線を伴う波状沈線文を下位まで施文し、縦の区画としている。また、この区画線によって分けられた区画の中心付近には縦位の波状沈線文を引き下ろしている。2は住居址北東部に出土した土器（No.2）で、口径約15cm、残存高約6cmであった。やはり1の土器と同じようにキャリパー形をした器形で、口縁部には横位の四角形の区画を隆帯によって作りだし内部を沈線で縁取りしてから、その中を縦位のやや粗めの間隔のヘラ描沈線で充填している。そして、体部にいたっては細線による条線文を縦位に引いて装飾している。また一部には波状沈線文もみられる。3は炉の中より出土した土器（No.3）で、外面に縄文が施文されている。4は樽形をした深鉢の体部の破片で、北東部の調査区の境界付近より出土している。口縁部との境界に、交互刺突による波状文や3本の横位の隆帯の間に列点文を施している。また、体部には縦位に腕骨文を伴う隆帯文を貼り付け、その中程より両側に隆帯が延び、縦位の腕骨文につながっていく。この隆帯を貼りつけた後にヘラ状工具を使用して体部上部は縦位に、その下の体部には綾杉文を充填している。

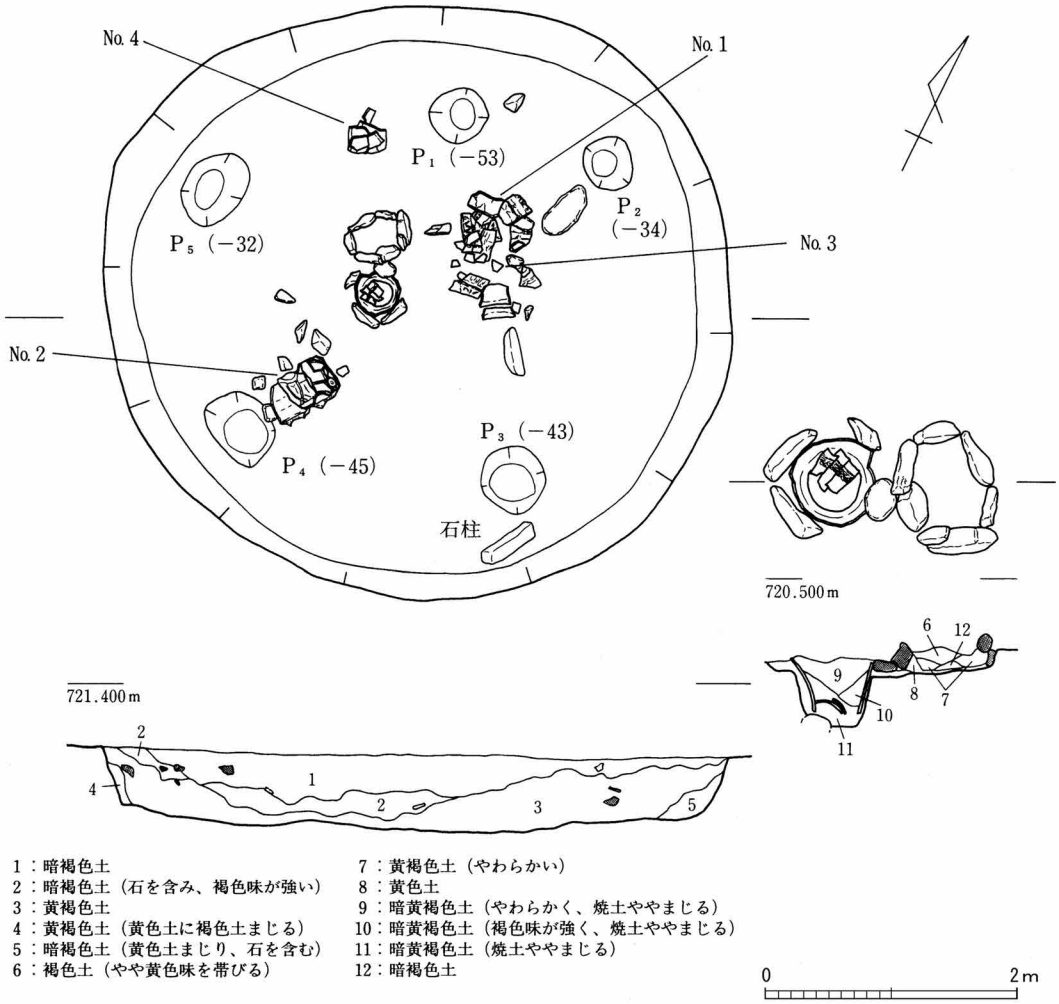
5～9は沈線文で施文をしている系統の土器である。すべて同一個体と考えられる。地文として細い条線文を体部全面に縦位に引き、その後に3本の隆帯による唐草文によって大きな区画を構成し、その間に沈線による唐草文や縦位の波状沈線文を描いて器面全体を装飾している。縦位の波状沈線文は破片から見るかぎりでは体部上半にのみ施文されている可能性がある。

第37図1・2は縄文時代中期中葉の土器であり、この住居址が縄文時代中期後葉であるので、混入品と考えられる。

第6号住居址

ＦＵ－90より出土している調査区の最南部に位置する住居址である。覆土が遺構検出面の土層の色と近似していて遺構の有無が確認しにくい地点であったため、サブトレンチを設定した結果遺物が大量に出土したため、住居址と確認された遺構である。プランは直径4.7m×5mのやや楕円形で、残存壁高はおよそ60cmであった。柱穴はP_1～P_5の5本柱と考えられる。住居址中央部の炉は石囲炉と埋甕炉を伴う石囲炉が作られており、埋甕炉の炉体（第34図3）の周囲には4個の石が置かれていた。また炉の底に底部のない小型の土器（第34図4）を縦に3つに割って敷いている。石囲炉は6個の石で構成されており、埋甕炉が深さおよそ30cmであるのに対して約10cmと浅く炉の底部に焼土は確認されなかった。また、埋甕炉の南東部の石が石囲炉の下に一部かかっていることから、埋甕炉が先に築かれていたものと考えられる。しかし、住居址の調査によって拡張された痕跡は確認することができなかったため、2つの炉が同時に存在していた可能性もある。

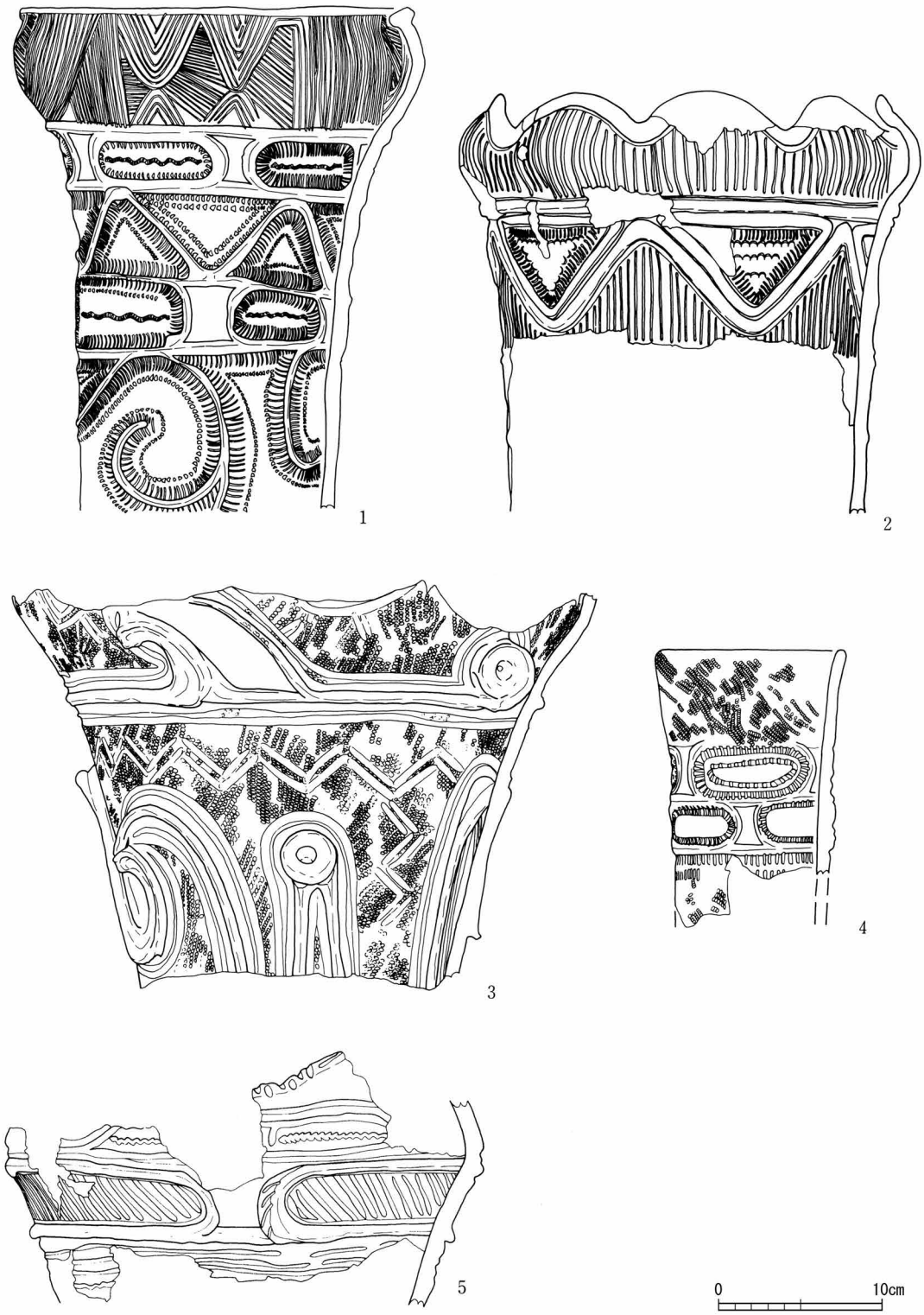
一方、住居址内には覆土をはじめ、床面に及ぶまで土器が出土しているが、特に床面付近から



第33図　第6号住居址実測図　S＝1/60（炉：S＝1/30）

は器形の判明する土器が出土している（No.1～No.4）。炉の北側からはNo.1（第34図1）・No.3（第35図2）が出土しており、No.1の土器が底部を失ってはいるものの、形をとどめたままで横倒しとなって床直上に出土し、その上にNo.3の土器が投げ捨てられたかのように周辺に大きな破片を飛び散らして重なるような状態で出土している。炉の南部はやはり底部が欠損してはいるものの、横に押しつぶされた状態で1個体出土している（第35図1）。

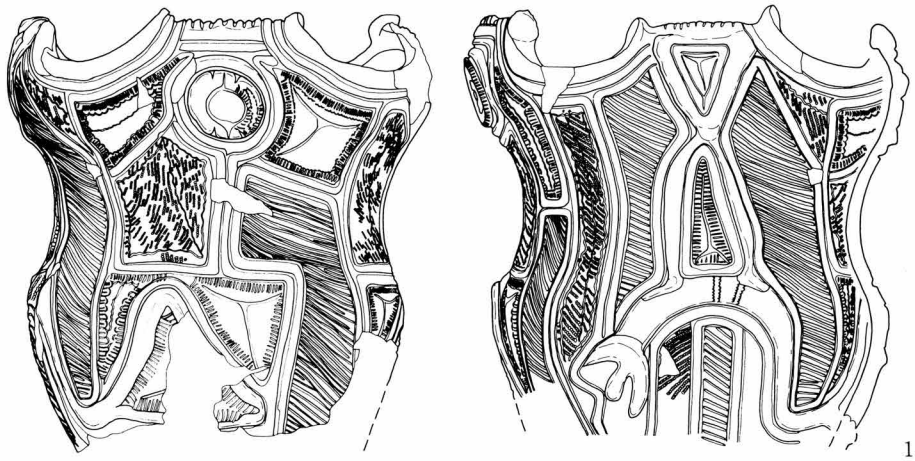
また南東壁付近からは一辺10cm、長さ50cmの細長い石がやや斜めに起き上がった状態で出土しており、石柱と考えられる。



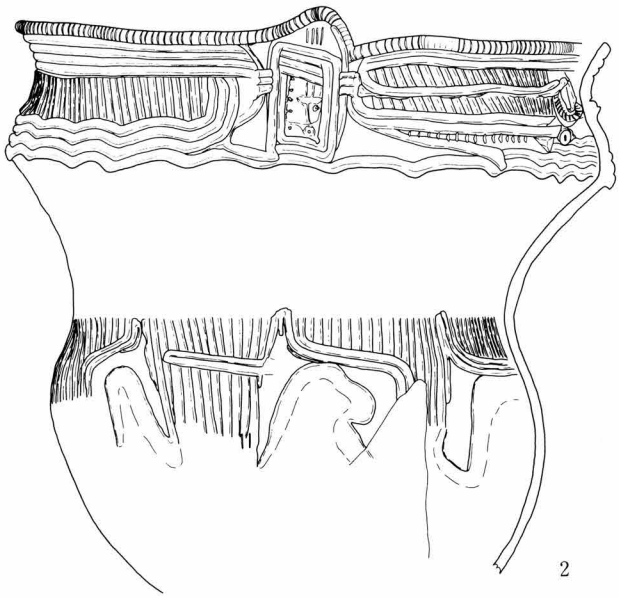
第34図　第6号住居址出土遺物 (1)

遺　　物

第34図～第36図は床または床直上に出土した土器である。第34図１と第35図２は重なりあって出土していたものである。第34図１は床に接して出土しており、底部以外はほぼ完全に残存していた。やや開き気味の円筒形の体部に、内湾しながら広がっていく口縁をもつ器形で、口縁部には半截竹管状工具による並行沈線によって縦位や波状に文様がひかれ、頸部から体部上部には三角形の区画文や楕円横帯文を三段施文し、その下部には隆帯による渦巻き状の文様が施されている。また、区画内には爪形文を隆帯に沿って施文し、更に充塡文様としては三角形区画文内に角



1



2

0　　10cm

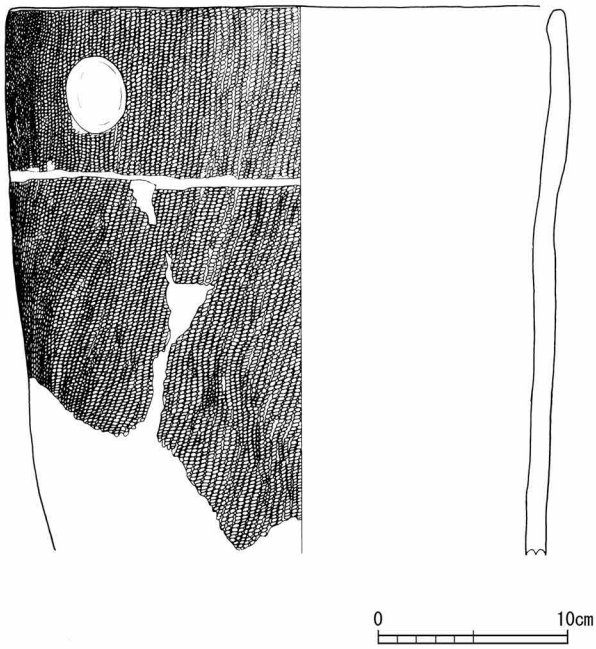
第35図　第６号住居址出土遺物（2）

押文を隆帯に沿って押し引いており、楕円横帯文内には押引による波状文が施文されている。胎土は緻密で焼成も良好であった。内面には煤が付着している。

第35図２は全体に暗褐色を呈しており、底部は失われているが体部中部がくびれ、口縁部にむかって外反していく。そして断面「く」字状に屈曲して内傾する器形である。器形的には大型の把手や櫛形文をもつ土器に似ている。文様は口縁部と体部下部に集中しているが、隆帯を用いているにもかかわらず平面的な印象である。口縁部の文様帯は上部に横位の粘土紐を直線的に貼り付け、下部は波状に貼り付けている。この隆帯の間には、半截竹管状工具による縦位の並行沈線を施文している。この縦位平行沈線を施文した隆帯は、口縁部に作った３カ所の突起の下部で区画され３単位の横位文様となっている。突起下部には四角形や、「R」字状の文様を装飾している。体部下部の文様は縦位の並行沈線を基調として半肉隆線で変化をつけ、その間にやや幅広の粘土紐を曲線に貼り付け、指で押さえて厚みのない偏平な隆帯としている。器壁も薄手で文様構成をみても在地の土器とは異なるものと感じられる。

第34図２は住居址床直上より出土しており、体部下半部が欠損している。口縁部は大きく膨らみ、波状を呈している。体部との境界部には２条の半肉隆線が施文され、その下部に三角形のパネル文が施文されている。パネル文内は隆帯にそって爪形文を施文し、その内側には半截竹管状工具による横位の刺突が連続的に加えられている。胎土は緻密で焼成も良好であった。内面にはミガキの痕跡が残されている。全体的には第34図１と似た胎土である。

第34図３・４は埋甕炉に使用されて　第36図　第６号住居址出土遺物 (3)　は口縁部と体部を打ち欠いて炉体としていたもので、縄文を地文としてもち、頸部には横位の隆帯と沈線を巡らせて口縁部との境界としている。口縁部には、この横位の隆帯から上部に曲線文や円文をつくり出している。また、その上部には２本の斜位の沈線によって波状文が引かれている。また、隆帯によってつくり出された曲線文内は、縄文が磨り消されていた。体部にも隆帯で渦巻文や円文を貼り付けた曲線文を施文しており、隆帯間や頸部の隆帯下には斜位の沈線によって波状沈線文が施文されている。胎土は粗いが、焼成は比較的良好であった。４は炉の底部に敷かれていた土器で、底部付近が失われている。体部下部と口縁部には縄文を施文して地文としており、体部中部には隆帯によって区画された楕円横帯文を２段施文し



第36図　第６号住居址出土遺物 (3)

ている。楕円横帯文内は押引文を隆帯の脇に施文し、上段にはさらに内側に押引文を１周させている。胎土に砂粒が少量混入されおり、やや白色系の色調であった。内面はよくミガキがかけられている。

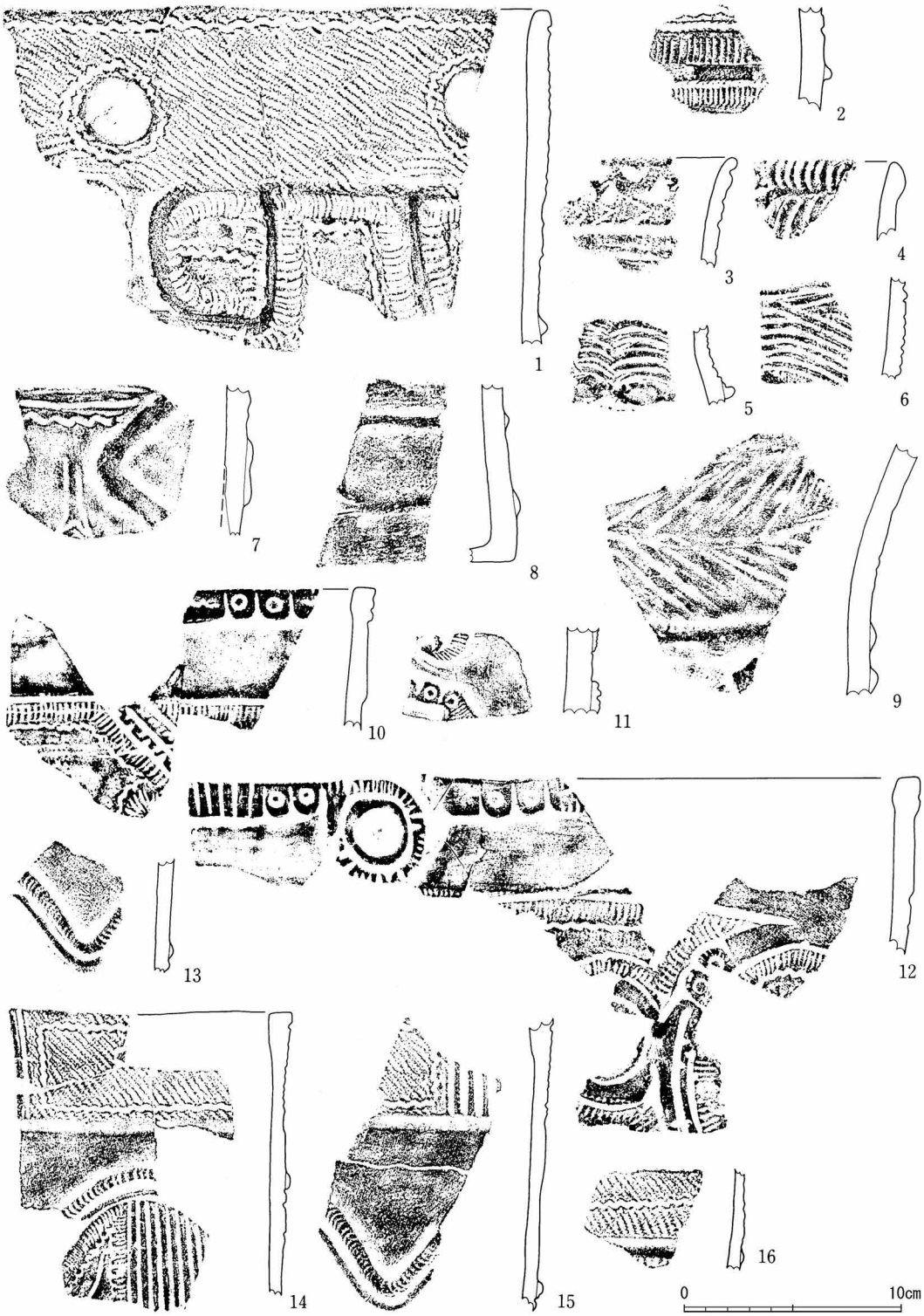
第35図１は住居址の南部より出土した土器である。縦位のパネル文を基本として、口縁部は４単位の波状を呈しており、この付近を中心として同心円状の円文や、三角文を上部に配した人体文が崩れた形とも考えられる偏平な隆帯が飾られている。また、体部のくびれ部付近から上部には煤が付着しており、内面には底部に近い部分に煤が確認されている。

第36図は、住居址北部に出土している。全面に縄文を施文しており、体部と口縁部との境界部の微妙なくびれ部は、縄文を細く磨り消している。また、口縁部には丸く器壁をえぐった無文部をつくりだしている。やや白色味をおびた褐色で、内面はよくミガキが施されている。外面には煤が付着している。

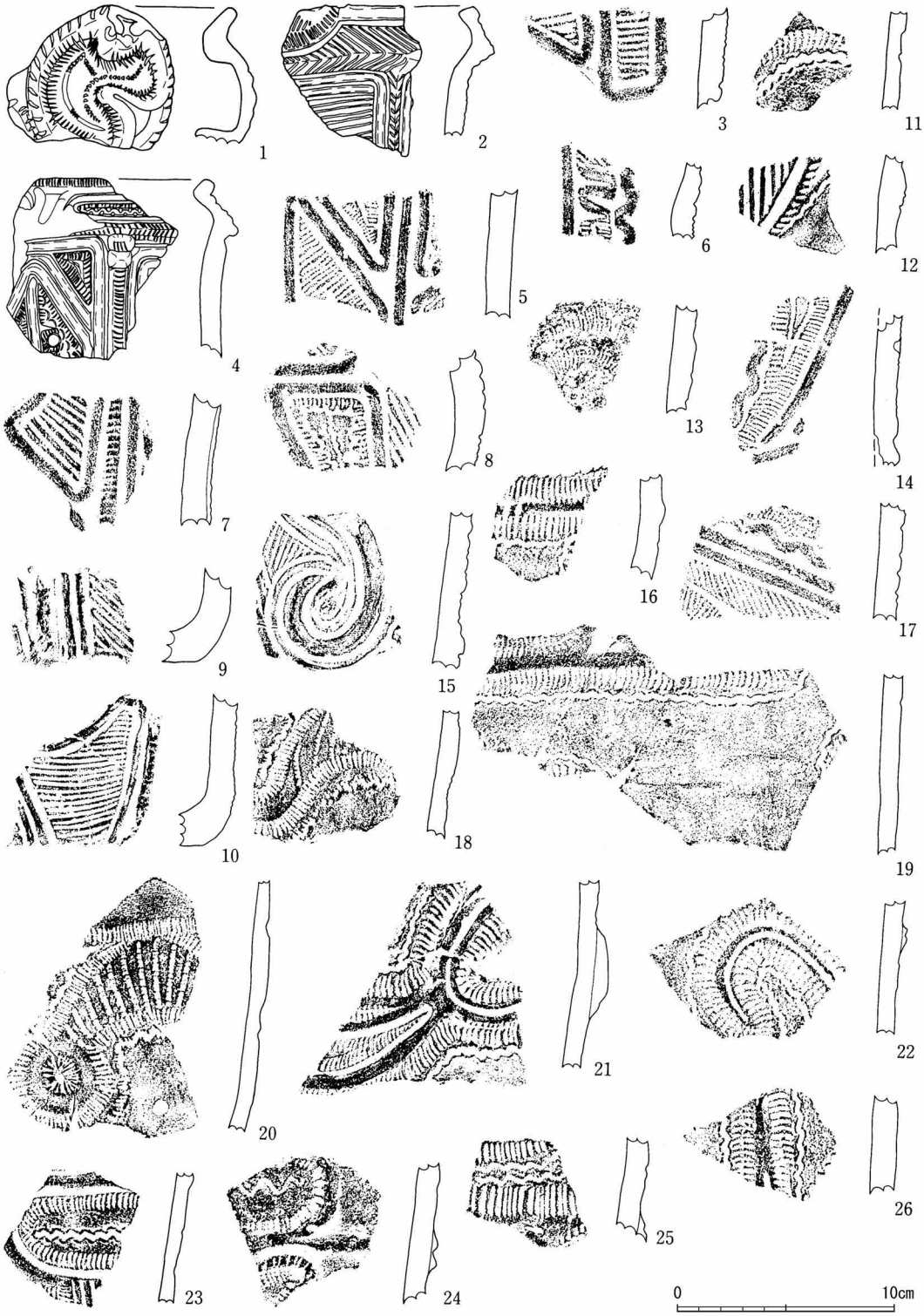
第37図３～第39図は住居址の覆土より出土している土器である。第37図３は口縁部の破片であり、口縁部直下に三角形の印刻文を施文している。また、その下部には横位の矢羽根状に「く」字状のキザミが入れられている。胎土は粗い。４～６は口縁部が「く」字状に内側に屈曲する器形で、屈曲部には連鎖状の偏平隆帯が装飾されていた。焼成は良好である。７は白色砂粒が混じり、焼成も良好であった。８も焼成が良好であった。９は沈線による文様を施した土器で、緻密な胎土であり、焼成も良好であった。10～12は同一個体である。緻密な胎土で焼成も良好であった。内面はよく磨かれており、全体的に丁寧な作りといった印象がある。外面の口縁部上部と体部上部の間の無文部にも丁寧なミガキが施されていた。その他の体部の無文部に関しては接合痕が明確に残されていた。13～16・第38図23も同一個体であり、面取りされた口唇部の直下から口縁部には縄文が施文され、体部との区画には横位の沈線が使用されている。10～12の土器と同様に内面は丁寧にミガキが加えられ、外面の無文部も丁寧にナデを加えている。この２個体はほかの土器とは異質な印象を受ける。

第38図２～10は半肉隆帯によってパネル状に区画した土器である。２は白味の強い色調で、緻密な胎土で、焼成も良好であった。４は内面にミガキが施されている。５・６は胎土が粗いが、５の焼成は良好であるのに対して、６はもろい。７は焼成が良好であった。11～17はパネル文が崩れて、半肉隆線が曲線や渦巻文になっているものである。14は胎土が粗い。15は焼成が良好であった。また16の爪形文下には三角押文が施文され、17には雲母がやや混入していた。18～26は体部に抽象文を描いている土器である。18と20は同一個体で、内面に煤が付着している。また、爪形文直下には三角押文が施文されていた。21と22は焼成は良好であり、22には砂粒が混入していた。

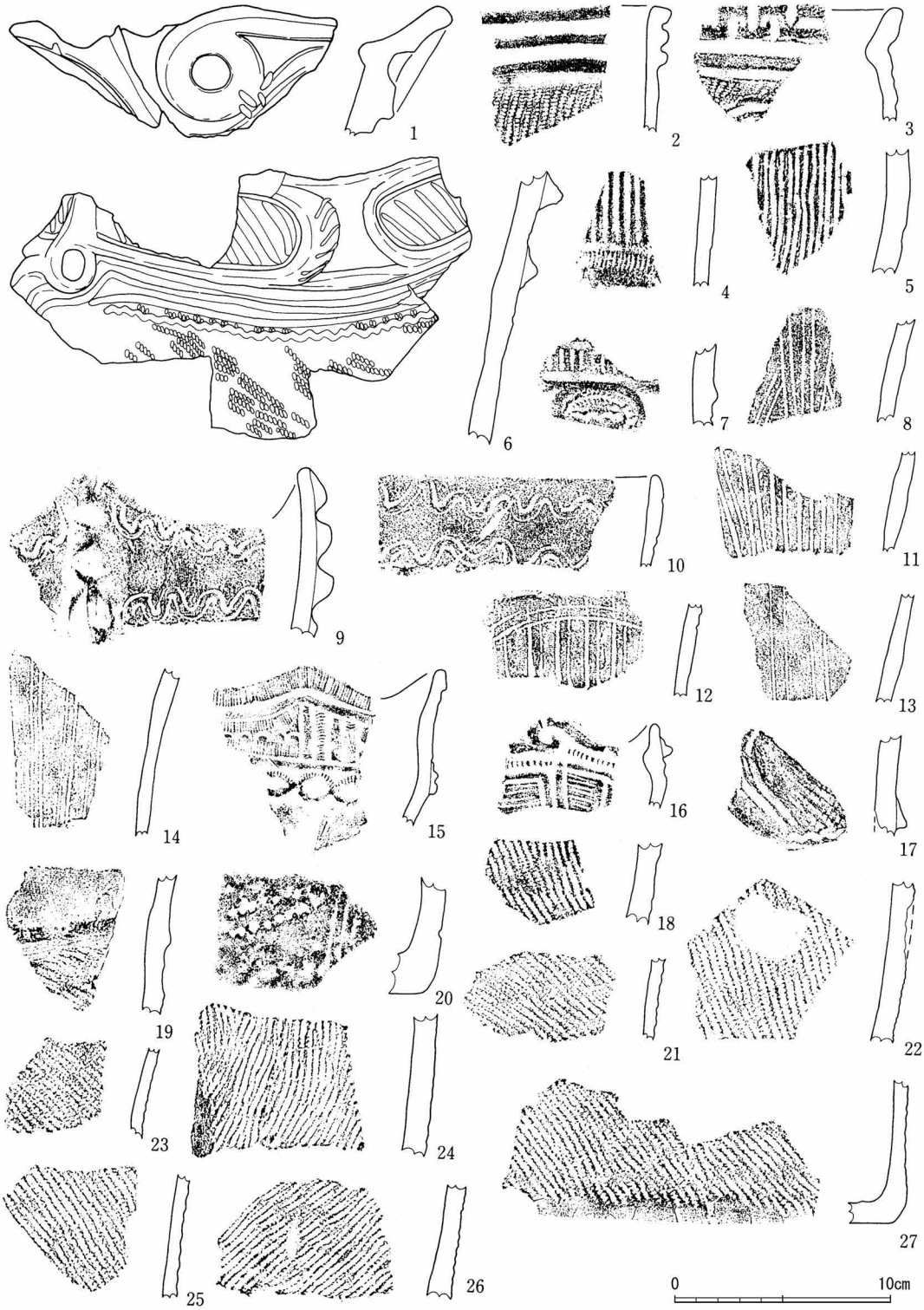
第39図１・６は斜行沈線文を施文している土器である。どちらも赤褐色を呈し、雲母がやや混じる焼成が良好な土器である。８～14は平出Ⅲ類Ａの土器である。15は、器形は平出Ⅲ類Ａと類似しているが、施文されている文様ははるかに複雑である。口縁部上部にはキザミを施し、体部との境界部の屈曲した箇所には横位の連鎖状隆帯がキザミをともなって施文されている。また、



第37図　第5号・第6号住居址出土遺物 (4) (1・2：第5号住居址)



第38図　第6号住居址出土遺物 (5)



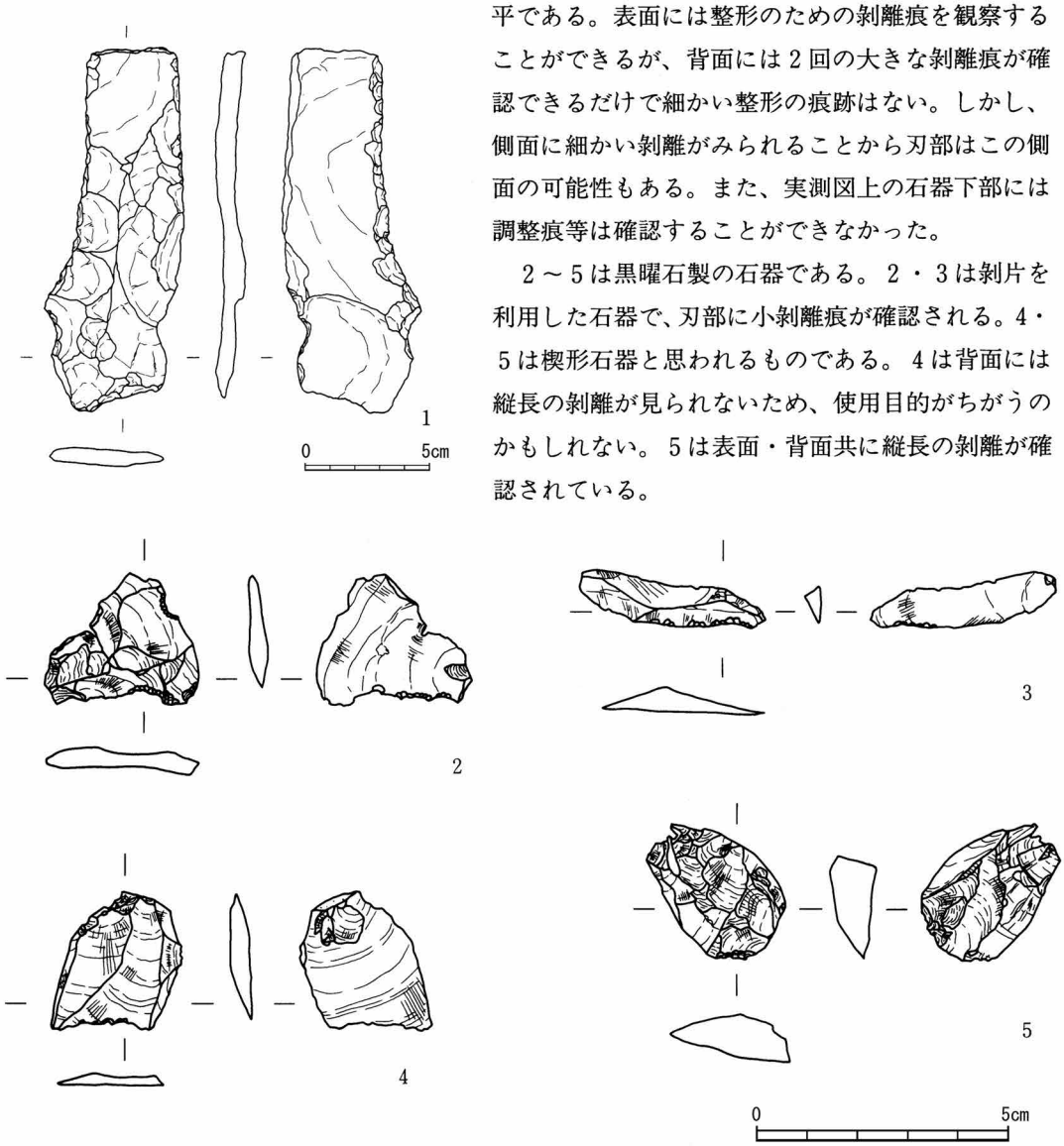
第39図　第6号住居址出土遺物 (6)

口縁部と屈曲部の間のキザミ状の施文部位は細かいハケ状の道具を使用しての押引文を横位に2条施文しており、この押引文の間には半截竹管状工具の小口部分を連続して刺突している。また、屈曲部の連鎖状文より下位には、破片でみる限り施文は行われていない。内面には緻密なミガキが施文されている。

16は口縁部に渦巻き状の文様をもったパネル文の土器である。パネル文内は横位の沈線によって装飾されている。17～27は縄文を施文している土器である。

第40図は第6号住居址より出土した石器である。1は打製石斧で厚みはおよそ1cmと薄く、偏平である。表面には整形のための剥離痕を観察することができるが、背面には2回の大きな剥離痕が確認できるだけで細かい整形の痕跡はない。しかし、側面に細かい剥離がみられることから刃部はこの側面の可能性もある。また、実測図上の石器下部には調整痕等は確認することができなかった。

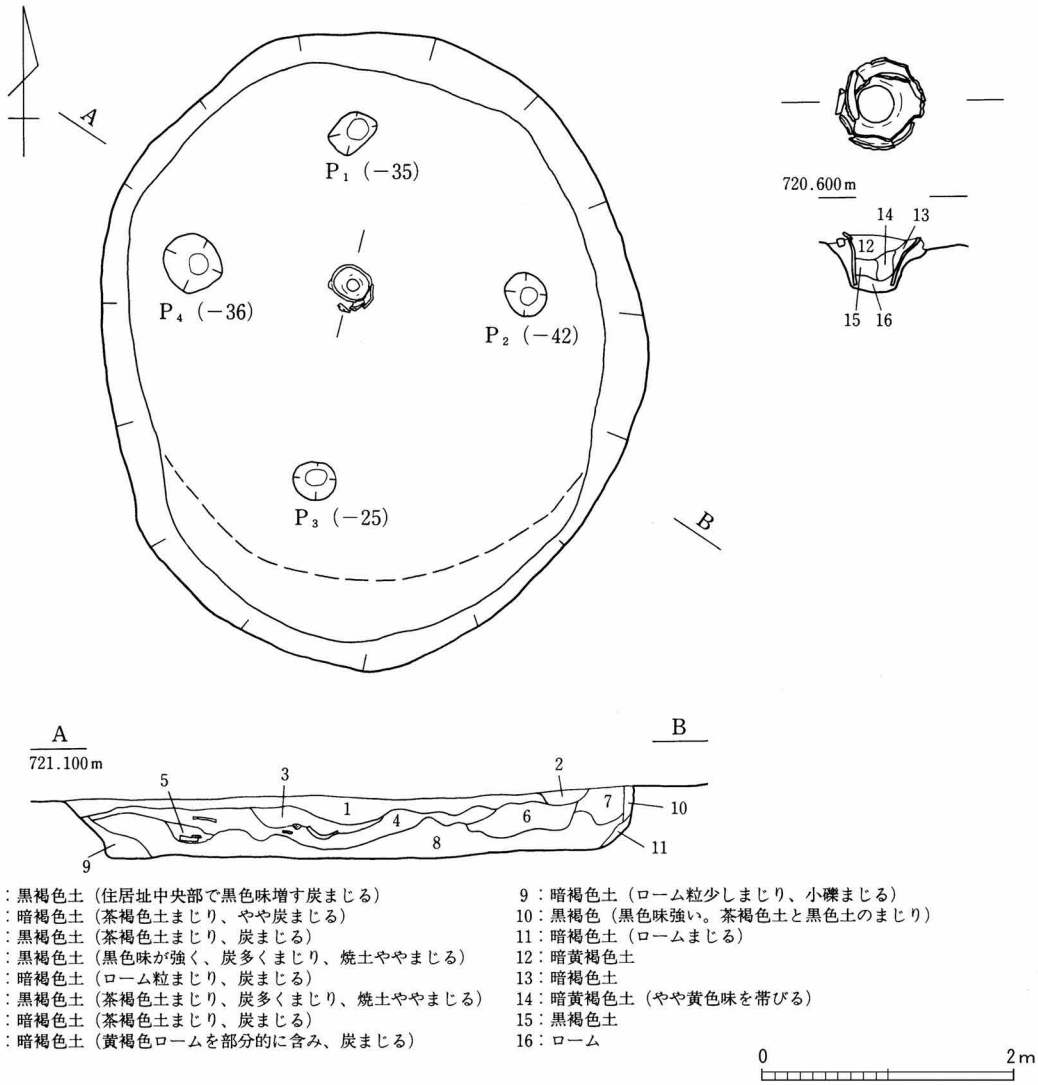
2～5は黒曜石製の石器である。2・3は剥片を利用した石器で、刃部に小剥離痕が確認される。4・5は楔形石器と思われるものである。4は背面には縦長の剥離が見られないため、使用目的がちがうのかもしれない。5は表面・背面共に縦長の剥離が確認されている。



第40図　第6号住居址出土遺物(7)

第７号住居址

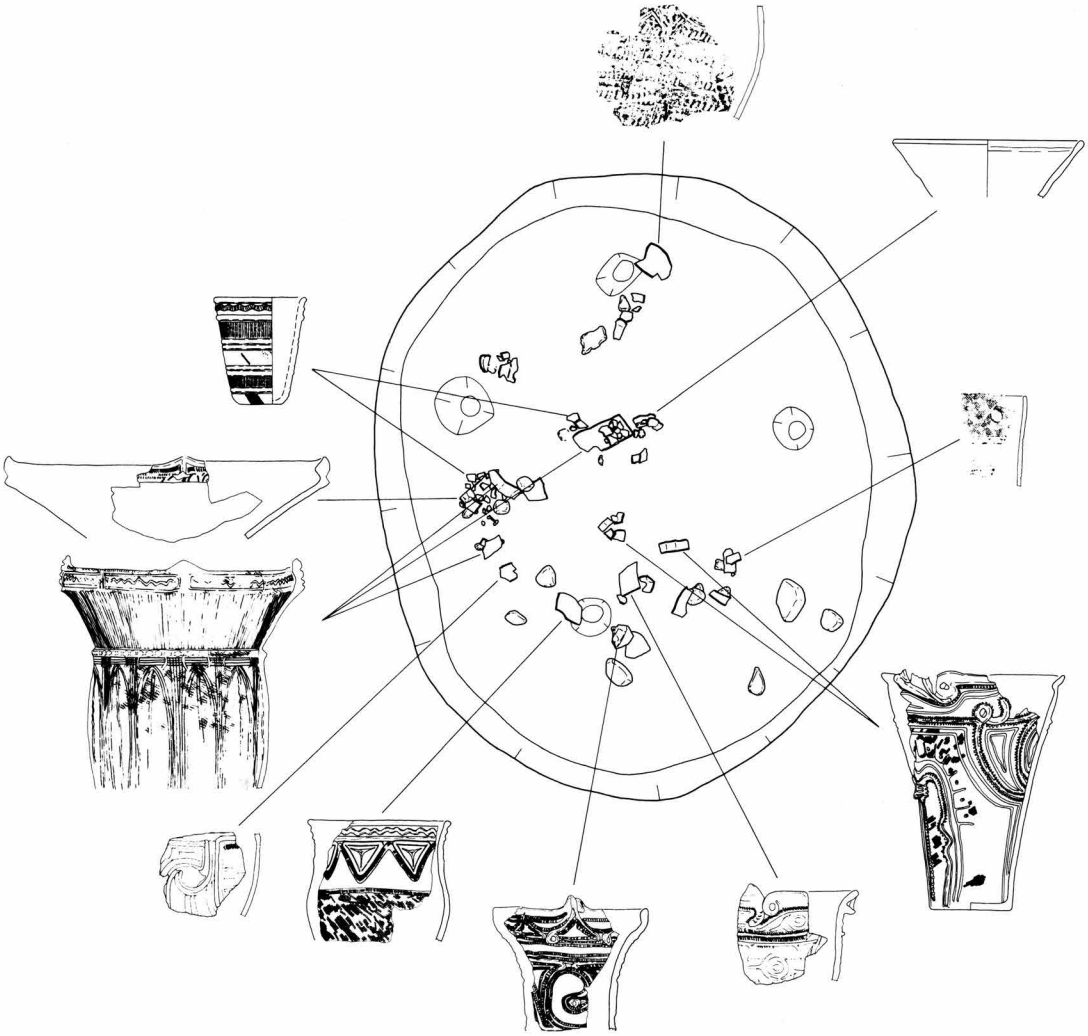
この住居址はＧＢ－83より出土している。遺構検出作業中に黒色土が検出されたので、その箇所にサブトレンチをいれたところ、住居址であることが判明した。この住居址は、4.3ｍ×５ｍのプランであるが、南壁を掘りすぎているため、本来は直径4.3ｍ程の円形と考えられる。柱穴は４箇所であり住居址の中心付近に埋甕炉が設定されていた。埋甕炉は体部を打ち欠いて使用されていた（第43図２）が口縁部の一部が欠損しており、その部分に別個体の口縁部（第43図１）を補充していた。炉内部からは焼土はあまり出土していない。また、住居址床の上層付近からは多くの土器が出土している（第43図３～５・第44図・第45図１・２・６・第45図４）が、器形の復元



1：黒褐色土（住居址中央部で黒色味増す炭まじる）
2：暗褐色土（茶褐色土まじり、やや炭まじる）
3：黒褐色土（茶褐色土まじり、炭まじる）
4：黒褐色土（黒色味が強く、炭多くまじり、焼土ややまじる）
5：暗褐色土（ローム粒まじり、炭まじる）
6：黒褐色土（茶褐色土まじり、炭多くまじり、焼土ややまじる）
7：暗褐色土（茶褐色土まじり、炭まじる）
8：暗褐色土（黄褐色ロームを部分的に含み、炭まじる）
9：暗褐色土（ローム粒少しまじり、小礫まじる）
10：黒褐色（黒色味強い。茶褐色土と黒色土のまじり）
11：暗褐色土（ロームまじる）
12：暗黄褐色土
13：暗褐色土
14：暗黄褐色土（やや黄色味を帯びる）
15：黒褐色土
16：ローム

0　2ｍ

第41図　第７号住居址実測図　Ｓ＝1/60（炉：Ｓ＝1/30）



第42図　第7号住居址遺物出土状況図

できるものは少数であり(第42図)、さらに1箇所に1個体分の破片が集中しておらず、住居址内に散乱しているような出土状態であったことからこの竪穴住居が廃棄された後に投げ込まれたものといえよう。

遺　　物

第43図1・2は埋甕炉として使用されていた土器である。1は樽形の体部に外反する口縁部をもつ器形で、口唇部に小さい突起を1箇所に設け、無文の口縁部から体部に流れ落ちるような渦巻き状の突起を隆帯で垂下させている。また、口縁部と体部の境界付近には横位の沈線がひかれ

ている。赤褐色の色調を呈し、焼成は良好であった。2は細かい砂粒が混入した胎土で、焼成は良好であった。口縁部に数ヶ所の突起をもち、口縁部下部に無文帯を設け、口縁部では密に隆帯と押引文を施文している。また、口縁部最下部の横位隆帯には隆帯の接点を中心として小さい突起を貼り付けている。体部は横位の半肉隆線を文様帯の上下に引いて区画し、上部の半肉隆線は一部に押引文を施文し、場所によってはこの半肉隆線が2条存在している。また、文様帯の下部の2カ所に円管状の粘土を貼り付けている。3は全体の1/2程が残存している土器である。やや開き気味に立ち上がる器形で、文様は横位の半肉隆線によって区画されている。口縁部には押引文を伴う隆帯を横位の隆帯の間に波状に貼り付け、その下部の文様帯には縦位の沈線と縄文を交互に施文しており、底部まで密に施文されている。焼成は良好であり、外面は褐色なのに対して内面は黒色であった。4は全体のおよそ1/4程度しか残存していない。底部よりやや開き気味に立ち上がり、体部上部に最大径をもって頸部にいたる器形で、口縁部はやや外反しながら立ち上がっている。口縁部には波状の隆帯が貼り付けられ、頸部には印刻文を充塡した三角形のパネル状の文様が横位に連続して施されている。また、最大径となる部分には、押引文を伴う横位の隆帯があり、その下部は縄文で埋められている。胎土は粗く、外面に煤が付着している。内面は滑らかに整形されていた。5は底部よりラッパ状に広がっている器形で、全体の1/3程度が欠損していた。胎土は粗く、細かい砂粒が混入されていた。焼成は良好である。外面の文様は縄文を基本として隆帯で大きく区画し、その脇に爪形文を施文している。また、この爪形文を伴う隆帯の文様に沿うようにして沈線が引かれ、一部には印刻状に器壁をえぐり取り、刺突を加えている。6は体部下部で、隆帯が垂下している。

第44図1・2は浅鉢の破片である。1は4単位の突起をもつ器形で、屈曲して立ち上がる口縁部には爪形文を施文している。内面は緻密にミガキが加えられているが、外面は粗い調整であった。

3は全体の1/4しか残存していない。キザミを伴わない隆帯による区画を基本として、その脇に爪形文を施文している。隆帯の終息部には円環状の突起を貼り付けている。口縁部と体部の境界は無文帯としている。焼成は良好であり、口縁部上部のみが黒く煤けたようになっている。

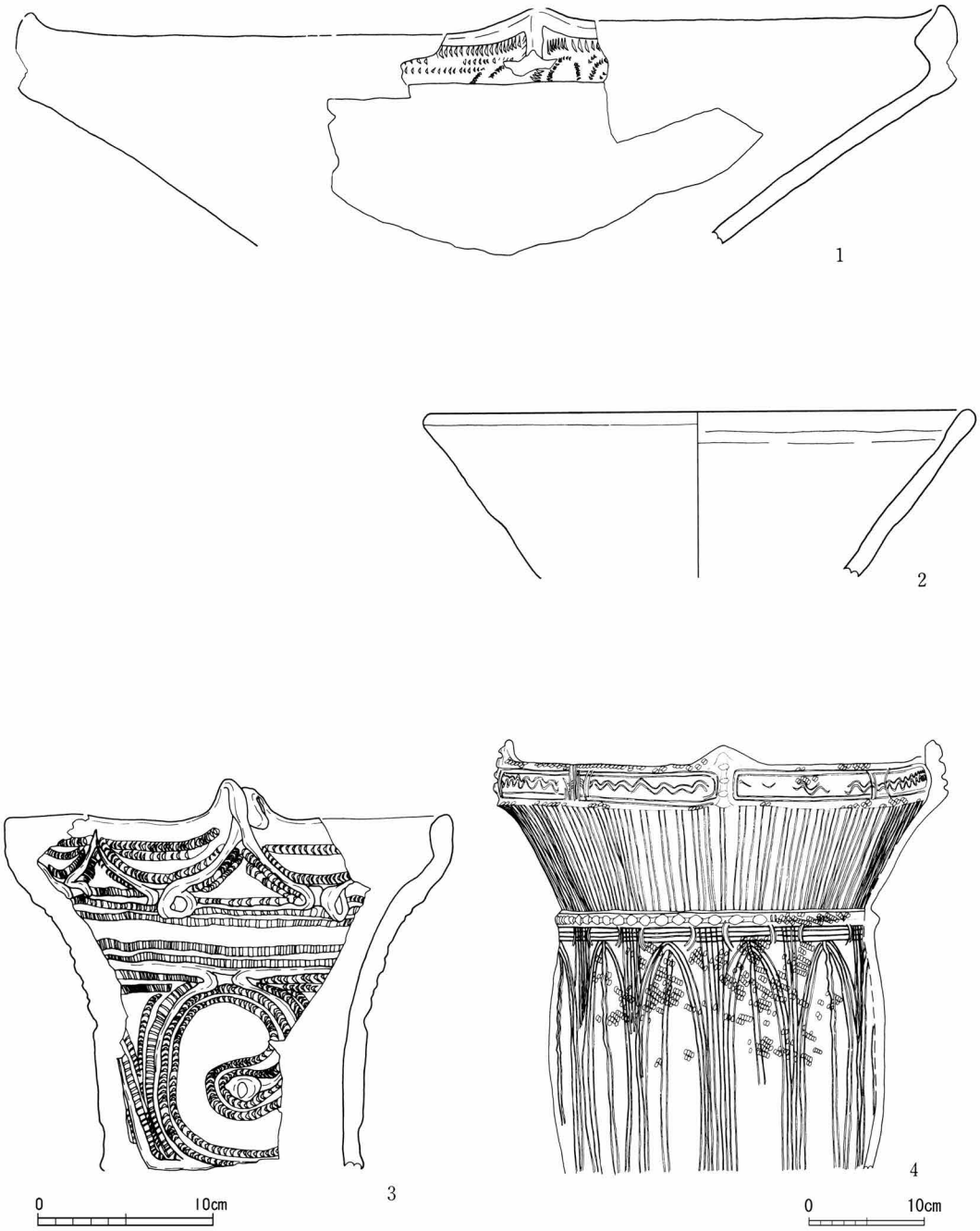
4は平出III類Aの土器である。器面全体に縄文を施文し、その後平行沈線等を施文している。

第45図1～3は、住居址床付近より出土した沈線文系の土器である。1・3は砂粒の混入した胎土であるが焼成は良好な土器で、1は暗褐色を呈している。2は緻密な胎土で、焼成も良好であった。

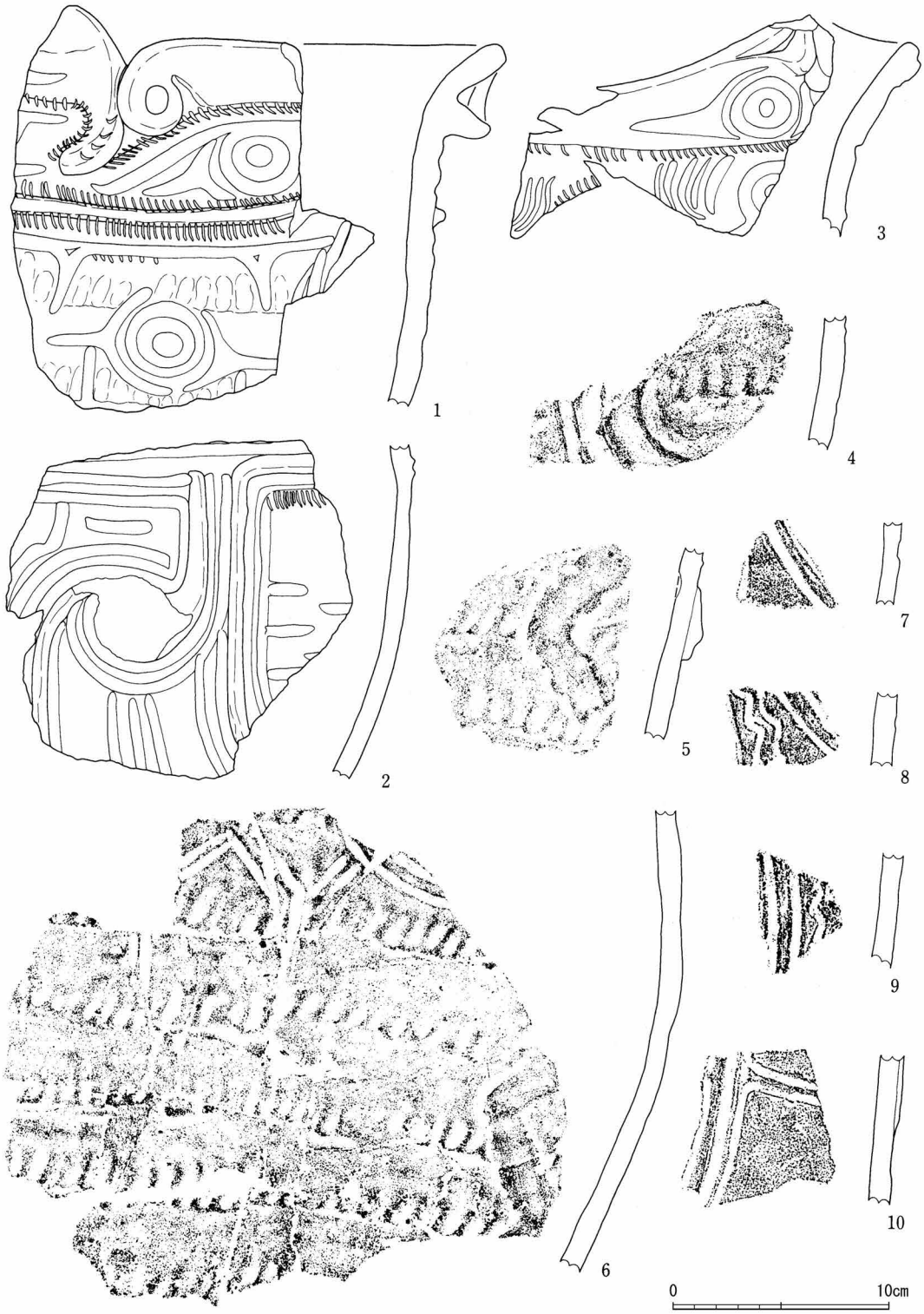
4～6は偏平な隆帯を貼り付け、体部には接合痕を地文として残す土器で同一個体と考えられる。5・6は砂粒が多く混入し、粗い胎土となっており、4は表面が黒褐色を呈し、焼成はややあまい。7～9も同一個体と思われる。沈線によって曲線文や波状文を描いている。10は焼成も良好であった。

第46図～第48図は主として住居址覆土から出土した破片である。第46図1～9・12は角押文を多用している。3・8は爪形文の間にヘラ状工具によって縦位に押引文を施文している。また、

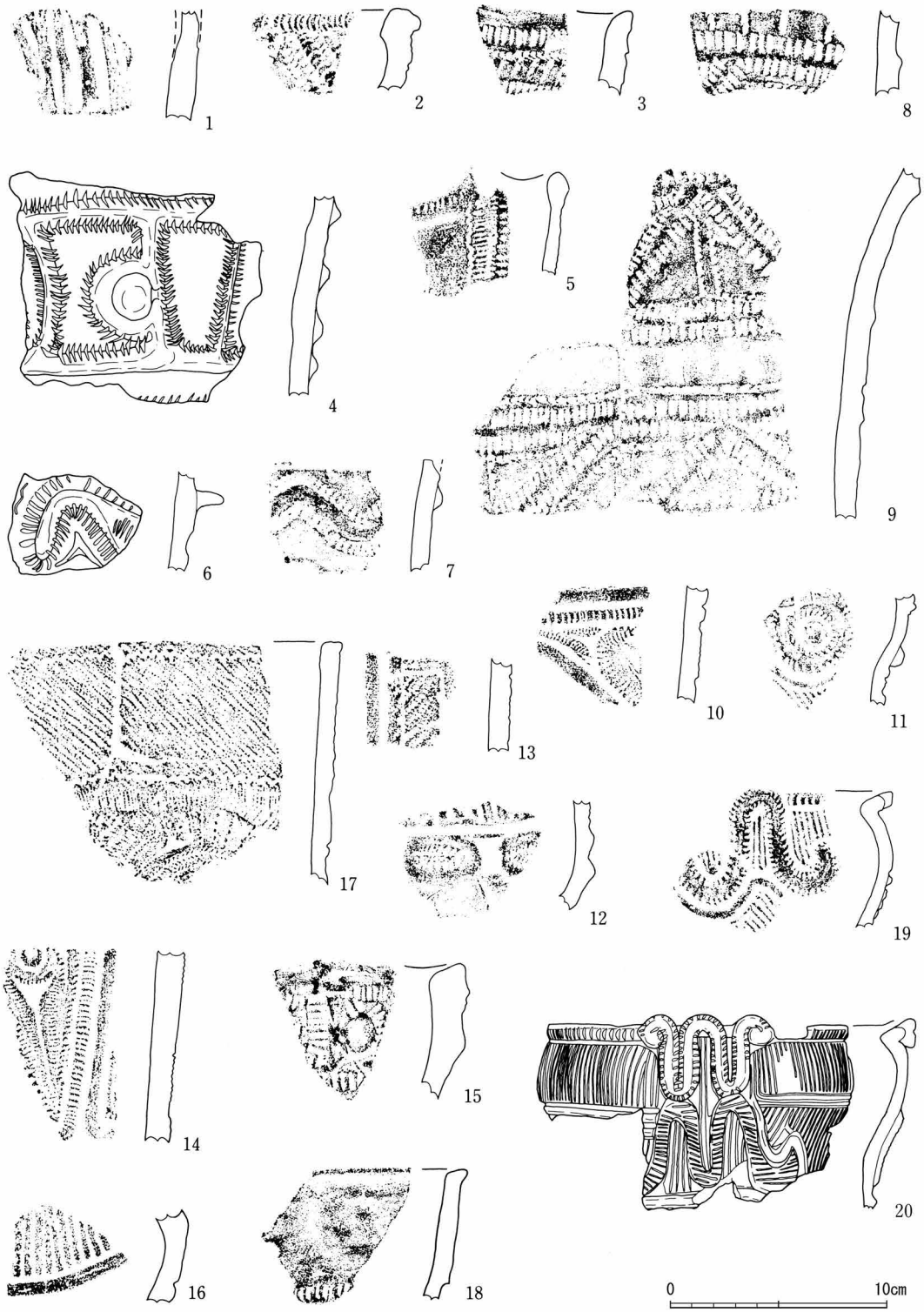
第43図　第7号住居址出土遺物（1）



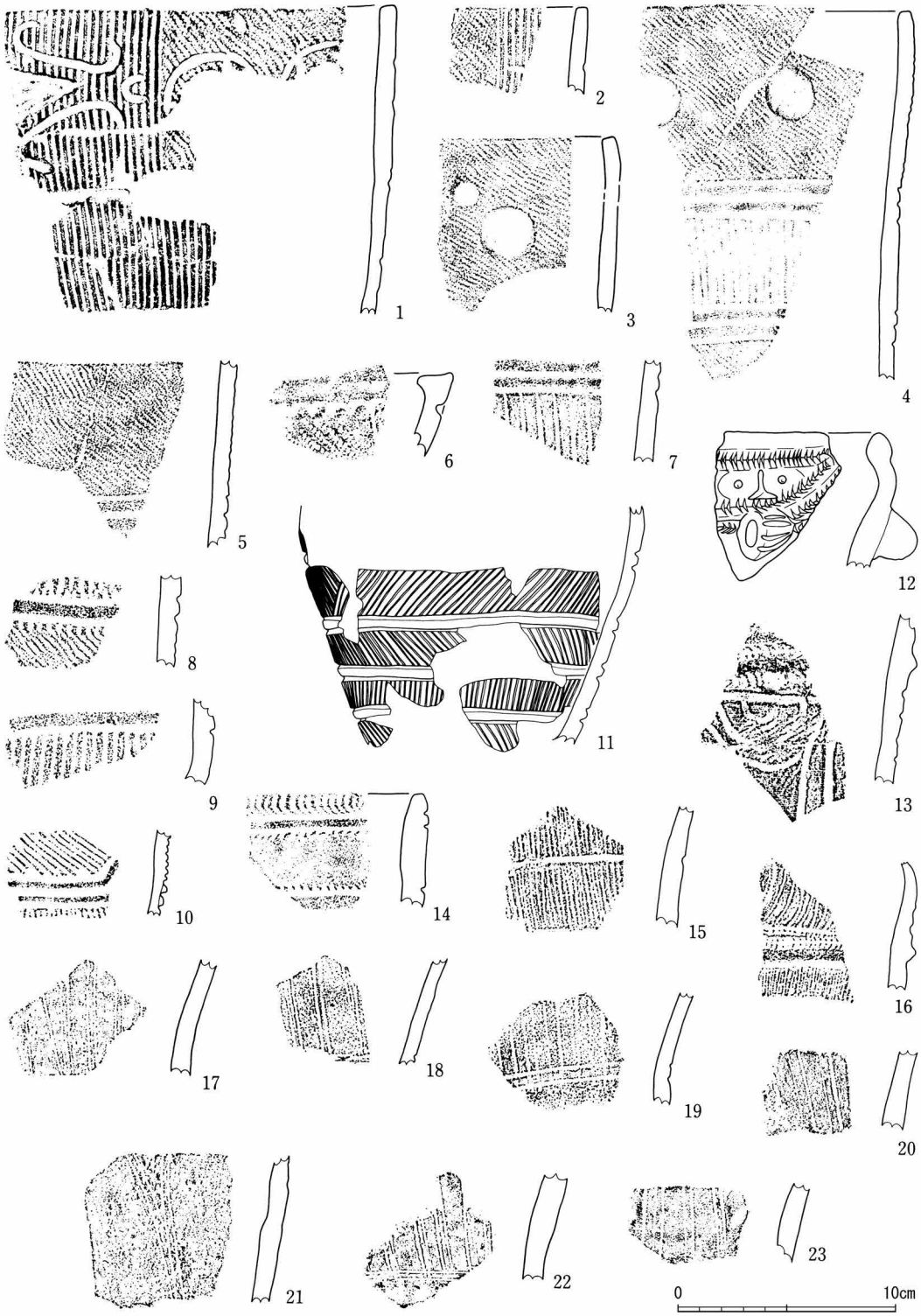
第44図　第7号住居址出土遺物 (2) (4は1/6)



第45図　第7号住居址出土遺物 (3)



第46図　第7号住居址出土遺物 (4)



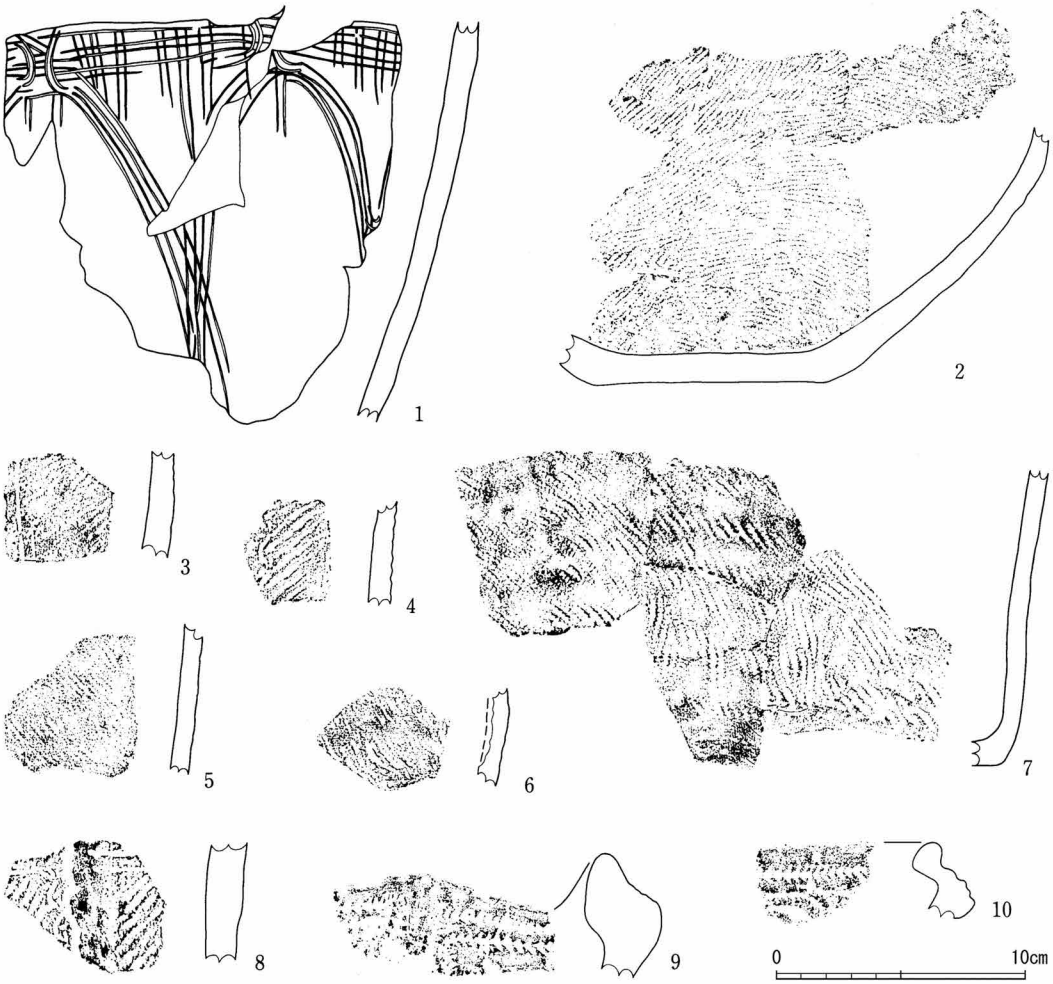
第47図　第7号住居址出土遺物 (5)

4・6・12は同一個体である。焼成は良好であり、全体的に白味を帯びた色調であった。12には内面に煤が付着していた。7も内面に煤がやや付着していた。9は胎土が緻密で焼成も良好であり、器面の爪形文の上部にはヘラ状工具によって押引文が施文されていた。

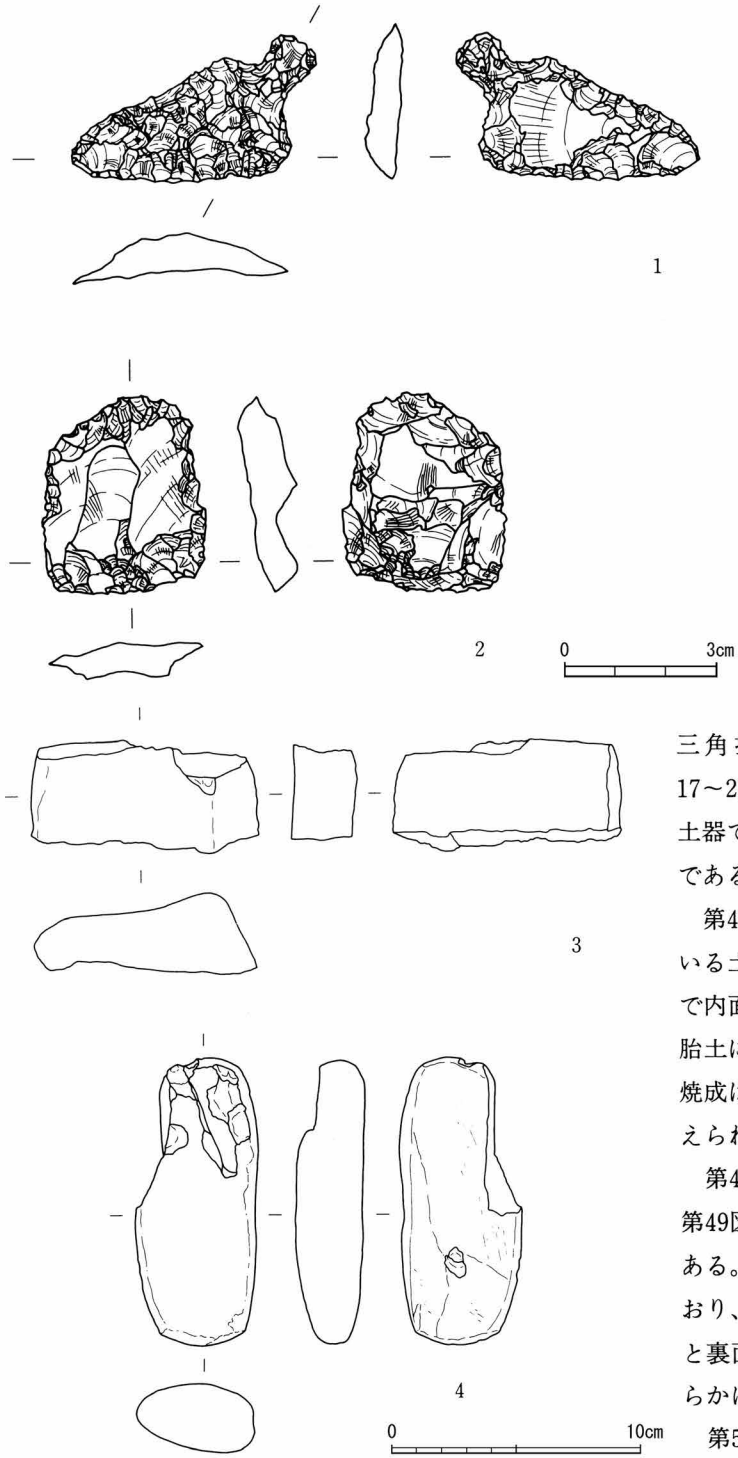
17・18は抽象文を施文しており、17は口縁部の縄文施文部の上下端部には三角押文が、さらに内面には丁寧なミガキが施されている。18は口縁部上部におこげが付着していた。

10・11・13・14～16・第47図9はパネル文をもつ土器である。10・11・14は同一個体で、胎土は粗い。15は縦位の隆帯を基準にして、パネル文を施文している。内面は丁寧なミガキがかけられている。16と第47図9は同一個体である。

19・20と第47図11は同一個体である。平行沈線を主文様としている土器で、全体的に暗褐色を呈しており焼成は良好であった。



第48図　第7号住居址出土遺物(6)



第 49 図　第 7 号住居址出土遺物 (7)

第47図１～５は円筒形の体部に沈線と縄文を主体として施文している土器である。1・2と3～5はそれぞれ同一個体で1には外面に煤が付着していた。胎土はきめ細かく、焼成も良好である。3には補修孔があけられている。

12には雲母が混入されており、焼成も良好であった。

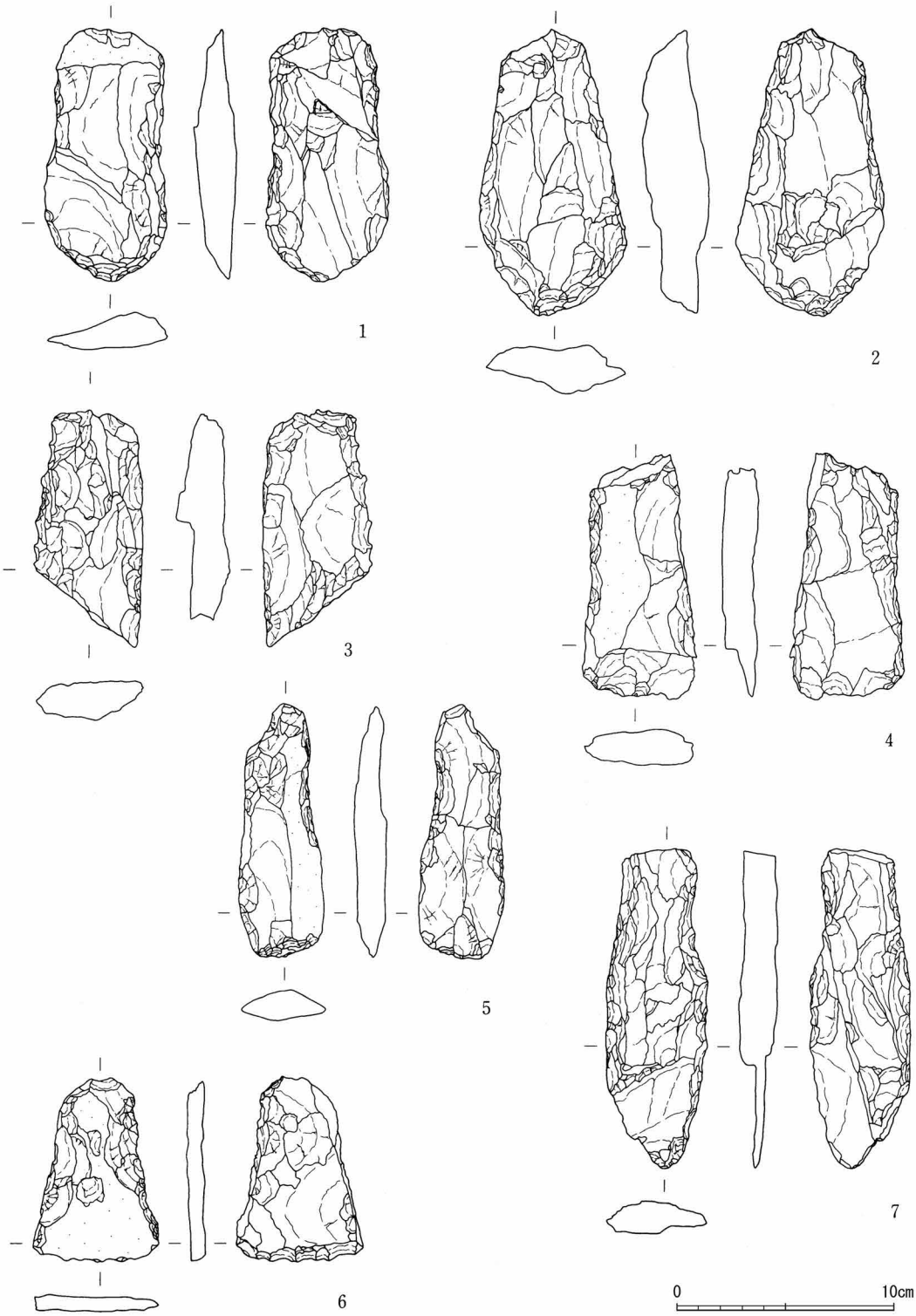
13は胎土に砂粒が多く混入されているものの焼成は良好であった。

16は破片上部に斜位の三角押文が施文されている。17～23・第48図１は平出Ⅲ類Ａの土器であり、いずれも体部の破片である。

第48図２～８は縄文を施文している土器である。７は胎土が緻密で内面は黒色であった。また２は胎土に砂粒が混入しているものの焼成は良好で、内面はミガキが加えられている。

第49図～第50図は石器である。第49図１・２は黒曜石製の石器である。３は上部と下部が欠損しており、形体は不明であるが、表面と裏面はよく磨かれており、なめらかになっていた。

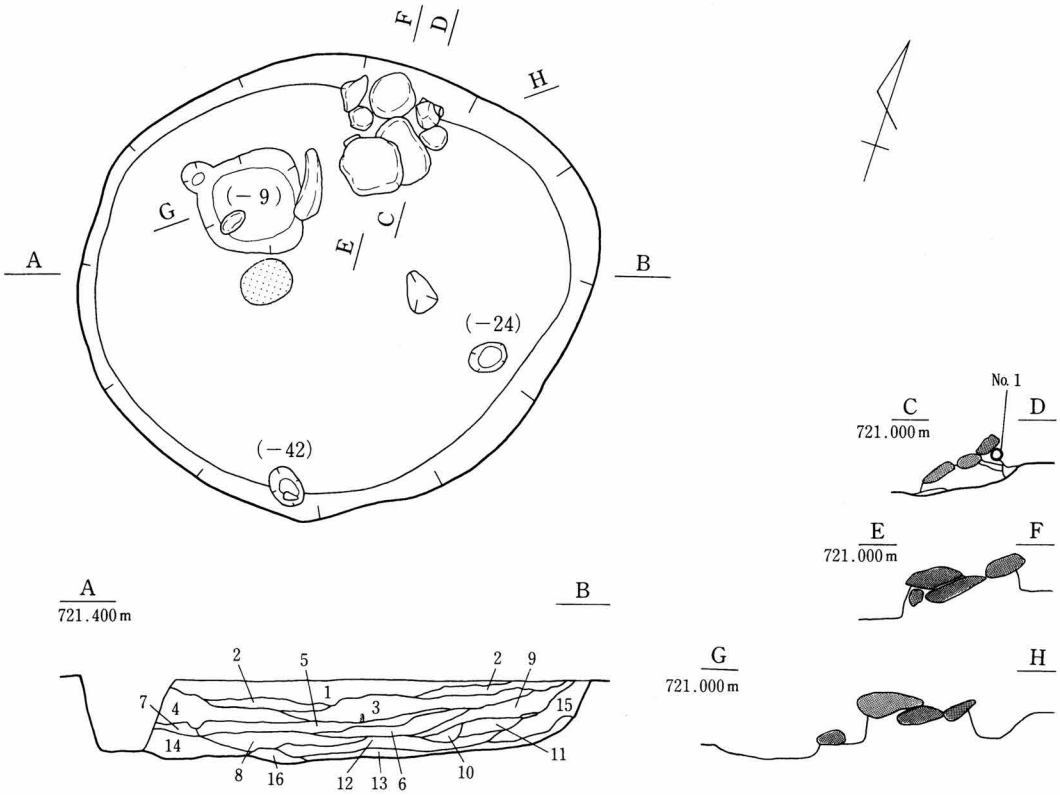
第50図は打製石斧である。



第50図　第7号住居址出土遺物 (8)

第８号住居址

この住居址は今回の調査中もっとも小さく、長径は3.3ｍ短径は４ｍの楕円形である。北壁には直径40cmほどの石が集中して出土しており、石壇の可能性がある。この石の間に挟まれるように小型の土器（第52図１）が出土している（第51図断面図）。また、床面には、柱穴や炉と思われる施設を検出することができなかった。しかし、住居址中央部付近の土坑付近からは焼土が検出されている。石壇は下段に小さい石を２列並べ、その上に直径40cm前後の偏平な石を乗せていたようである。小型の土器はこの石壇が崩れた時に挟まったものと考えられる。また覆土中からは遺物の出土が少なく、第52図に示した遺物が主なものであった。



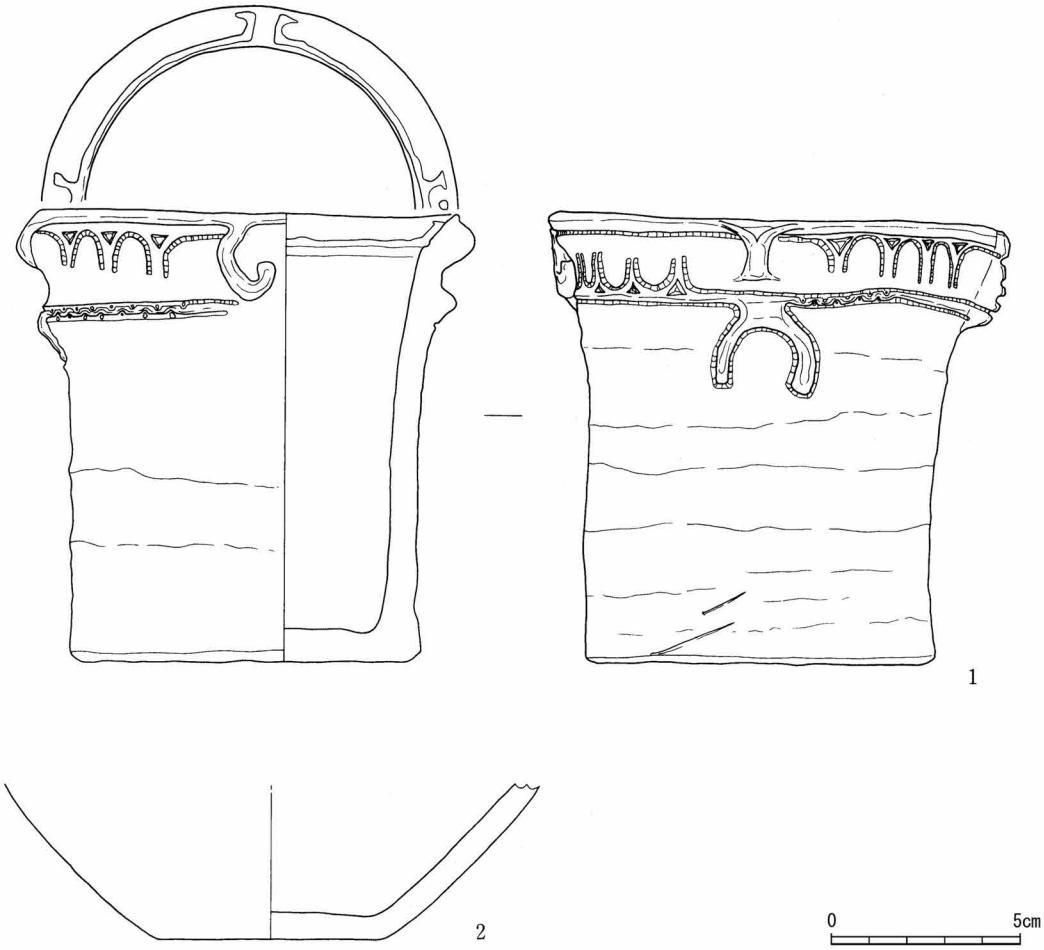
1：黒褐色土（茶褐色土まじり、炭多くまじる）
2：褐色土（ローム、茶褐色土まじる、炭ややまじる）
3：黒褐色土（茶褐色土、炭ややまじる）
4：黒褐色土（茶褐色土多くまじり、炭ややまじる）
5：黒褐色土（ローム、茶褐色土、炭まじる）
6：暗褐色土（ローム部分的にまじり、炭まじる）
7：黒褐色土（炭ややまじる）
8：黒褐色土（黒味が強く、炭・ローム細粒まじる）
9：暗黄褐色土（ローム多くまじり、炭ややまじる）
10：黒褐色土（炭ややまじる）
11：暗褐色土（炭少しまじる）
12：暗褐色土（炭やや多くまじり、ローム細粒まじる）
13：暗黄褐色土（炭ややまじる）
14：暗褐色土（炭ややまじり、ローム細粒多くまじる）
15：暗褐色土（上部は茶褐色味が強く、下部は色調暗い）
16：暗褐色土（焼土まじる、炭ややまじる）

0　2m

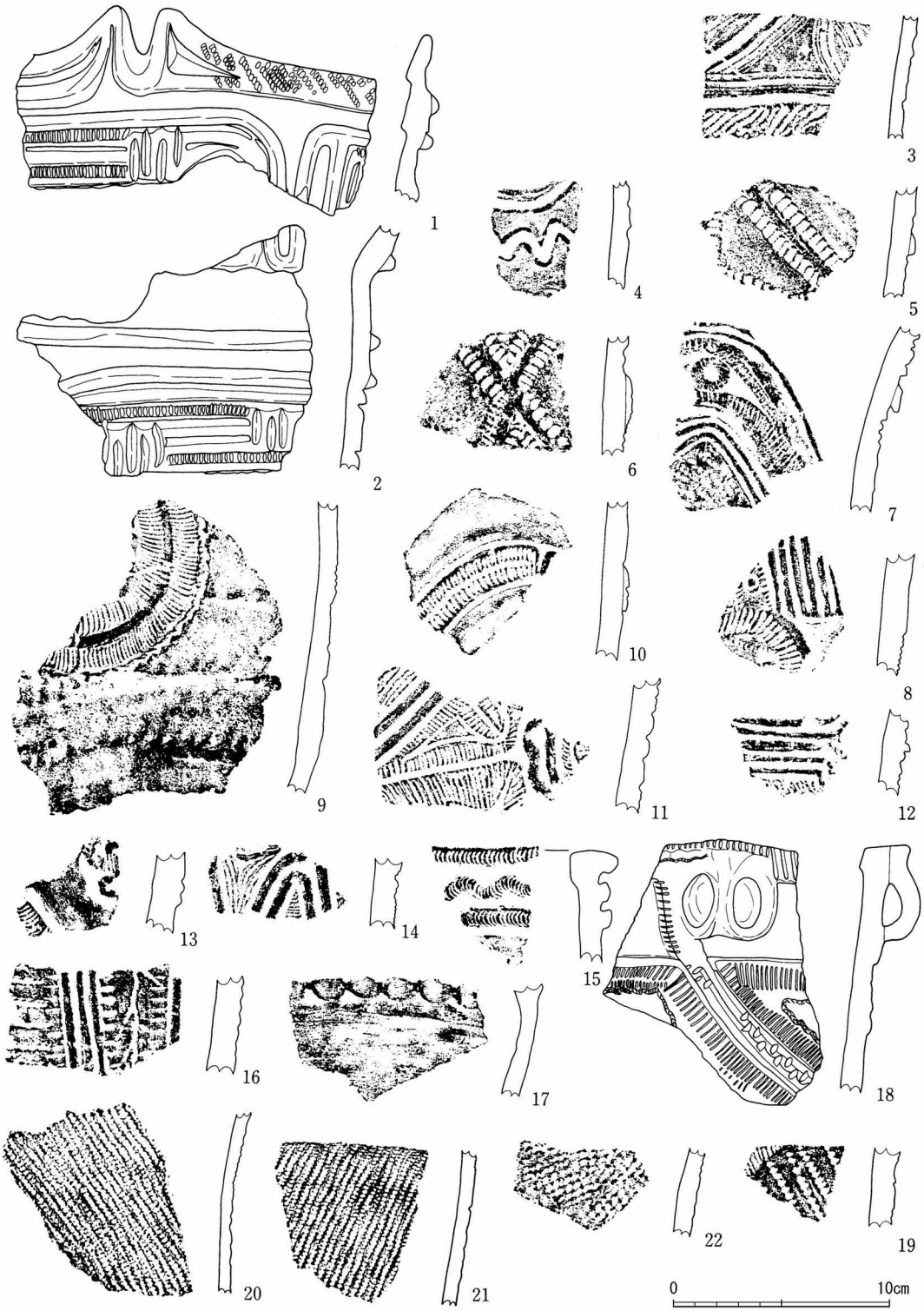
第51図　第８号住居址実測図　S＝1/60

遺　　物

第52図１は石壇より出土した土器である。直径12cm、高さ12cmの円筒形で、口縁部は上部がやや外反している。体部には接合痕が残されている。口縁部には細い棒状工具による押引文を中心に施文している。口縁部の下部には、横位の押引文を２条引いて区画し、その上部に「U」字状や「∩」状を基本として横位に連続して施文している。また、口縁部の1/4周ごとに突起を貼り付け、これが文様の割り付けの基本単位となっている。口縁部の内面には突起の位置に該当する部分に文様を印刻状に施文し、その他の部分は沈線をめぐらしている。土器の外面には全面的に煤が付着しており、内面の文様がつけられた部分にも煤が付着していた。外面に比べて内面は丁寧に整形している。２は浅鉢の底部と考えられる。内・外面ともに文様はみられなかった。



第52図　第８号住居址出土遺物 (1) (2は 1/4)



第53図　第8号住居址出土遺物 (2)

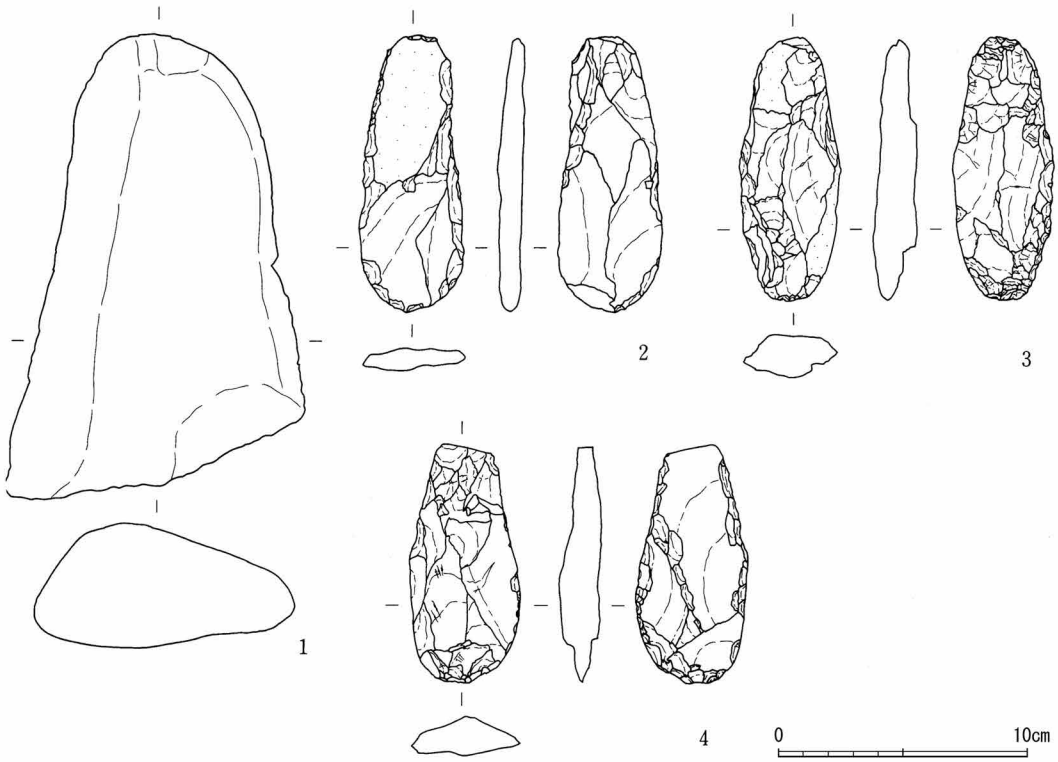
第53図１・２は同一個体である。口縁部に縄文を施文し、突起部には印刻を施している。口縁部上端部は折り返すことによって肥厚させている。胎土中には白色の砂粒や雲母が混入しているものの焼成は良好であった。

３は下部に縄文を施文し、上部に沈線による曲線文を施文している。やや白味を帯びた色調で内面にミガキが密に施されている。

４は斜行沈線文土器の系統である。５・６は同一個体である。７・８・19は抽象文を描いていると思われる土器である。７は区画内をクシ状工具で刺突している。焼成は良好であった。８は白っぽい色調で、半肉隆線の内面に爪形文を施文している。焼成は良好で、内面にミガキが施されている。19は緻密な胎土で焼成は良好である。12～16・18はパネル文をもつ土器である。18は口縁部に耳飾り状把手をつくり、その下部より斜めに隆帯を貼り付けている。外面の一部に煤が付着し、内面にはミガキが密に施文されている。胎土は緻密で焼成は良好である。16は内面に丁寧なミガキが施されている。

21・22は焼成が良好な土器で共に煤が付着している。21は白味を帯びている。

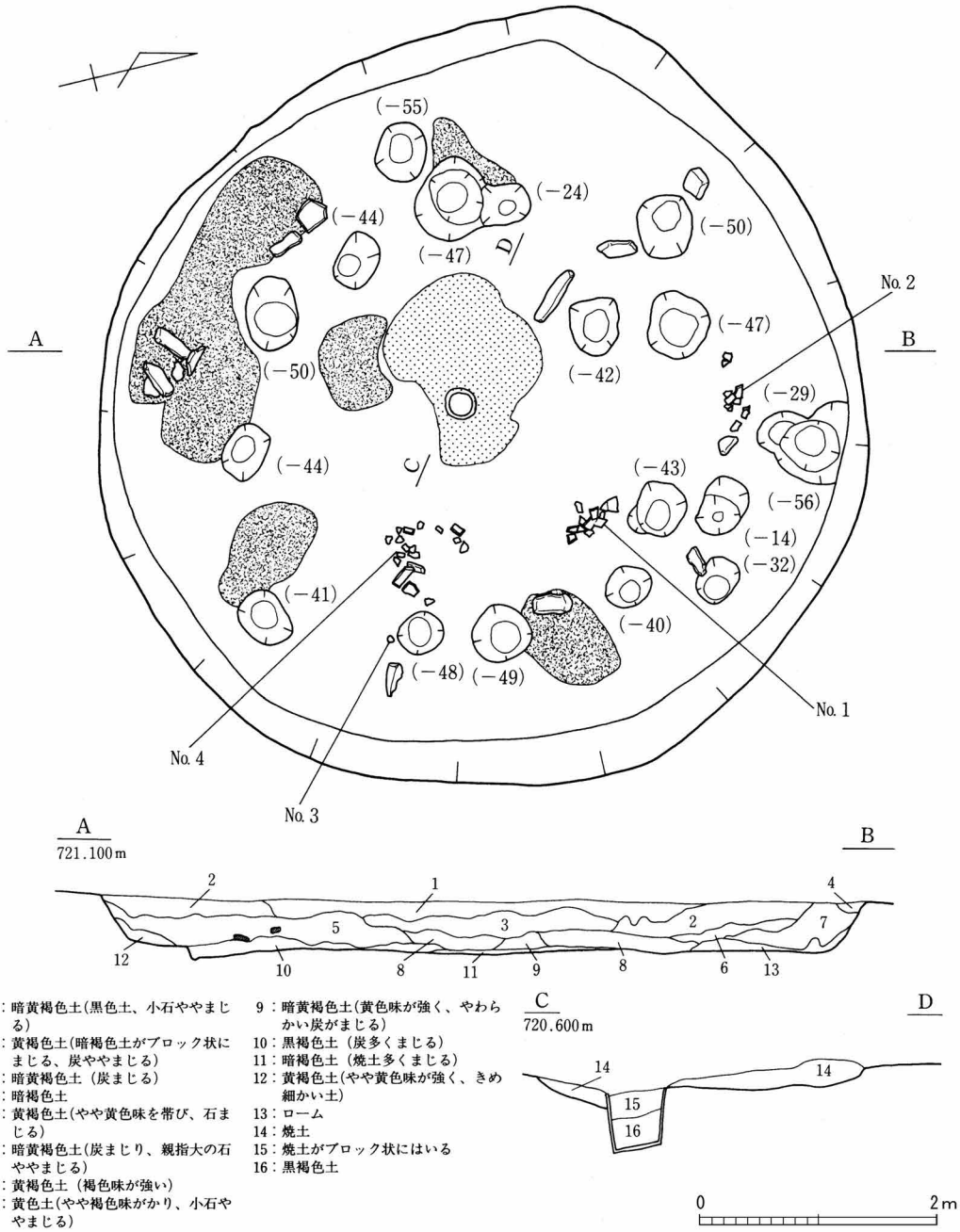
第54図は石器である。１は下部は欠損しているものの３方向ともによく擦痕が残っている。２～４は打製石斧である。２・３はほぼ完全に残存している。２・４は刃部がやや広い短冊形、３は中央部がやや広い短冊形と考えられ、刃部・基部ともによく加工されている。



第54図　第８号住居址出土遺物（3）

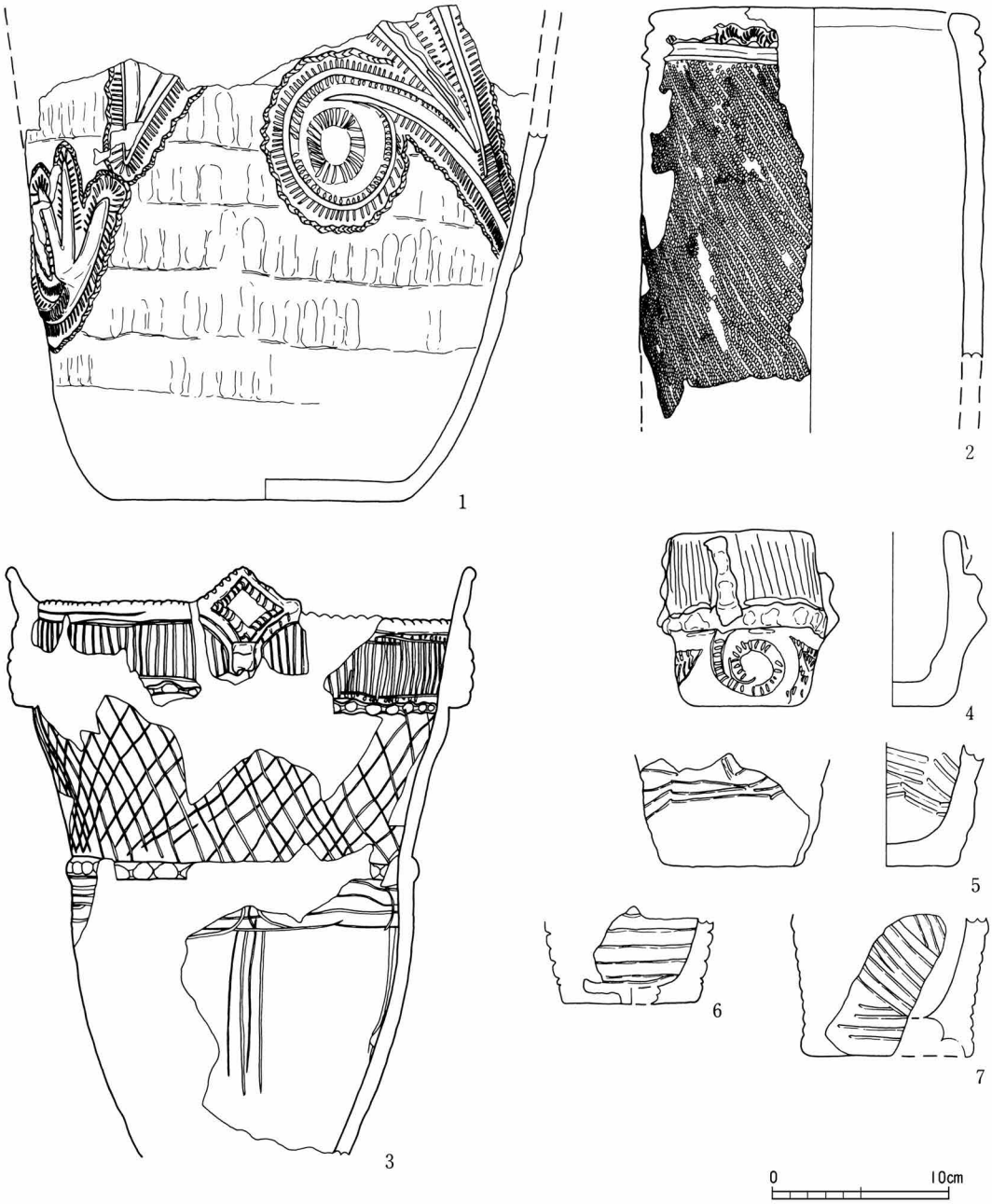
第９号住居址

この住居址はＧＣ－93より出土している。直径およそ6.5ｍの円形のプランで中央部に埋甕炉が設けられていた。住居址の床直上からは炭が多量に出土し、破片も覆土中より多数出土している。埋甕炉周辺の床には焼土が多量に出土している。また、柱穴も14箇所検出され、主柱穴を特定す



1：暗黄褐色土(黒色土、小石ややまじる)
2：黄褐色土(暗褐色土がブロック状にまじる、炭ややまじる)
3：暗黄褐色土（炭まじる）
4：暗褐色土
5：黄褐色土(やや黄色味を帯び、石まじる)
6：暗黄褐色土(炭まじり、親指大の石ややまじる)
7：黄褐色土（褐色味が強い）
8：黄色土(やや褐色味がかり、小石ややまじる)
9：暗黄褐色土(黄色味が強く、やわらかい炭がまじる)
10：黒褐色土（炭多くまじる）
11：暗褐色土（焼土多くまじる）
12：黄褐色土(やや黄色味が強く、きめ細かい土)
13：ローム
14：焼土
15：焼土がブロック状にはいる
16：黒褐色土

第55図　第９号住居址実測図　Ｓ＝1/60（炉：Ｓ＝1/30）



第56図　第9号住居址出土遺物 (1) (4～7は1/2)

ることはできなかった。床面からも破片が出土しているが、器形のわかる遺物は少なく、3個体程度しかない。また、床面からはミニチュア土器が完形品で出土しているのに加え3個体出土している。

またミニチュア土器は、今回の調査で、この住居址と第12号住居址より出土している。

遺　物

この住居址からはミニチュア土器が4点出土しており、そのうち1点（第56図4）は住居址床面から立った状態で出土している（第55図№3）。この土器は体部中部に横位の押圧隆帯を巡らせ、そこから口縁部にむかって押圧隆帯が4単位立ち上がっている。この隆帯の間には縦位の細い沈線文を引き、体部下部には押引文によって渦巻き文や曲線文を施文している。

第56図1は埋甕炉に使用された土器である。残存する体部には接合痕を襞状に残して文様化しその上に隆帯を貼り付けて抽象文を描き出している。焼成は良好であり、胎土は緻密である。2（№1）・3（№2・№4）は床面より出土している。2は円筒形の器形で口縁部に横位の隆帯によって波状文を作り、その上に爪形文を入れている。外面には煤が付着しており、焼成は良好であった。3は平出Ⅲ類Aの系統である。4カ所の突起部には垂下隆帯ではなく、爪形文によって構成される菱形の文様で飾られている。4～7はミニチュア土器で、5～7は横位や斜位の沈線文によって外面を装飾している。また、5は内面にも沈線がみられるが文様ではなく成形時の工具痕の可能性がある。

第57図～第62図は住居址覆土を中心に出土した遺物である。第57図1～4は沈線を多用している土器である。1と2、3と4はそれぞれ同一個体であり、1・2は口縁部、3・4は体部と思われる。1は淡褐色で、胎土が緻密で、焼成は良好であった。

5～7は角押文を隆帯脇に施文している土器である。6の焼成は良好である。

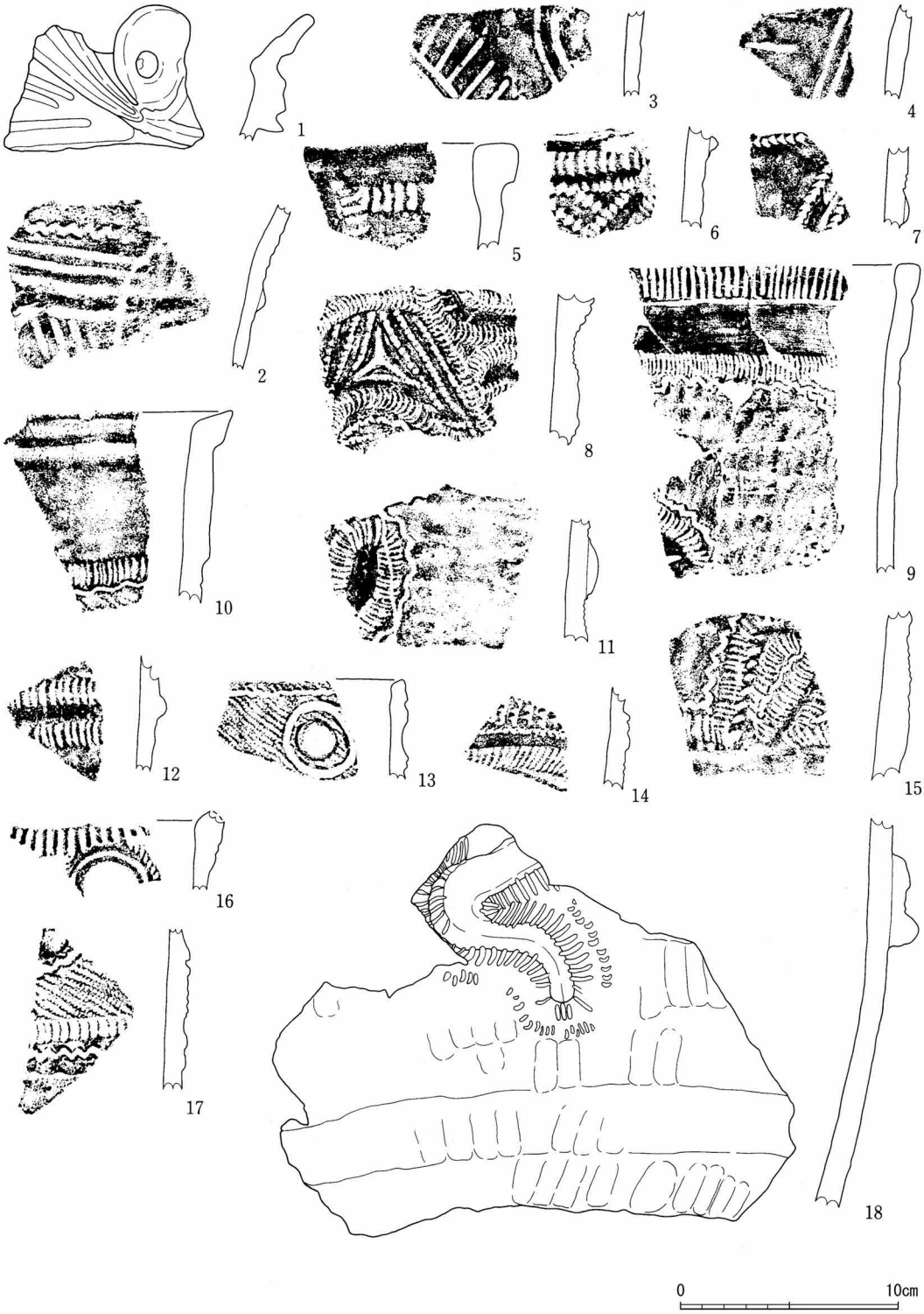
8・11・14・15は抽象文を施文している。8は白色砂粒が混入している。

9・10・13は円筒形の器形に爪形文を施文している土器である。9は口縁部にキザミを施し緻密にミガキがかけられた無文帯を挟んで横位の爪形文を施している。その下部には波状沈線文がひかれ、体部は接合痕を地文化している。内面は緻密にミガキが施されている。10は無文の口縁部と内面に緻密なミガキが施され、爪形文で口縁部と体部を区画している。

第59図1・3～9・12・14・15はパネル文をもつ土器である。1は縦位の半肉隆線にヘラ状工具によって交互にキザミを入れている。3は低い隆帯上に爪形文を施文し、両脇にも爪形文を施文している。またこの爪形文の間には波状押引文を施文している。9・12・14は白色の砂粒が混じる焼成良好な土器である。

16～18は楕円横帯文が施文された土器である。17は区画内にペン先状工具を用いて波状押引文を施文している。18は白色砂粒が混入している。19～24は口縁部が外反して立ち上がった後に、「く」字状に屈曲する器形である。屈曲部には横位の押圧隆帯が施文され、その上には沈線が引かれている。なお、20～22・24は同一個体である。

第60図2～15は平出Ⅲ類Aの土器である。口縁部には2本の波状平行沈線を引き（2）、その下



第57図　第9号・第11号住居址出土遺物 (2)

部から体部にむかって格子目状に平行沈線が施文され（3・5・6・9）、横位の押圧隆帯と平行沈線による区画文（4・6）を経て体部下部の「Y」字状文や縦位平行沈線文へとつながっていく。15は体部下半部の破片で、半截竹管状工具による平行沈線によって［Y］字文が描かれている。

第61図1・2は円筒形をした土器である。

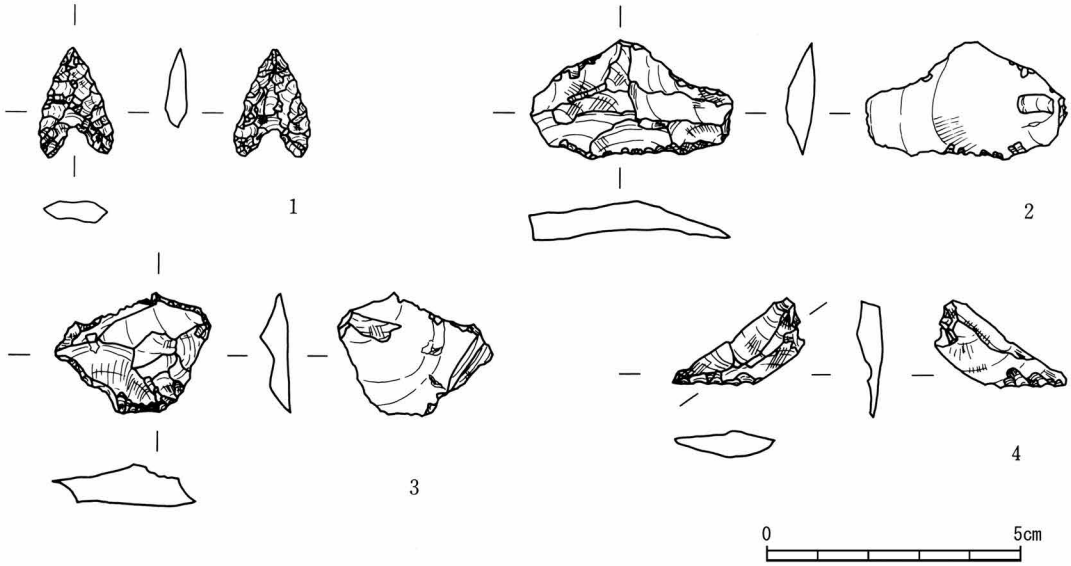
3～5は口縁部の破片で、口唇部にキザミが施され、口縁部には縦位の沈線が引かれている。さらにその下部には、横位の押圧隆帯が貼り付けられている。6は、横位の押圧隆帯上に押引文を施文している。胎土は粗いものの焼成は良好であった。

7は浅鉢の破片である。口縁部の屈曲部に押引文を伴う押圧隆帯を貼り付けている。胎土は粗いが焼成は良好であった。8は薄めの隆帯の上に縄文を施文した土器である。この下部には細線文が縦位にひかれている。焼成は良好である。

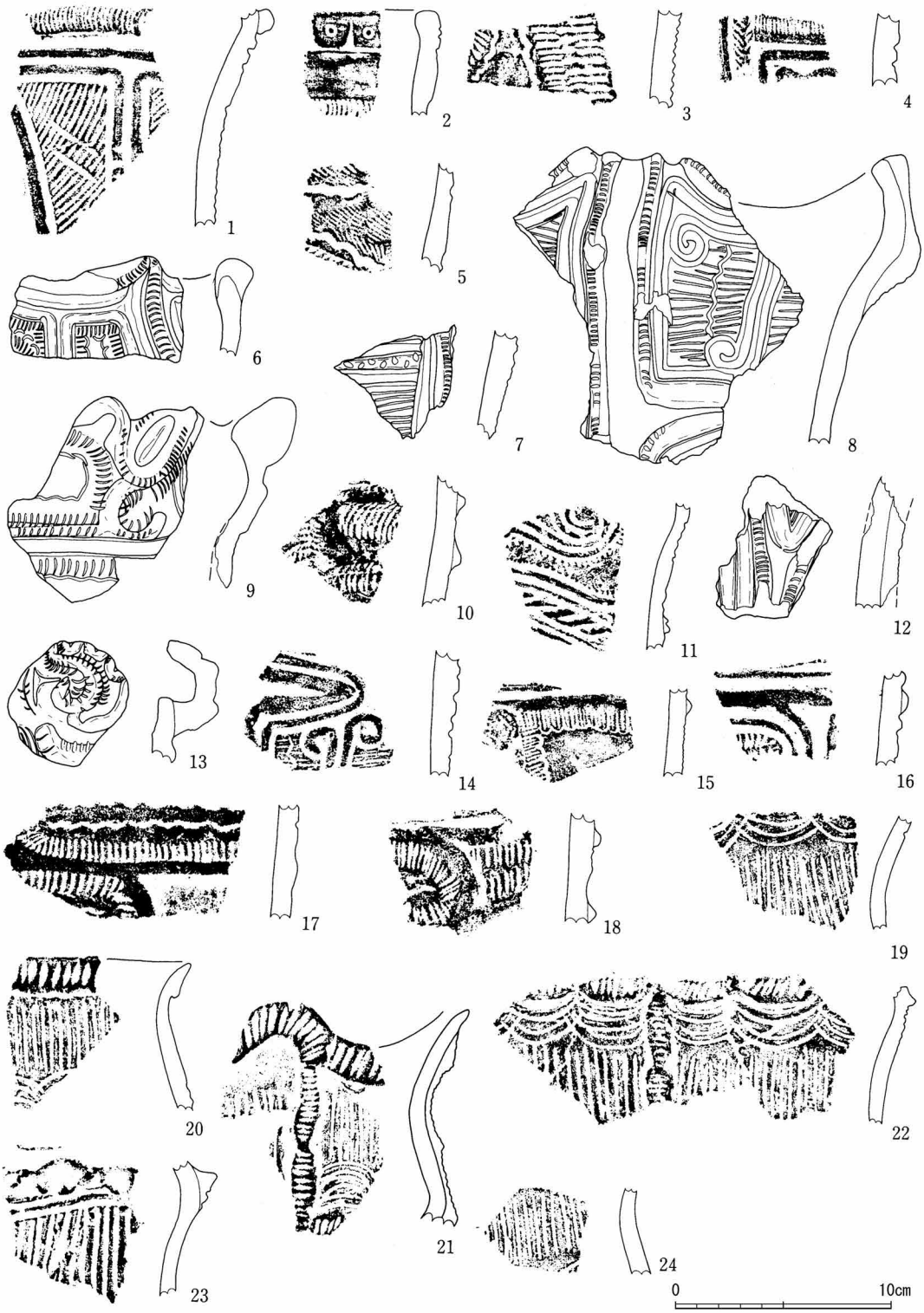
9は内面に緻密なミガキを施し、焼成は良好であった。11～24は縄文を施文している土器である。15は口縁部の破片で、沈線によって2条の波状文が描かれている。

第58図は黒曜石製の石器である。1は無茎の石鏃である。完形品であり、表裏共によく調整されている。2～4は剥片を利用した石器である。背面は剥離したままの状態であり、調整痕はみられなかった。刃部として利用した部位には小剥離痕がみられた。

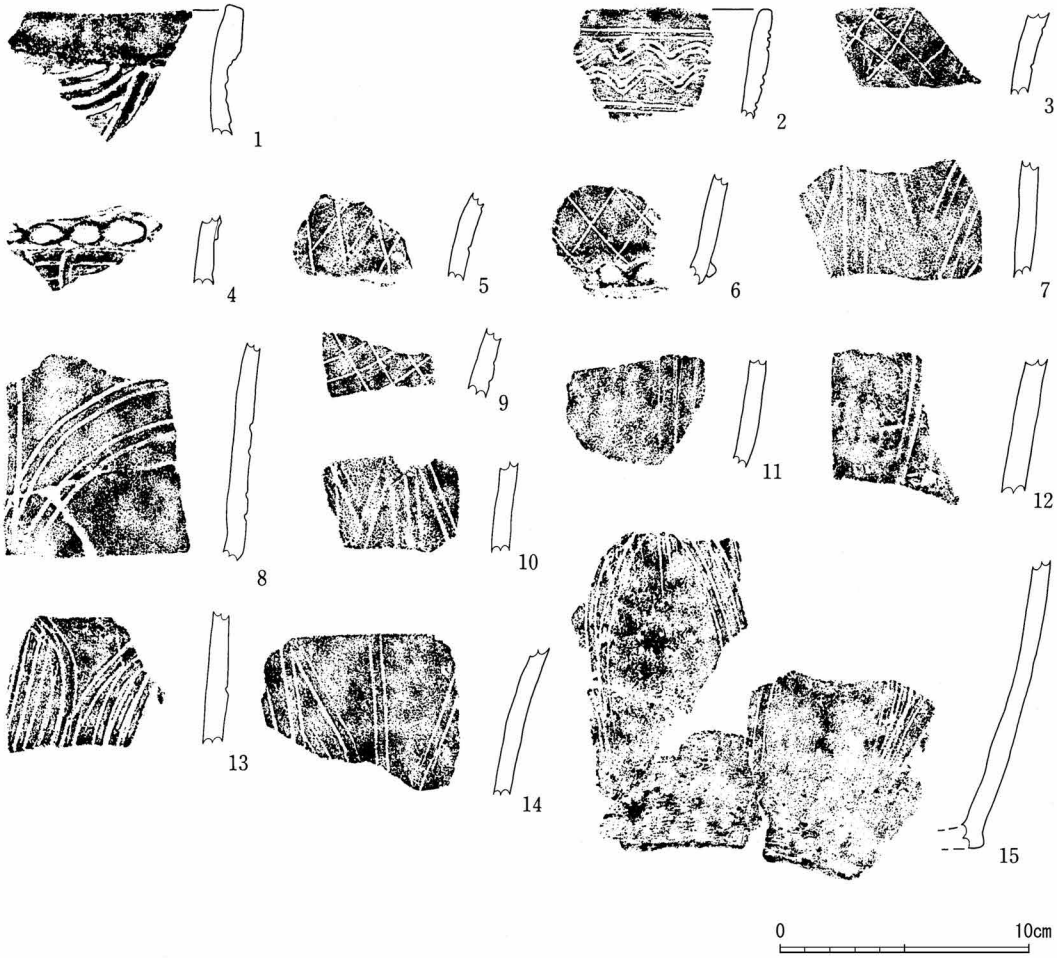
第62図1～3は打製石斧である。1は刃部が欠損しているものの短冊形の石斧で、表裏共によく調整されていた。2はやはり刃部が欠損している。表面は自然面を多く残し、裏面についても大きな打撃によって粗加工した痕跡を残していた。基部には側面を打ち欠いてえぐりをいれている。3は完形品と思われるが、裏面は原石より打ち欠いた際の打撃痕のみであった。表面は細かく打撃を加えて形を整えている。4は全面に磨られており、滑らかな外面となっている。



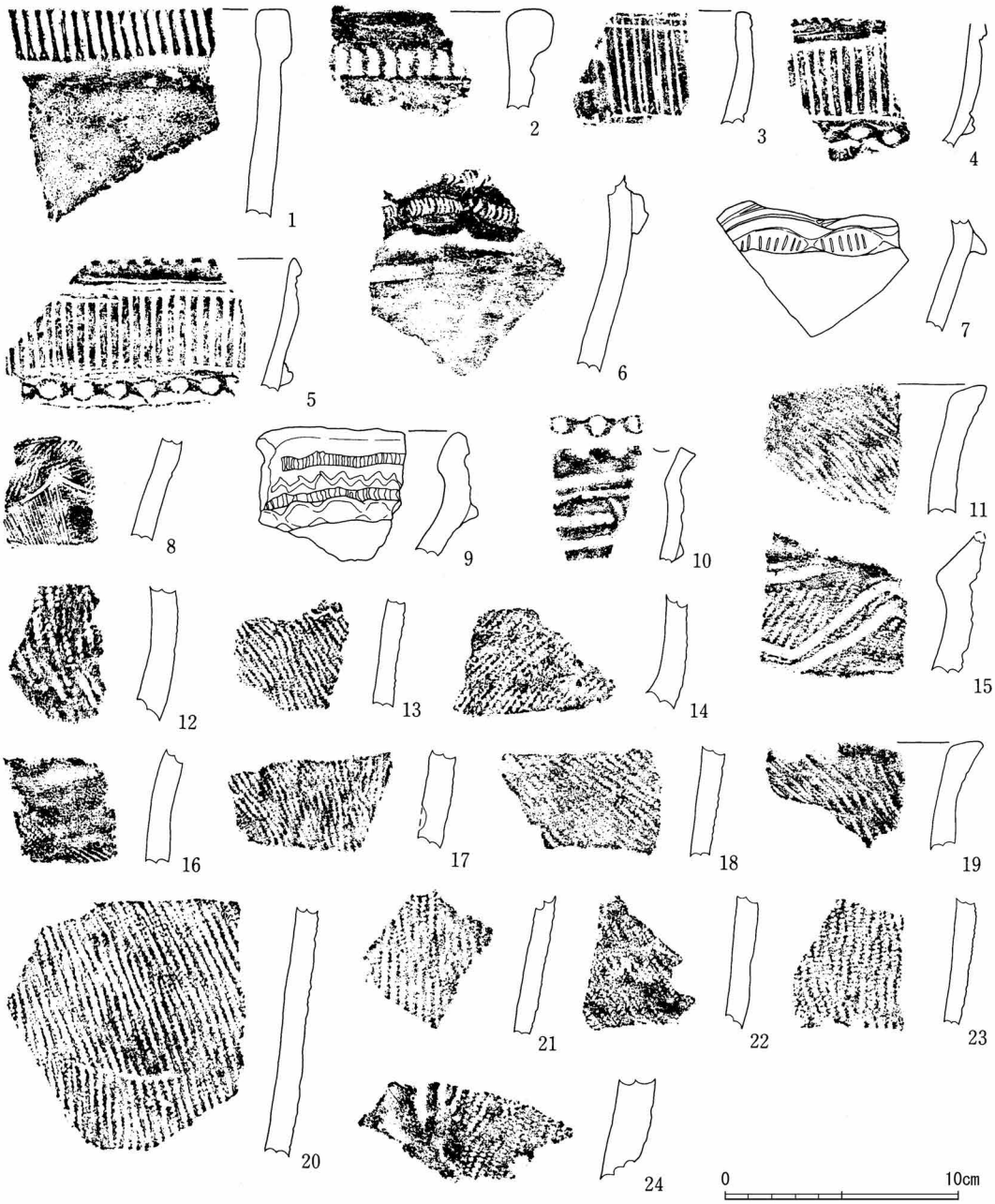
第58図　第9号住居址出土遺物（3）



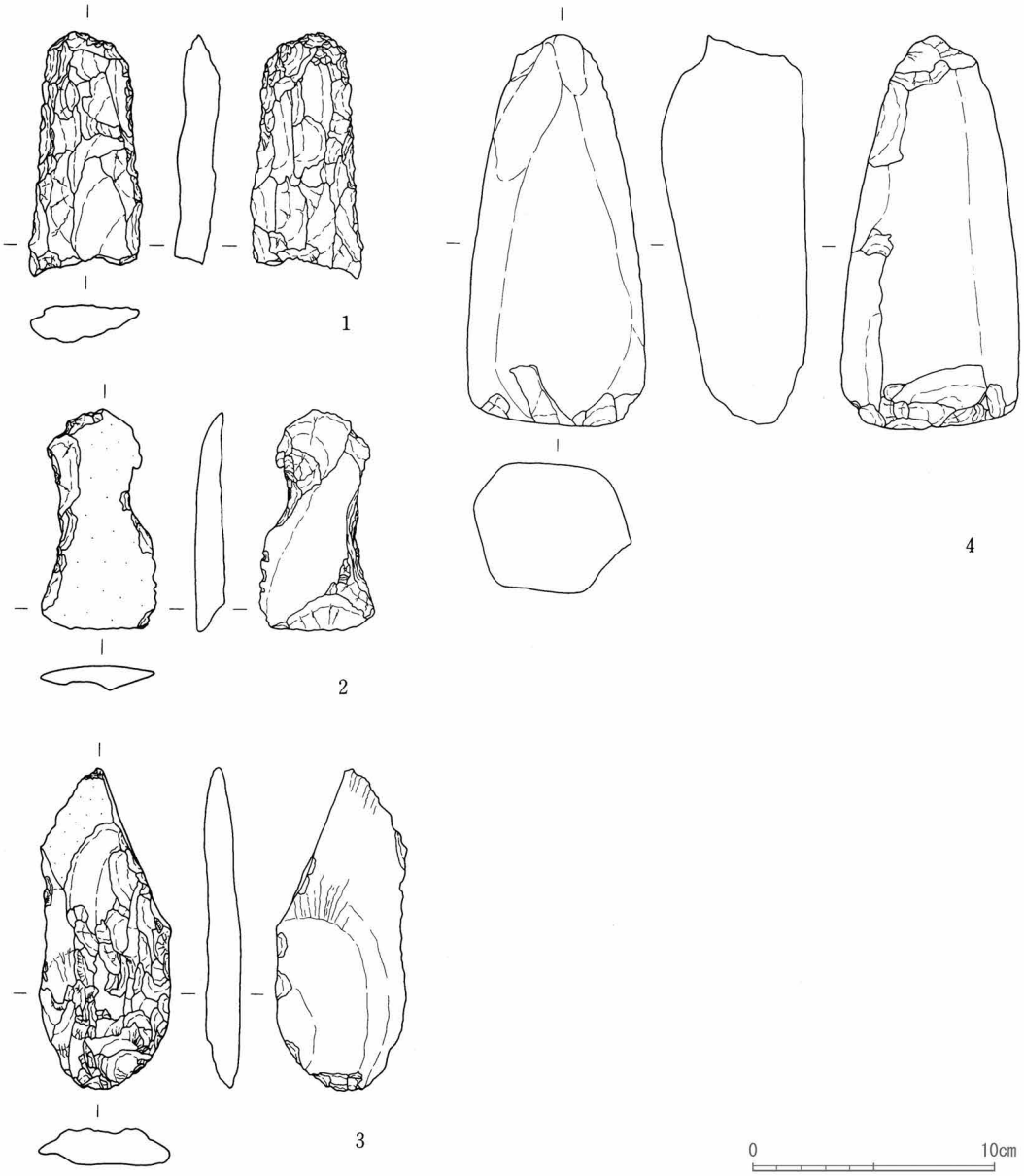
第59図　第9号住居址出土遺物 (4)



第60図　第9号住居址出土遺物（5）



第61図　第9号住居址出土遺物 (6)



第62図　第9号住居址出土遺物（7）

第10号住居址

この住居址はＧＪ－92より検出している。調査区の東端より検出され、ややこの地点が黒色味を帯びていたため、トレンチを入れて確認した住居址である。

プランは直径6.7ｍ×6.2ｍの楕円形であり、覆土には全体的に炭が混じり、特に炉直上の覆土には炭が集中して出土していた。また、住居址中央部には石で囲った炉が出土しているが覆土中には焼土等はあまり出土していない。住居址内に柱穴と考えられる穴は９箇所検出されているが、主柱穴を特定することができない。深さでみると、P_1～P_4が該当する可能性がある。

遺　物

この住居址からは器形の判明する土器の出土は見られず、図示できたのは第64図および第73図１の器台のみであった。第64図１・３・４は隆帯脇に爪形文を施文している土器である。１は内湾しながら開いていく口縁部の破片で、口縁部を隆帯で三角形に区画している。胎土は粗いが焼成は良好である。３は口縁部上端部を肥厚させ口唇部を面取りしたように平らにし、この下部に隆帯を１条めぐらしている。爪形文の下部には三角押文が施文されている。さらにその下部には爪形文を脇にもつ隆帯が斜位に施文されている。４は波状口縁部で、無文帯をはさんでその下部に温泉マーク文を施文している。

２・５・11は抽象文の描かれている土器で、２は、爪形文の下部に三角押文を施文している。胎土は緻密で焼成は良好である。11は胎土は粗く、内面から断面にかけて煤が付着していた。

７は楕円横帯文を施文する土器で、楕円文内には波状沈線文を充填している。胎土は粗い。

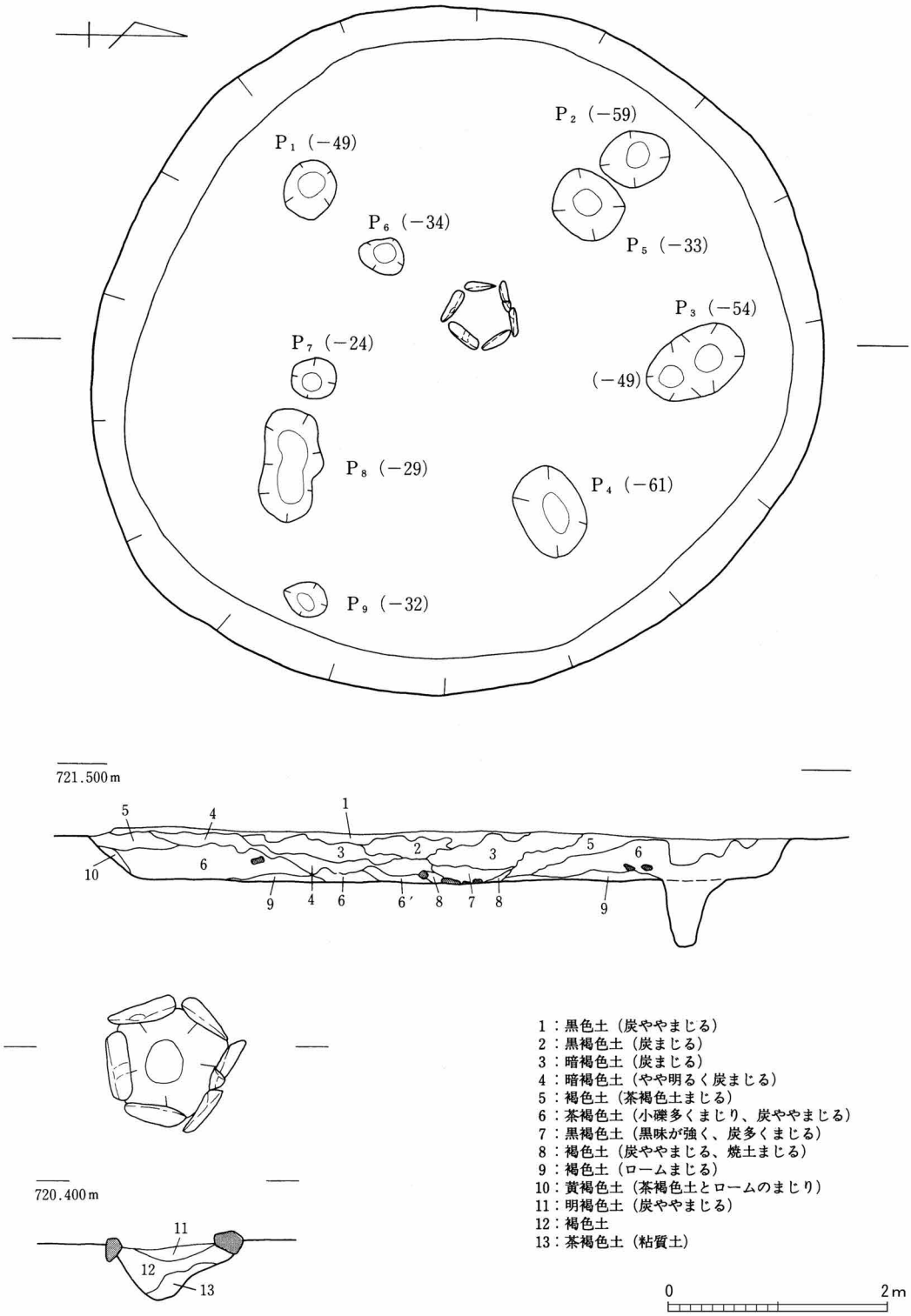
12・13は口縁部に隆帯で波状文を貼り付けている。12は２条の隆帯を貼り付けた間に波状隆帯を貼り付けている。内面は緻密なミガキが施されていた。13は口縁部上端部に波状隆帯を貼り付け、その下部には横位の隆帯を貼り付けている。胎土は緻密で焼成は良好であった。

15～17は器面に隆帯を貼り付け、その隆帯上にキザミをいれるのみで、その他の部分には施文をしていない土器である。16は口縁部の破片で、いわゆる肩章文を隆帯で施しており、その上にはキザミが施されている。無文部はミガキが施され、緻密な胎土で焼成も良好であった。17はキザミを伴う２条の隆帯で円文を描き、その中心部を縦位の沈線で充填している。色調は明褐色を呈し、白色の砂粒が混入しているものの焼成は良好であった。15～17に施文される隆帯はいづれも断面は「冂」状になっており、縁取りを行っていると考えられる。

14・18～20は平出Ⅲ類Ａの土器である。14は体部下部、18・19は体部上部、20は体部中部の破片である。

22・23は偏平な隆帯の上に縄文を施文しており、23の隆帯の脇には爪形文を施文している。22は緻密な胎土で焼成は良好であり、23は砂粒が混入しているものの焼成は良好であった。24は口縁部の破片で、やはり縄文を地文として口縁部直下に三角押文を引き、その下部に爪形文を２条両脇に三角押文を伴って平行に施文している。

第73図１は器台の破片である。円盤の下に脚部がつくと考えられる。円盤の周囲にはキザミが全周していると思われる。焼成は良好であった。



第63図　第10号住居址実測図　S＝1/60（炉：S＝1/30）

第64図　第10号住居址出土遺物

第11号住居址

この住居址はＧＮ－88より検出されている。長径９ｍ短径８ｍの楕円形で、今回の調査で最大規模の住居址である。住居址壁際には柱穴があり、床面より51cm～67cm掘り下げている。また、住居址の中央には、細長い石を使用した一辺およそ90cmの石囲炉を築いている。この炉の中央部には土器片が出土しており（第57図17・18）埋甕炉であった可能性がある。炉の覆土の観察によると、焼土が確認されず、上層において炭がわずかに出土していた。

また、住居址西部の床面からは、完形の深鉢と体部下半部が横倒しとなって出土している（第73図２・３）が、住居址の規模に対して土器片の出土量は少なかった（第67図～第69図）。

遺　物

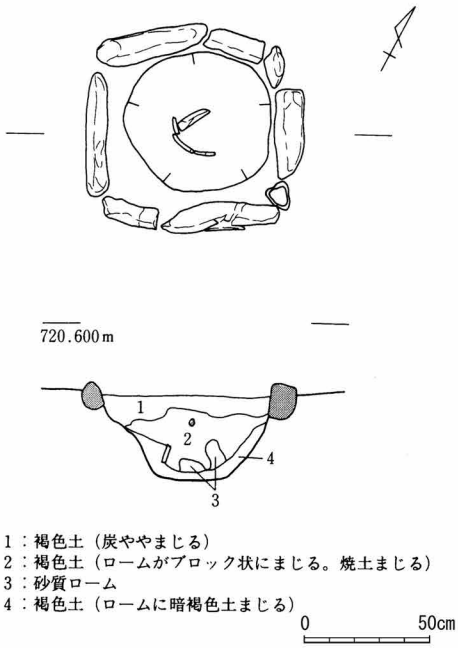
第67図～第69図は住居址覆土を中心に出土した土器片である。多くの遺物が小片であり、土器の全体を把握することができない。

第67図１は隆帯をやや屈曲した口縁部上部と下部に横位に貼り付け、その間を波状隆帯で充填している。破片左端には補修孔がみられる。

２・７は円筒形の土器である。２は器面を縄文で充填し、波状沈線を施文している。器面は白褐色を呈している。７は円形の磨消部の周辺に波状沈線を引いている。

３～６・８～16は隆帯の脇に爪形文を施している。隆起文を施文している４・11は胎土に白色砂粒が混入して粗く、同一個体と考えられる。第67図10と第68図１は同一個体で、胎土中に雲母と白色砂粒が混入し赤褐色を呈している。第67図13は白褐色を呈し、焼成は良好であった。

17～24は縄文時代前期前半の土器と考えられ、混入品である。

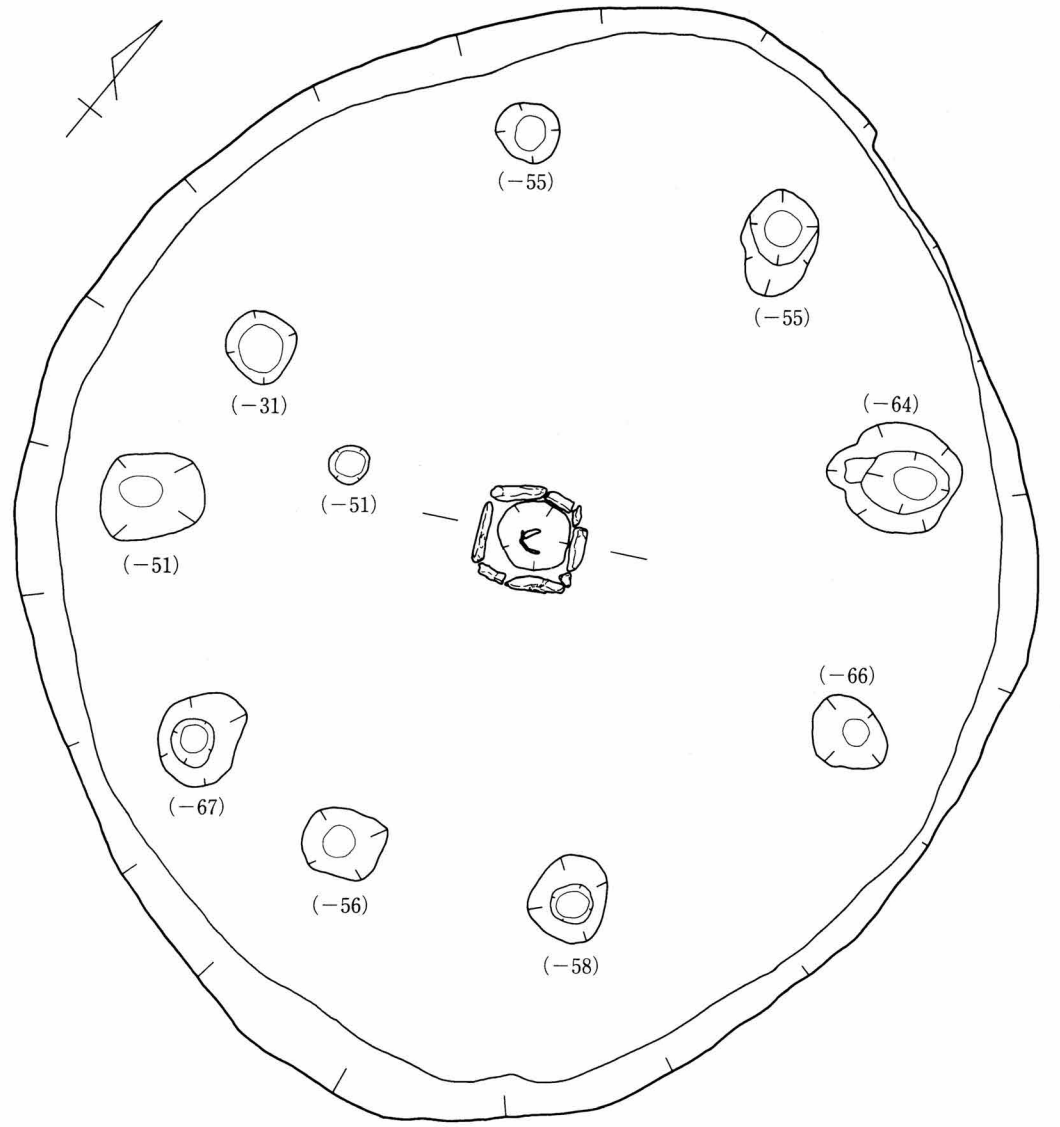


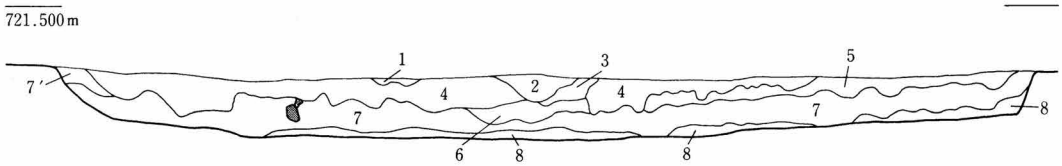
第65図　第11号住居址炉実測図　Ｓ＝1/30

25は沈線で曲線や押引き文を施文し、沈線の両脇に角押文を施文している箇所もある。

26～32は抽象文を施文している。28は隆帯上にキザミが施文されている。30は胎土が緻密で、焼成も良好であった。31は爪形文間に三角押文が縦位に施文されている。焼成は良好で内面におこげが付着している。32は第68図８と同一個体である。

第68図３～12・14はパネル文を施文している土器で多くが文様のモチーフが曲線状に変わり、区画性が失われた土器である。３・４・10・11は規則性のあるパネル文である。３は粗い胎土で爪形文内には角押文が施文されている。４は白味がかった色調で胎土は緻密で焼成も良好であった。10は断面の内面側半分に煤が付着しており、外面の文様は半肉隆線内を棒状の施文具や半截竹管状工具による押引文が施文されている。11は胎土は緻密で焼成も良好であった。５は白色砂粒

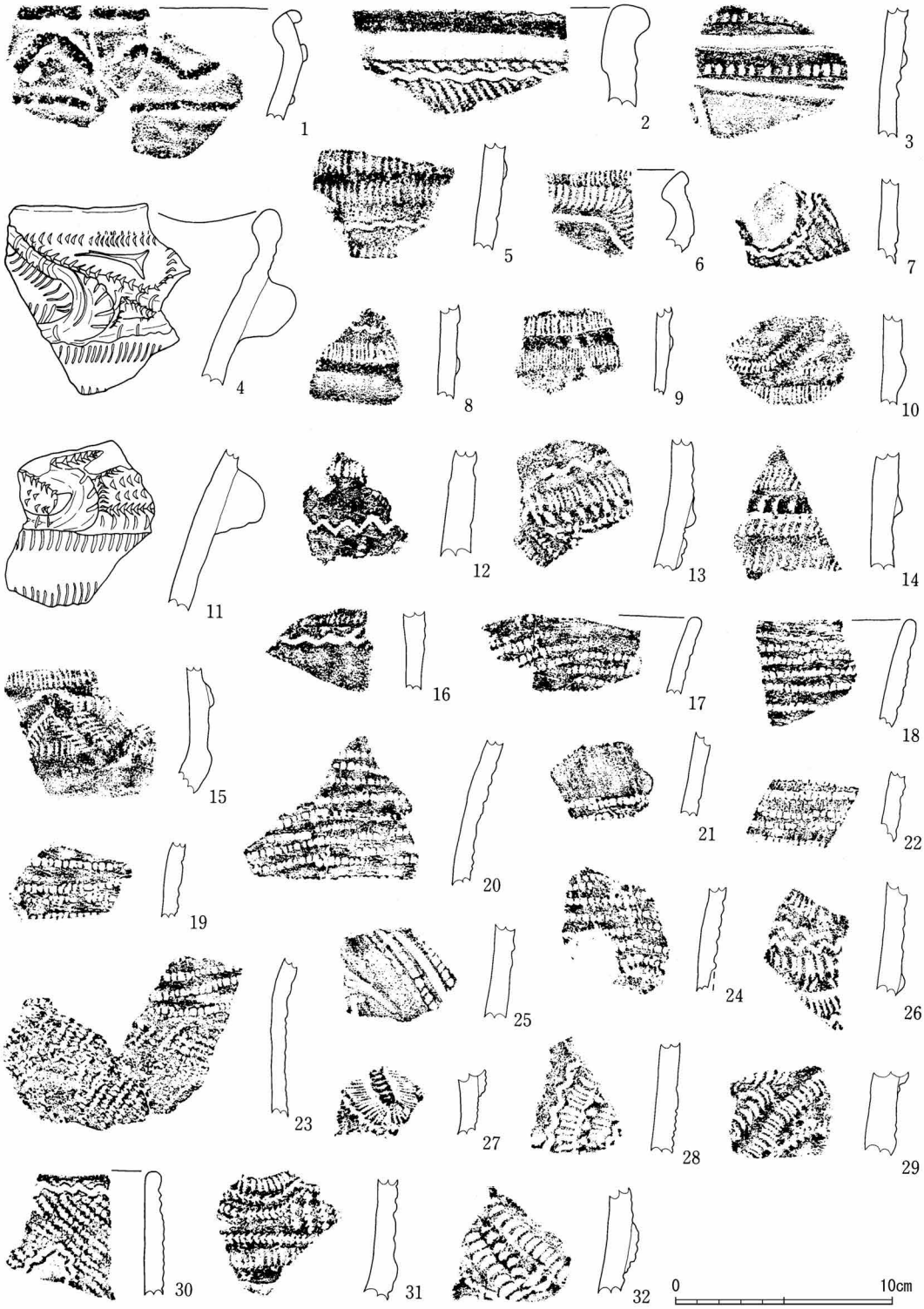




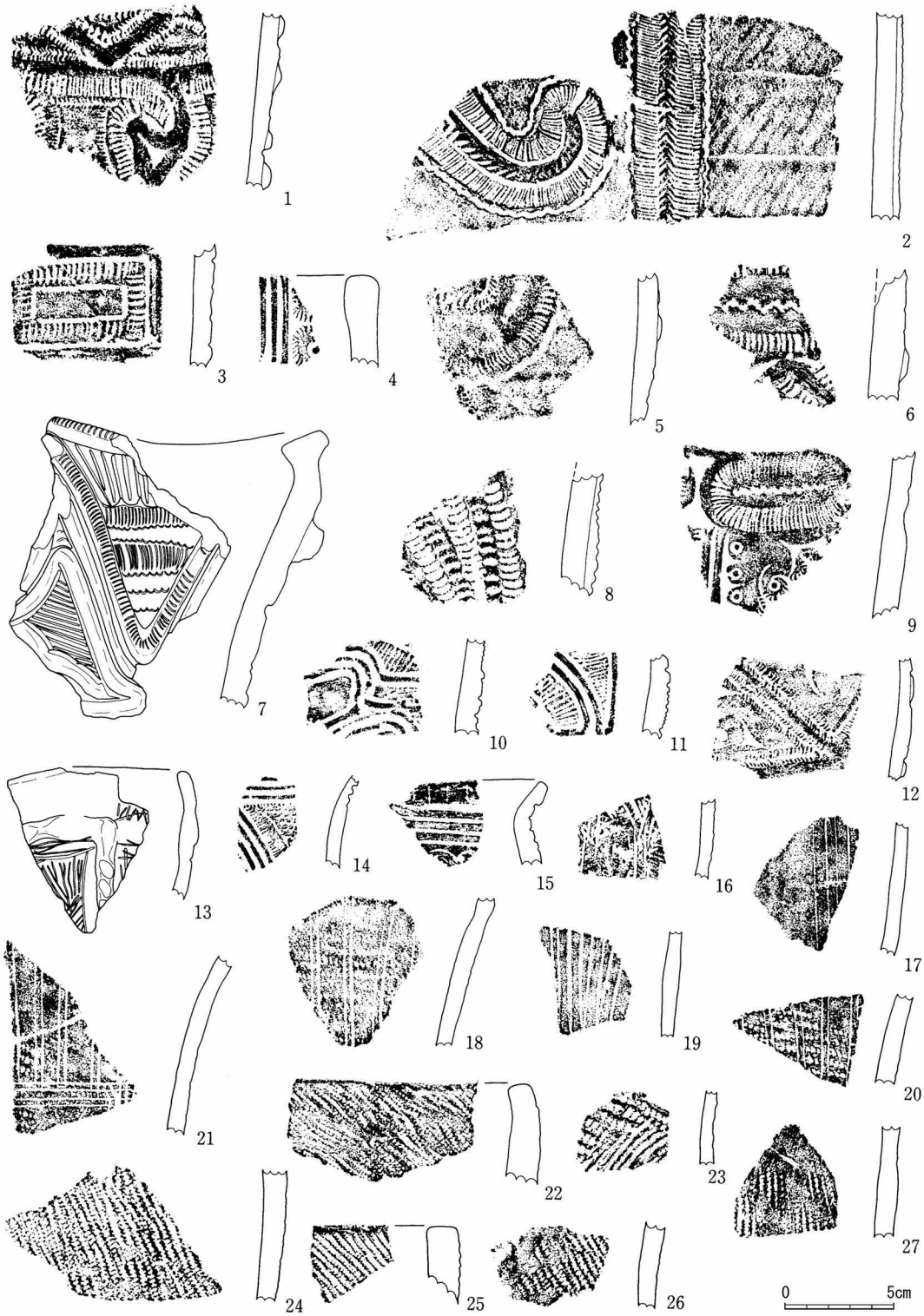
1：黒褐色土（黒色味強く、炭ややまじる）
2：黒褐色土（焼土多くまじり、炭ややまじる）
3：暗褐色土（黒色味を帯び、炭ややまじる）
4：暗褐色土（炭ややまじる）
5：暗褐色土（やや褐色味が強く、炭ややまじる）
6：暗褐色土（炭ややまじる）
7：茶褐色土（ややしまっている部分的に小礫多くまじる。炭ややまじる）
7′：茶褐色土と暗褐色土のまじり
8：暗黄褐色土（茶褐色土とロームのまじり、粘質で炭ややまじる）

0　2m

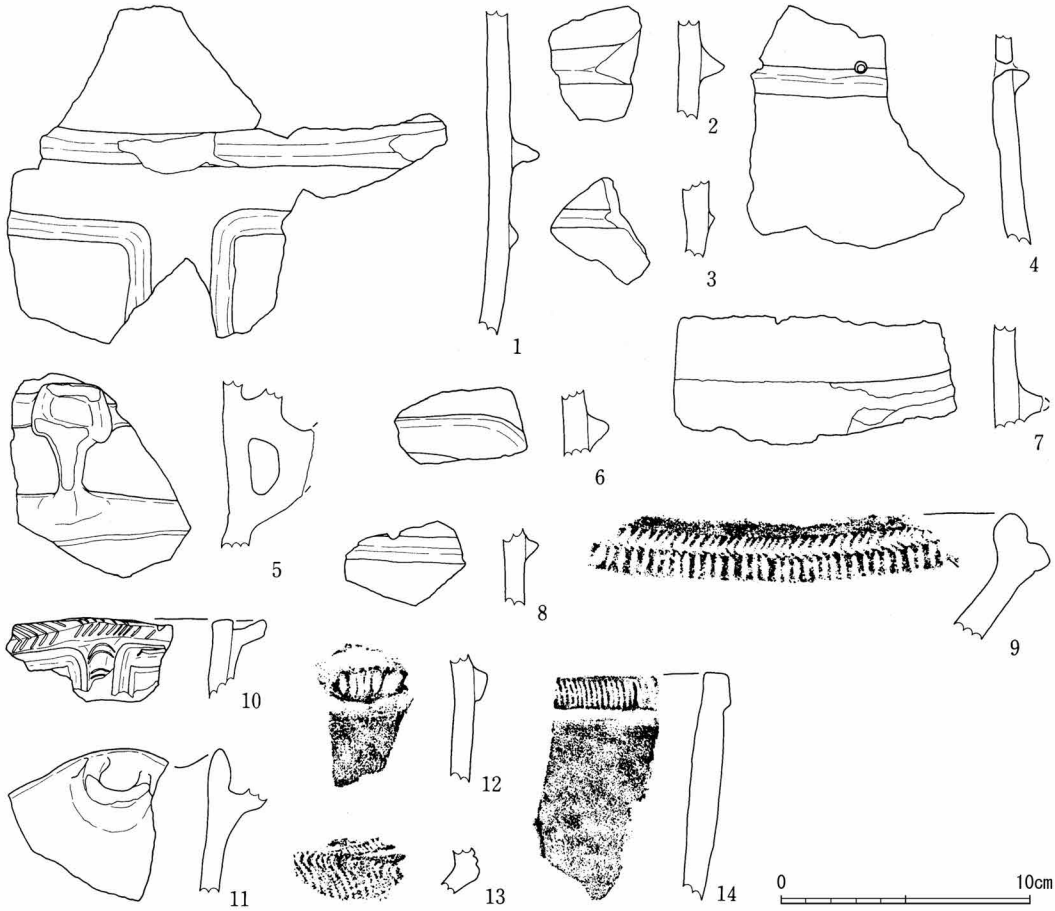
第66図　第11号住居址実測図　S＝1/60



第67図　第11号住居址出土遺物 (1)



第68図　第11号住居址出土遺物 (2)



第69図　第11号住居址出土遺物（3）

が混じり、磨滅が著しい。6は緻密な胎土で白褐色を呈し、焼成は良好である。7は焼成は良好である。14は器壁が薄く、区画文内はヘラ切りで爪形文を作り、その内部に三角押文や半截竹管文による刺突が施文されている。

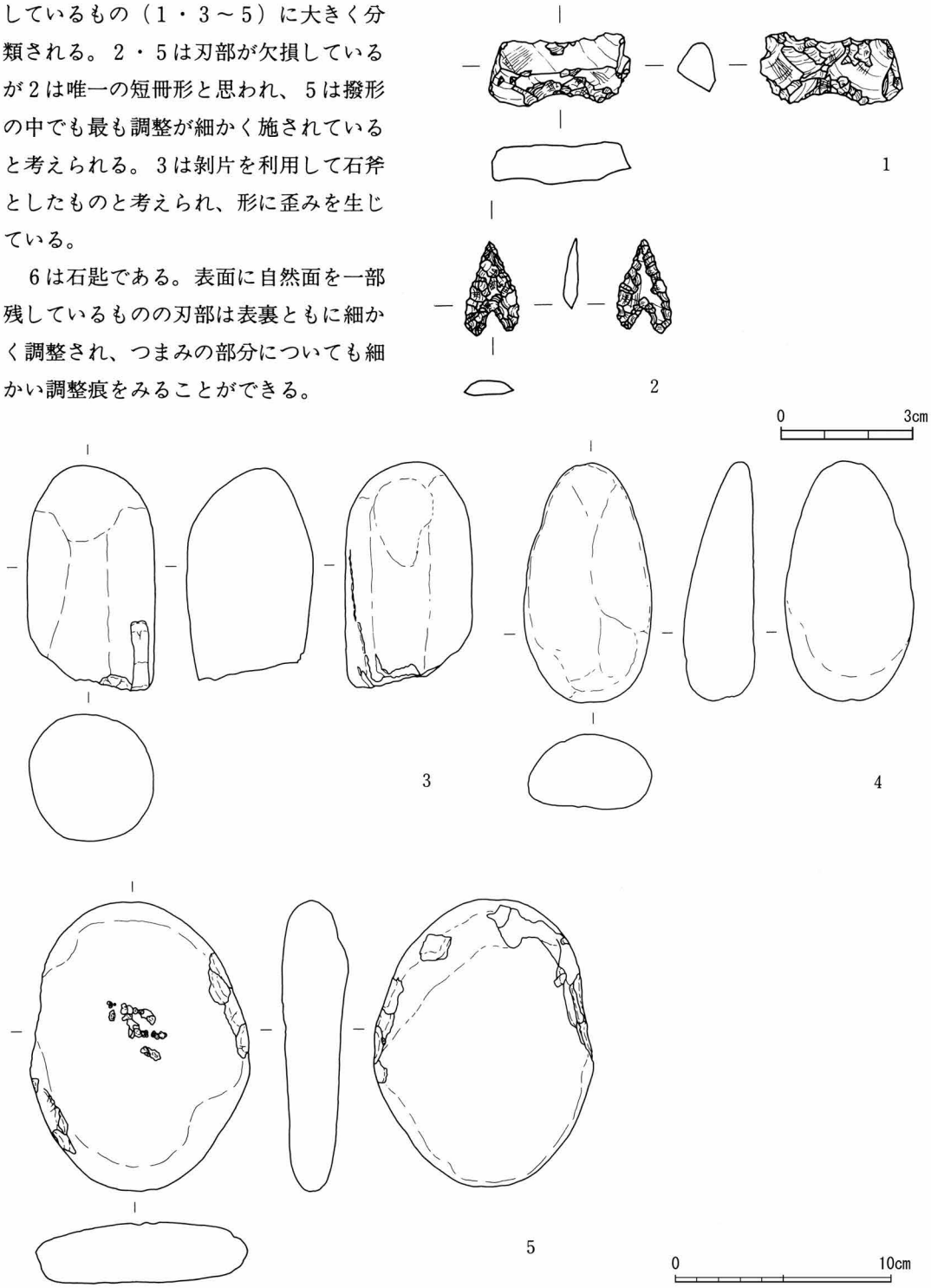
13は胎土が緻密で焼成は良好であり、黒褐色を呈している。

第69図1～8は有孔鍔付土器の破片である。4は8と同一個体であり、4には煤が付着しており、赤色塗彩がみられる。5は体部の破片で、4と同様に赤色塗彩の痕跡がみられる。11は内面に補修孔のような穴をあけようとした痕跡がある。

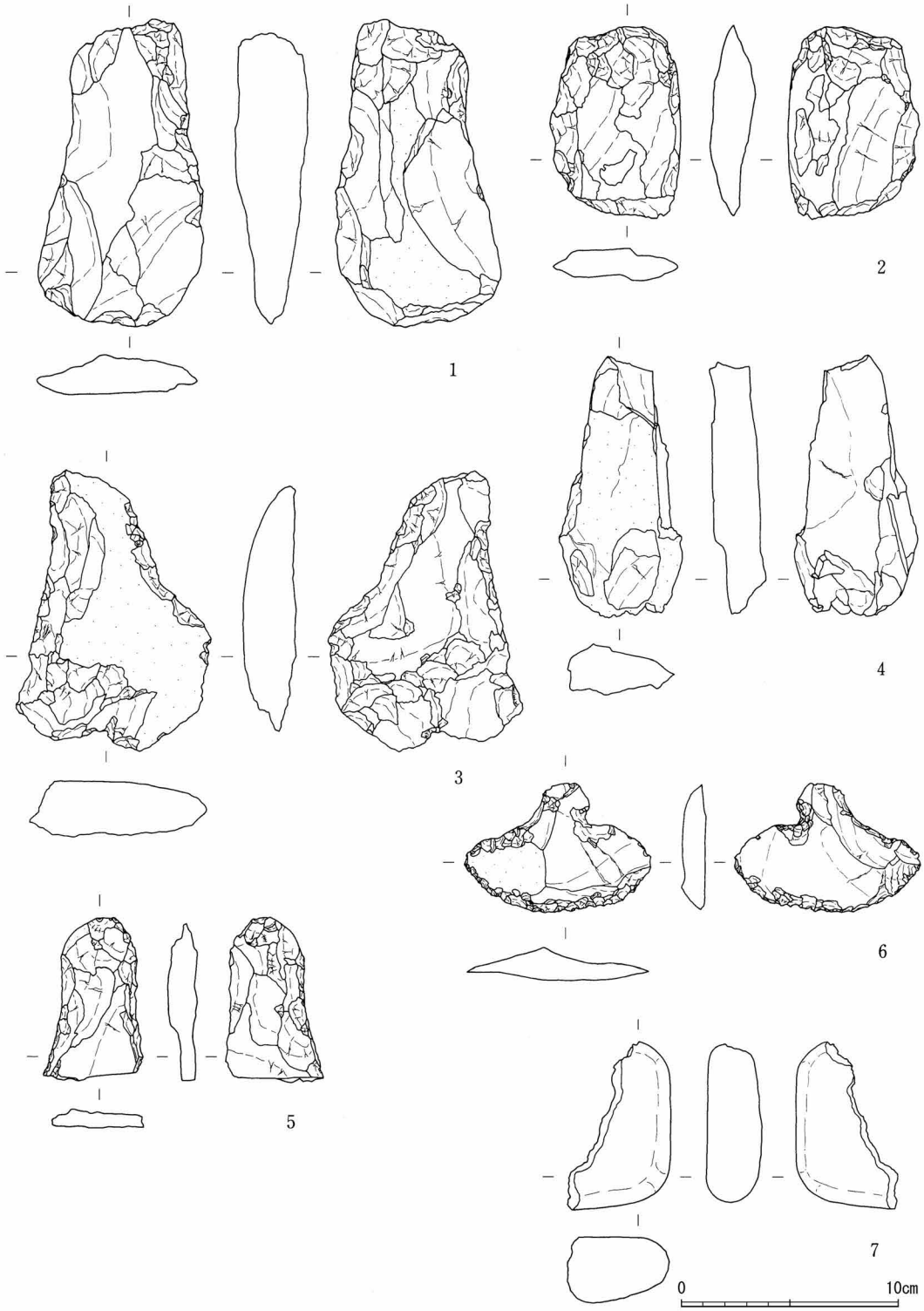
第70図・第71図は石器である。第70図2は黒曜石製の打製石鏃である。無茎のもので、完形品である。第70図3・4・第71図7は磨石である。3・4が断面円形をしているのに対して、7は長方形を呈し、形態的に違いがあり、住居址覆土の出土であることから混入品の可能性も考えておきたい。5は叩き石の台として使用されていたようである。表面に小さな叩きによって生じたと考えられる窪みがある。第71図1～5は打製石斧である。短冊形をしたもの（2）と撥形を呈

しているもの（1・3～5）に大きく分類される。2・5は刃部が欠損しているが2は唯一の短冊形と思われ、5は撥形の中でも最も調整が細かく施されていると考えられる。3は剝片を利用して石斧としたものと考えられ、形に歪みを生じている。

6は石匙である。表面に自然面を一部残しているものの刃部は表裏ともに細かく調整され、つまみの部分についても細かい調整痕をみることができる。



第70図　第11号住居址出土遺物（4）



第71図　第11号住居址出土遺物 (5)

第12号住居址

ＧＲ－89より検出されている住居址で、当初はP_5～P_9および石囲炉が出土していたが、床面を精査したところ、P_1～P_4と、炉の部分が一段（約10cm）下がったところに土器片を伴う土坑が出土した。この結果、柱穴が重複して出土していることや炉が２基出土していることから建替えが行われたと考えられる。また、柱の本数や、炉の位置が移動している様子から考えると旧の住居址を拡張している可能性が高い。

旧住居址は直径5.4ｍ程の円形のプランで４本の柱（P_1～P_4、67cm～81cmの深さを測る）をもった住居址で中央部に炉のある住居址と推定される。炉に付随する施設等は確認されず不明であるが、覆土にはロームと焼土が混入していた。

新しい住居址は５本の柱（P_5～P_9、66cm～91cmを測る）をもつ長径6.5ｍ短径5.4ｍの楕円形プランで、およそ60cmの深さを測った。床面中央部やや北寄りに石囲い炉が築かれており、炉体として使用されていた土器内部の西側に焼土が出土していた。またこの炉の周辺には炉の内部にも増して多量の焼土が広範囲にわたって発見されている。

またP_{10}付近のピットについてはその他の柱穴の規模等と比較するとやや小規模な印象であることから、補助的なものとして位置づけておきたい。

遺　物

第73図５は旧住居址の炉より出土した土器である。体部上部であるが、一部しか残存していない。爪形文を伴う隆帯で体部上部を飾り、下半部はヘラ描き波状文をはさんで粘土紐を襞状に残して文様化している。胎土には砂粒が混入しており、焼成もややあまい。

８はP_8より出土した平出Ⅲ類Ａの土器である。上半部全体の1/4程度しか残存していない。

６・７はミニチュア土器である。６は胎土には砂粒が混入している。７は緻密な胎土で、焼成も良好である。内面は緻密にミガキが行われている。黒褐色を呈していた。

第76図５・25・26はピットより出土した土器である。５は10と同一個体で、砂粒が多く混入し胎土は粗い。25は底部で器面全面に縄文が施文されている。これらの土器はP_{10}より出土している。26はP_8より出土している。

１は隆帯の脇に爪形文を施文し、その下部に波状沈線を施文している。

２・３・13・14はパネルのモチーフが崩れた土器である。２は緻密な胎土で淡褐色を呈し焼成はややあまい。３は胎土が緻密で焼成も良好である。14は内面に丁寧なミガキが施されている。

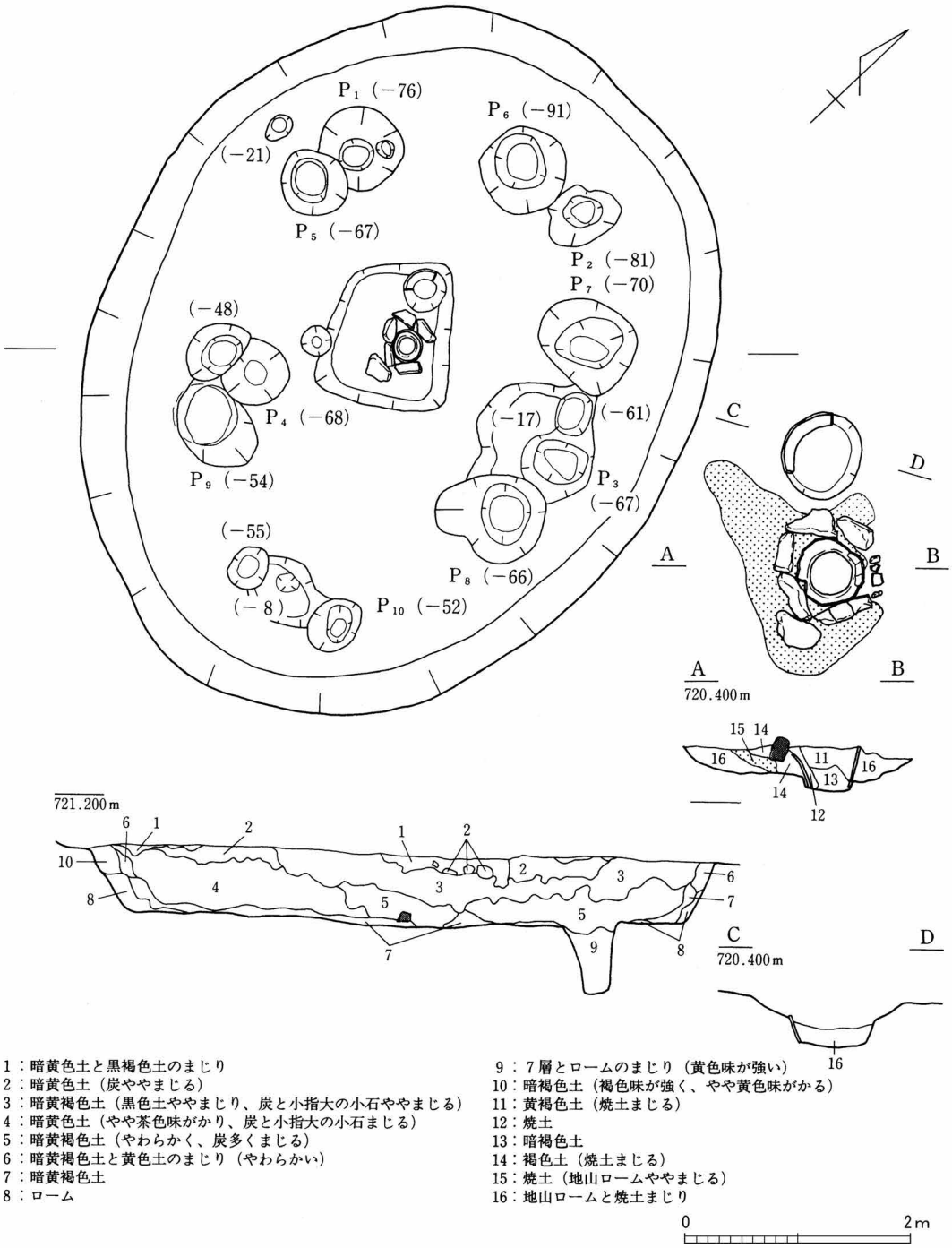
６～９は抽象文を施文している土器である。７は淡褐色を呈している。９は緻密な胎土で、淡褐色を呈し、焼成は良好であった。内面には緻密なミガキが施されている。

11は中心部にヘラ状工具によるキザミを行っている。12は内面にミガキが施されている。

15～19は体部に楕円横帯文を施文している土器である。15には横位の押圧隆帯が施文されている。19は淡褐色を呈し、胎土は緻密で焼成は良好であった。

20～22は平出Ⅲ類Ａの土器である。

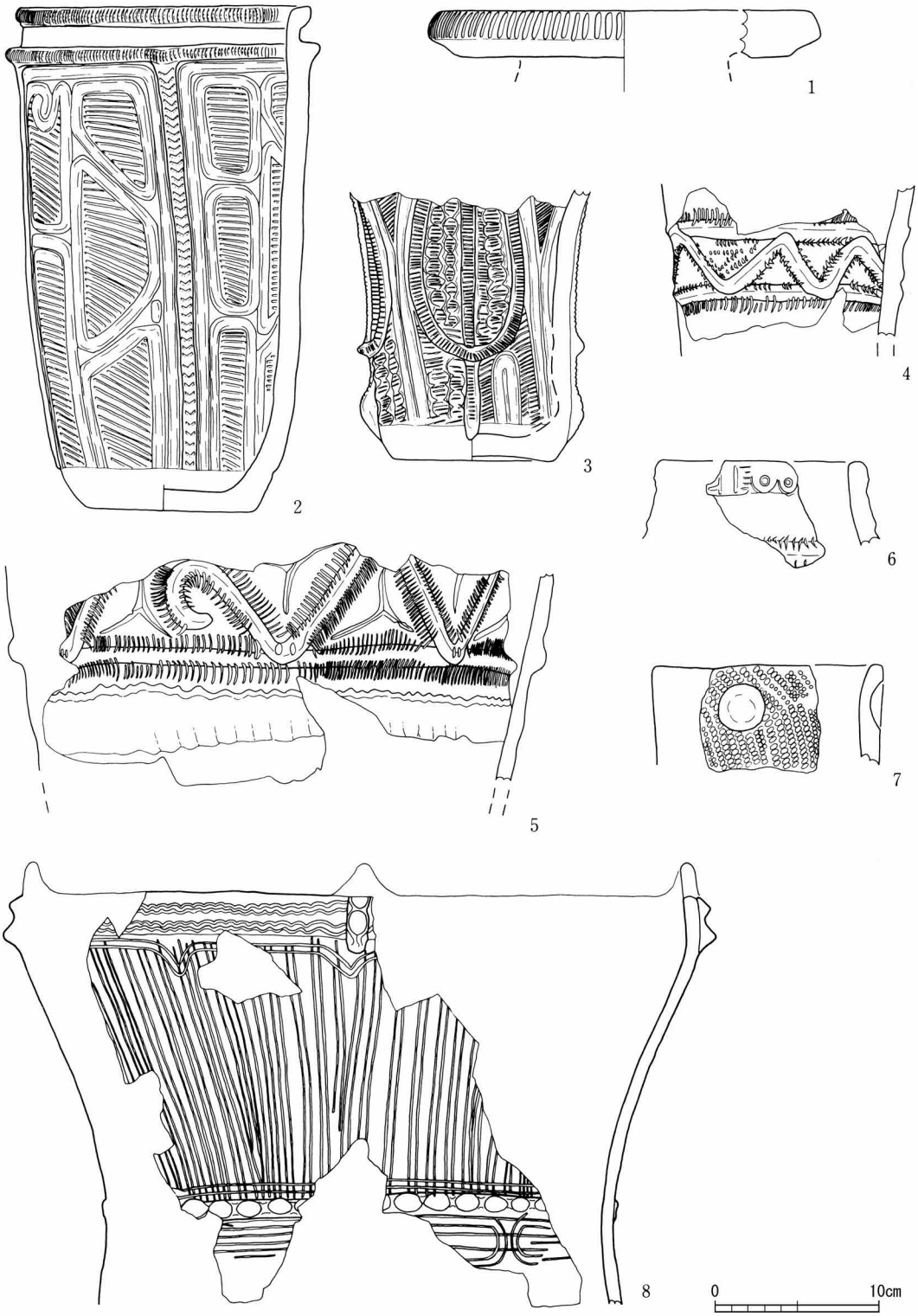
23～29・第75図１・２は縄文を施文している土器である。



1：暗黄色土と黒褐色土のまじり
2：暗黄色土（炭ややまじる）
3：暗黄褐色土（黒色土ややまじり、炭と小指大の小石ややまじる）
4：暗黄色土（やや茶色味がかり、炭と小指大の小石まじる）
5：暗黄褐色土（やわらかく、炭多くまじる）
6：暗黄褐色土と黄色土のまじり（やわらかい）
7：暗黄褐色土
8：ローム
9：7層とロームのまじり（黄色味が強い）
10：暗褐色土（褐色味が強く、やや黄色味がかる）
11：黄褐色土（焼土まじる）
12：焼土
13：暗褐色土
14：褐色土（焼土まじる）
15：焼土（地山ロームややまじる）
16：地山ロームと焼土まじり

0　2m

第72図　第12号住居址実測図　S＝1/60（炉：S＝1/30）



第73図　第10号～第12号住居址出土遺物（1）（6・7は1/2）

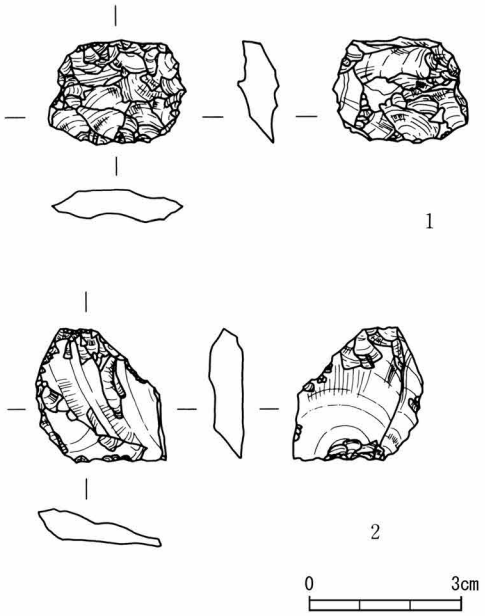
第75図６は土偶腰部である。住居址覆土からの出土であり、脚部および体部が欠損している。文様は前面のみに施文されており、浅い三角形にも似たえぐりが左右対称に入れられ、その上部にへその表現がみられる。へそから上半身に向かって沈線が１条引かれている。５は有孔鍔付土器の破片である。体部の破片である。

７は外面に緻密にミガキが加えられている。

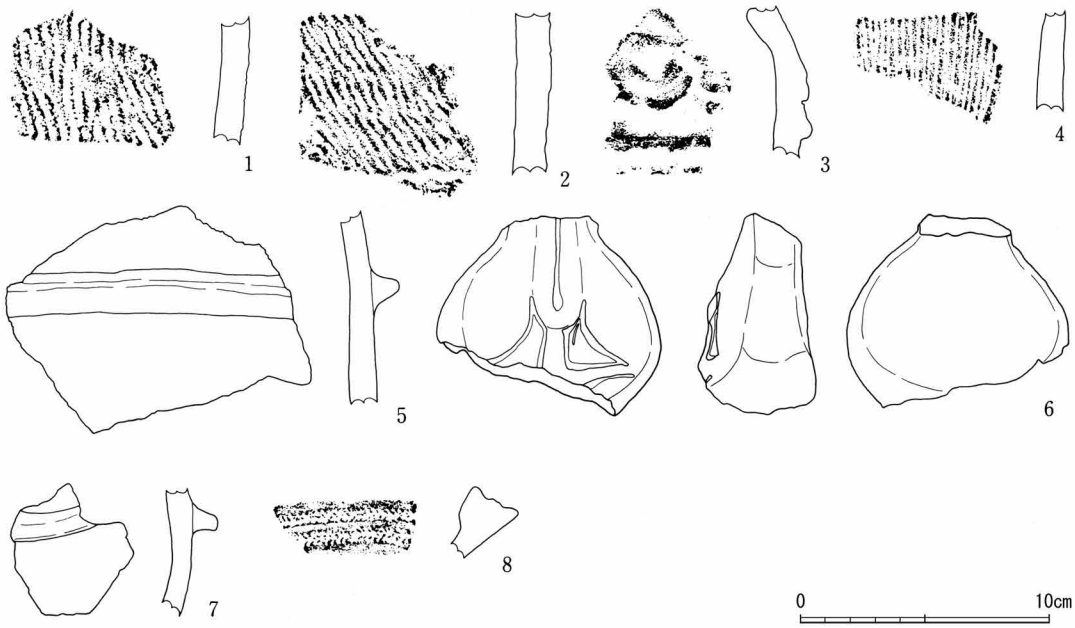
８は浅鉢の破片である。

第74図は黒曜石製の石器である。１は楔形石器の可能性もあるが剥器と考えられる。また２は剥片を利用した石器と考えられる。

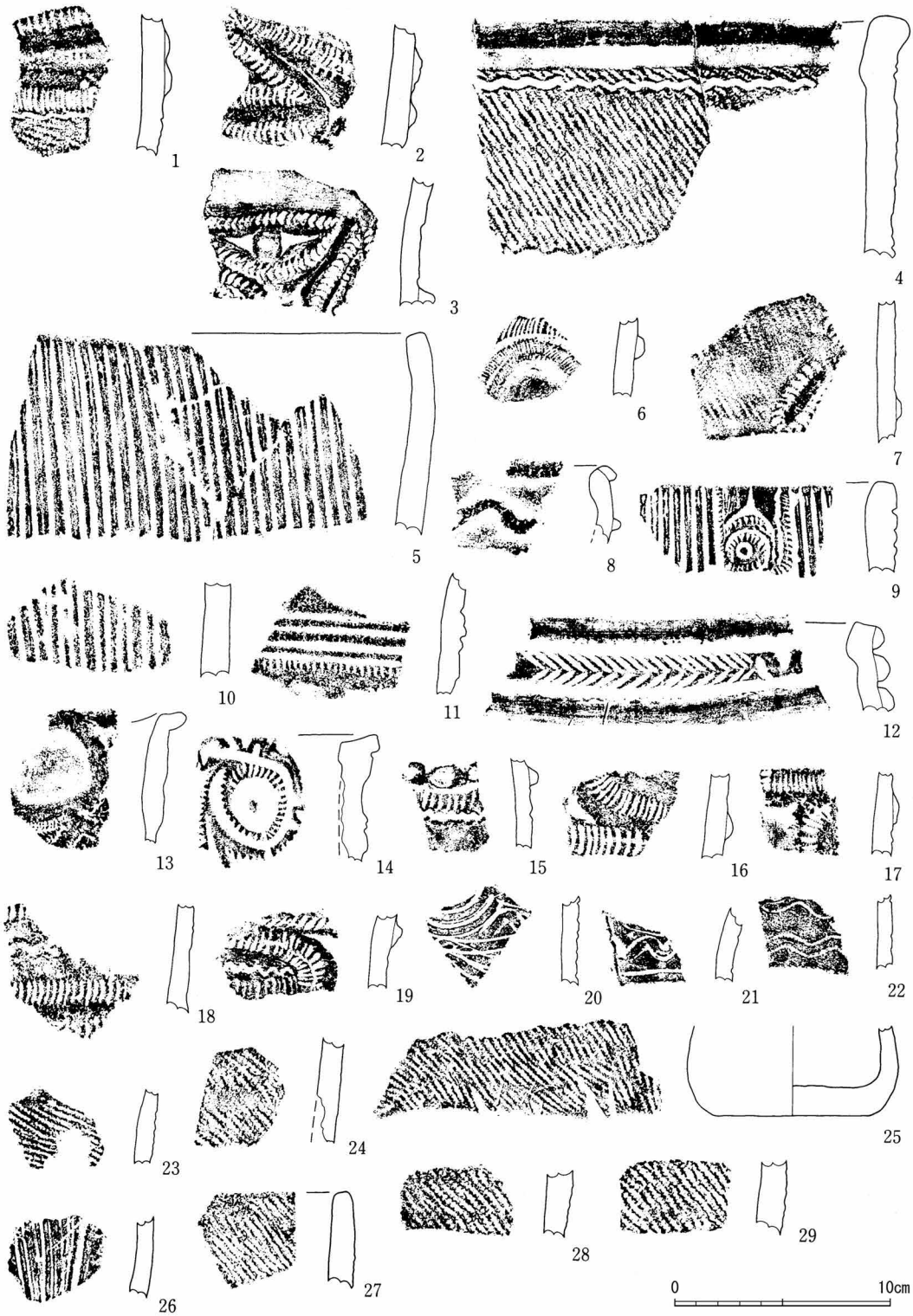
第77図１～５は打製石器である。１・５は短冊形の石器で両者とも完形品である。２・４は剥片を利用した石斧である。表面に自然面を残し、刃部を中心に加工が施されている。３は撥形の石斧であるが、刃部が失われてしまっている。６は磨製石斧である。刃部に最大幅をもち柄部にむかって細くなっていくいわゆる乳棒状石斧である。偏平でやや曲面の刃部はよく磨かれている。



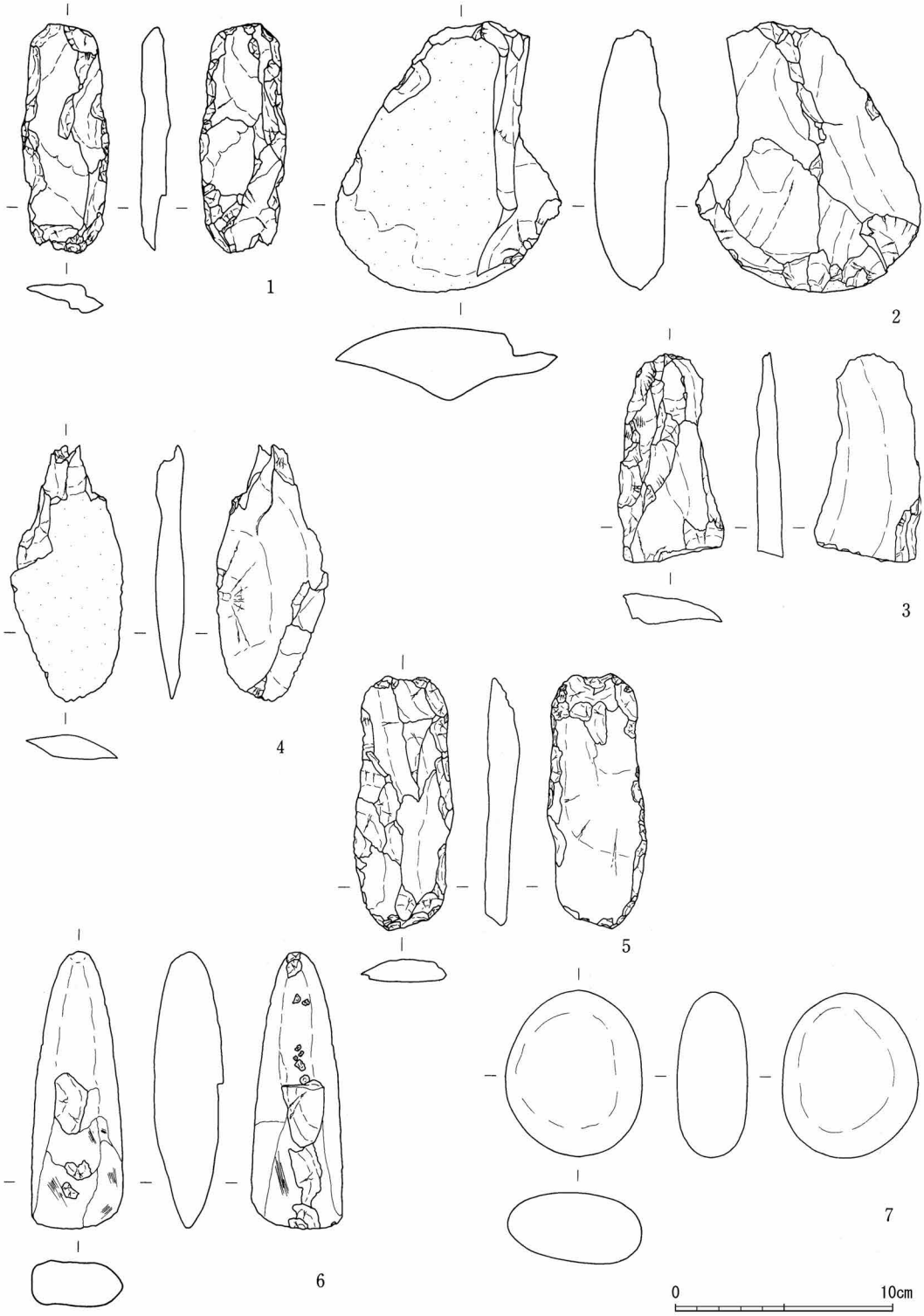
第74図　第12号住居址出土遺物 (2)



第75図　第12号住居址出土遺物 (3)



第76図　第12号住居址出土遺物 (4)



第77図　第12号住居址出土遺物 (5)

第13号住居址

ＧＵ－81より出土している。上部の包含層を掘り下げすぎてしまい、壁面を大きく破壊してしまった。また、住居址の北東部は調査区外となってしまい、未調査となってしまったが一辺が5.2ｍの隅丸方形に近いプランとなっている。柱穴はP_1～P_3の３箇所が確認されている。また床面の北西寄りには石囲炉があり、その下にはややずれて土器（第79図４）が埋設されていた。石囲炉は１片が１ｍの方形であり、細長い石を５個使用して築いている。埋甕炉の外面に焼土が出土したが、量的にはあまり多くなかった。

遺　　物

住居址の床面からは第79図の土器が出土した。３は住居址北部より出土しており(№１)、唯一この住居址で器形の判明する土器であった。縄文を地文として施文し、キザミを伴う隆帯を大きくうねらせて貼り付け、その間にヘラ描沈線による三叉文を施文している。また体部下部には横位のキザミを伴う隆帯を貼り付け、両脇に爪形文を施文している。全体にやや赤褐色を呈し、内面にはミガキが加えられていた。２は床の南西部に出土している。底部は失われており、体部にパネル文を施文しているがやや崩れたモチーフとなっている。４は埋甕炉として利用されていた土器である。全体の1/4程度体部下部が残存していたが、縦位の隆帯を２条垂下させ、その間にヘラ描の波状沈線を施文している。

第80図～第83図は覆土中より出土した土器である。

第80図１は隆帯によって大きくモチーフを描き、その脇を沈線によって装飾している土器で、雲母が混入し、焼成は良好であった。内面にはミガキがみられる。

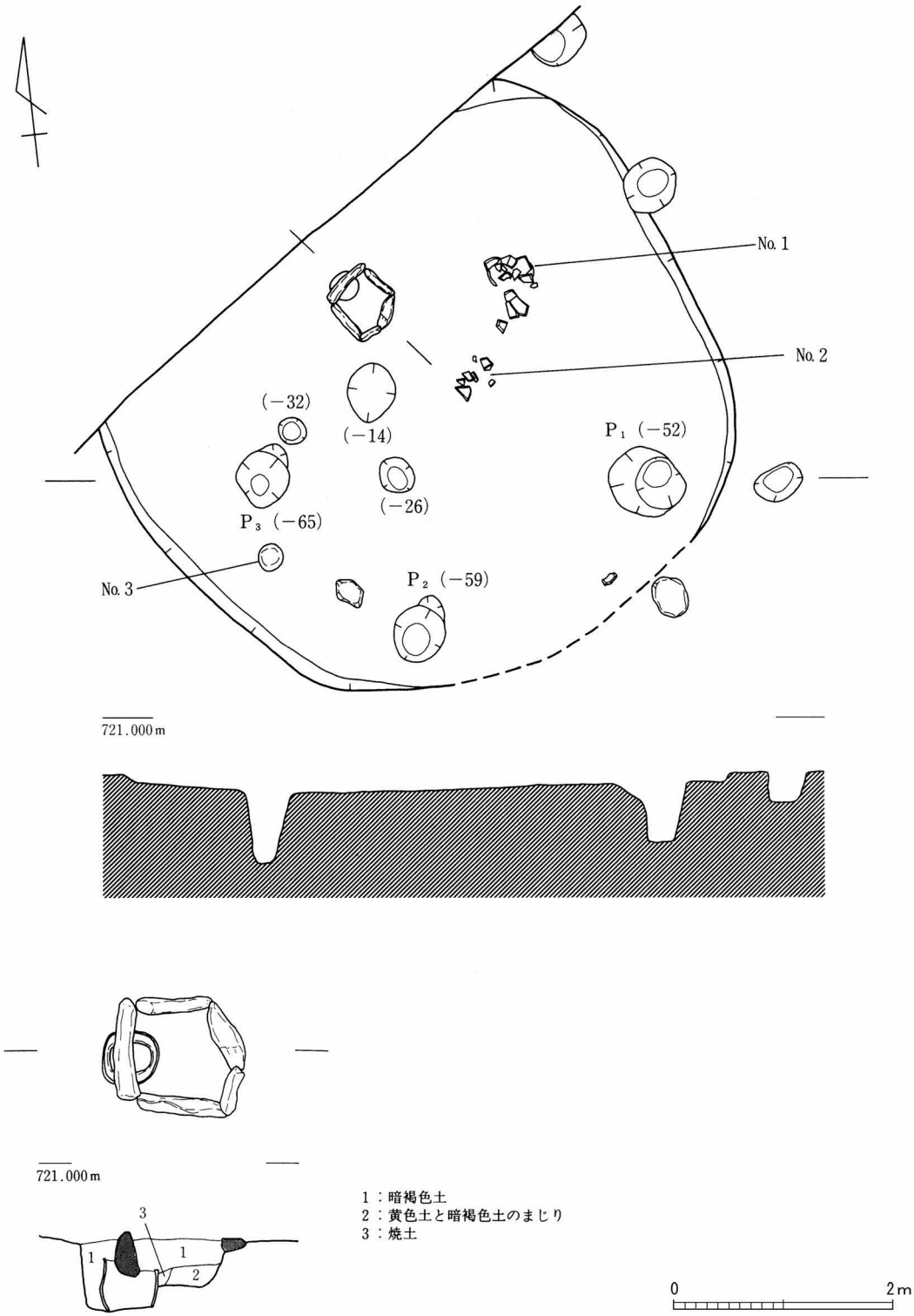
３は下部より指によって押圧を加えて波状隆帯とし、その上部に大きな押引文を施している。

第80図５～18・第82図12・14～16は爪形文を多用している土器である。隆帯を曲線状に配してその両脇を爪形文で施文している。また、この隆帯によって囲まれた内部にはヘラ描沈線による三叉文や波状文（第80図７・８・12）を充填したり、玉抱三叉文を施文している破片（第80図14・15）もみられる。また、８は内面に緻密なミガキが施されており、15の内面にはタール状に煤が付着していた。その他、爪形文と隆帯の間に沈線を引いて縁取りをしているもの(第82図14～16)もみられる。第82図12・17は縄文地に爪形文を施文している。

第80図19～28は体部に抽象文を施文していると考えられる土器である。口縁部には縦位の沈線を施文し、その後で縦位のヘラ描文を引いたり（19･20)、縄文を地文としてその上に横位の波状沈線や、円形に磨り消して無文部を作っている（25･26)。体部はキザミを伴う曲線状の隆帯の両脇に爪形文を施文している（24・27・28)。20は爪形文の屈曲部に隆帯を貼り付けて立体感をだし、破片下部にも爪形文を施文している。21・24は粗い胎土であった。27は焼成は良好であり、爪形文の下部には半截竹管状工具の押し引きによる波状文を施文している。

第81図１～５は縄文を地文としてその上にヘラ描き沈線文を施文しているものである。２～４は同一個体である。１は内面に緻密にミガキが施されている。５は胎土がやや粗い。

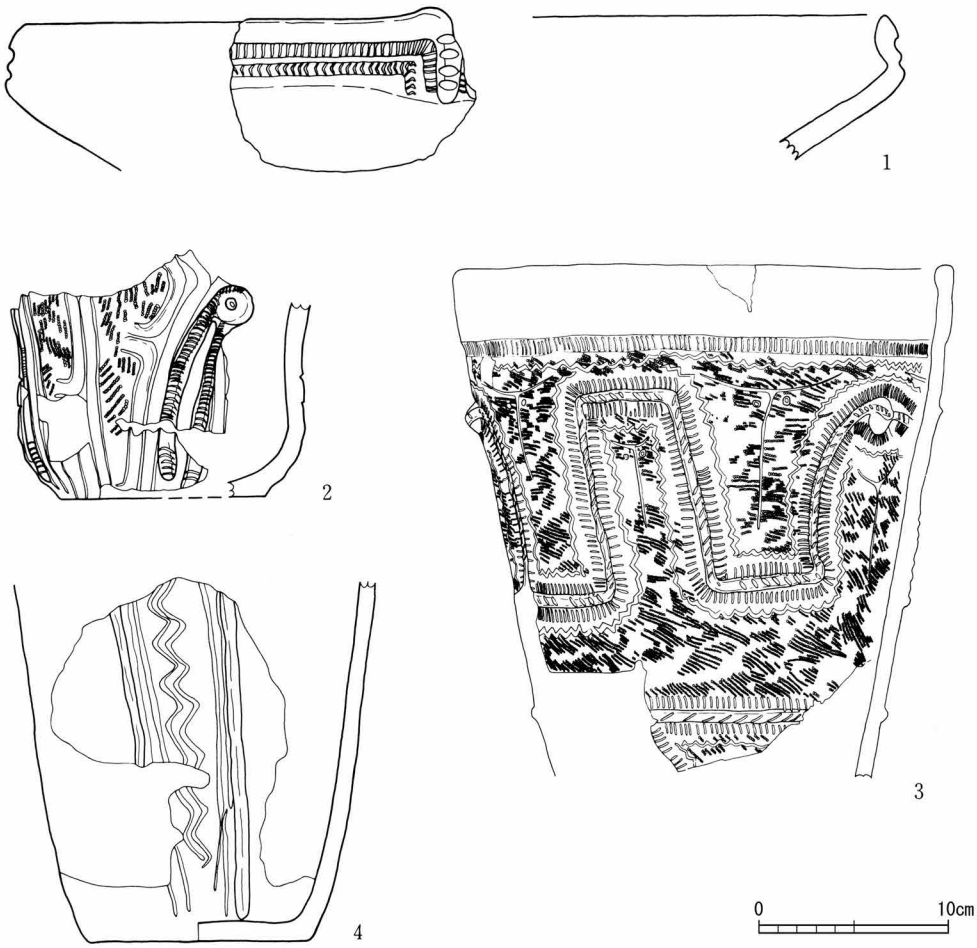
７～14・16はパネル文を施文している土器である。半肉隆線で縦位に細長く区画したパネル文



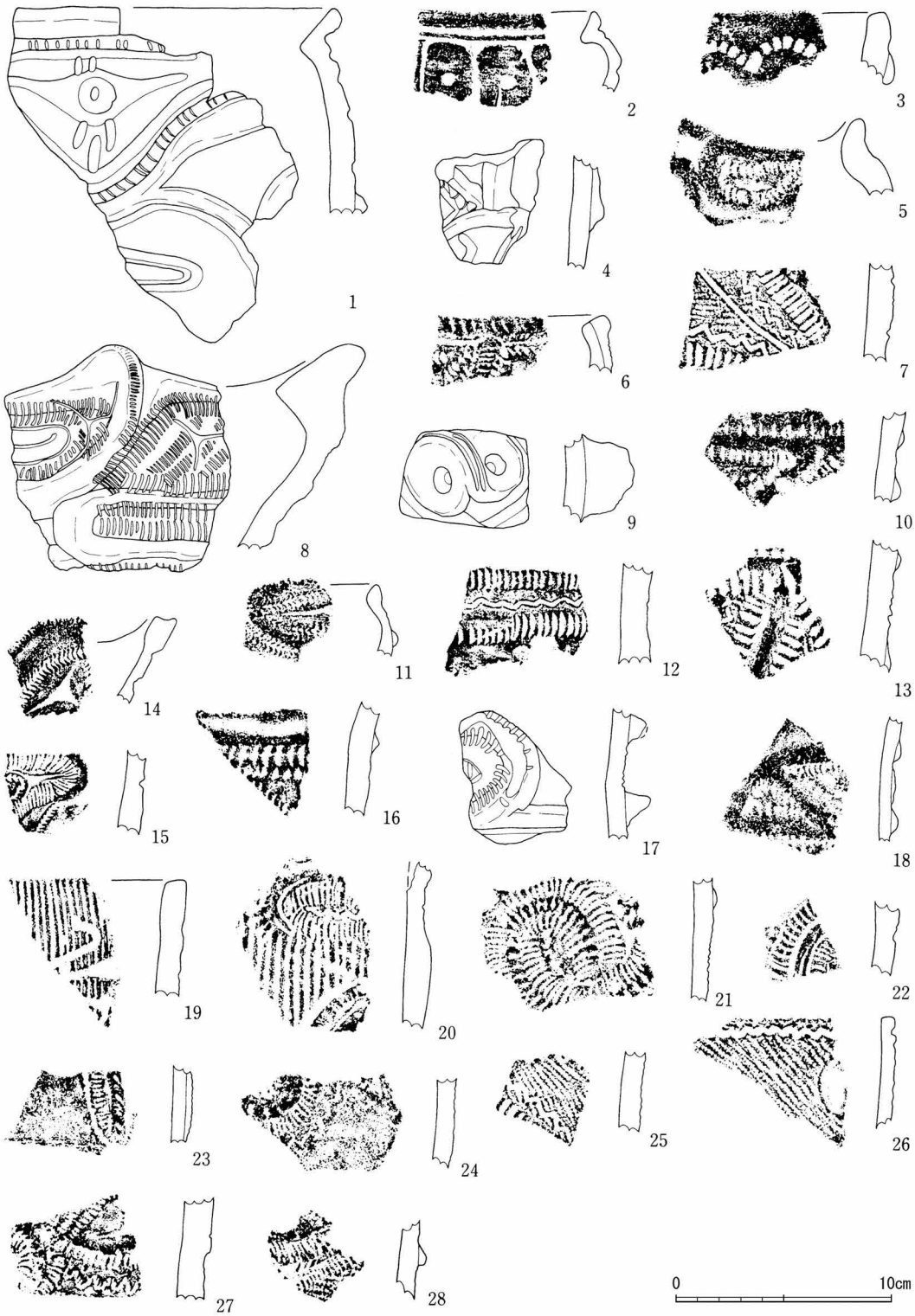
第78図　第13号住居址実測図　S＝1/60（炉：S＝1/30）

を基本として、そのパネル内を沈線（11）や、爪形文（13）、温泉マーク文（13）等で充填している。また、基準の縦位区画には爪形文を施文した隆帯を使用している箇所（11・14）もある。8は器壁が薄く、やや白味を帯びた色調を呈し、焼成は良好であった。10は内湾する口縁部に縦位の区画を施す体部が連なっていく。口唇部は粘土紐を貼り付けて肥厚させており、焼成は良好であった。外面には煤が付着していた。13・14と同一個体と考えられるものの、全体の器形が把握できないため、体部にパネル文を施文しているのかは疑問がのこる。12はキザミをもつ隆帯を波状に貼り付け、その下部の区画された内部には縦位の沈線を充填している。この区画内はやや器壁を肥厚させている。

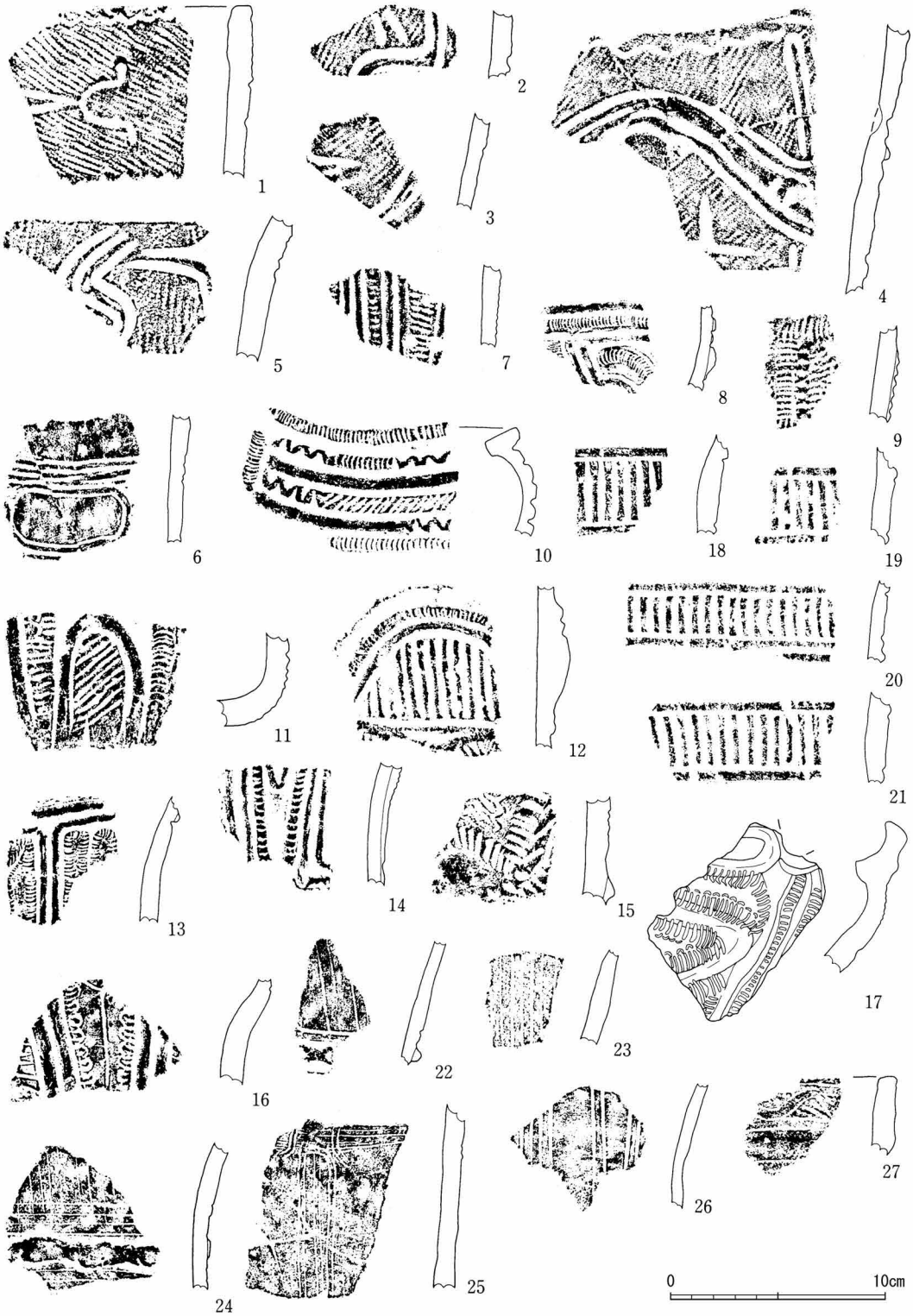
18～21は横位の半肉隆線を基本としてその間を縦位の沈線で充填している直線的な文様が施された土器である。この文様は中期中葉のモチーフとはやや異なっており、中期初頭の可能性もある。この土器の胎土は粗いものの、焼成は良好であった。



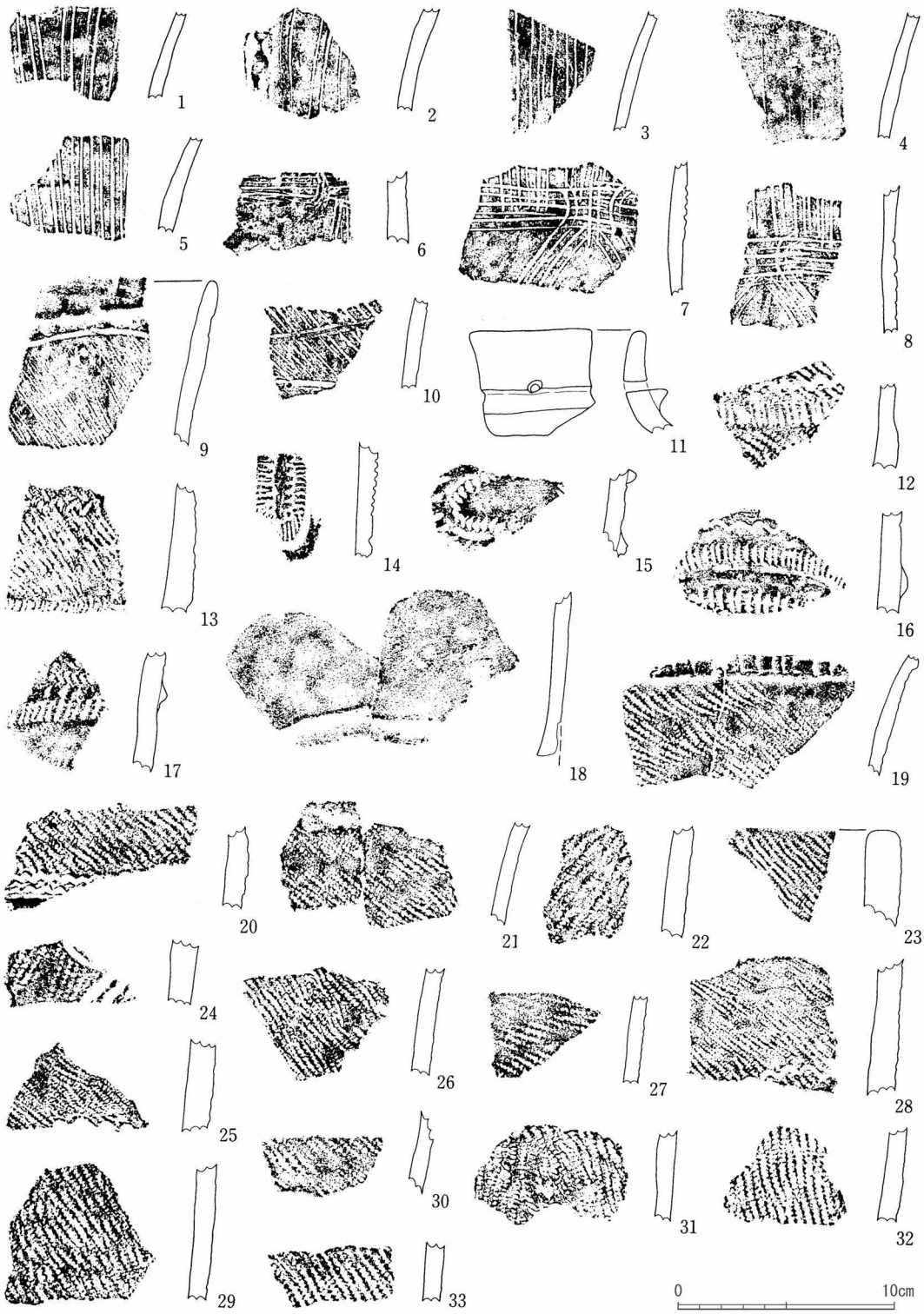
第79図　第13号住居址出土遺物（1）（3は1/6）



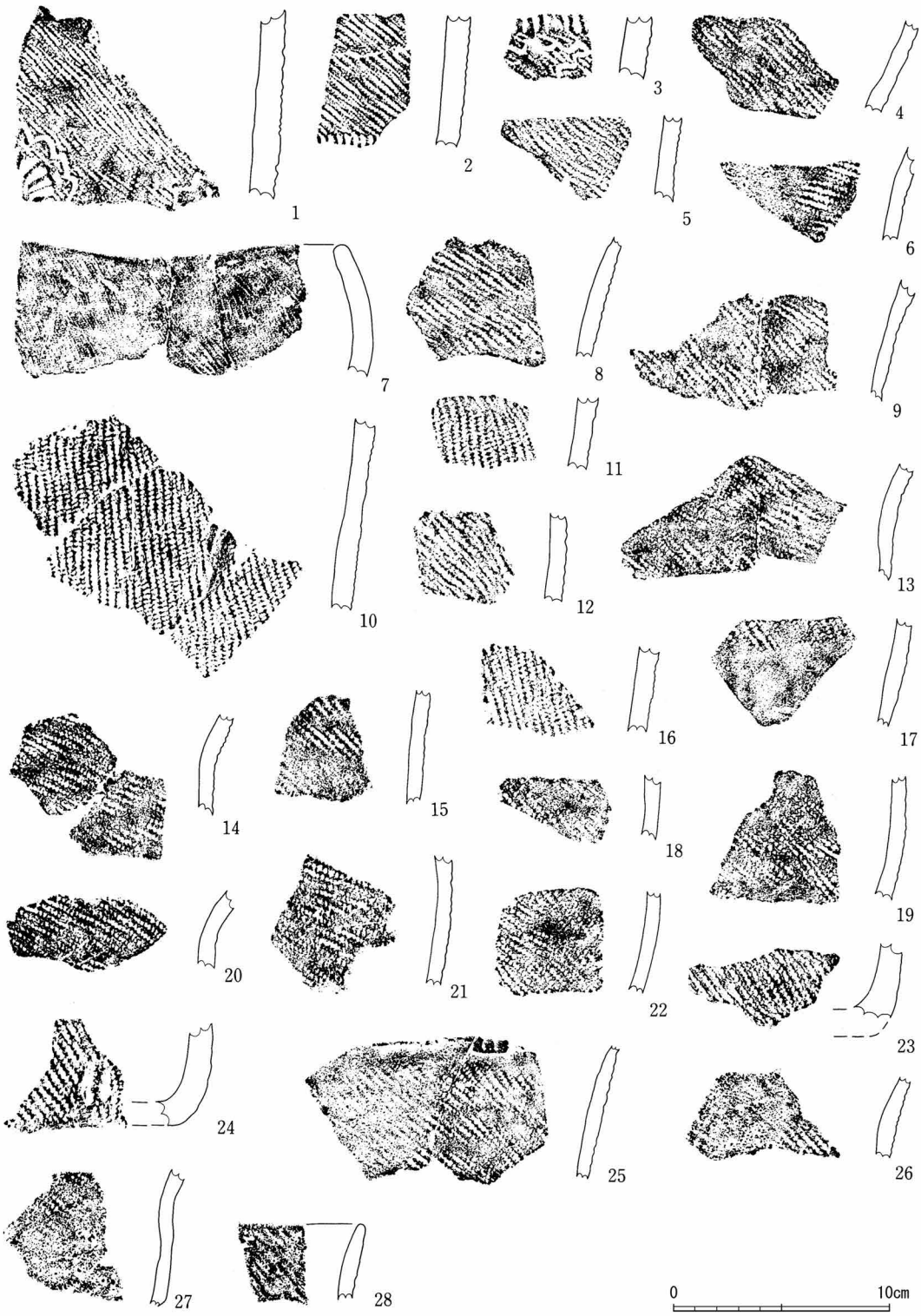
第80図　第13号住居址出土遺物 (2)



第81図　第13号住居址出土遺物 (3)



第82図　第13号住居址出土遺物 (4)



第83図　第13号住居址出土遺物 (5)

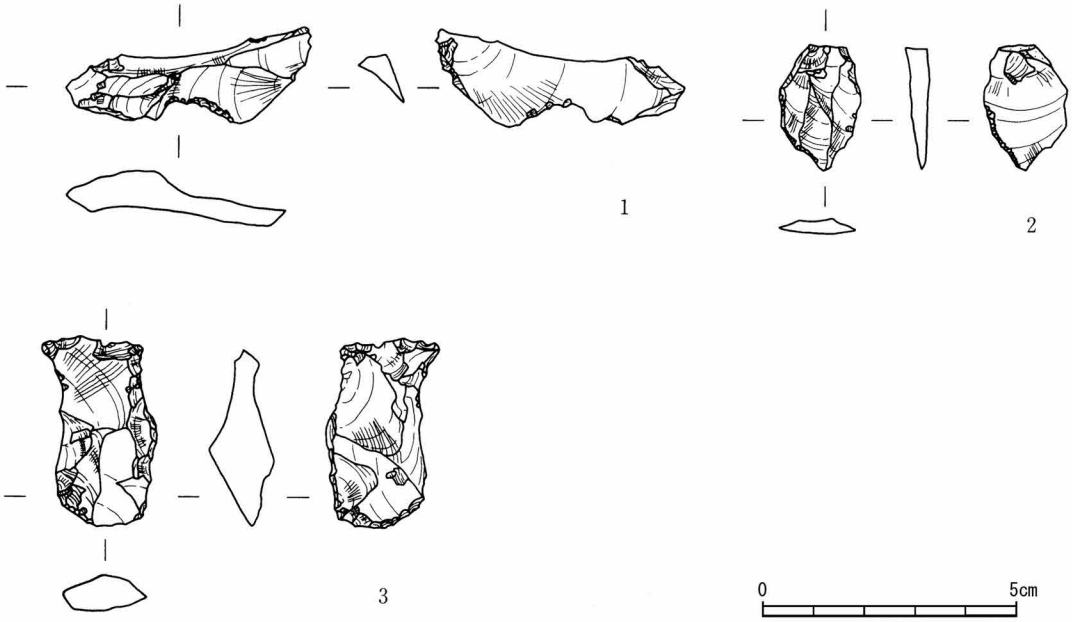
第81図22～27・第82図１～８は平出Ⅲ類Ａの土器である。口縁部は平行沈線で波状文を配しているものである。体部上部には粗い縦位の平行沈線を引いて（第81図23・26・第82図１・３～５）横位の押圧隆帯（第81図22・24）をはさんでＹ字文のある体部下部へとつながっていく。体部中部の押圧隆帯については、平行沈線による（）状の区画のついた横位の平行沈線（第82図６～８）の場合もある。このうち７・８は内面に緻密なミガキが施され、やや白味を帯びた滑らかな胎土の土器である。

第82図９・10は口縁部上部に無文帯を残し、その下部には斜位の沈線を施文している土器である。口縁部は外側に折り返して成形されている。

11は有孔鍔付土器の破片である。赤色塗彩の痕跡を残している。

第82図19～33・第83図は縄文を施文している土器である。第82図24はヘラ状工具による沈線を施文しており、工具の太さ等から第81図１～５と同系統の土器と考えられる。また、第82図20・25・28・第83図１～３は抽象文を体部に描いている可能性がある土器である。これらは縄文を地文として隆帯を貼り付け、その周囲に爪形文や波状沈線文を施文しており、この下部を抽象文で装飾している可能性が高い。第83図７は撚り糸状の細かい縄文が施文されている。

第84図は黒曜石製の石器である。いずれも剥片を利用して作られている。１は剥片の鋭利な部分を使用しての剥器である。くびれ部を刃として利用している。２は剥片の鋭利な部分を加工して錐として利用している。３は周囲を調整加工して形を整え、石器として利用しているものである。



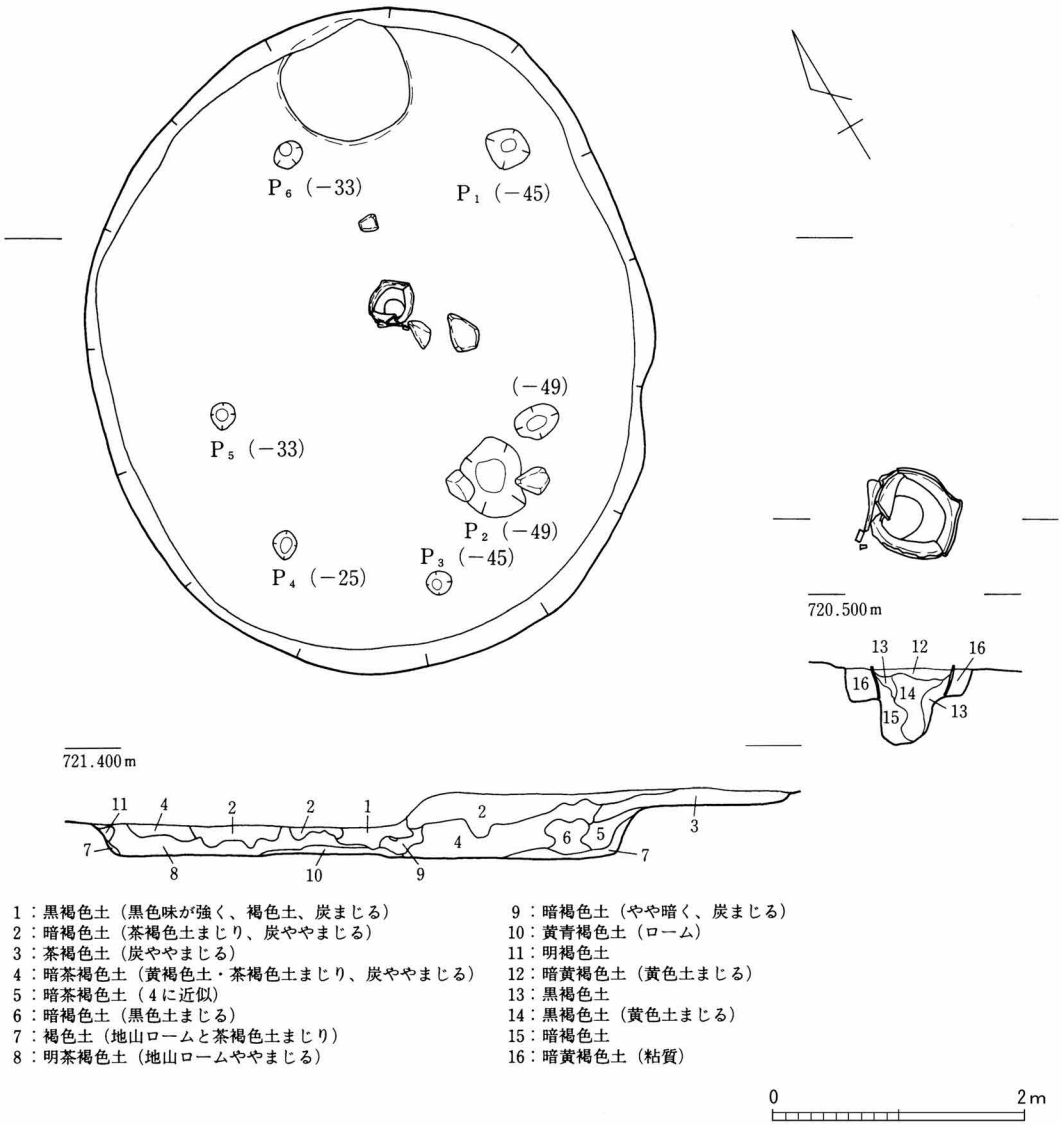
第84図　第13号住居址出土遺物（6）

第14号住居址

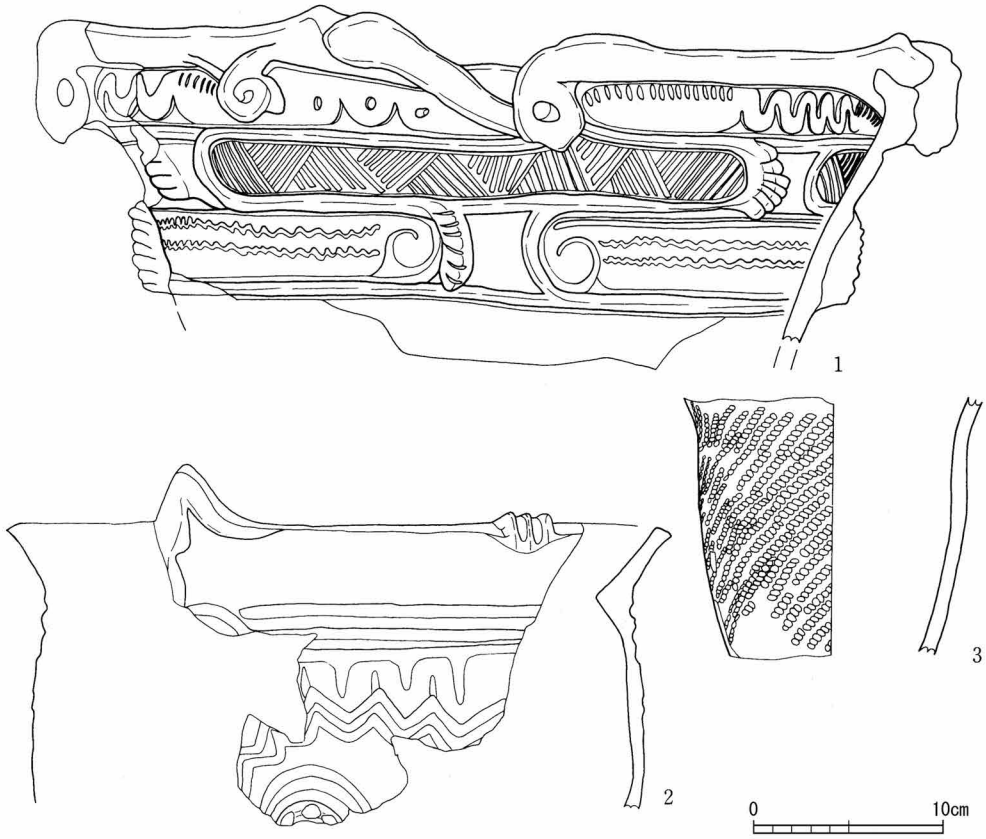
ＧＨ－81より出土している。長径5.3ｍ×短径4.5ｍの楕円形のプランで、現存する壁高は20㎝～50㎝である。住居址の中央部には埋甕炉が検出されている。柱穴はP_1～P_6が考えられるが、直径20㎝前後のものが多く、ほかの住居址と比べるとやや規模が小さい。北西の壁際に直径１ｍ程の土坑が出土しているが、この住居址に伴うかは疑問である。

埋甕炉は直径45㎝程で、体部は失われている。炉内の覆土中には焼土は確認されていない。

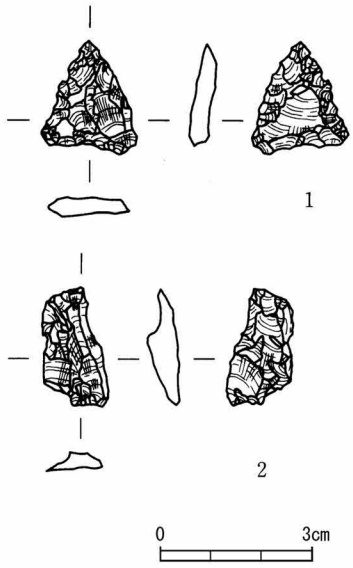
床面からは遺物の出土はなく、覆土中からの出土も少量であった。



第85図　第14号住居址実測図　Ｓ＝1/60（炉：Ｓ＝1/30）



第86図　第14号住居址出土遺物 (1)

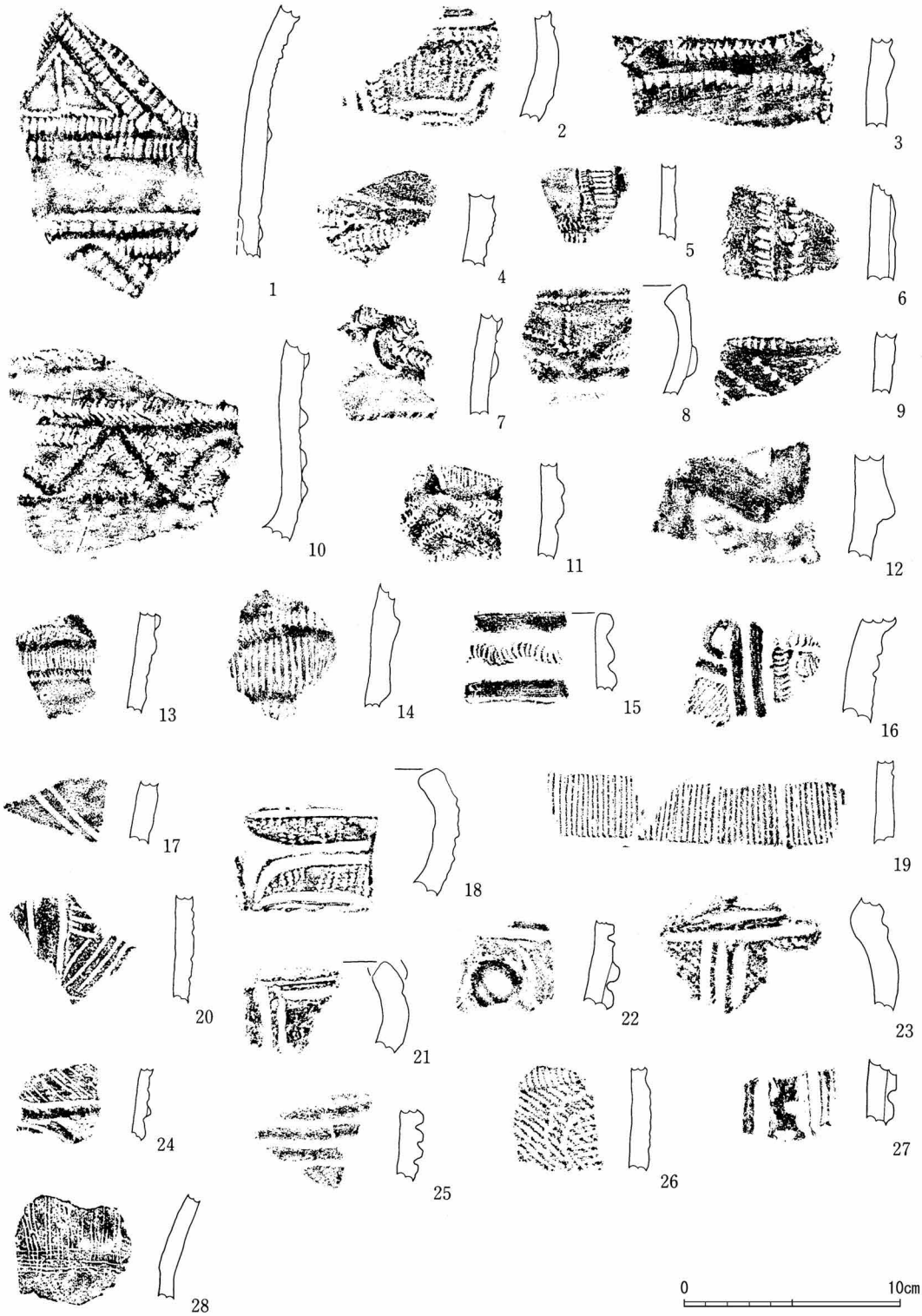


第87図　第14号住居址出土遺物 (2)

遺　　物

第86図１は埋甕炉として使用されていた土器である。いわゆる斜行沈線文の土器で、胎土中には砂粒が混入し焼成はややあまい。２は覆土中より出土している。全体に沈線によって装飾されており、色調は淡褐色を呈し焼成は良好である。

第88図１～11は、角押文を施文している土器である。１はやや白味を帯びる胎土で、区画内には角押文が施文されている。２は沈線を中心とした施文で、縄文を地文として使用している。砂粒が混入しており、胎土は粗い。３・６・９は同一個体である。緻密な胎土で焼成も良好である。７には雲母がやや混入し、焼成は良好である。８は１と同様に区画内に角押文を施文している。胎土は白味を帯びて緻密であり、焼成は良好である。10は雲母がやや混じり、胎土は緻密で焼成は良好である。

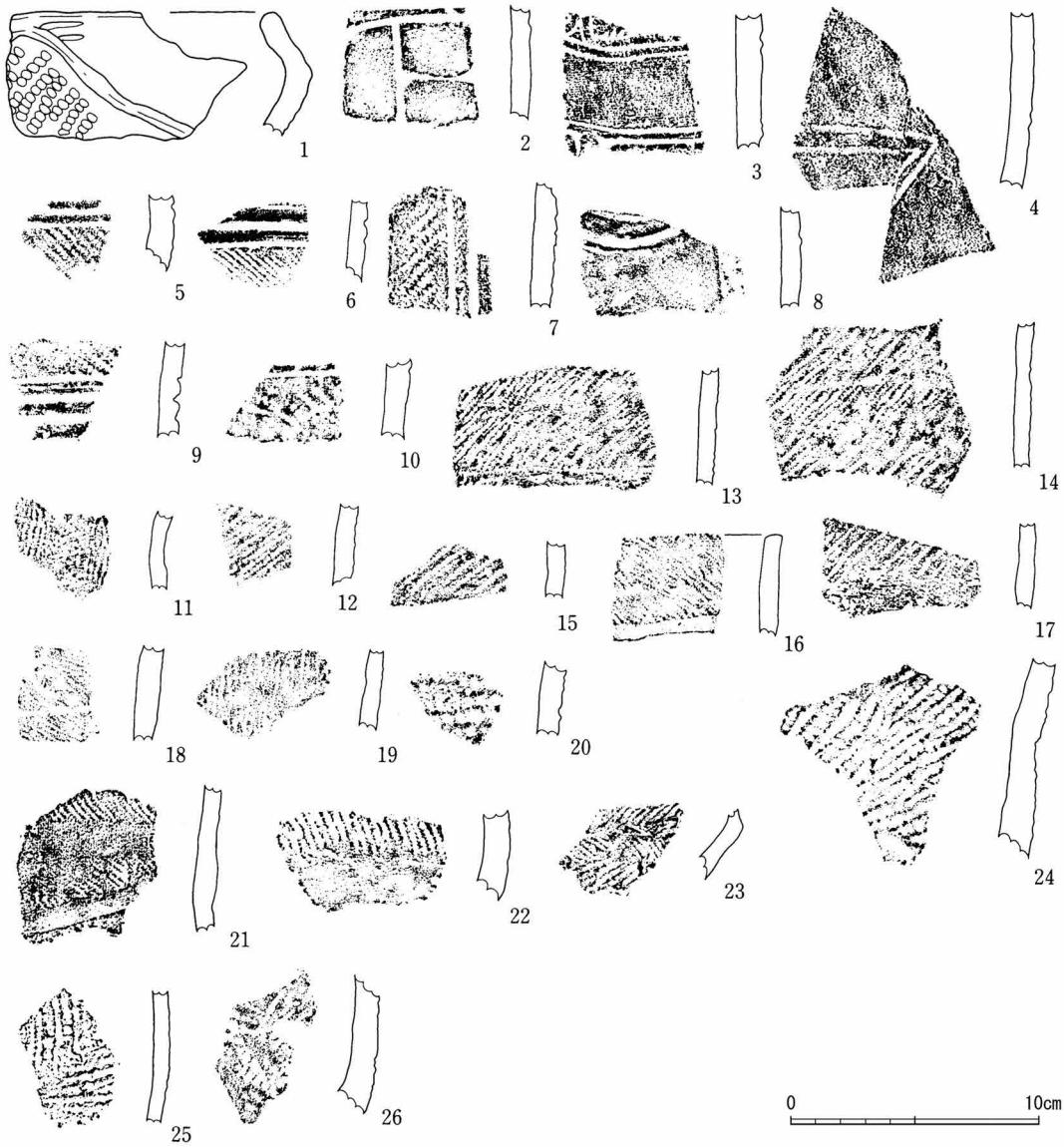


第88図　第14号住居址出土遺物 (3)

12は隆帯を貼り付けた土器で、胎土中に砂粒が混入している。15は胎土が緻密で焼成も良好である。18・21～23は縄文を地文として沈線で装飾している。22は円管文を貼り付けている。28は平出Ⅲ類Ａの土器である。

第89図１は外面と断面に煤が付着している。５～７・９・10は縄文を地文として半肉隆線でパネル状に区画している土器である。半肉隆線は２条～３条施文されている。

13～26は縄文を施文している土器である。

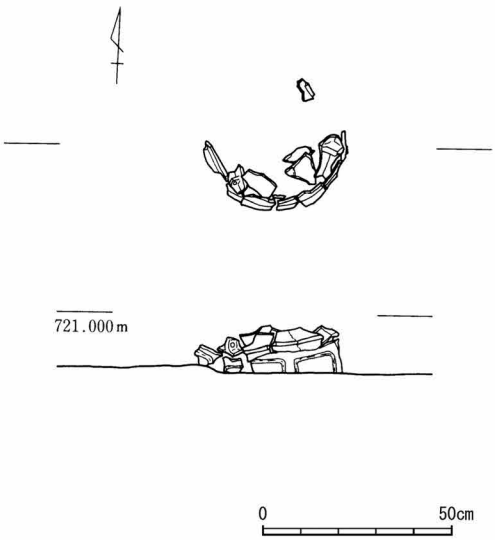


第89図　第14号住居址出土遺物（4）

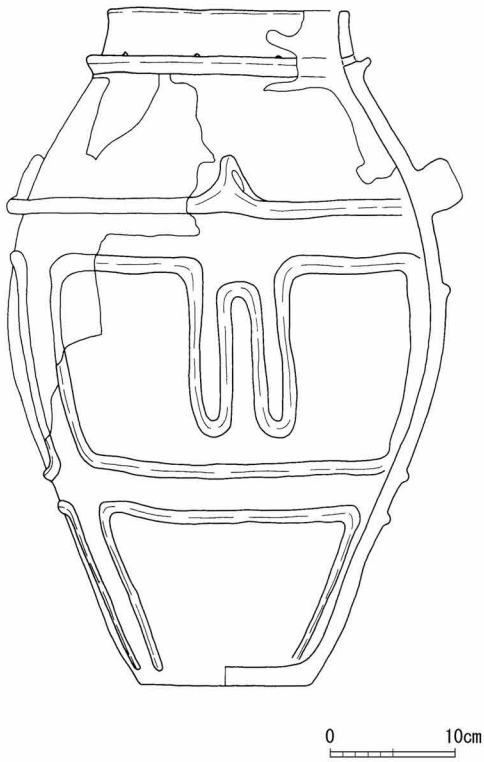
2　単独埋設土器

今回の調査域の東寄り、第14号住居址と第３号住居址の間にあたる地点に、遺構とは別に独立して有孔鍔付土器が埋設されていた。この土器は全体のおよそ1/2が欠損しており、底部はほぼすべて残存していた。土器は遺構検出面の高さで、体部上半部まで埋設されており、鍔を巡らせた部分より上部が土器内部に落ち込んでいることから、埋設時には口縁部のみ地表に出ていた可能性が強い。

この有孔鍔付土器は体部中部に最大径を持つ、いわゆる樽形を呈しており、口縁部は垂直に立ち上がっている。口縁部下には鍔をつけ、その直上に穴を穿孔している。体部には隆帯による簡素な文様が施文され、体部上部には横位の隆帯を１条巡らせ、そこに３個の把手が付けられている。把手は抉られているが穿孔はされておらず、紐等を通すことはできない。胎土は緻密で焼成も良好である。



第90図　単独埋設土器実測図　S＝1/20



第91図　有効鍔付土器実測図

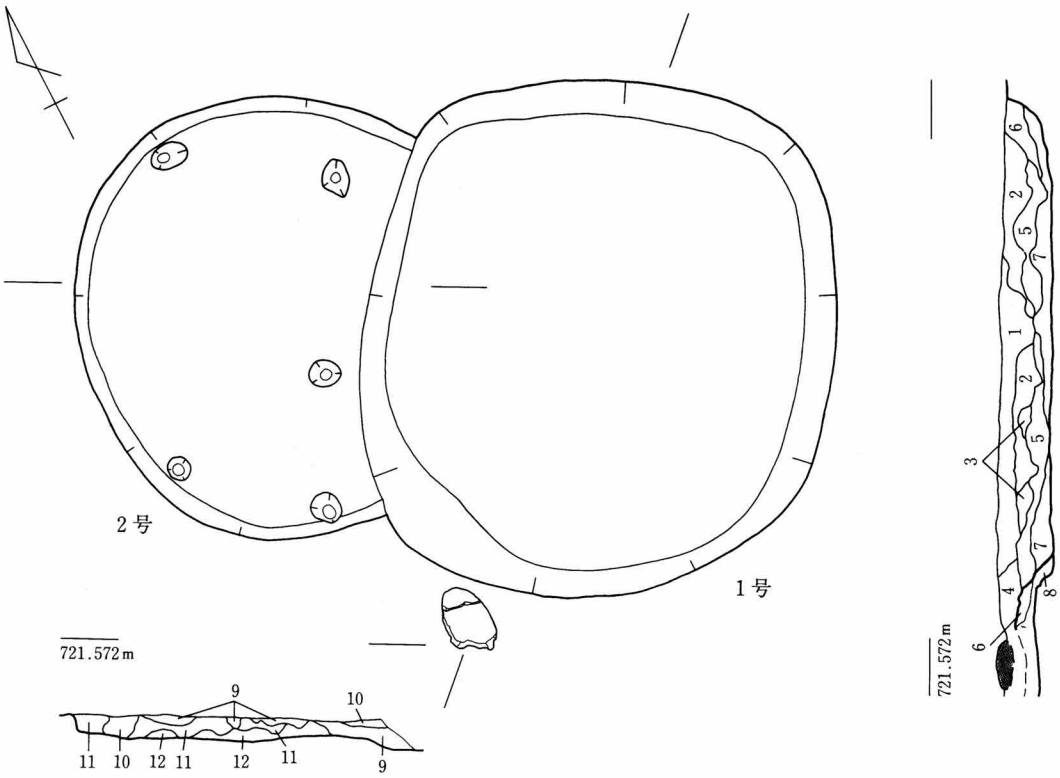
3　縄文時代早期の竪穴と遺物

第１・２号竪穴

GM－91より出土している。この付近を精査中に、押型文土器片が多量に出土したために、綿密に調査した結果、竪穴が重複して出土した。第１号竪穴は遺物の出土が少なく、第２号竪穴に集中して出土している。第１号竪穴は直径3.7ｍ×４ｍのやや楕円形を呈しており、断面皿状を呈している。全体的に黒色系と暗褐色系の土で覆われている。柱穴等は確認できなかった。第２号竪穴は直径3.5ｍの円形を呈している。現存する深さはおよそ20cmであった。覆土は黄色系の土で占められていた。

遺　物

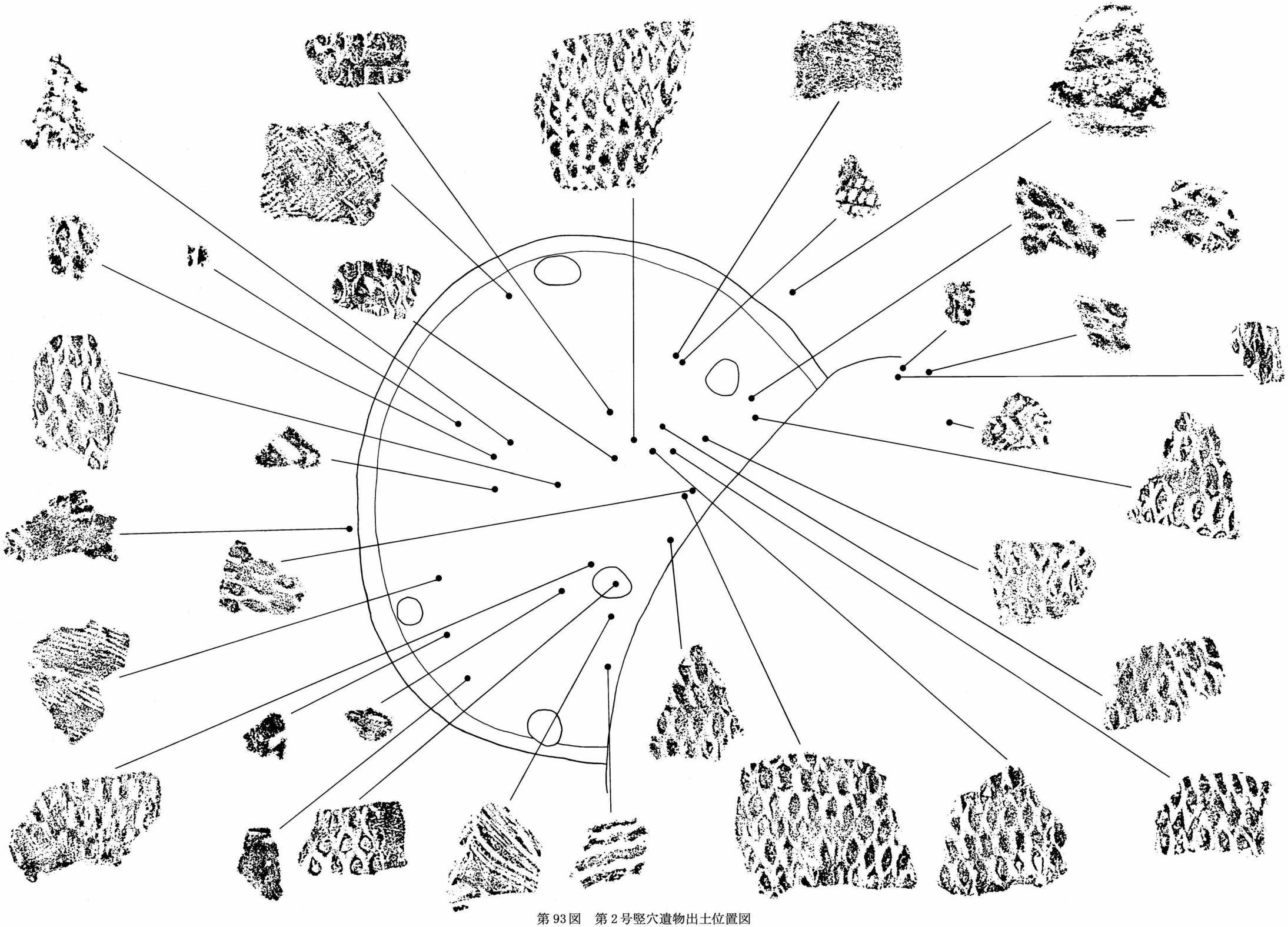
この竪穴からは押型文が出土しており、そのほとんどが楕円文であったが、一部複合鋸歯文や格子目文がみられる。また、第２号竪穴では縄文や、半截竹管状工具による沈線で施文している



1：黒色土（赤褐色味を帯びる。木炭わずかにまじる）
2：黒色土（木炭わずかにまじる）
3：黒褐色土
4：暗褐色土
5：黒褐色土と黄褐色土のまじり。小礫まじる
6：暗黄褐色土
7：黄褐色土（８と地山ロームとのまじり。中・小礫多量包含）
8：黄褐色土（地山砂質ローム上の小礫含む。粘性ロームか）
9：暗黄褐色土（黒褐色土斑状にまじる。小礫含む）
10：褐色土（やや赤褐色を帯びる。小礫含む）
11：黄褐色土（やや赤褐色を帯びる。小礫含む）
12：明黄褐色土（小礫含む）

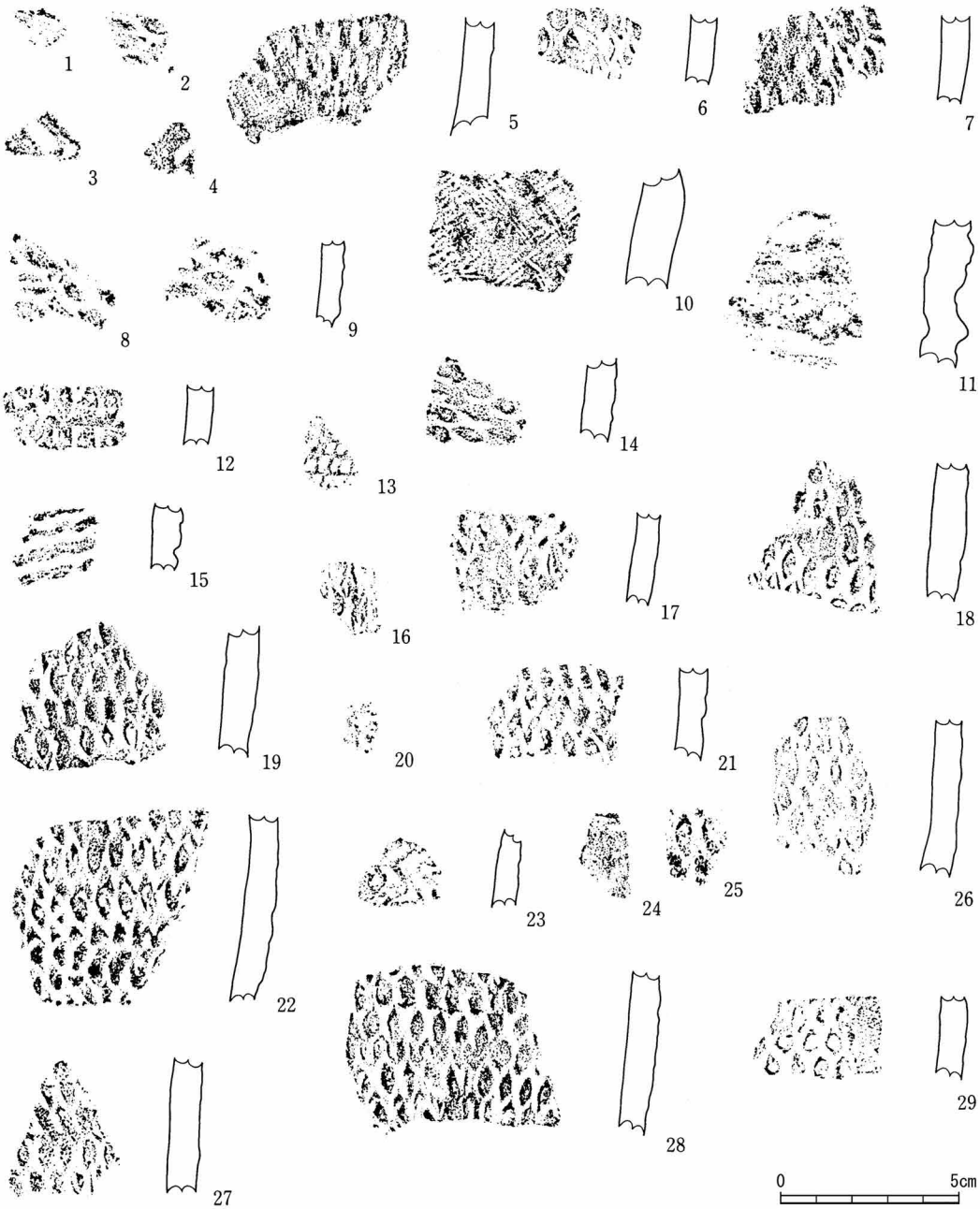
0　2m

第92図　第１・２号竪穴実測図　S＝1/60

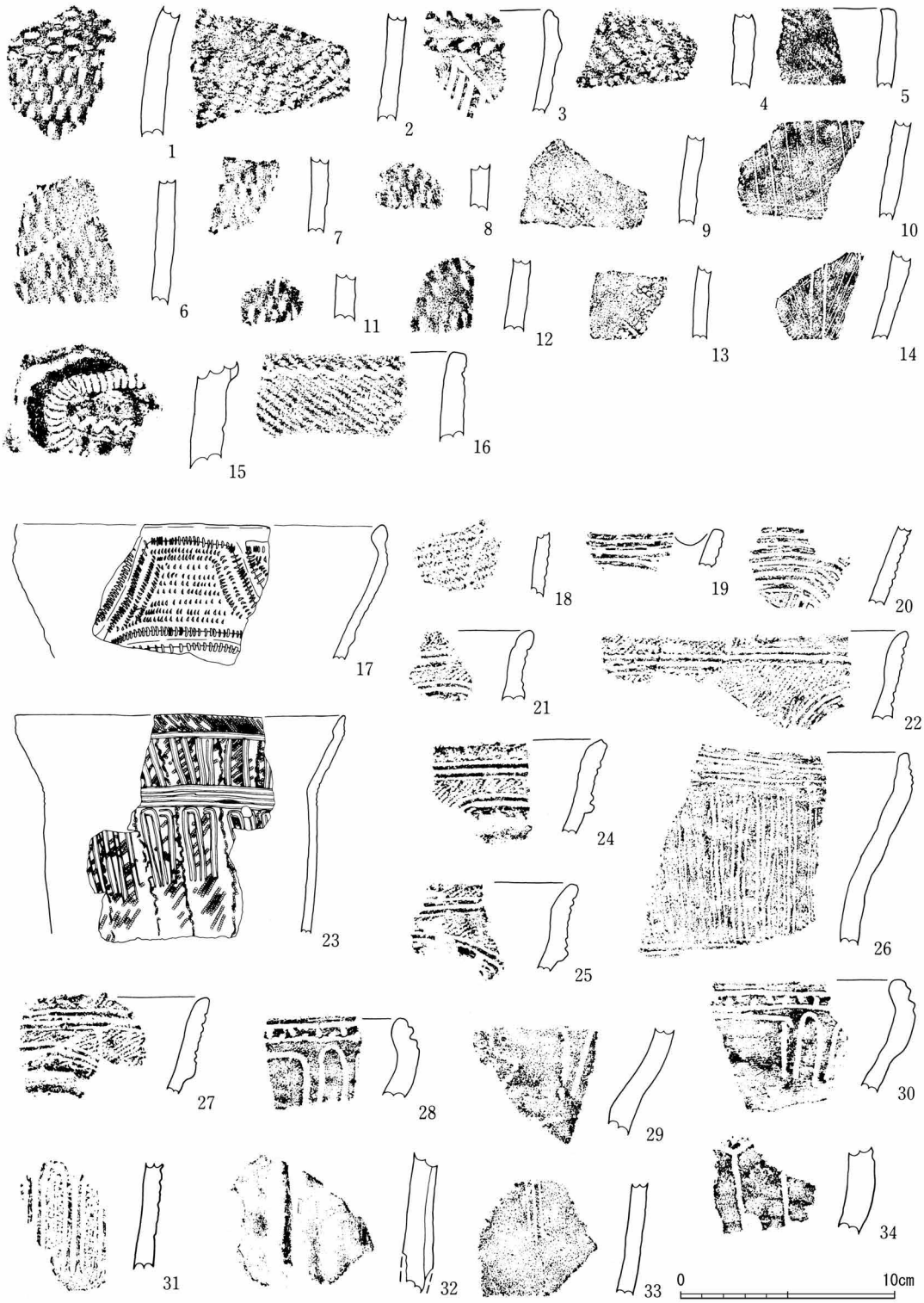


第93図　第2号竪穴遺物出土位置図

土器も出土しており、早期の遺物と共に、前期の遺物かと考えられる土器も出土していることから時期の確定は難しい。



第94図　第1・2号竪穴出土遺物　S＝1/60



第95図　第2号竪穴・集石出土遺物（1～16：2号竪穴・17～34：集石）

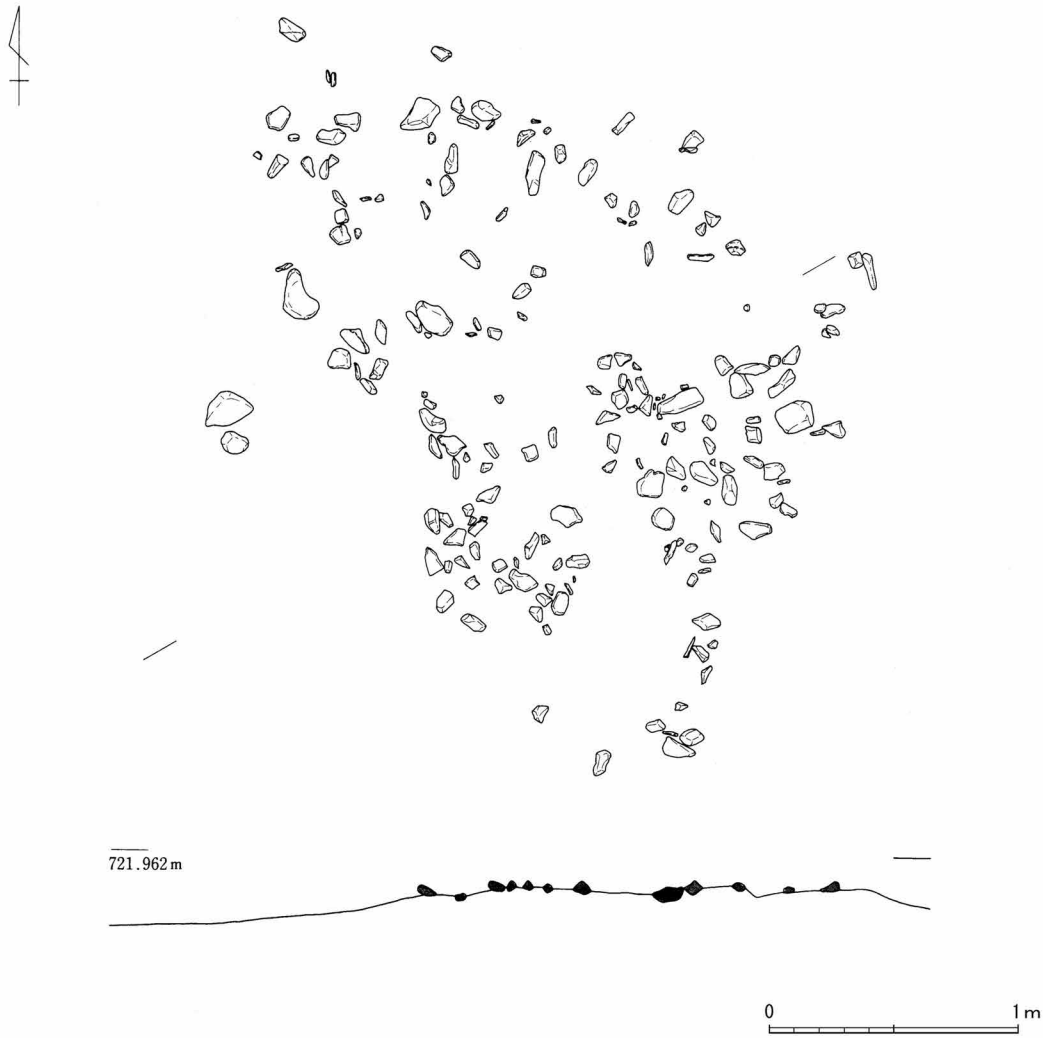
4　集石と遺物

第１号集石（第96図）

集石といっても特に密集している状態ではなくおよそ３ｍ×２ｍの範囲に直径10cm程の石がやや集中しているといった様子で検出されている。集石の下部に遺構は確認されておらず、平面的に石が集中している。

遺　　物（第95図17・18）

この集石の調査中に出土している遺物は第93図17・18であった。17は隆帯によって大きく区画を行った後に爪形文で装飾している土器である。外面の口縁部付近に煤が付着している。胎土は



第96図　第１号集石実測図　S＝1/30

第97図　第2号集石実測図　S＝1/30

緻密で焼成も良好であった。外面は褐色を呈し、内面は淡褐色を呈していた。18は縄文を施文した土器である。比較的薄手の土器で、焼成は良好であった。なお、内面には煤が付着している。

第2号集石（第97図）

直径10cm程の大きさの石が1.8m×1.6mの範囲に分布している。この集石の隣には土坑が出土しているが集石との関係は不明である。

遺　　物（第95図19～34）

第93図19～34が集石の調査中に出土した遺物である。19・20は同一個体である。4単位の波状口縁を持つ土器で、半截竹管状工具による平行沈線によって器面に曲線文や縦位の直線文を施文している。胎土は緻密で、焼成も良好であった。外面は暗褐色を呈し、内面は淡褐色であった。縄文時代前期末葉の土器と思われる。

21・22・24・25・27は同一個体と考えられる。やや先端を尖り気味につくり出し、器面には縄文を地文として施文し、口縁部直下には半截竹管状工具による平行沈線文が横位に施文されている。この平行沈線文の下部には隆帯による曲線文が貼り付けられ、その上部脇には平行沈線がひかれている。この土器は胎土中に大きめの砂粒が混入されておりやや粗い胎土であるが焼成は良好である。また、内面には横位のミガキが観察される。21・24は暗褐色を呈しているのに対して22・25・27は褐色である。

28～30・32～34は直線的に立ち上がる体部にやや膨らみをもちながら広がっている器形の土器である。口縁部上端部付近には交互刺突による波状文が施文され、その直下から横位や縦位の半截竹管状工具による押引文が施文されている。体部には縦位の隆帯を貼りつけている。28と30・29・32はそれぞれ同一個体である。

23は縄文を地文としてその上に施文しており、体部下半には結節縄文もみられる。26は縦位の平行沈線が密集して施文している。

31は半截竹管状工具を使用した平行沈線で「∩」状に施文し、内部に格子文を充塡している。胎土は砂粒が混入されており、淡褐色を呈している。

5　集石炉と遺物

第１号集石炉（第98図）

この集石炉はＧＬ－79より出土しており、およそ60cm四方に集中している。長径1.2ｍ短径１ｍの楕円形に掘られた土坑の西隅にまとまって出土している。土坑内には直径30cm前後の石が１個出土している。

第２号集石炉（第99図）

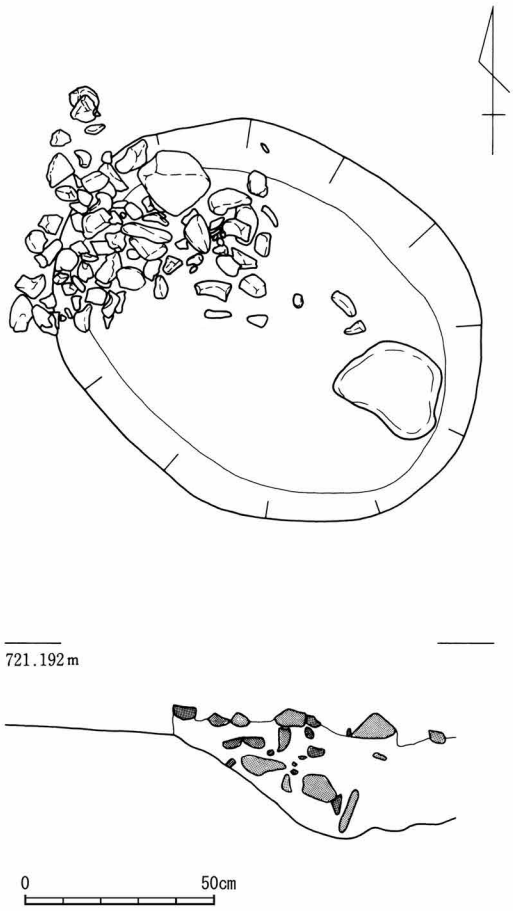
ＧＪ－79より出土している。検出面では比較的少量の出土であった。直下の土坑は直径55cmの不整円形で、15cm程掘り込んだ底部には偏平な石が敷きつめられていた。この土坑の覆土からは少量の石と炭が出土している。石は焼石であった。

第３号集石炉（第101図）

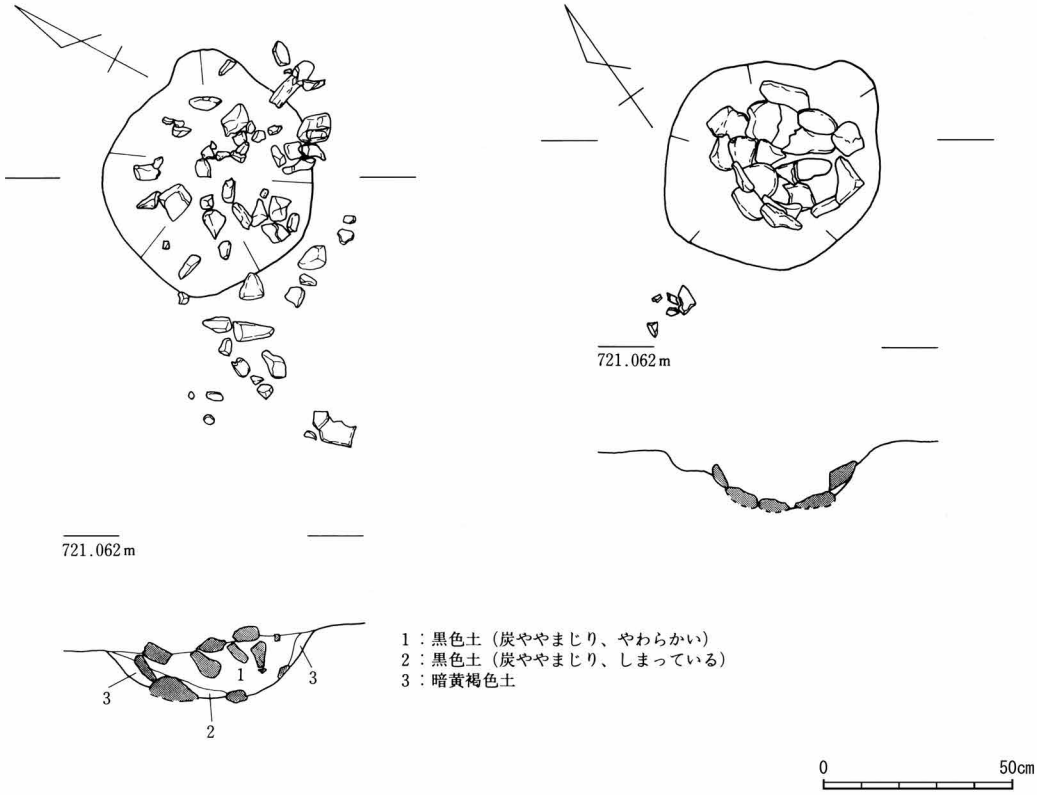
ＧＬ－76より出土している。第２号集石炉よりも石の量は多く、土坑内にも多くの焼石が入っており、その覆土中からは炭が出土している。石は直径１ｍに集中していた。直下の土坑は直径70cmの不整円形で、深さ20cmを測り、底部には石が敷かれている状態が確認されている。

第４号集石炉（第100図）

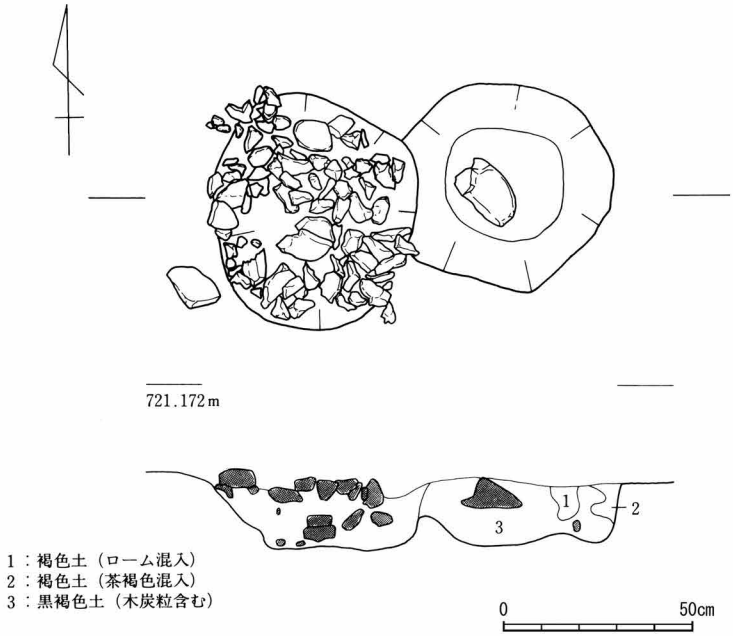
ＧＢ－74より出土している。直径60cmの円形に集中して出土している。集石炉の下の土坑は別に掘られたと考えられる直径60cmの不整円形の土坑を切って掘り込んでいる。この集石炉は遺構検出面の表面に石が集中して出土している。集石炉下の土坑は直径60cmの不整円形で、15cm掘り込まれた土坑底部には、石が敷きつめられている様子は確認されなかった。



第98図　第１号集石炉実測図　Ｓ＝1/20



第99図　第2号集石炉実測図　S＝1/20



第100図　第4号集石炉実測図　S＝1/20

第５号集石炉（第102図）

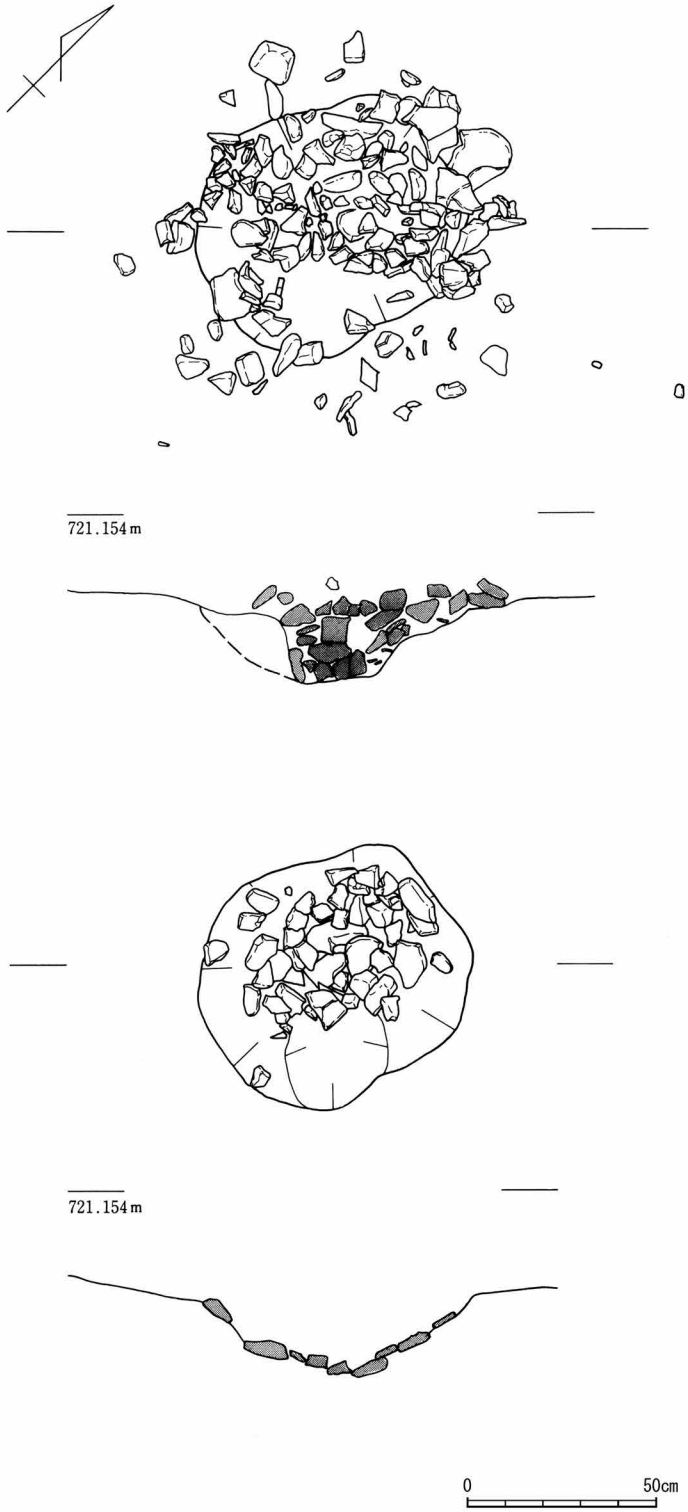
ＧＩ－86から出土している。遺構検出面には密集した状態では出土せず、比較的まばらであった。この集石炉の下に掘られている土坑中には焼石が入れられていた。この石と共に覆土中からは炭が出土している。土坑は直径50cmの円形で、底部には石が敷かれていた。

第６号集石炉（第103図）

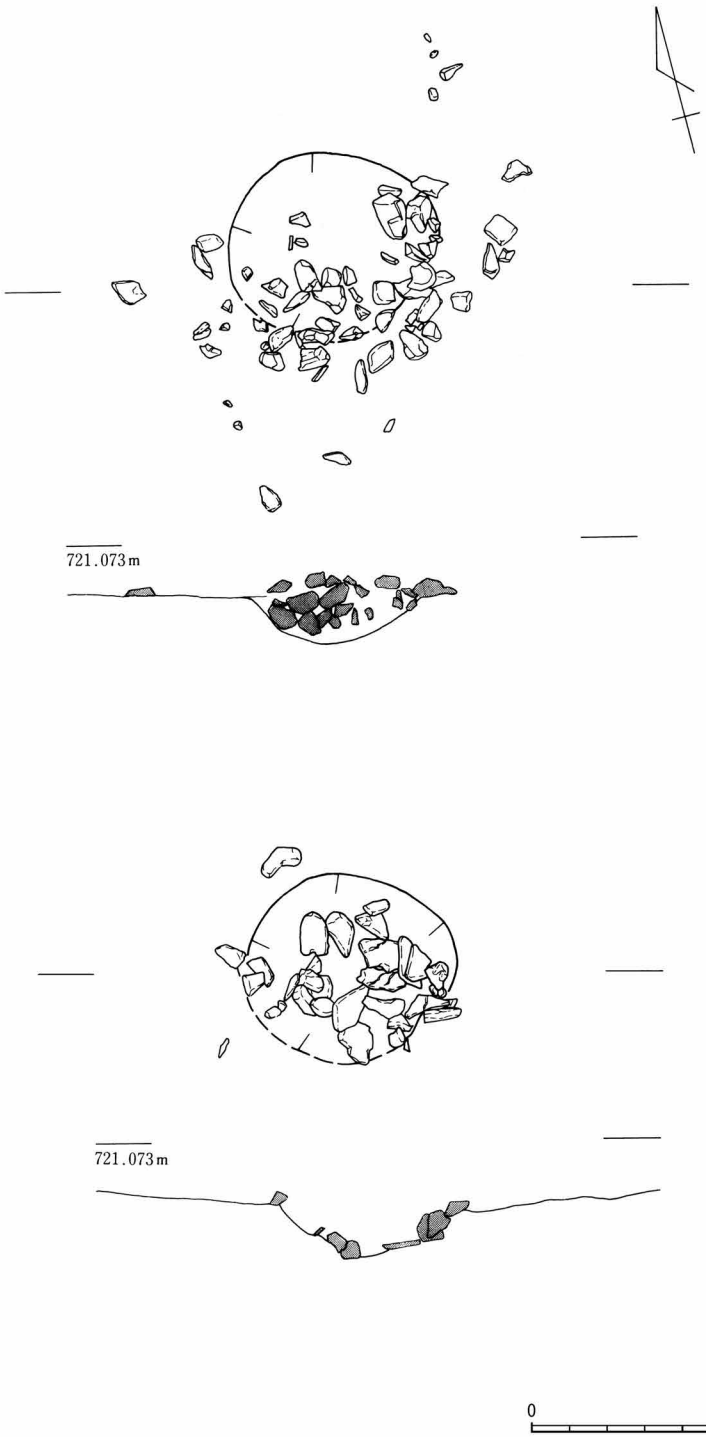
この集石炉は今回調査されている集石炉のなかではやや異質の遺構で、直径20cm程の大きさを測る大きめの石を中心に十数点の石で構成されている。上部が削平されてしまっている可能性も考えられる。石の底部に、浅い掘り込み状の土坑が検出されている。

第７号集石炉（第104図）

調査区の北東部より出土している。直径70cmの円形に集められていた。検出された石は比較的集中していたがその下部には土坑は出土せず、横に直径１ｍ程の不整円形で、深さ35cm程の土坑が出土している。この土坑は褐色系の土が覆土の中心を占めているが、集石炉との関係を明らかにする資料は出土していない。



第101図　第３号集石炉実測図　Ｓ＝1/20



第102図　第5号集石炉実測図　S＝1/20

第8号集石炉（第105図）

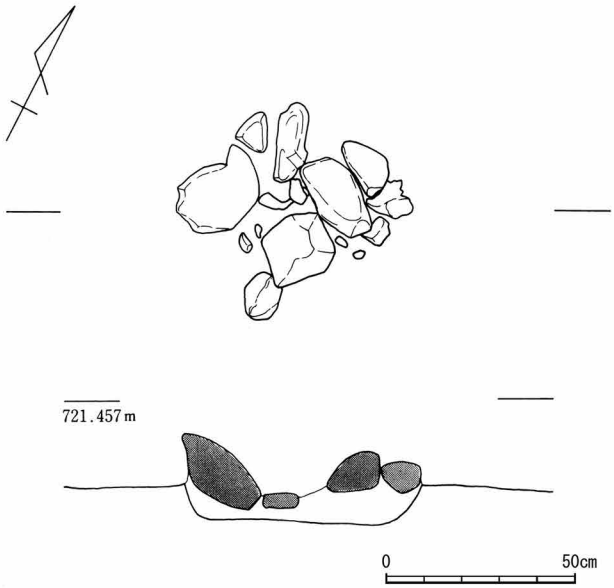
ＧＪ－76から出土しており、直径30cmの円が中心となる比較的規模の小さい遺構である。この集石炉の横にやや石がまとまって出土している。

第9号集石炉（第107図）

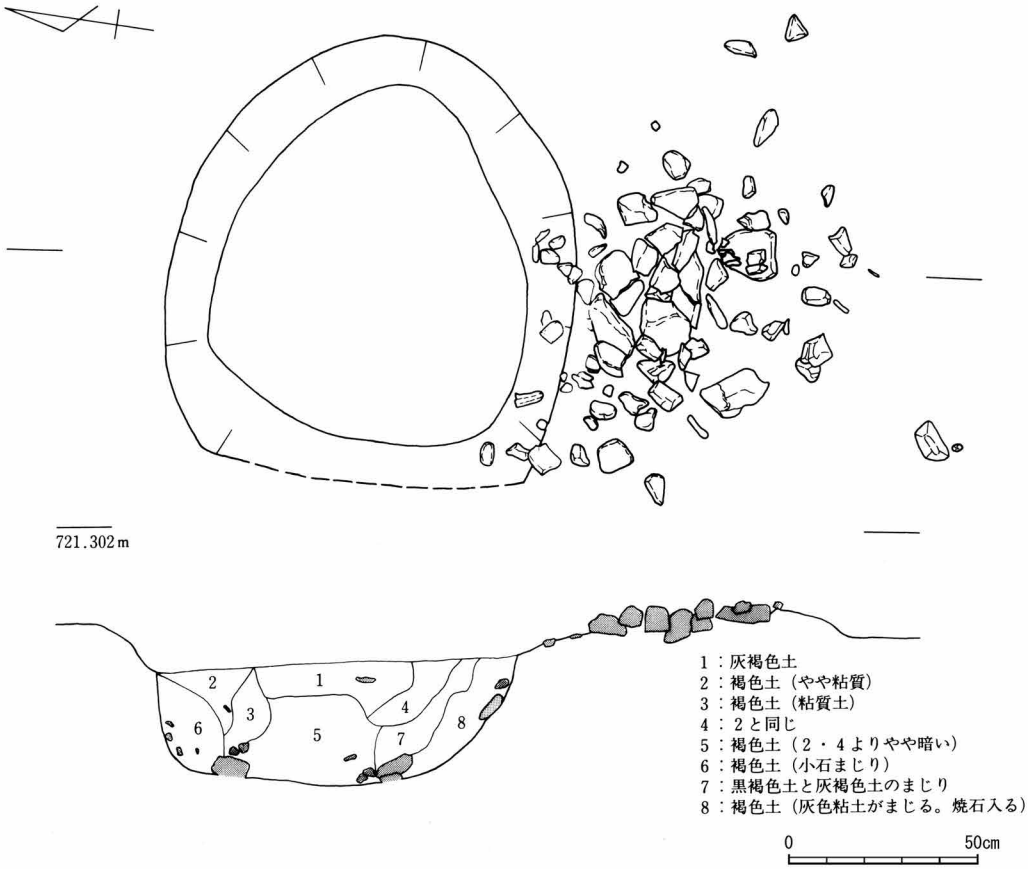
ＧＬ－67に出土している。石の量はあまり多くなく、比較的まばらであった。この集石炉の西に接して長径1.2m短径0.9mの楕円形の土坑が出土している。この土坑の深さはおよそ40cmであった。

第10号集石炉（第108図）

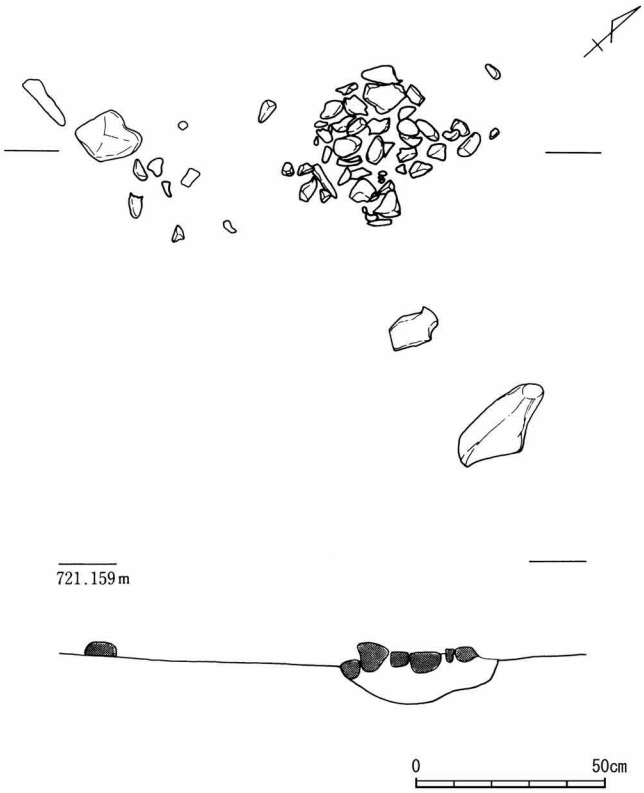
この集石炉はロームマウンドに接して出土し、当初、遺構の把握が充分でなかったため、集石炉のプランを検出することができなかった。石は遺構検出面に薄く出土しており、およそ1m×0.5mの楕円形の中に集中して出土していた。下層から石は出土していない。



第103図　第6号集石炉実測図　S＝1/20



第104図　第7号集石炉実測図　S＝1/20



第105図　第8号集石炉実測図　S＝1/20

第11・12号集石炉（第106図）

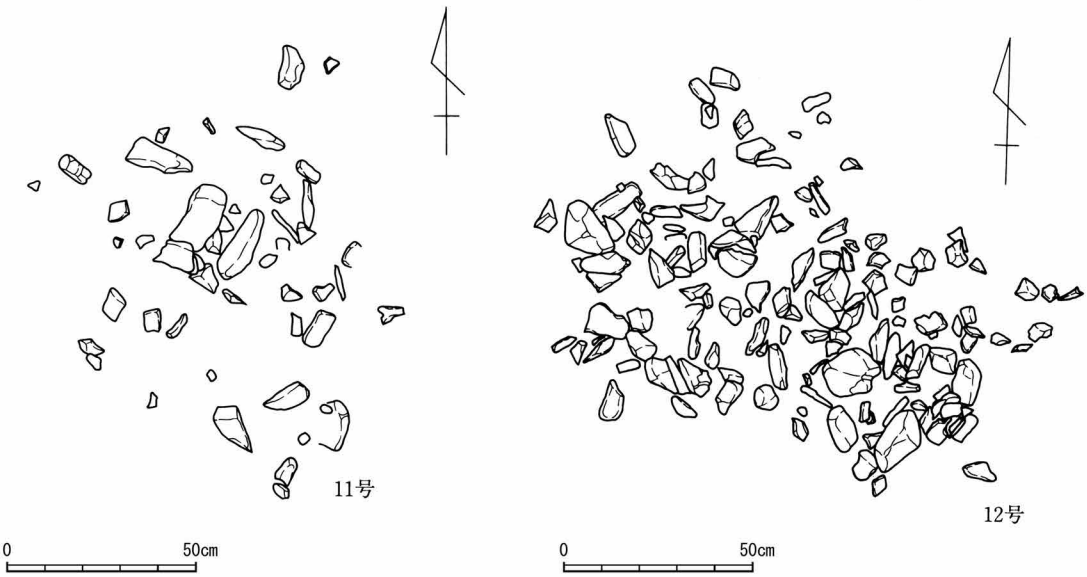
これらの集石炉は調査時のミスによって平面図しか記録することができなかった。

第11号集石炉は、1m四方に石がまとまって出土している。石の数はそれほど多くははなかった。

第12号集石炉は1.2m×0.7mの範囲で出土しており、比較的密集した形で出土している。

第13号集石炉（第109図）

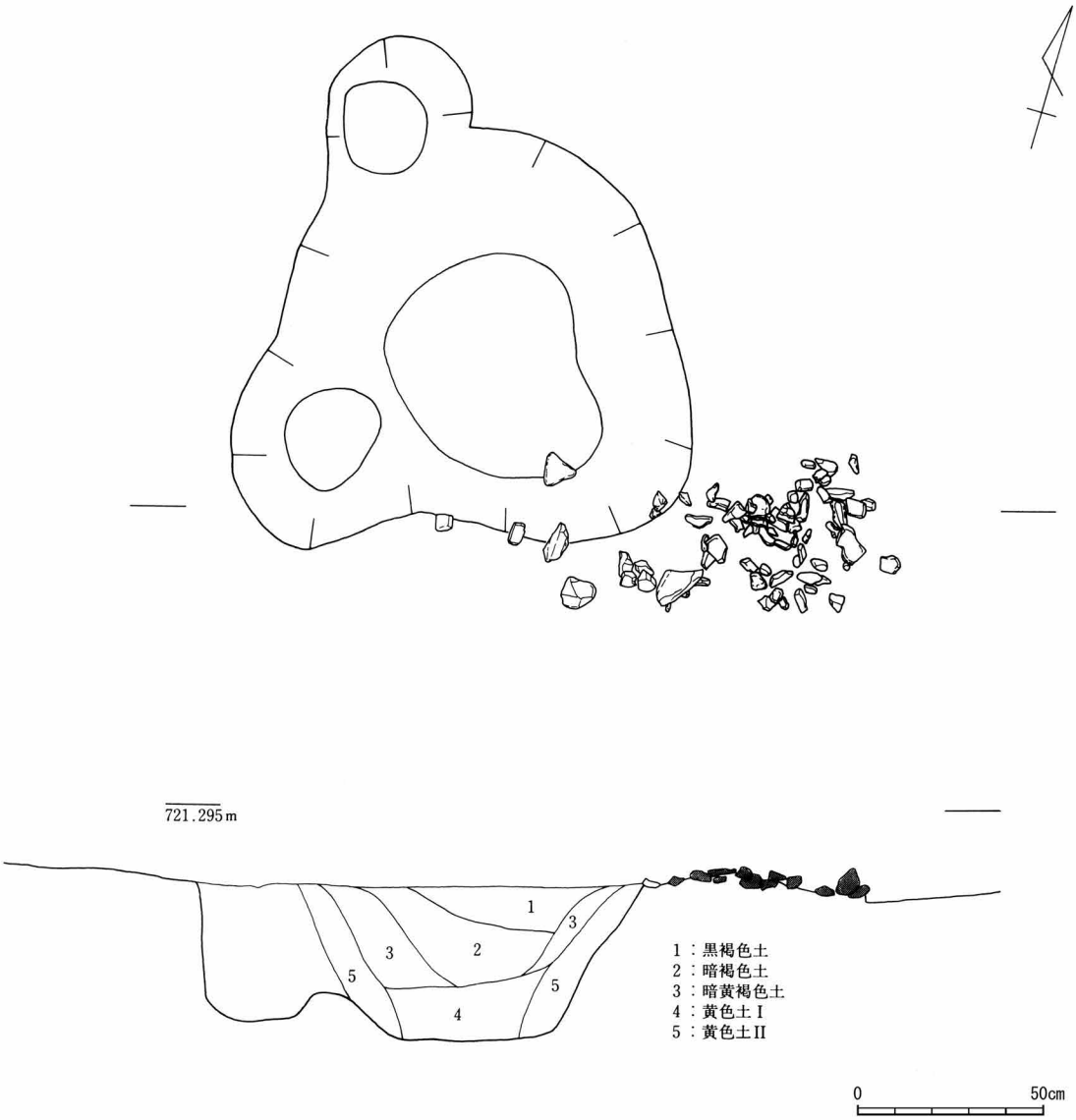
この集石炉はGM－76に出土している。直径50cmの円形を呈していた。この遺構の下には土坑が検出されているがこの覆土内には石や炭の共伴はなかった。土坑の深さはおよそ10cmであった。



第106図　第11・12号集石炉実測図　S＝1/20

第14号集石炉（第109図）

ＧＭ－77より検出されている。直径20cm程の石を中心にして小さな石が集まって構成されている。この遺跡の集石炉の中では小規模な遺構であった。集石炉の下には10cm程の落ち込み状の土坑が確認されている。



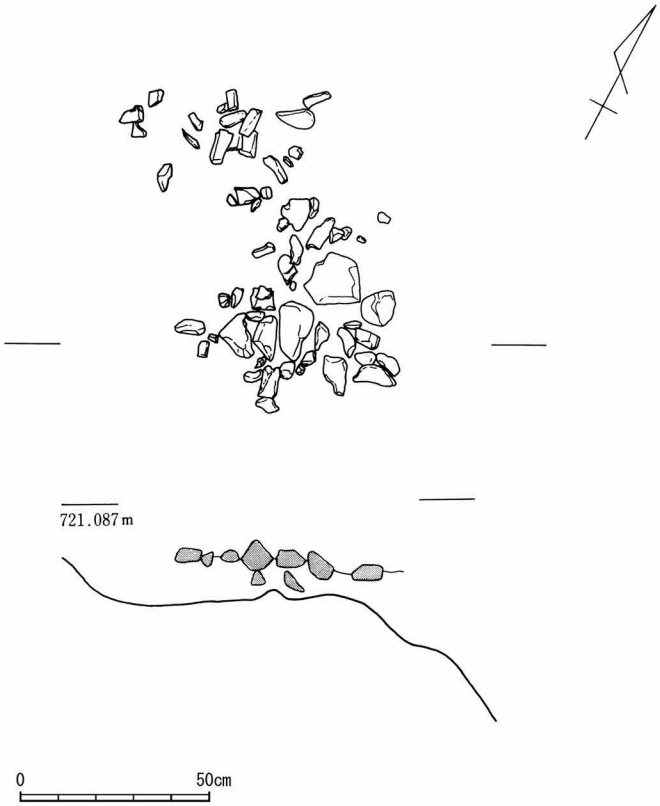
第107図　第9号集石炉実測図　S＝1/20

第15号集石炉（第110図）

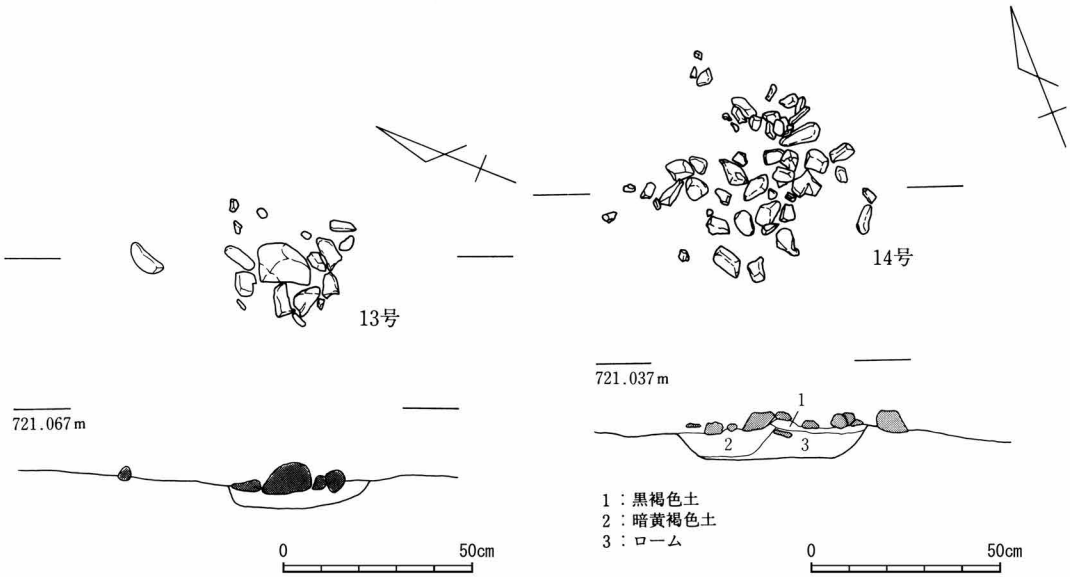
この集石炉は調査区の南部より出土しており、中世の柱穴によって中心部が掘り込まれていた。石は１カ所に集中している状態ではなく、約２ｍの範囲に散在するように出土していた。集石の中心部よりやや北西寄りには、焼石を伴う土坑が検出されている。

第16号集石炉（第112図）

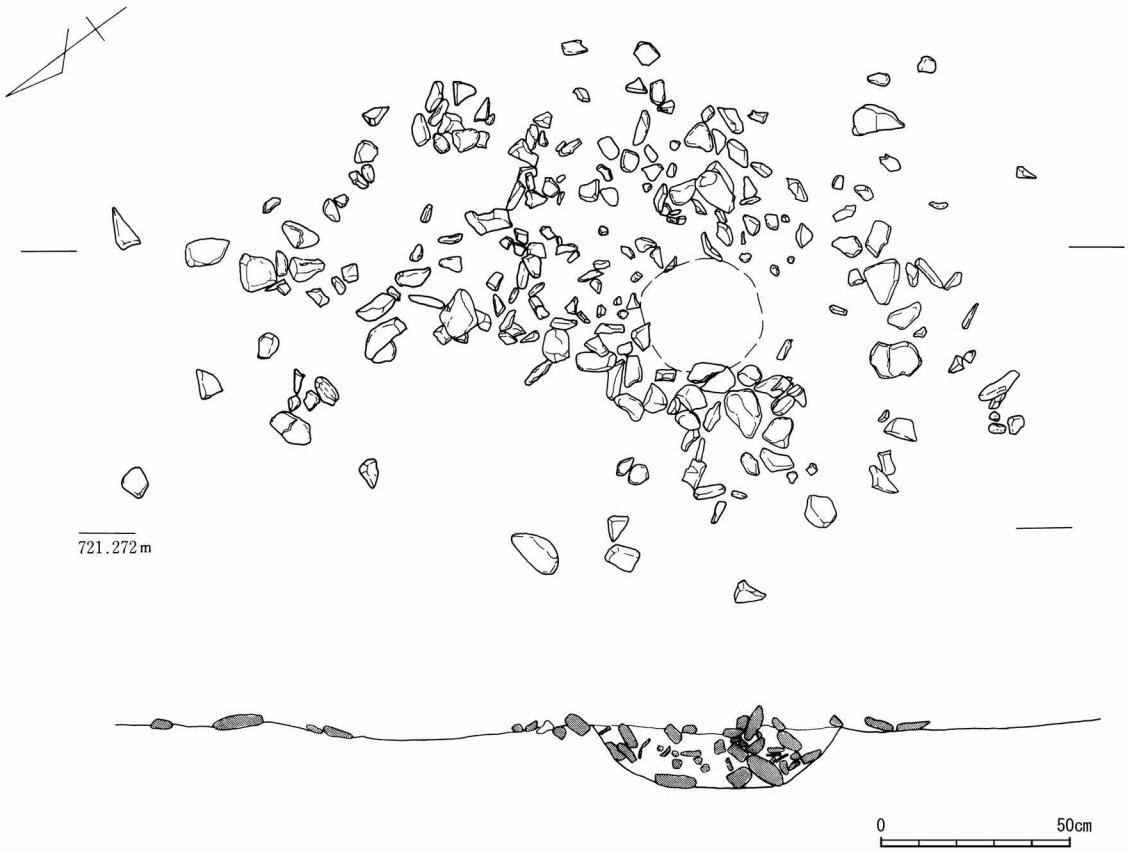
約３ｍ四方に散在して検出された集石炉である。この集石炉は直径30cm程度の石を周囲に伴いその内部に10cm程の石が集中している。この石の集中している箇所の南東部寄りに直径70cm程の土坑が出土している。



第108図　第10号集石炉実測図　S＝1/20



第109図　第13・14号集石炉実測図　S＝1/20



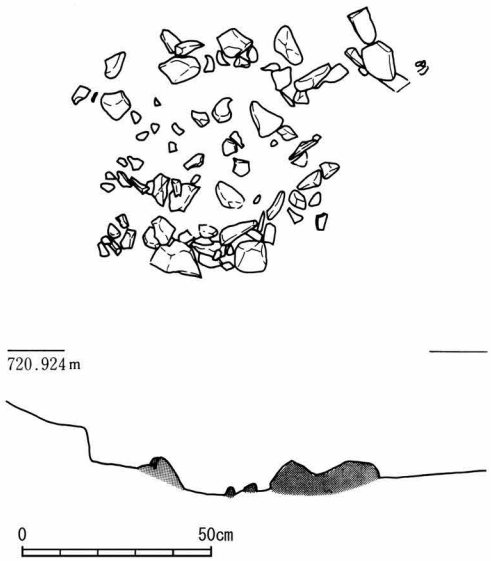
第110図　第15号集石炉実測図　S＝1/20

第17号集石炉（第113図）

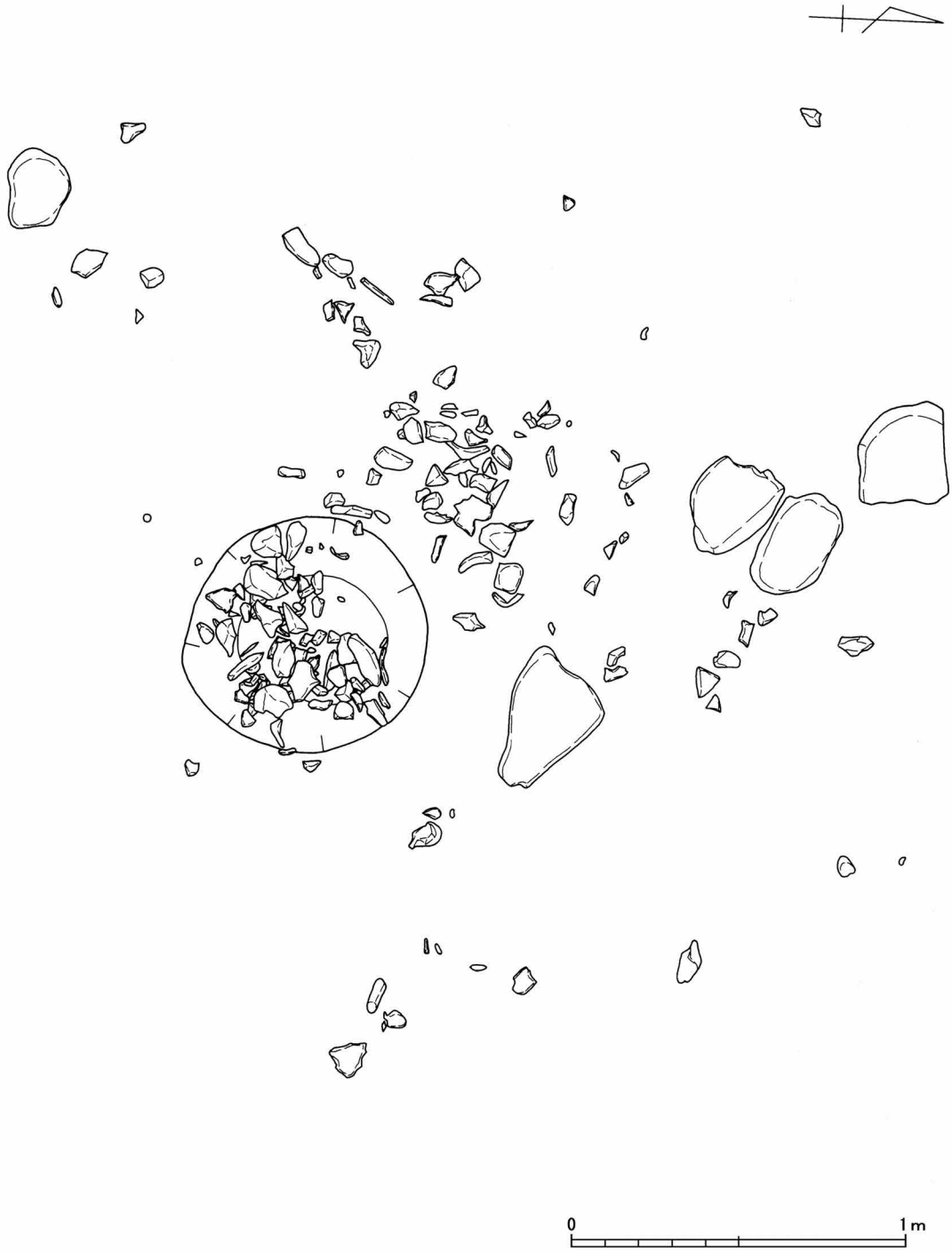
第11号住居址の壁際に出土している。直径90cmの円形に石が集中しており、この直下には80cm×60cmのやや楕円形を呈する土坑が出土している。この土坑の中からも、焼石が出土している。

第18号集石炉（第111図）

直径１ｍの範囲に集中しており、直下には土坑が掘られていた。土坑は直径70cmの円形で、覆土中に石が入っていた。土坑の底部には偏平な石が９個敷かれていた。



第111図　第18号集石炉実測図　S＝1/20



第112図　第16号集石炉実測図　S＝1/20

第19号集石炉（第114図）

直径１ｍの範囲に集中しており直下には土坑が掘られていた。土坑は直径70cmの円形で覆土中に石が入っていた。土坑の底部には偏平な石が９個敷かれていた。

第20号集石炉（第115図）

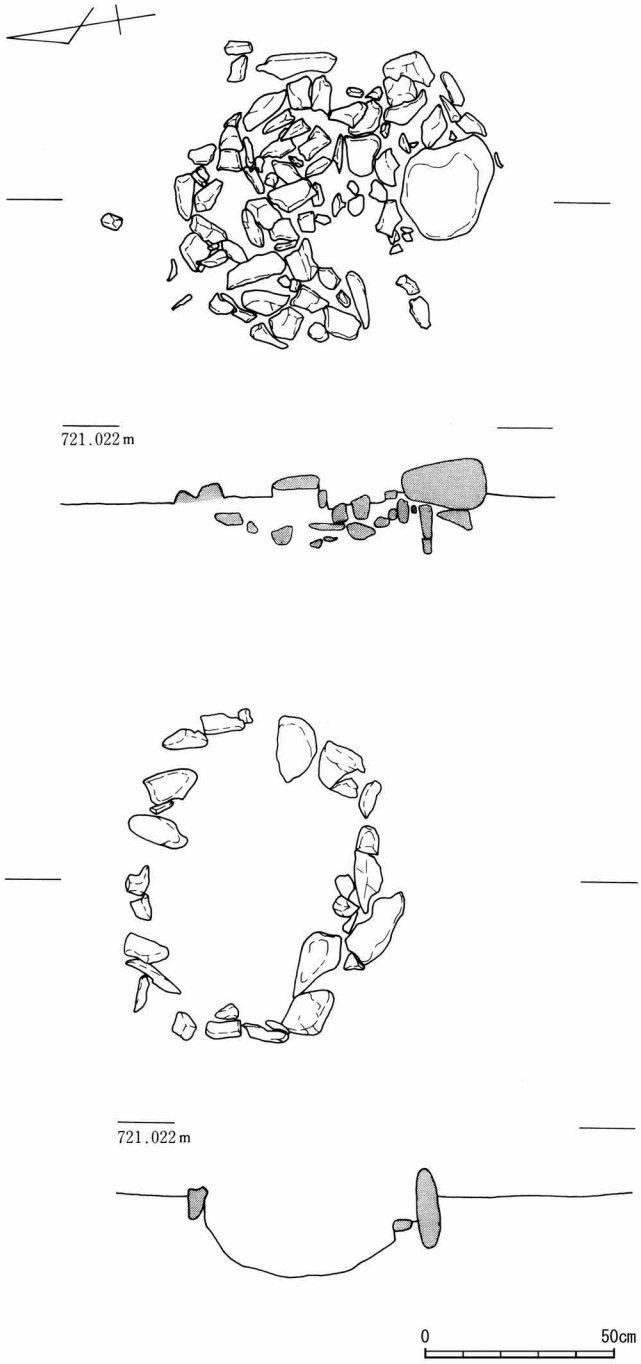
第13号住居址の床面より出土している。北東隅は調査区外となってしまった。直径およそ50cmの範囲に石が集中しており、その底部に直径70cmの土坑が掘り込まれており、その底部に直径70cm程度の範囲に石が敷かれていた。

遺　　物

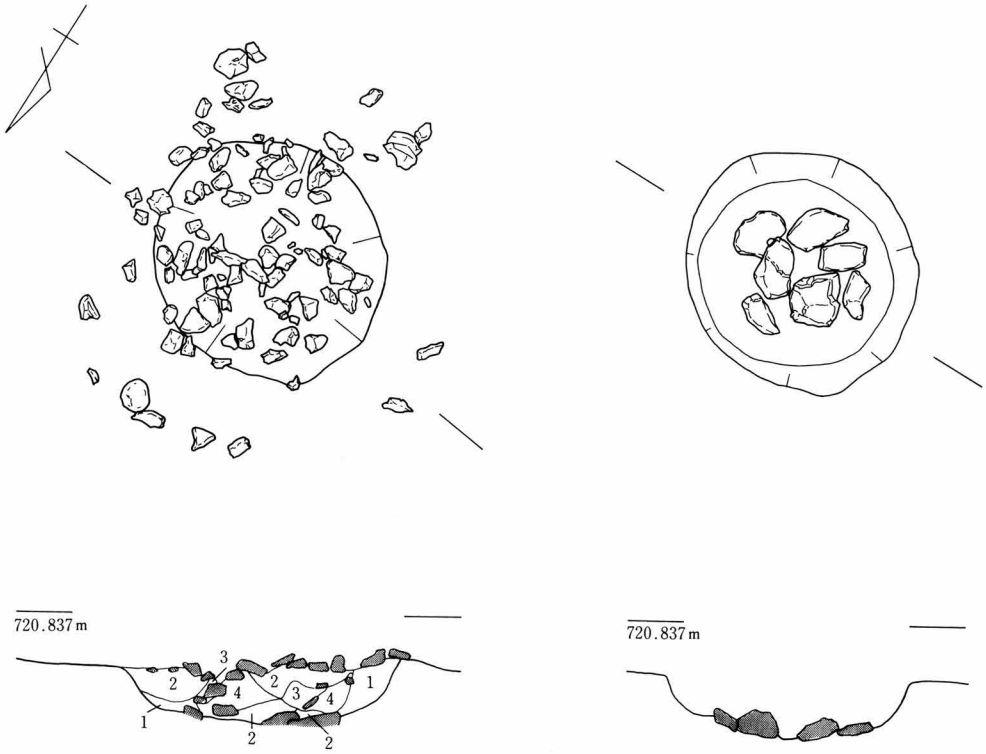
第116図に図示した遺物がすべてである。

１～８は第２号集石炉から出土している遺物である。１・２・５は平出III類Ａの土器である。１には地文に縄文が施文されている。３・４・６・８は縄文を施文している土器である。８は口縁部で、口唇部には指による押圧が加えられている。７は縄文を施文した後にヘラ状工具によって縦位の波状文を施文している。

９は第３号集石炉より出土している土器である。体部上部の破片と考えられ、縦位の平行沈線を施文し、その下部に横位の沈線が引かれている。

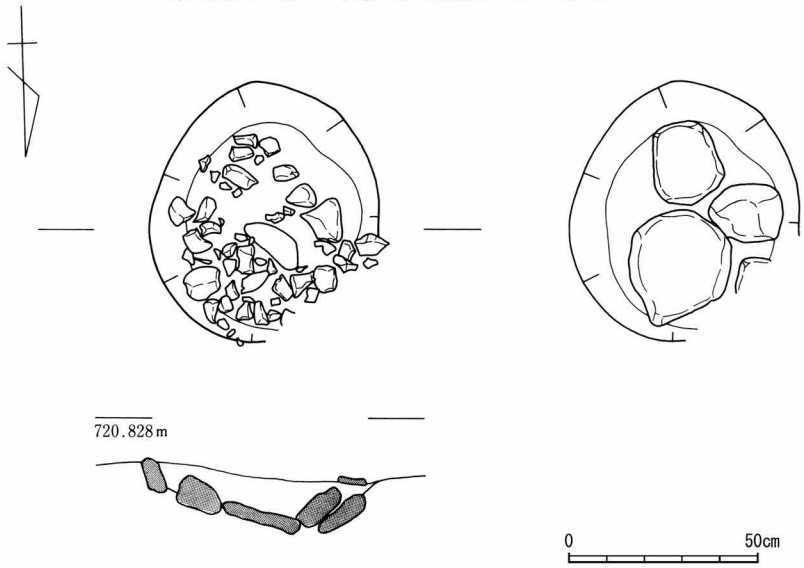


第113図　第17号集石炉実測図　Ｓ＝1/20



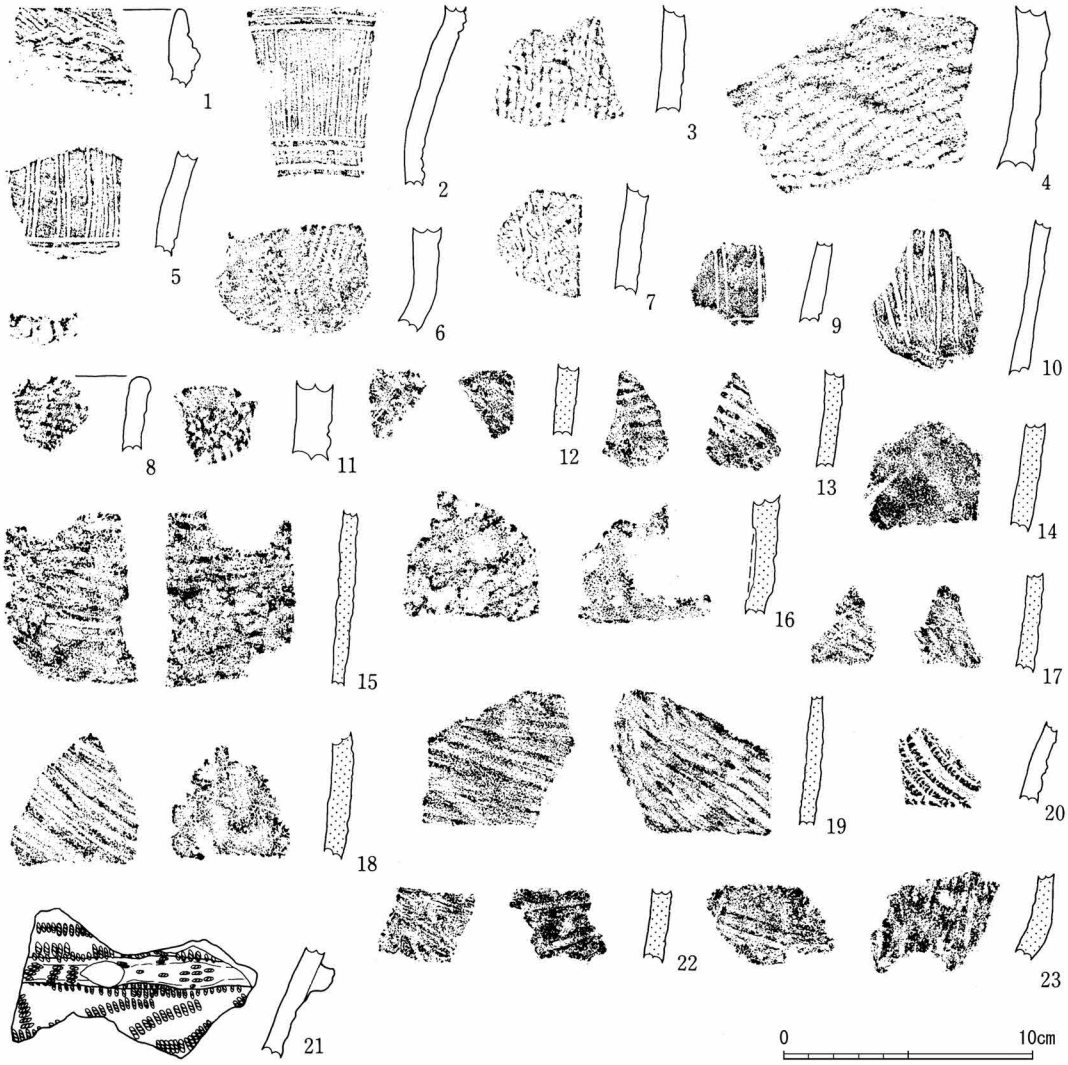
1：黄褐色土（黄色土の混入）
2：暗黄褐色土
3：黒色土（木炭層？　木炭が混入）
4：黒褐色土（黒味がある）

第114図　第19号集石炉実測図　S＝1/20



第115図　第20号集石炉実測図　S＝1/20

10～23は第13・14号集石炉より出土している遺物である。10は体部下部であり、ヘラ状工具による沈線を施文している。11は押引文を施文している土器である。12～19・22・23は条痕文系の土器である。いずれの土器にも胎土に繊維を含有している。20は結節浮線文を施文している土器である。21は横位の隆帯を貼り付け、その後に縄文を押圧している。１～11は縄文時代中期の遺物と考えられ、集石炉に伴うか疑問が残る。20は前期末葉の土器で、混入品の可能性が考えられる。



第116図　集石炉出土遺物

6　土坑と遺物

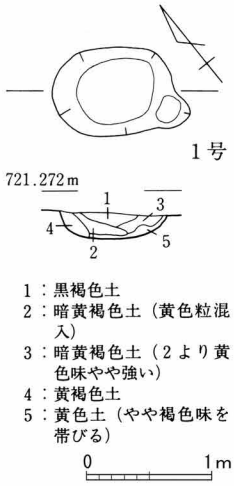
今回の調査で出土した土坑のうち、遺物が出土している土坑を中心に掲載した。

第１号土坑（第117図）

長軸１ｍ・短軸0.7ｍの楕円形を呈しており、南部にピットが重複している。覆土は暗黄色系の土で占められており、断面は皿状で浅い。

遺　　物（第118図１・２）

１はヘラ状工具によって斜位の沈線を施文しており、２は半肉隆帯によってパネル文を描き、内部に縄文が充填されている。



第３号土坑（第117図）

長径65cm・短径50cmの楕円形で、深さ25cmを測る。覆土は暗褐色系の土で覆われていた。

遺　　物（第118図３・４）

３・４は粗い胎土で、縦位の沈線を施文している。

第４号土坑（第117図）

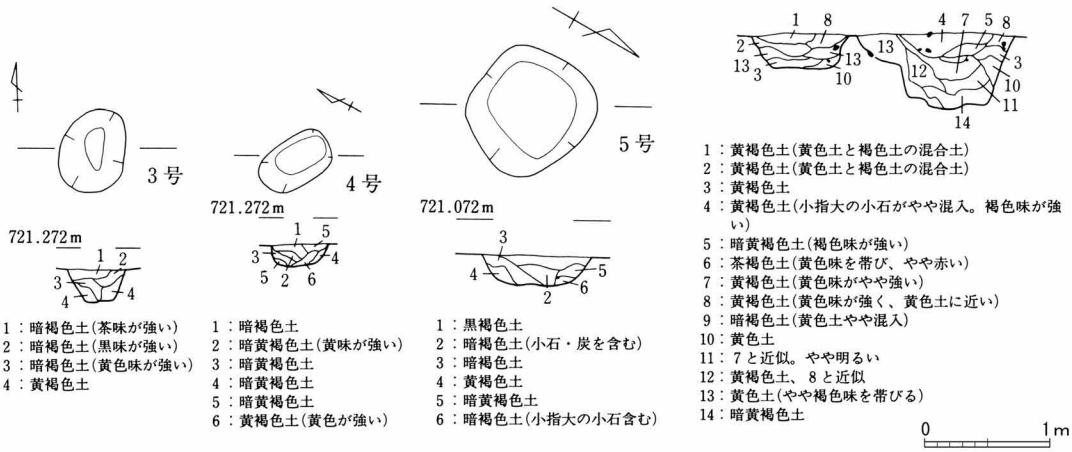
長径60cm・短径40cmで暗黄褐色系の覆土で覆われていた。

第５号土坑（第117図）

１ｍ四方の隅丸方形を呈しており、断面皿状を呈している。

遺　　物（第118図５）

半截竹管状工具で縦位に平行沈線を施文している。



第117図　第１・第３～７号土坑実測図　S＝1/60

第118図　土坑出土遺物 (1)（第1号～第21号土坑）

第６・７号土坑（第117図）

第６号土坑は、直径1.2ｍの平面円形で、深さ30cmを測る。

第７号土坑は第６号土坑を切って掘り込まれている。長径1.7ｍ、短径1.5ｍの楕円形で、60cmの深さとなっている。覆土は第６号土坑と同じく黄褐色系の土で占められている。断面を見ると土坑西部の壁面に沿って黄色土が見られるが、この土は地山の可能性も考えられる。

遺　　物（第122図１）

１は第６号土坑より出土している。浅鉢の破片で上部には把手が付けられている。体部には縄文が施文されている。

第９号土坑（第119図）

直径1.1ｍ、短径0.8ｍの不整楕円形をしており、断面は皿状を呈している。覆土は全体的に黄色系の土で占められている。

遺　　物（第118図７・８）

７は半截竹管状工具による斜位の平行沈線を密に施文している。焼成は良好である。８は横位の沈線を口縁部直下に施文し、その下部に斜位の沈線を施文している。胎土はやや粗い。

第10号土坑（第119図）

直径1.2ｍ、短径0.9ｍの楕円形で、断面は丸底の碗状である。土坑内は黒褐色系の土で覆われていた。

遺　　物（第118図９）

９が出土した遺物である。沈線によってレンズ状文を施文している。

第14号土坑（第119図）

直径1.3ｍの円形をしており、壁面が垂直に立ち上がる土坑である。遺構検出面で直径30cm程の石が土坑内より出土している。覆土は暗褐色や黄褐色の土で占められていた。

遺　　物（第118図12～17）

12～17が出土している。12・13は横位の押圧隆帯が巡らされ、この隆帯を境に上部は横位のミガキ、下部は縦位の薄い沈線が密に施文されている。12～15は同一個体と考えられる。

16は条線文が斜位に施文されている。

17は沈線によって文様を施文している土器である。

第20号土坑（第119図）

直径1.3ｍの円形で、壁面が垂直に立ち上がっている。覆土は暗褐色系の土で覆われている。

遺　　物（第118図21～24）

21～24が出土している。21は平行沈線を縦位に施文している。23は横位の隆帯を貼り付け、下

部に縄文を施文している。24は縄文を地文とし、波状沈線を横位に施文している。

第21号土坑（第119図）

長径1.3m、短径１mの楕円形で、壁面は垂直に立ち上がっている。

遺　　物（第118図25～34）

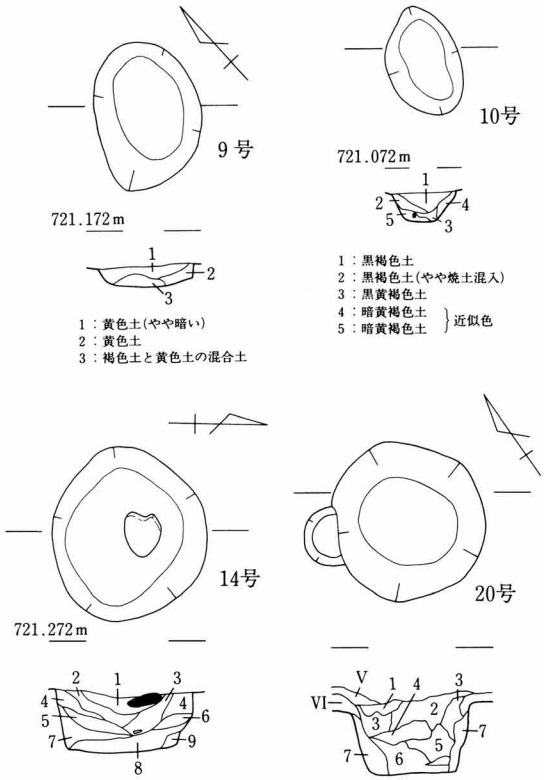
25～34が出土した遺物である。25～27は縄文を施文している。28は輪積痕を襞状の地文としている。30・31は隆帯上に矢羽根状のキザミを施している。29・32は細い沈線を引いており、33は太めの沈線を山形状に施文している。34は平行沈線による施文を行っている土器である。

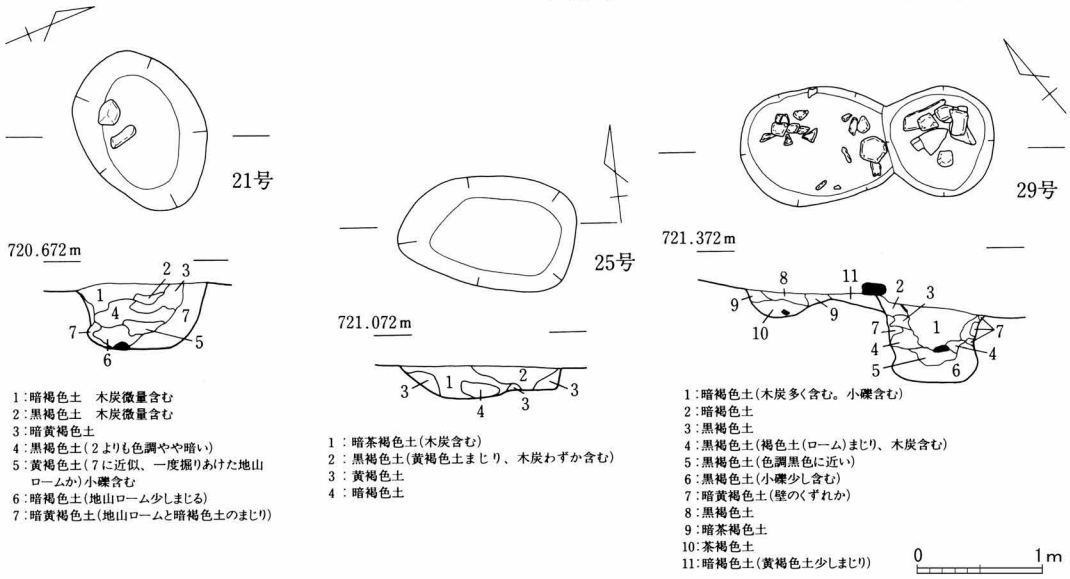
第25号土坑（第119図）

長径1.5m・短径0.9mの楕円形で、断面皿状を呈している。

遺　　物（第120図１～14）

１～14が出土遺物である。１～４は半截竹管状工具を使用しての平行沈線を密に斜

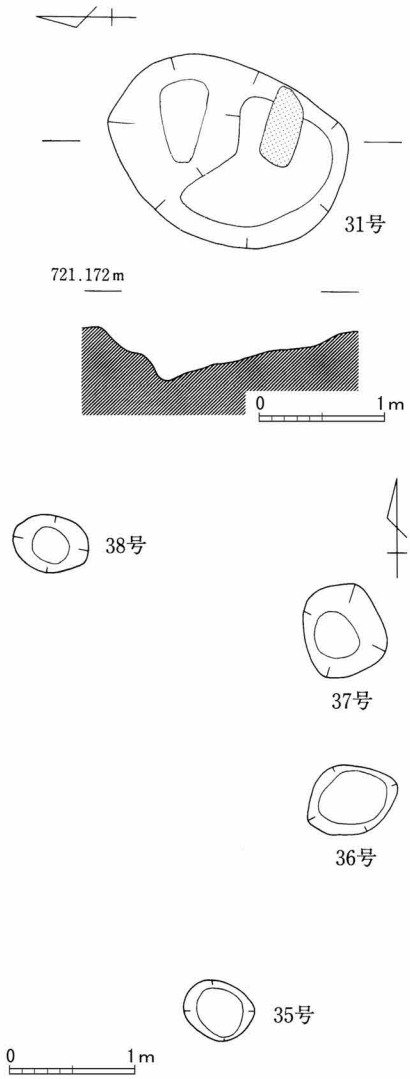




第119図　第９・10・14・20・21・25・29号土坑実測図　S＝1/60

第 120 図　土坑出土遺物 (2)（第 25 号～第 32 号）

位やレンズ状に施文した土器であり、5はその平行沈線を施文した後に沈線を施文している。6・8・9は爪形文を施文している土器である。9は三角押文が施文されている。7は隆帯で楕円文を施文し、内部には縄文を充塡している。10は沈線で文様を描いている。12は縄文が施文され破片上部には爪形文がみられる。13は横位の押圧隆帯を施文しており、その下部には縦位の集合沈線が施文されている。



第121図　第31・35～38号土坑実測図

第29号土坑（第119図）

この土坑は、長径およそ1.3m、短径0.8mの楕円形の土坑を切って掘り下げており、直径1mを測る円形となっている。深さはおよそ0.6mで、壁は垂直に立ち上がっている。覆土は暗褐色と黒褐色の土で占められている。また、土坑の中層で偏平な石が集中して出土している。

遺　　物（第120図16～26・第122図3・4）

第120図19～21・23・26は半截竹管状工具を使用して平行沈線を施文している土器である。このうち19は沈線施文後に幅広の沈線を、器壁を抉りとるようにして施文している。17・22はやや太めの沈線をもちいて山形文や、「∩」状・波状文を施文している。

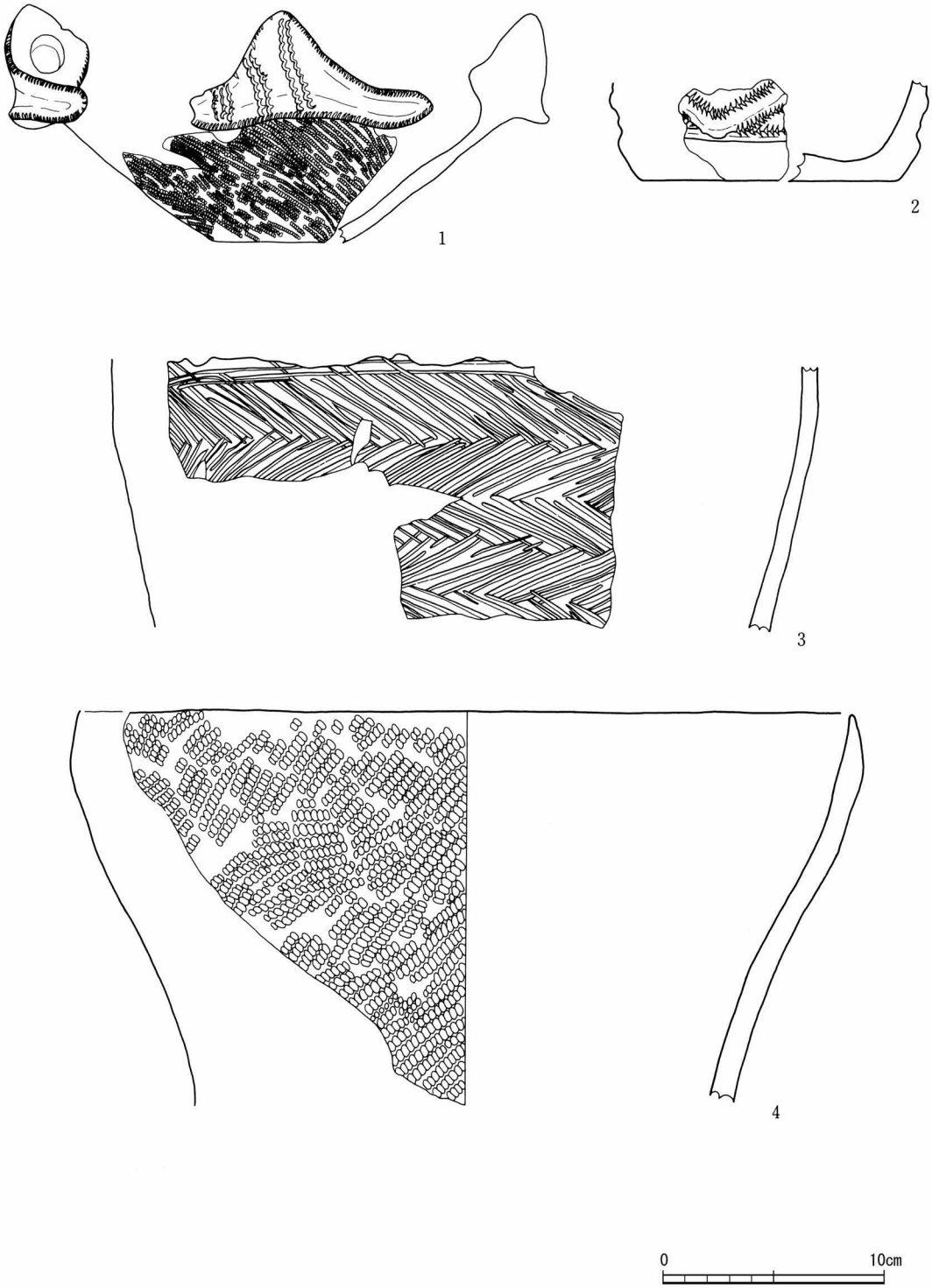
第122図3は体部の破片で、横位の綾杉文が一面に施文されている。破片上部には一条の横位の平行沈線文もみられる。4は体部上部で、縄文が前面に施文されている。

第31号土坑（第121図）

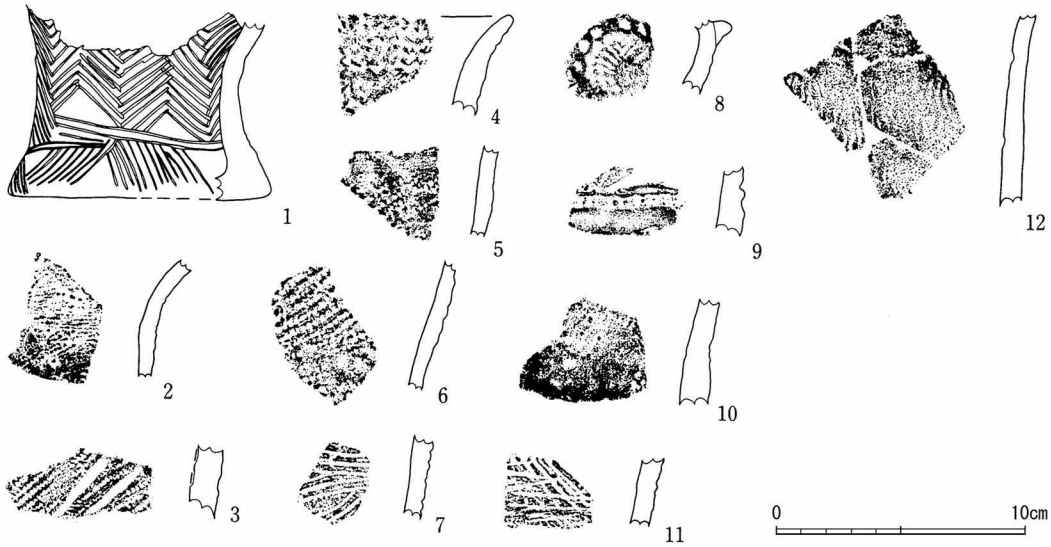
長径2m・短径1.5mの楕円形を呈し、テラスをもった断面「V」字状の土坑である。この土坑北部の浅い箇所には焼土が出土している。

遺　　物（第120図27・28・第123図1）

第120図27は口縁部に温泉マーク文が施文されている。第123図1は土坑の上部に出土している。底部は丸く欠損しており、打ち欠いたようにも考えられる。また、体部上半部も失われている。外面には沈線による綾杉文が施文され、底部付近では横位の平行沈線が1周している。



第122図　土坑出土遺物(3)（第6・29・42号）



第123図　土坑出土遺物(4)（第31・35・39・40・42・43号）

第35号土坑～第38号土坑（第121図）

第35号土坑は直径50cmの楕円形、第36号土坑は長径80cm・短径60cmの不整円形、第37号土坑は直径70cmの隅丸方形、第38号土坑は長径65cm・短径45cmの楕円形をそれぞれ呈している。

遺　　物（第123図２）

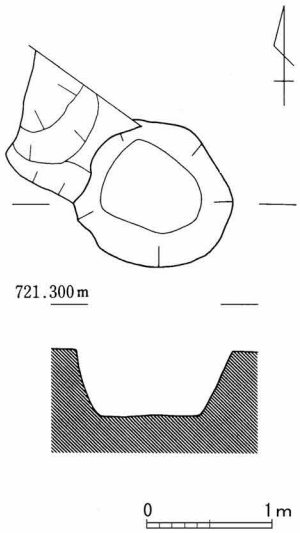
２が出土しているのみである。外面に細線文を施文している。

第40号土坑（第124図）

直径1.2ｍの楕円形を呈しており現存する深さは50cmである。この土坑の北西部にはロームマウンドが切り合っているが前後関係は不明である。

遺　　物（第123図４～６）

４は口縁部の破片である。外面には山形文の押型文を横位に施文している。５・６は縄文が施文されている土器である。両者共に斜位に縄文を施文している。



第124図　第40号土坑実測図

7　遺構外出土の遺物

今回の調査では遺構外から約1,620点の遺物が出土しているが、紙面の都合上、縄文時代早期および晩期の遺物を中心に掲載している。

第125図１～14は押型文を施文している土器である。１～８は楕円文を施文しており、１～３・６～８は横位に施文原体を使用して施文している土器片で、１と２は同一個体の可能性が高い。５は斜位に押型文を施文している。文様はあまり明瞭とはいえない。

９・14は山形文を横位に施文している土器である。両者共に口縁部の破片で、口唇部にはヘラ状工具によるキザミが施されている。また、14は破片下部に補修孔が穿たれている。

10～13は市松文を施文しており、11は縦位に施文原体を使用している。

写真図版30下段は図面に掲載していない押型文である。２～９の市松文を中心に、10～12の楕円の押型文などがみられる。１は粗雑な施文具を使用して文様を施文している。11はネガティブな押型文である。

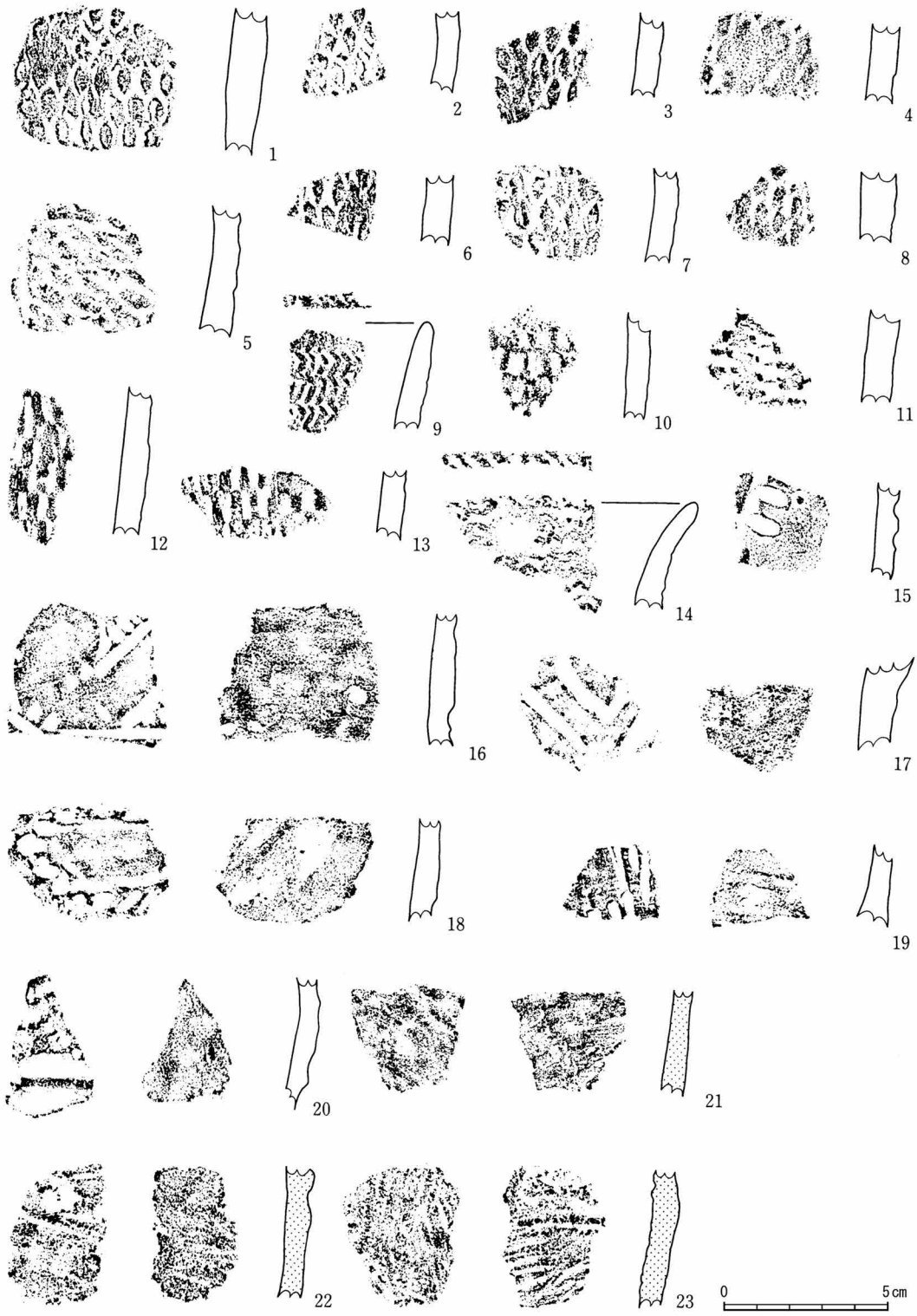
15～23・図版34は器面に沈線を施文している土器である。15・17は胎土中に砂粒が混入されているために粗い。16・18・20は棒状の工具によって沈線を施文し、その脇を斜めに工具を使用して刺突している。内面には条痕文はみられず、横位のナデが施されている。また、19には内面に条痕文が確認できる。21～23は体部の破片である。21は内・外面共にヨコナデ調整を行っており、22・23は内・外面共に条痕文がみられる。

写真図版34の３・５・９～13は図面に掲載していない土器である。５は施文部下半でやや内側に屈曲しており、体部中部の破片と考えられる。11には縦位の隆帯が貼り付けられ、その上に竹管状工具を使って押圧を加えている。

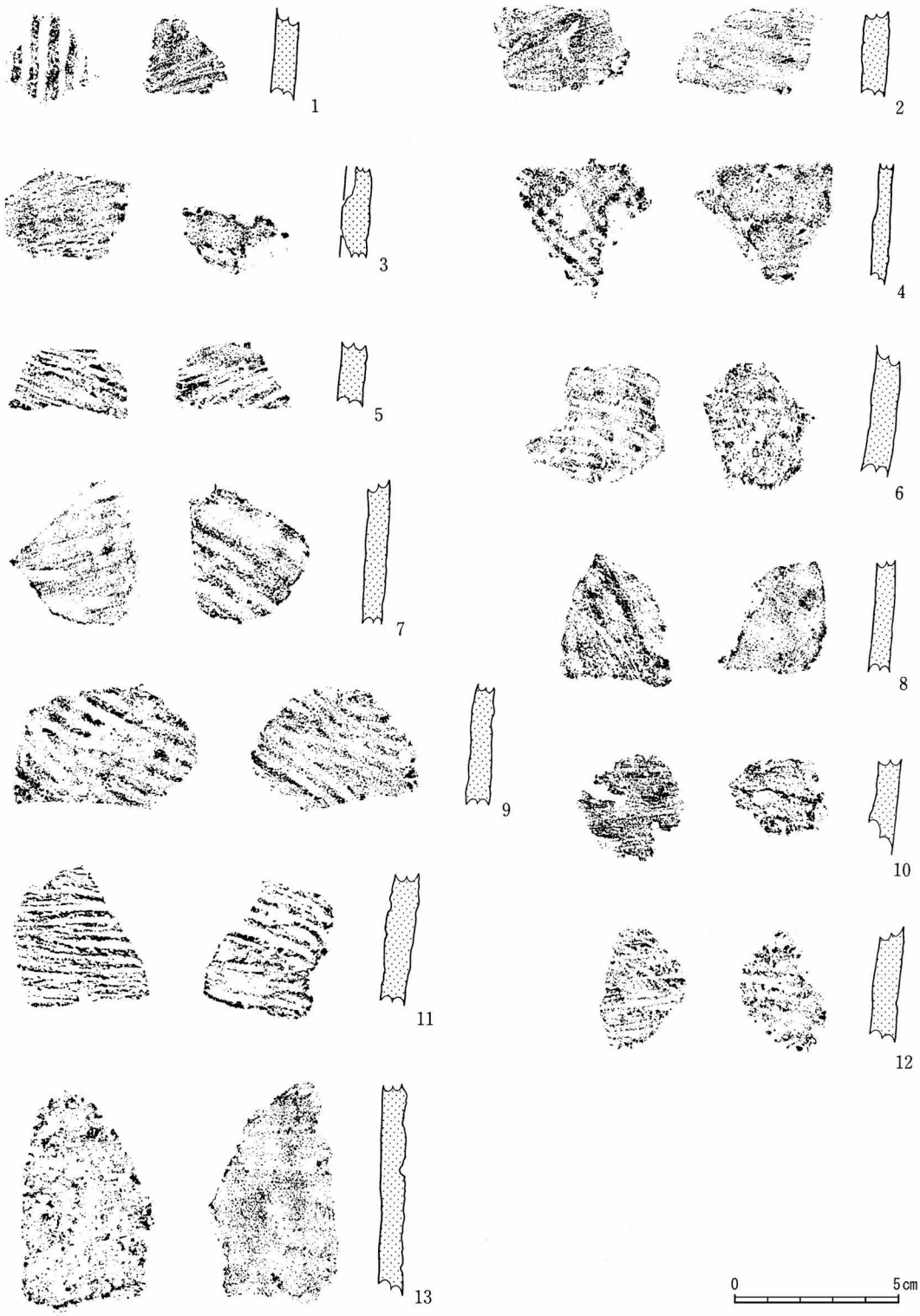
第126図は条痕文が施文されている土器である。１は外面に条痕文を明瞭にとどめているが、内面にはナデが観察される。２・３は内・外面共に不明瞭な条痕文が観察される。５・11・12は同一箇所に複数回施文原体で調整したために擦痕状になっている土器である。いづれの土器も内面にも明瞭な条痕文をとどめている。６・７・９は外面に条痕文がみられる土器で、６は内面の条痕文は不明瞭ではあるが、いづれも内面に条痕文を施文している土器である。

４は口縁部の破片であり、比較的薄手の器厚で、淡褐色を呈していた。外面には羽状縄文が施文されているが、不明瞭である。

８・13は外面に擦痕状のナデが施されている土器である。13は縄状のものが原体として使用されていたのか一部に縄文が観察される。内面は両者共にヨコナデ調整が施されている。
また、写真図版31は外面に縄文を施文した繊維を胎土に混入している土器である。写真図版33は文様等が判明しない繊維土器である。



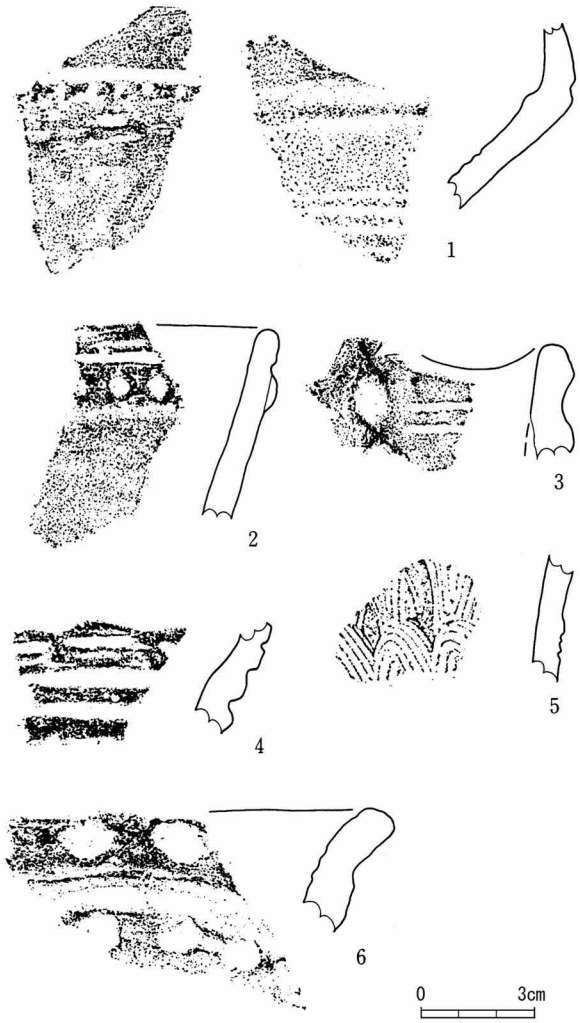
第125図　遺構外出土遺物 (1)



第126図　遺構外出土遺物(2)

第127図は縄文時代晩期の土器である。

1は浅鉢の破片である。体部と口縁部の屈曲部には沈線を1条巡らし、その下部の屈曲部にヘラ条工具でキザミを施文している。体部はミガキを行って平坦に仕上げている。内面は屈曲部に隆帯を貼り付け、体部には横位に沈線を引いている。器壁は粗く調整痕は確認できない。2は鉢の破片で、口縁部直下に隆帯を貼り付け、その上に刺突を加えている。体部はヨコナデを行っている。内面は外面よりもていねいなヨコナデ調整を行っている。外面には煤が若干付着していた。3は鉢の口縁部である。数カ所に山形の突起を作り出していると考えられ、その突起から隆帯を垂下させ、押圧を加えている。4は鉢または甕の体部と考えられる。破片全面に横位の突帯を貼り付け、上部にはレンズ状付帯文を施文している。また写真図版36の土器も同時期の土器と考えられる。5・6は晩期の土器か疑問が残る。



第127図　遺構外出土遺物(3)

8　掘立柱建物址

今回の調査では中世の建物址と考えられる掘立柱が出土している。建物の規模が明確に判明する遺構はないものの、少なくとも8棟程度は時期が前後しながら建っていたと推察できる。

このうち、第3号建物址と、第4号建物址は比較的柱穴の並びが明瞭で、3間×4間の建物が長軸を90度ずらした形で時期が前後して建っていた可能性が考えられる。また、第5号建物址は3間×3間の方形の建物と推定できる。第1号建物址と第2号建物址は柱穴が無数に出土しており、およそ2棟の建物が存在していた可能性が考えられる程度である。第6号・第7号建物址は3間×4間の建物が2棟建っていたと考える事ができるが、第8号建物址についてはその存在は疑わしい（第4図参照）。

これらの建物は主軸が2種類あることから重複して建てられている建物址も考え合わせると大きく3時期に分けることができそうである。

第V章　ま　と　め

ここでは、当地域とは異なった様相を示している土器を中心にまとめてみたい。

まず、他地方の土器としては、第35図２・第59図19～24があげられる。第35図２は第６号住居址から藤内Ⅰ式の土器と重なりあって出土しており、東海地方の山田平式に相当すると考えられる。この時期の土器は東海地方においてもこれだけ大型の土器の出土例が少なく、非常に貴重な例といえよう。第59図19～24は小型ではあるものの、第33図２と同様な器形をしていると考えられ、口縁部の屈曲部には連鎖状文がみられる。これらの土器は山田平式の次の型式である子種式と推定される。子種式の土器についても、山田平式と同様に第９号住居址の覆土から藤内Ⅰ式の土器と共に出土している。

次に県内の他地域の土器についてみると、まず東信地方によくみられる新巻類型の土器があげられる。この土器は縄文を地文にもち、沈線と隆帯を使用して曲線文を施文している。隆帯の脇に爪形文はみられない。新町大原遺跡では第23図１・第34図３・第43図１・５をはじめ、破片としても出土している。これらのうちには埋甕炉として使用されている例（第23図１・第34図３・第43図１）もある。

第34図５・第86図１等は斜行沈線文の系統の土器である。今回の調査では土器片の中にも数多くみられる。この土器は新巻類型同様に、千曲川水系、特に東信地域に主体的に分布している土器で、後沖式土器として型式を設定する動きもある。

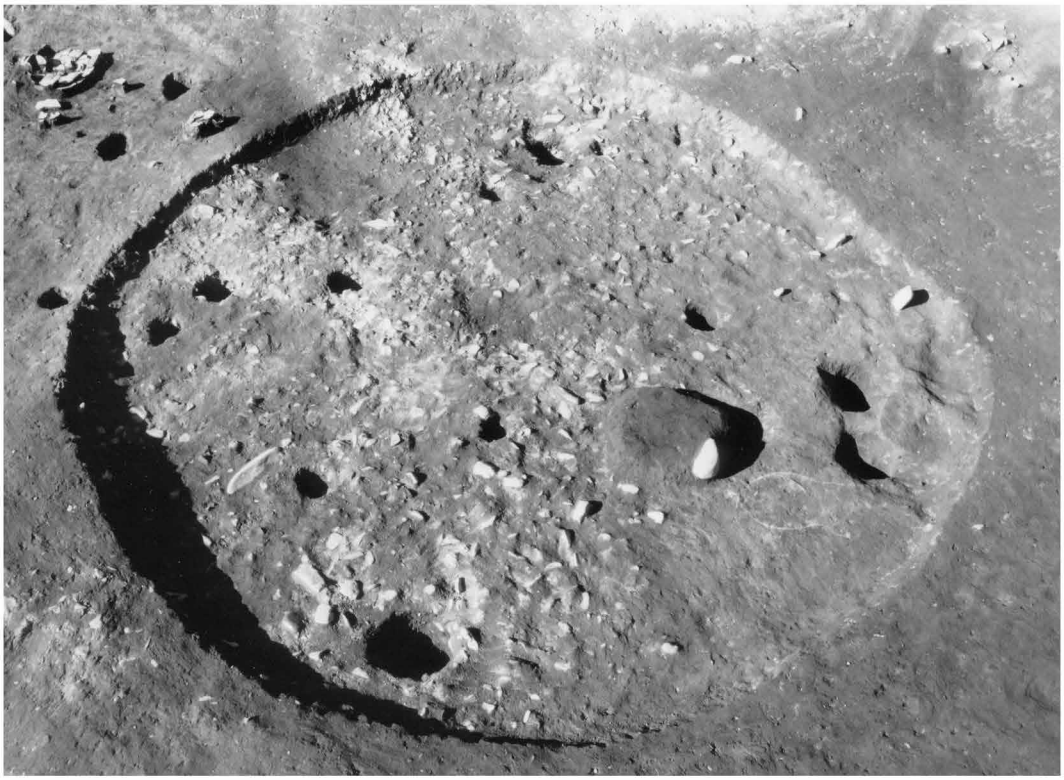
第22図はいわゆる下伊那型の櫛形文の系統の土器と考えられる。器壁は薄く、胎土は平出Ⅲ類Ａに近似している。

そのほか、第23図２・第37図10～16・第53図18・第57図９・10・17は底部から口縁部にむかって器壁が直立して立ち上がっており、口縁部は丁寧にミガキがかけられているのに対して、体部は調整痕をそのままとどめている。文様からみるといわゆるキャリパー形の器形が考えられるので、やや系統を異にする土器といえよう。さらに、第35図１は器形は松本平に求めることができるが文様構成は異なっており、第34図１の口縁部の文様については他に例を見ない。さらに第79図３のモチーフについても他に類例がなく、特に隆帯間に描かれたヘラ描の三叉文とその両側に突かれた円形の刺突文はこの土器独特のものである。第56図３は口縁部に藤内式のモチーフをとりいれた平出Ⅲ類Ａの土器である。

このように、この地域ではさまざまな系統の土器や、各地域の文様の影響をうけて、独特なモチーフをもった土器を製作しており、固有の様相を呈している。今後、類例の増加をまって中期中葉の地域性について検討していかなくてはならないであろう。

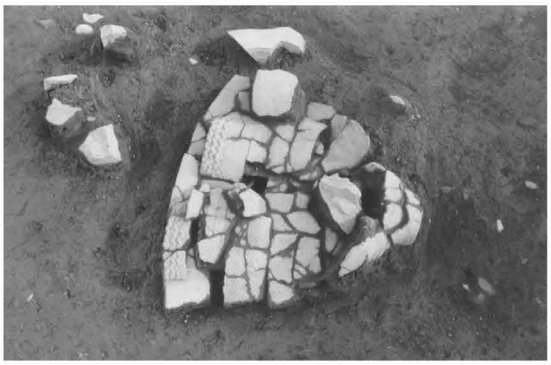
末筆になりましたが、報告書をまとめるにあたって北沢武志氏、三上徹也氏には土器編年についてご教示頂きました。ここに感謝申し上げると共に、その内容を十分に活かしきれなかったことをお詫びしてまとめとします。

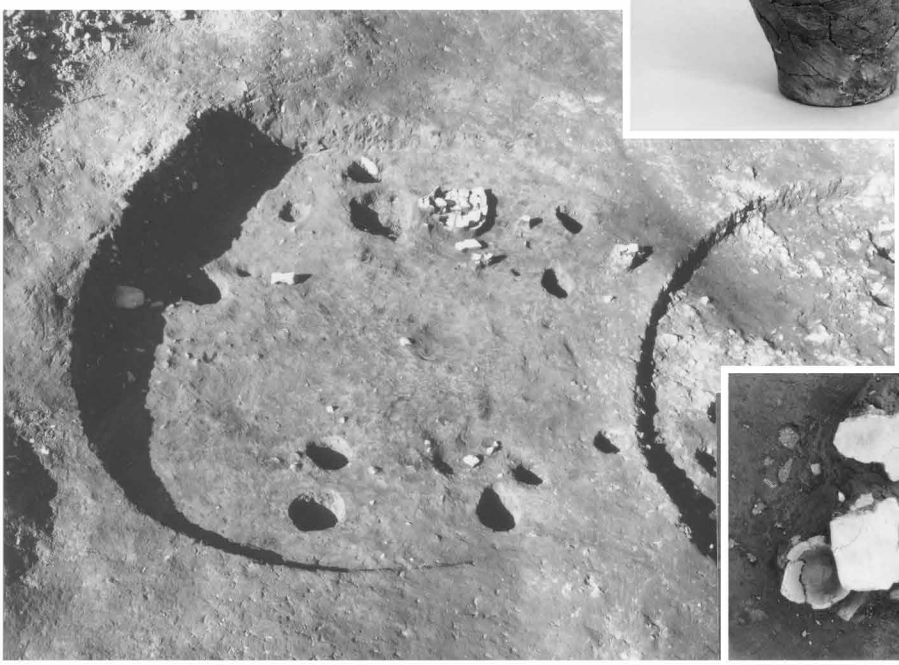
写真図版



第１号住居址

図版　2





第２号住居址

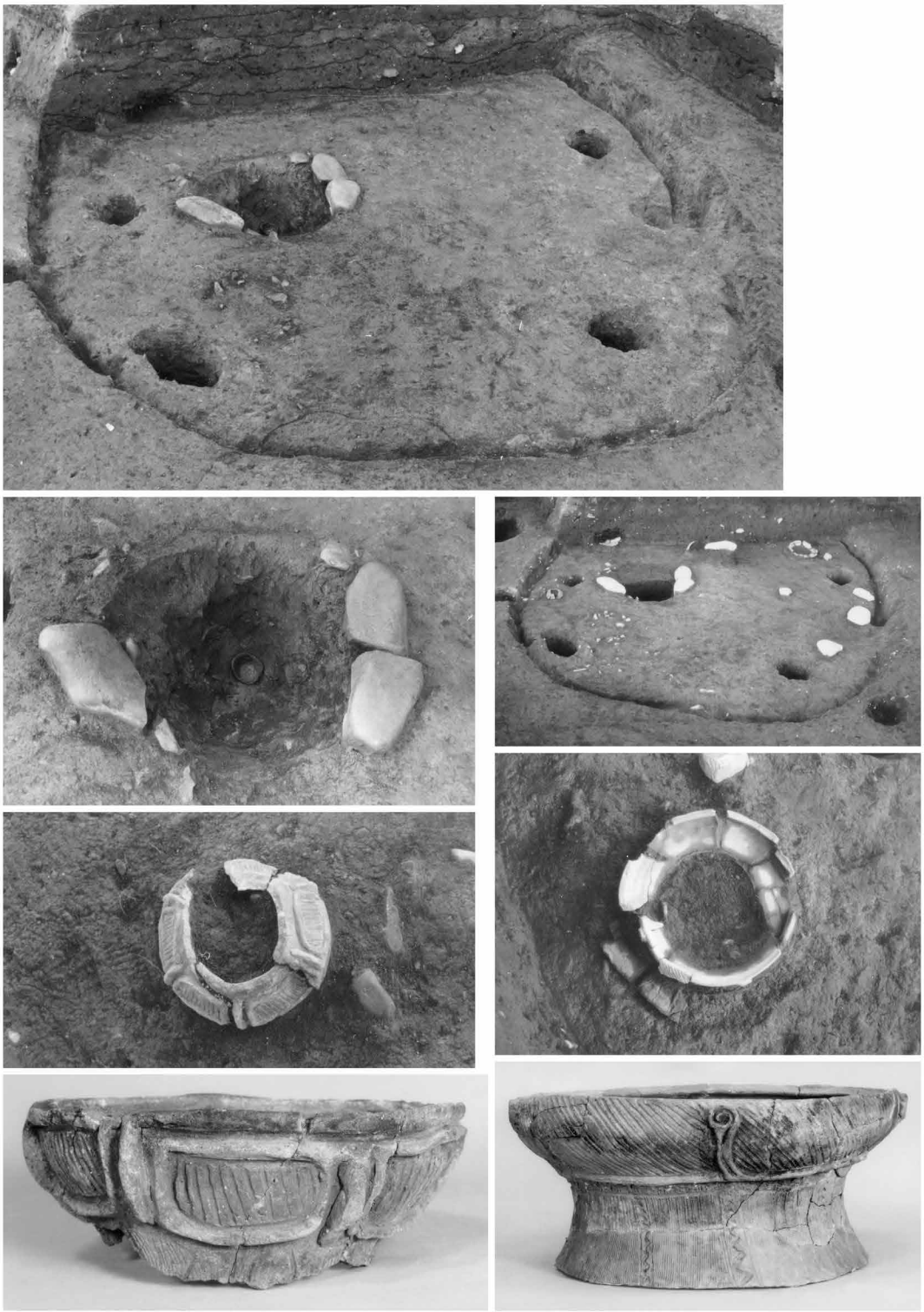
第３号住居址

図版　4

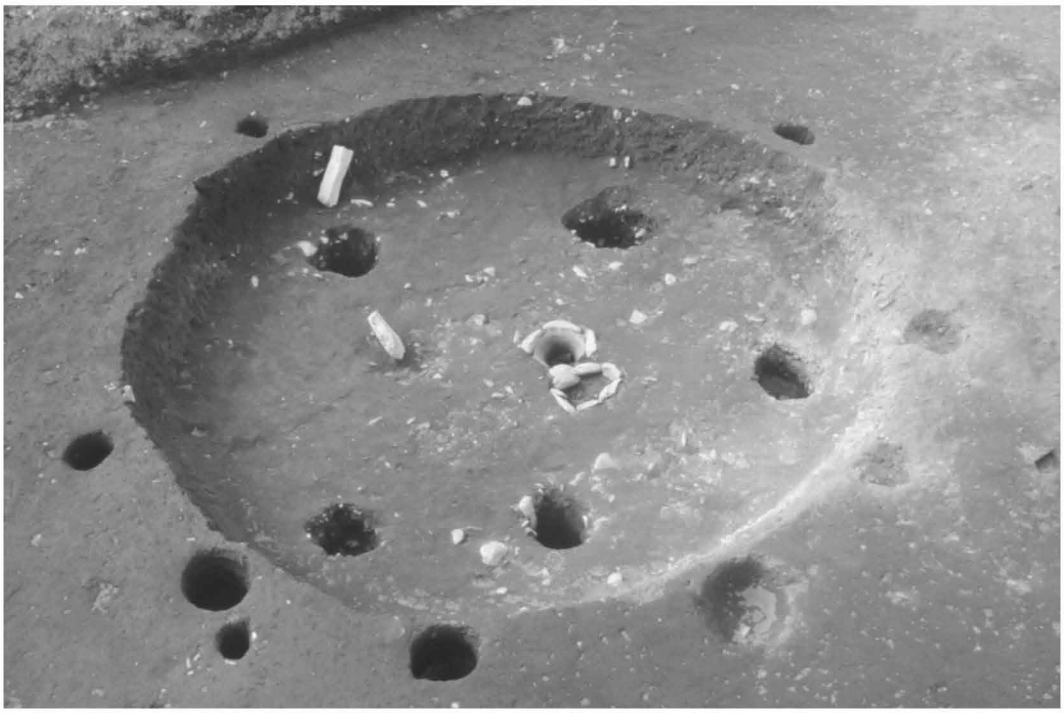
第４号住居址（1）

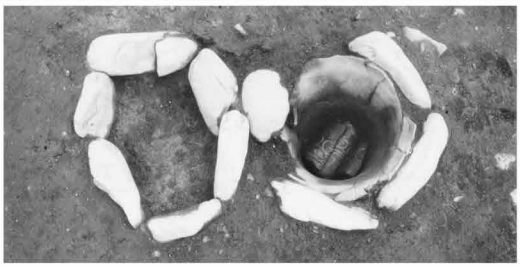
第４号住居址 (2)

図版　6

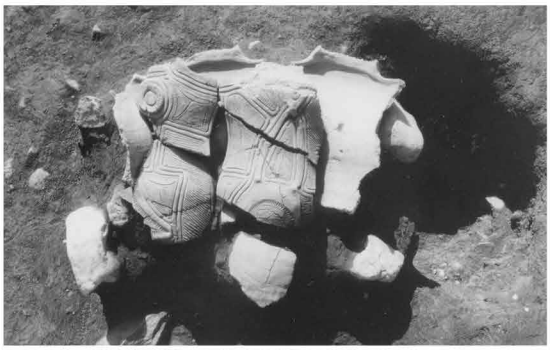


第５号住居址

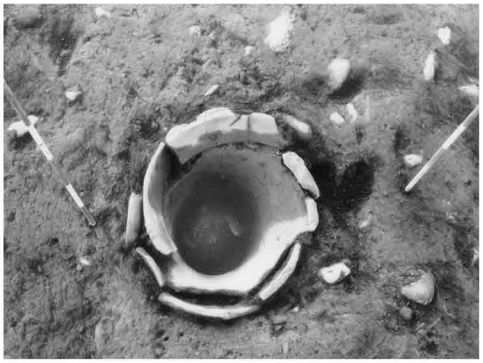




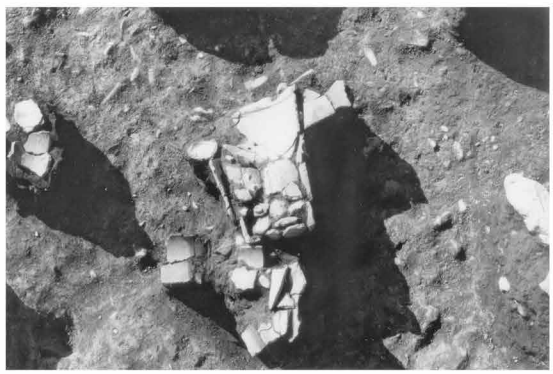
第 6 号住居址 (1)



第６号住居址（2）



第７号住居址（1）

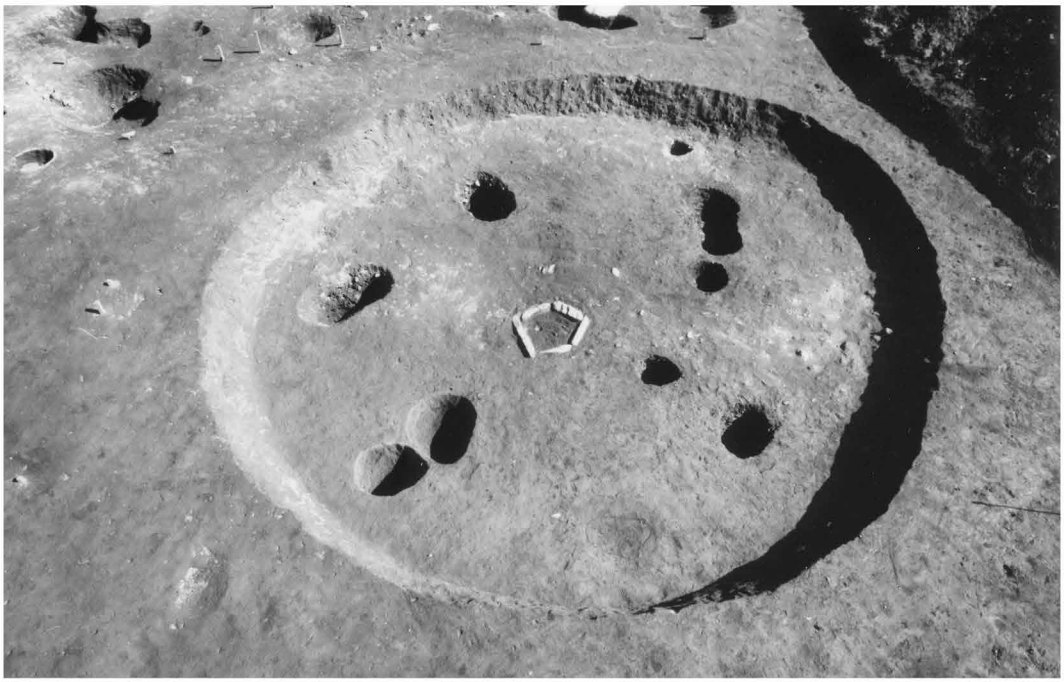


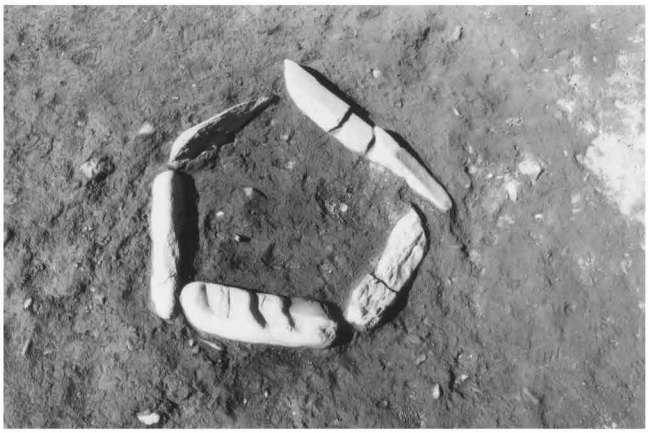
第７号住居址 (2)

第７号住居址 (3)

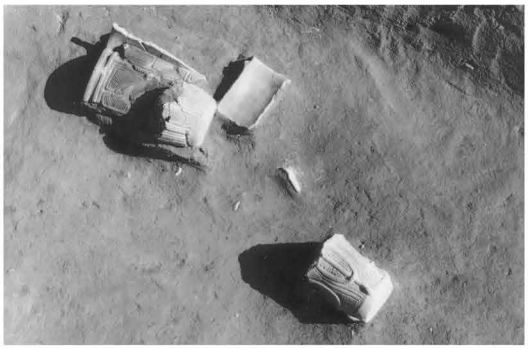
第８号住居址

第９号住居址





第 10 号住居址



第 11 号住居址

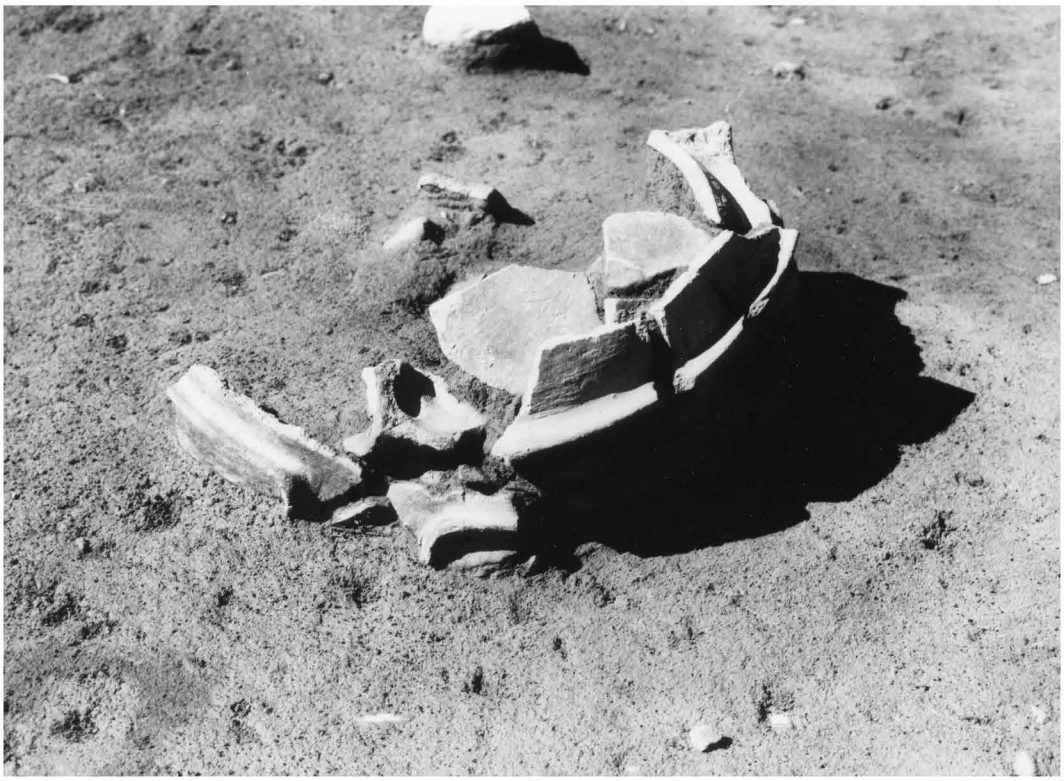
第 12 号住居址

第 13 号住居址 (1)

図版　18

第 13 号住居址 (2)

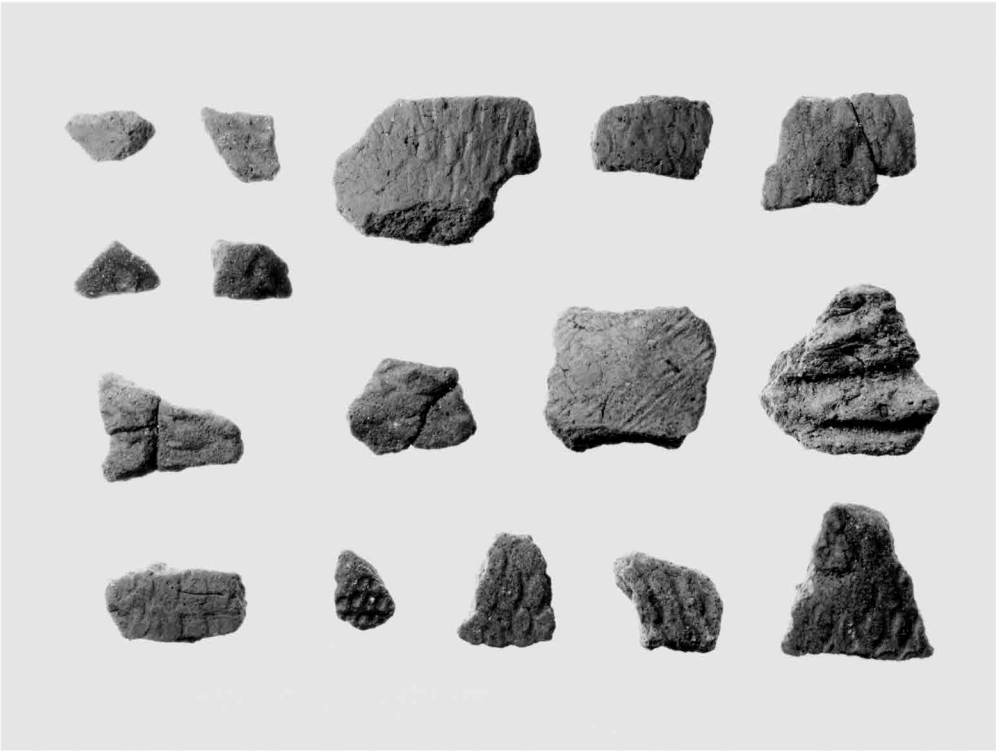
第 14 号住居址

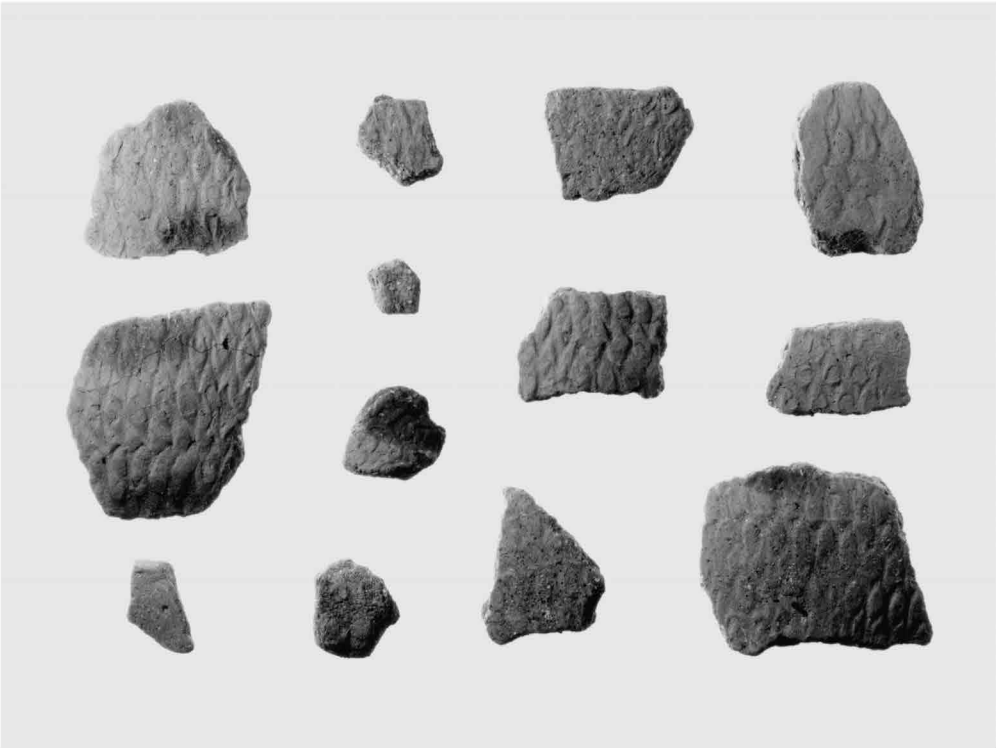


単独埋設土器

第１・２号竪穴

調査参加者

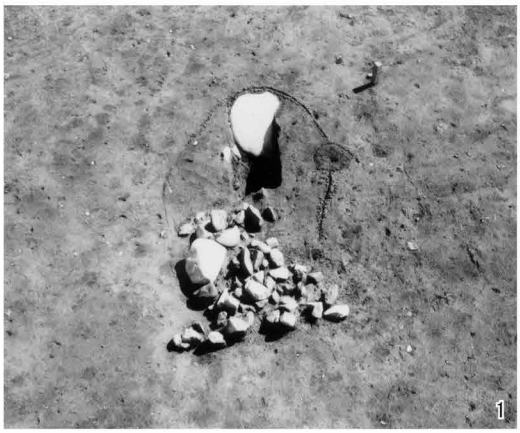


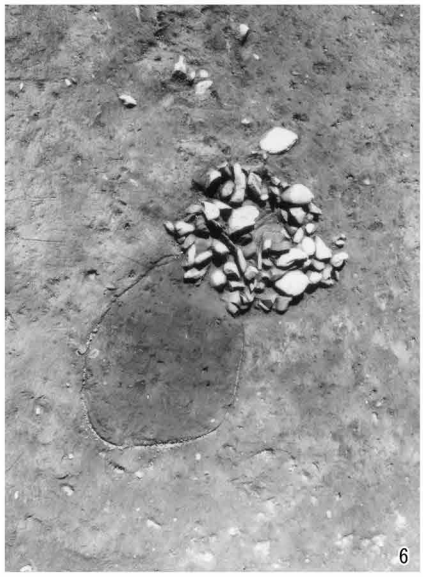


第１・２号竪穴出土遺物

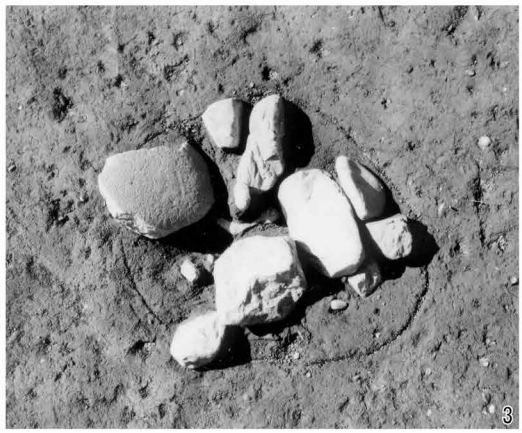
第１・２号集石（上：１号，下：２号）

第３・４号集石（上：３号，下：４号）

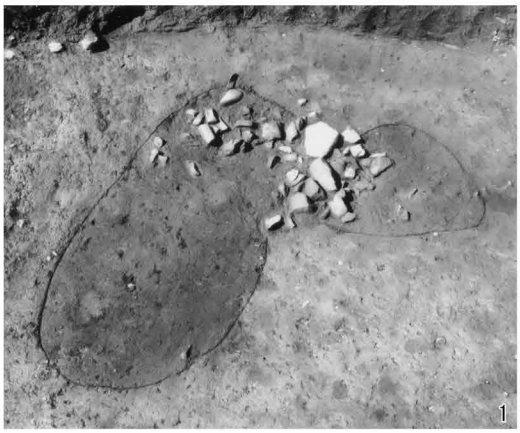


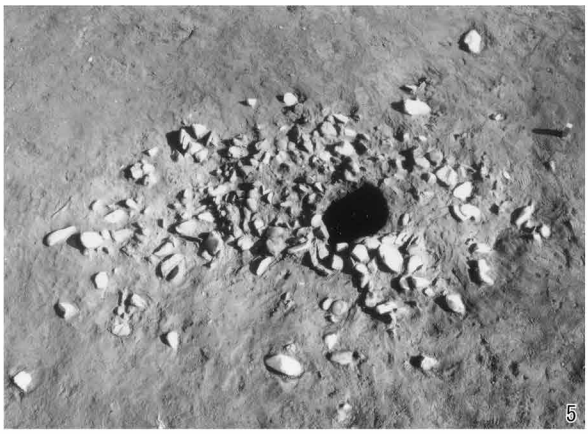


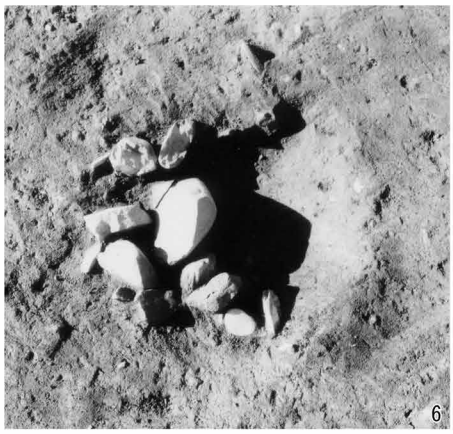
第１～４号集石炉（1：１号，２・３：２号，４・５：３号，６：４号）



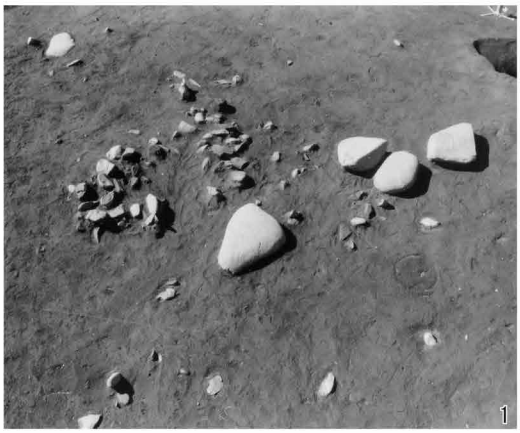
第５～９号集石炉（1・２：５号，３：６号，４：７号，５：８号，６：９号）



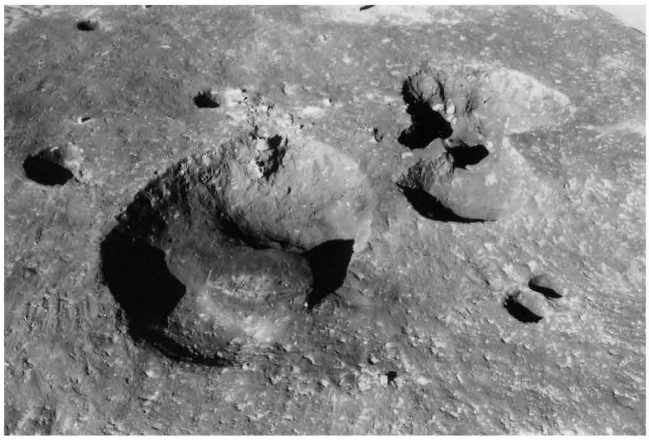


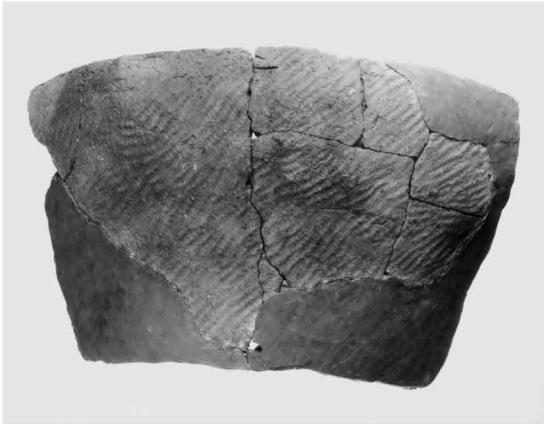


第10～15号集石炉（1：10号，2：11号，3：12号，4：13号，5：14号，6：15号）

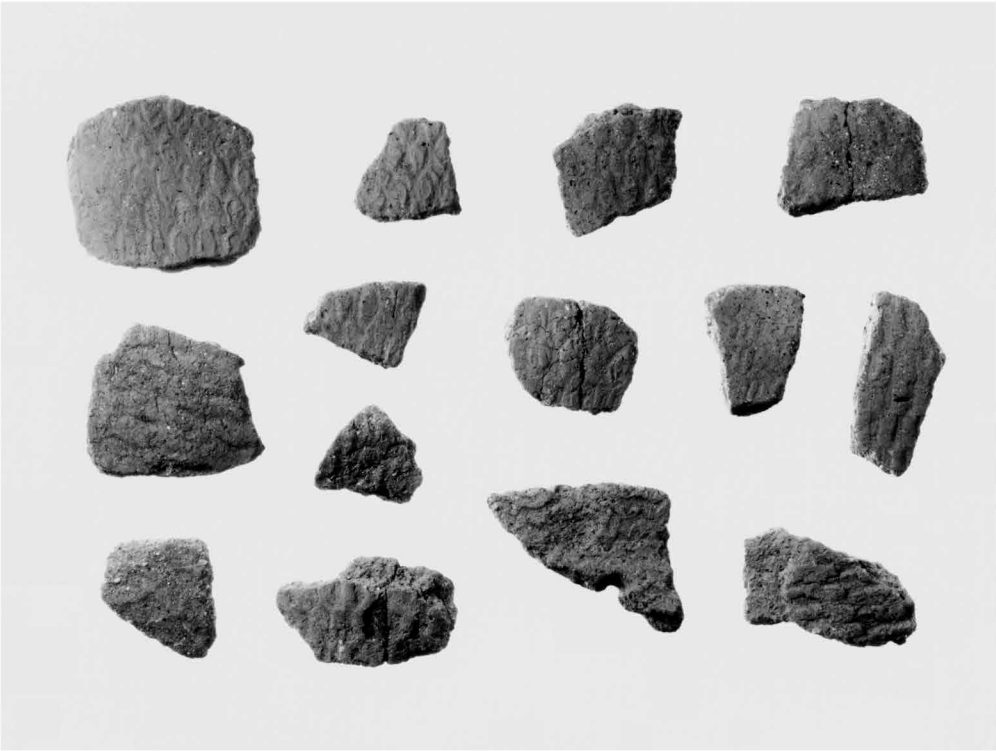


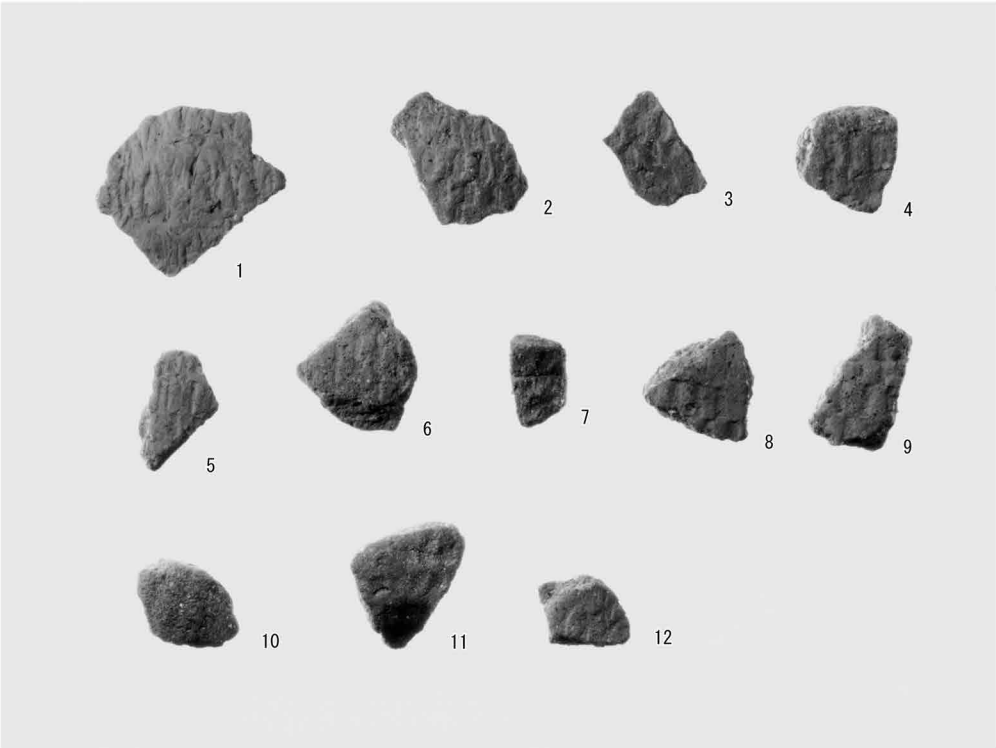
第16・17・19・20号集石炉（1：16号，2：17号，3・4：19号，5：20号）



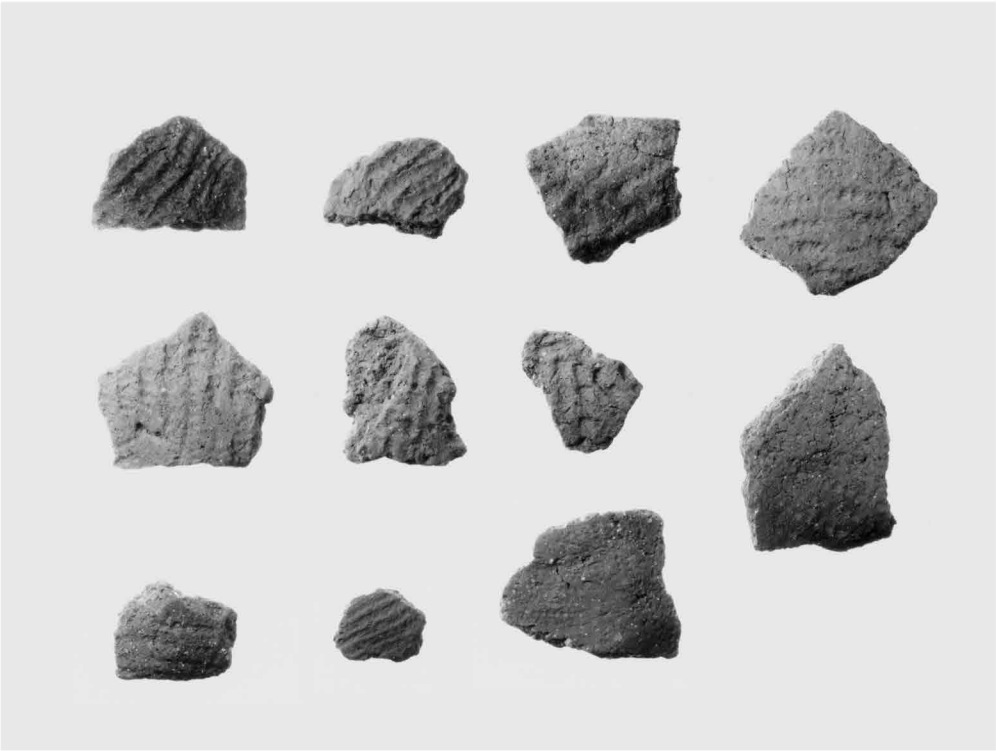


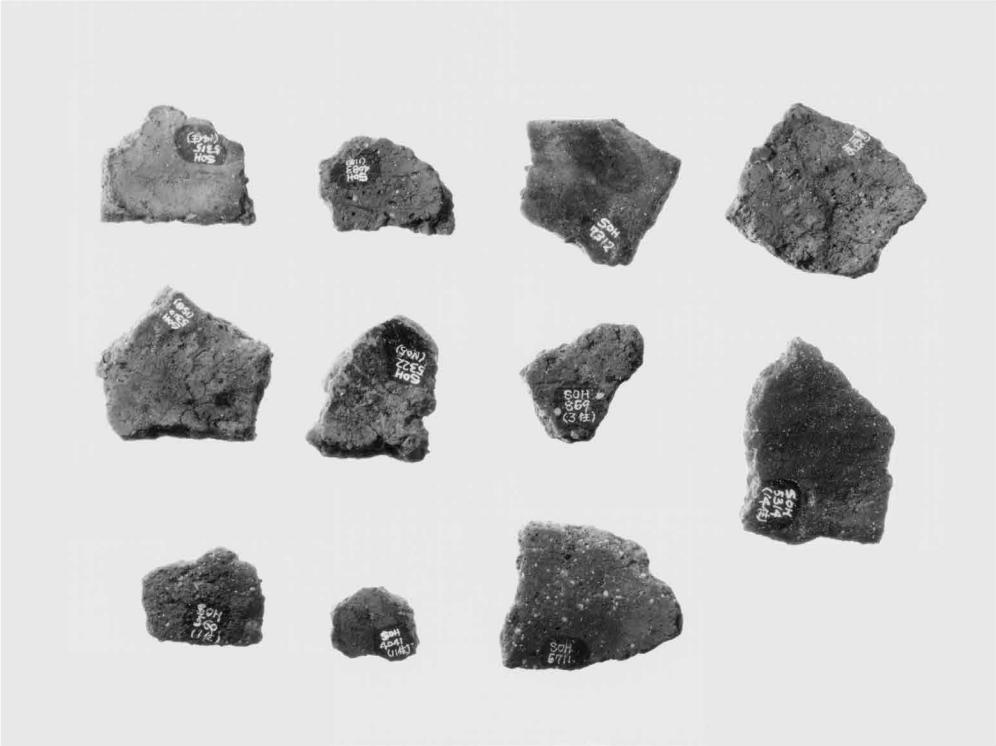
第6・29・31号土坑



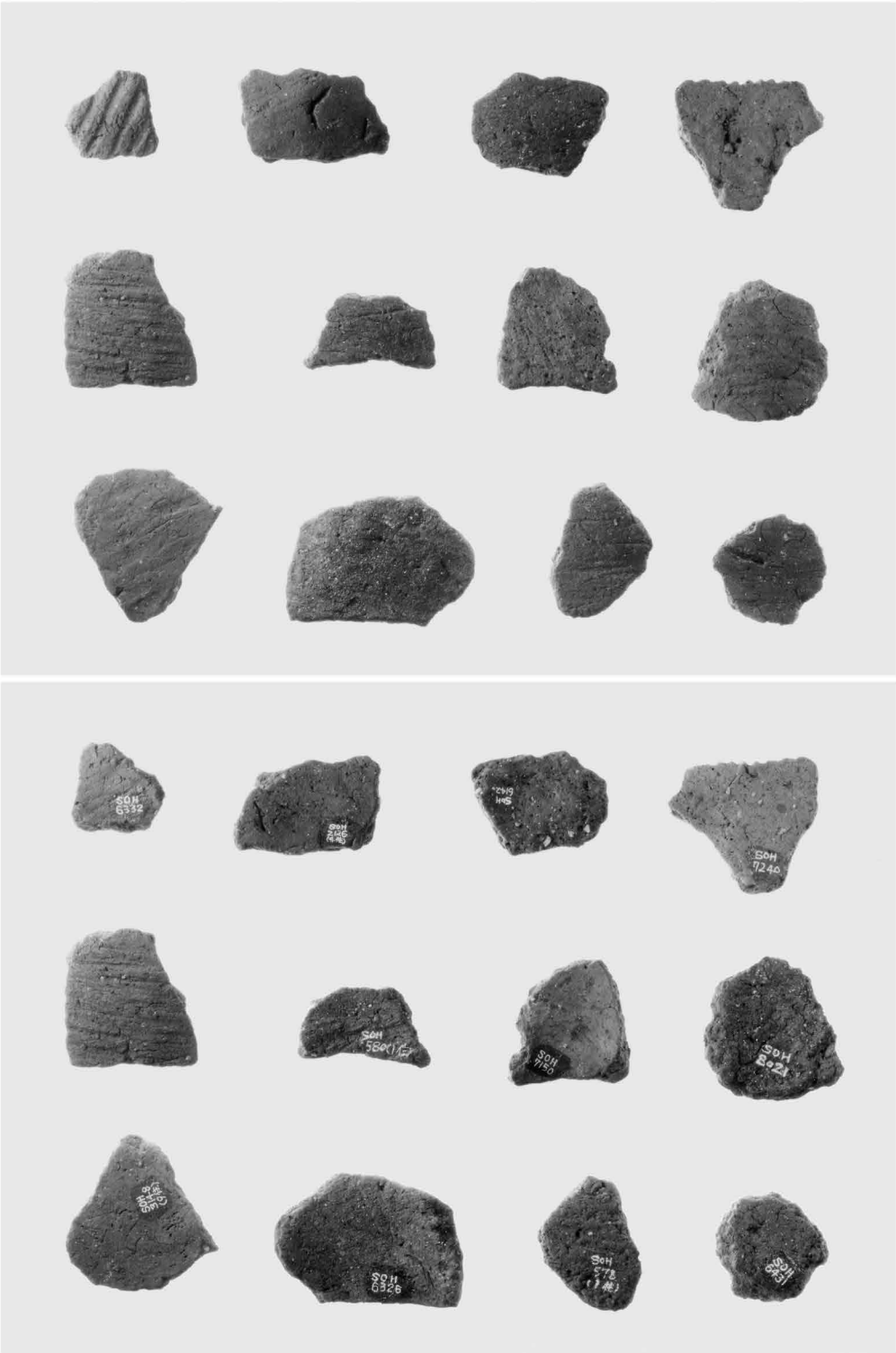


遺構外出土遺物（1）

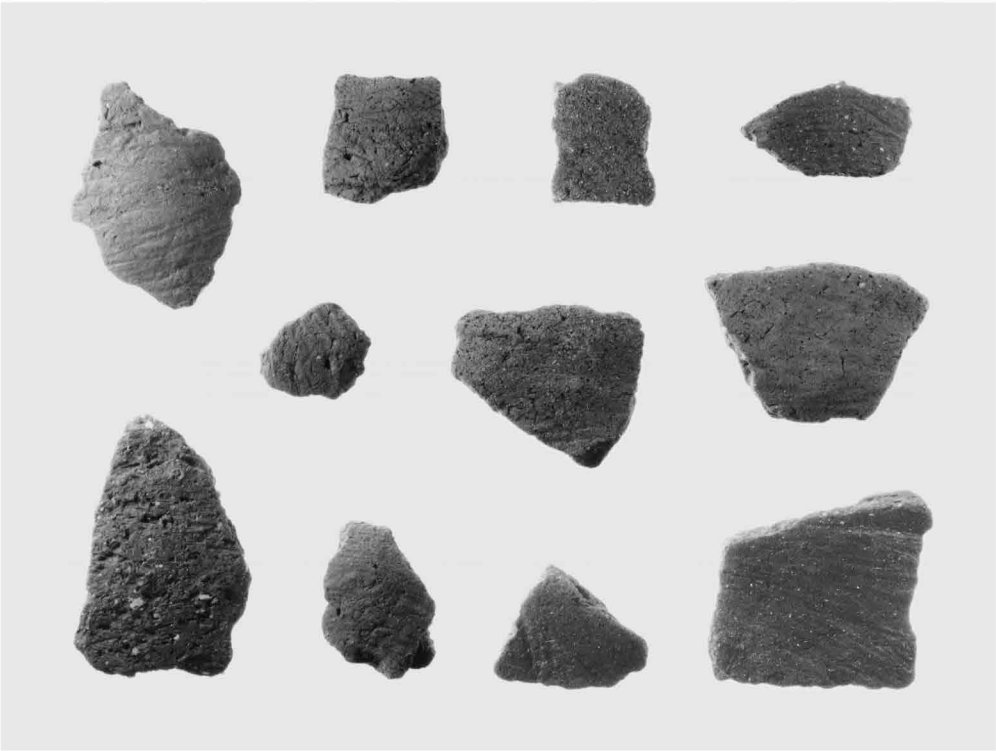




遺構外出土遺物 (2)

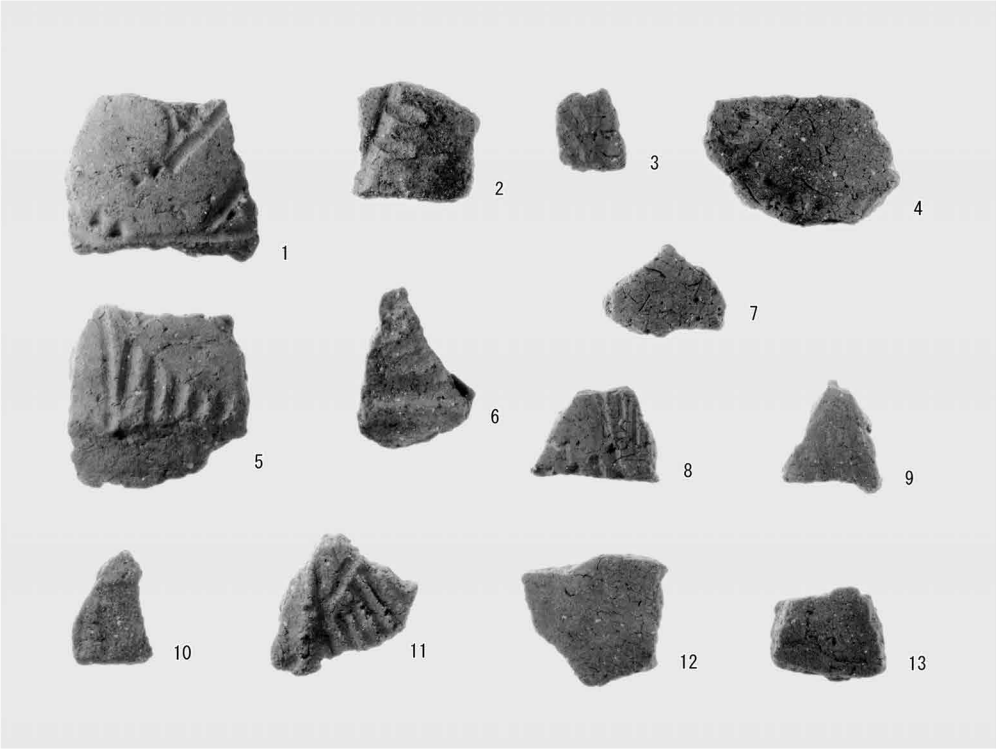


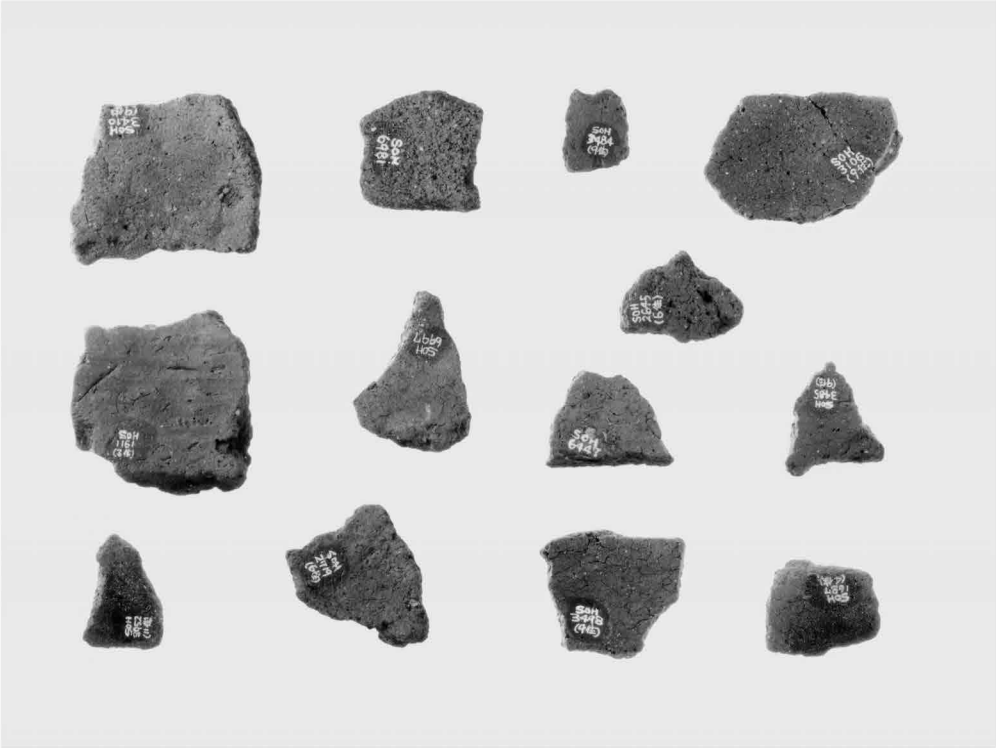
遺構外出土遺物 (3)



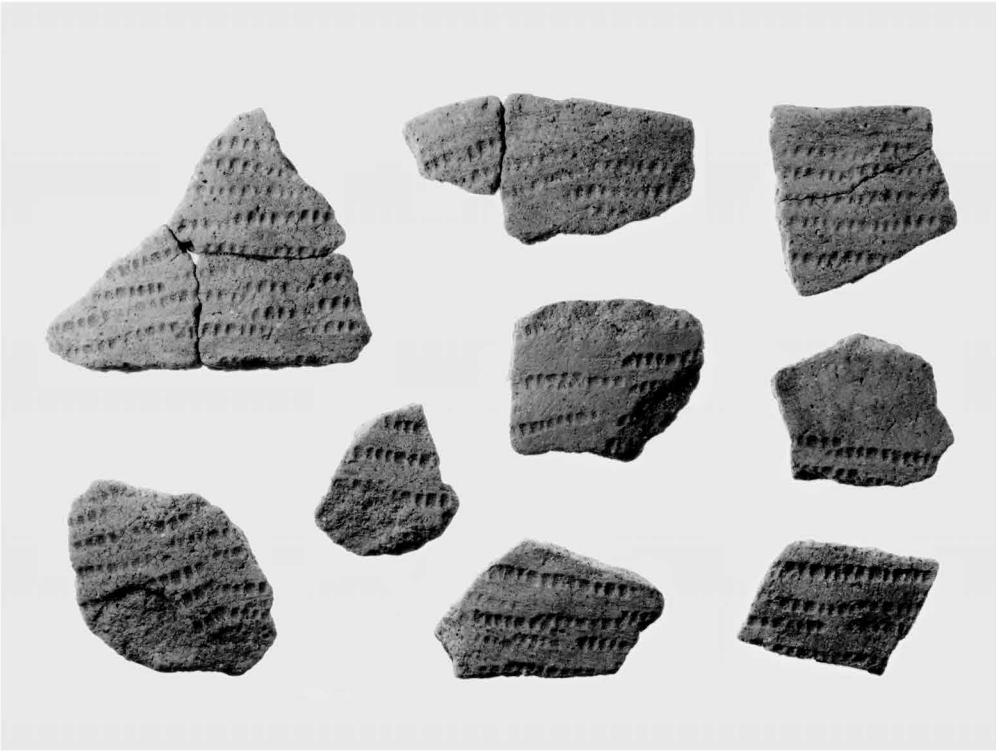
SOH
1631
(4住)
SOH
2987
(8住)
SOH
794
(3住)
SOH
6965
SOH
2944
(8住)
SOH
2797
(3住)

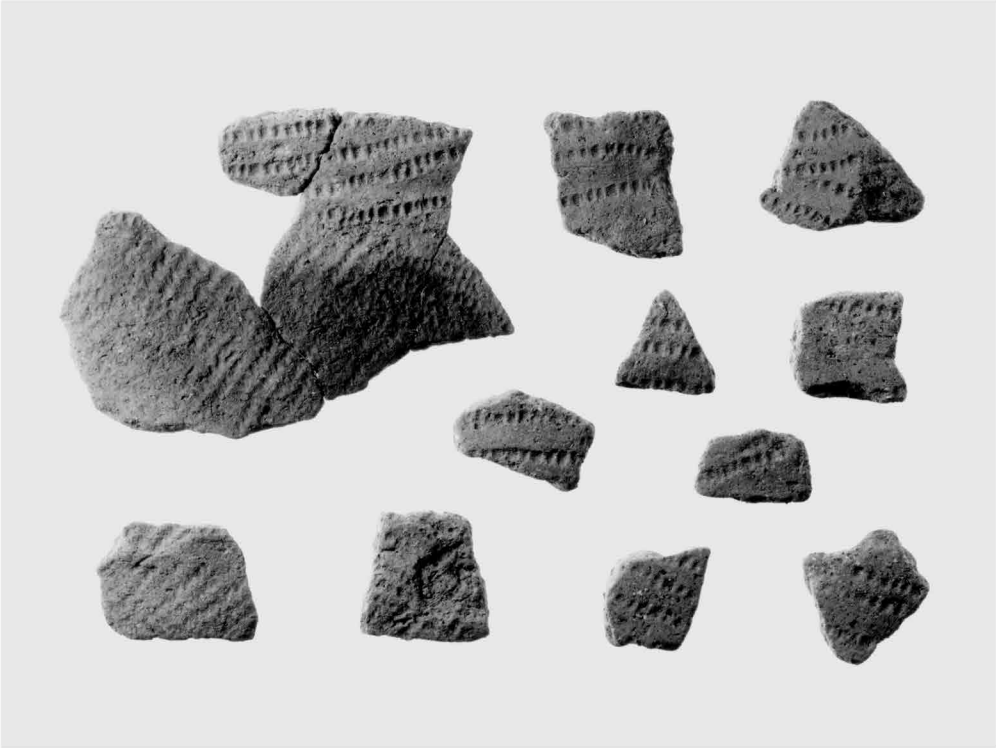
遺構外出土遺物 (4)



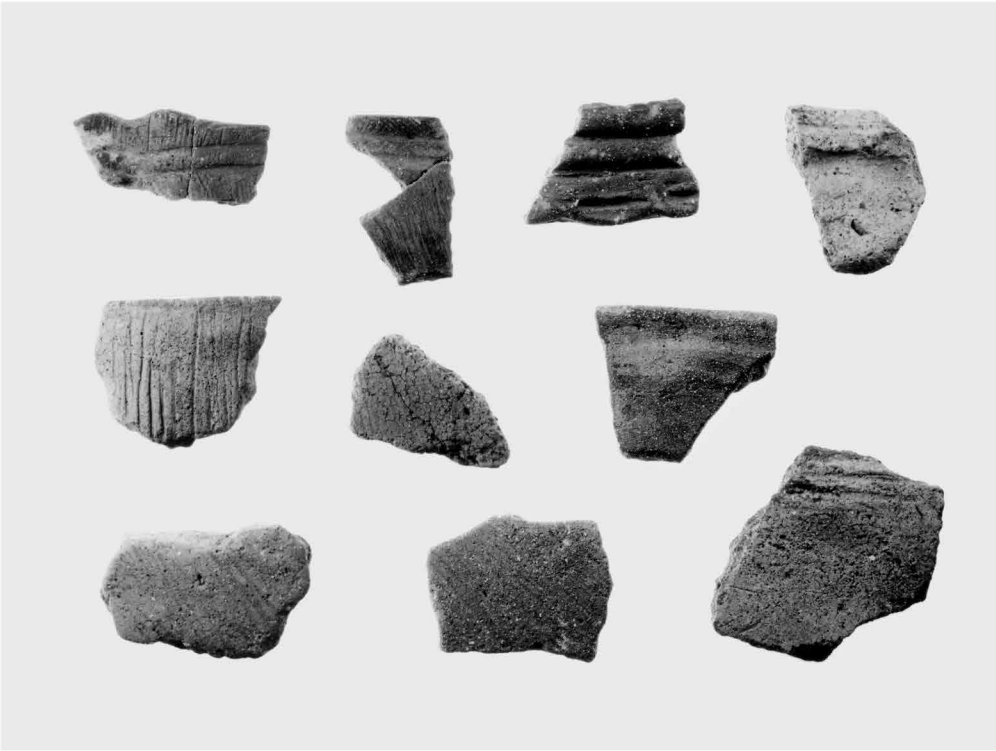


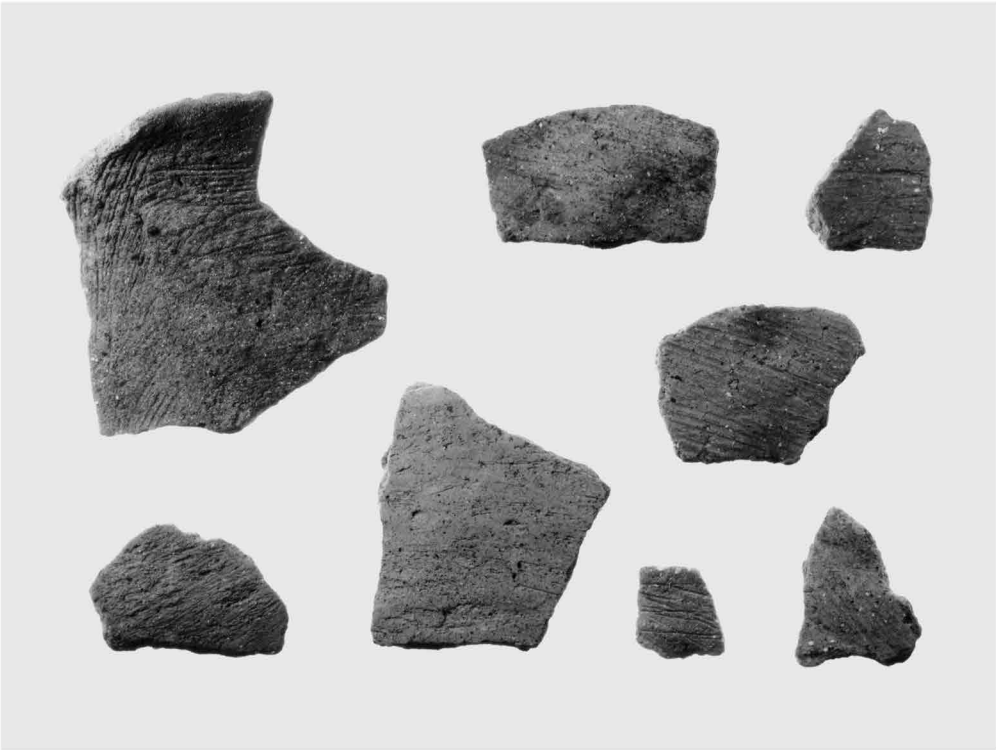
遺構外出土遺物 (5)



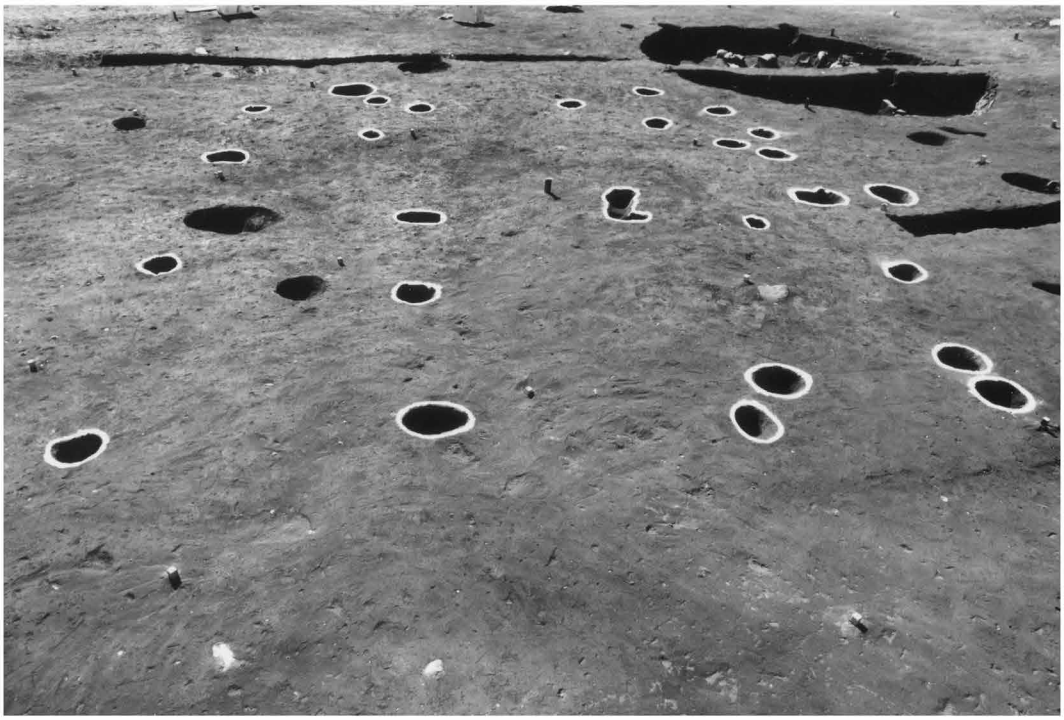


遺構外出土遺物（6）

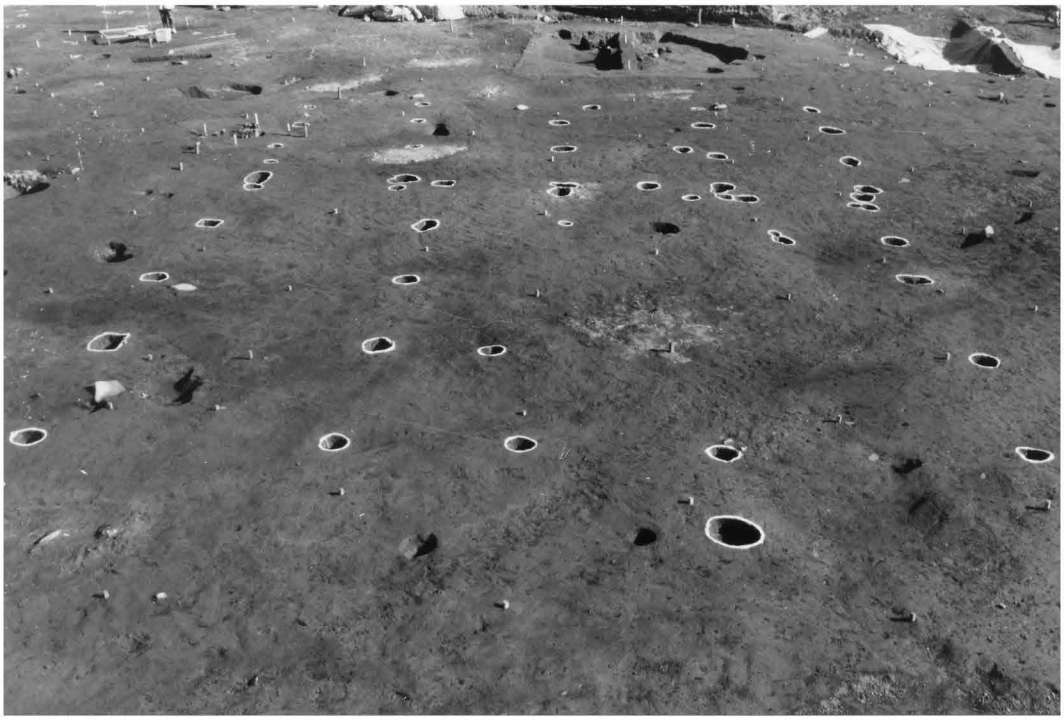




遺構外出土遺物（7）



掘立柱建物址 (1)



掘立柱建物址 (2)

報告書抄録

ふりがな	しんまちおおっぱらいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	新町大原遺跡発掘調査報告書
副 書 名	縄文時代中期中葉の集落址
著 者 名	福島　永
編集機関	辰野町教育委員会
所 在 地	〒399-0493　長野県上伊那郡辰野町中央1番地　☎(0266)41-1111
発行年月日	1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号				
しんまちおおっぱらいせき 新町大原遺跡	長野県上伊那郡 辰野町大字伊那 富4447番地ほか	20382	60	35° 57′ 52″	137° 59′ 20″	19870928 ～ 19871119	2,800m²

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構
新町大原遺跡	集落址	縄文時代早期・前期・中期 中　世	住居址（縄文時代早期）　1 （縄文時代前期）　1 （縄文時代中期）　13 土　坑（縄文時代）　43 集石炉（縄文時代早期）20 掘立柱建物址

特　記　事　項

・縄文時代早期の集石炉が集中して発見された。
・縄文時代中期中葉の住居址が土器を大量に伴って出土した。
・縄文時代早期の竪穴が発見された。

新町大原遺跡

縄文時代中期中葉の集落址

平成10年３月31日　発行

編　集
発　行　辰 野 町 教 育 委 員 会
長野県上伊那郡辰野町中央１番地

印　刷　ほおずき書籍株式会社
長野県長野市柳原2133-5
☎（026）244－0235㈹